

岐阜県文化財保護センター

調査報告書 第150集

国 分 寺 遺 跡

2021

岐阜県文化財保護センター

こく　　ぶん　　じ　　けい　　跡

2021

岐阜県文化財保護センター



発掘区全景（南から）



SK42 出土 陶馬

序

国分寺遺跡が所在する大垣市は、木曾三川(木曾川・長良川・揖斐川)により形成された濃尾平野の北西部に位置しています。国分寺遺跡は、史跡美濃国分寺跡及びその周辺に広がる遺跡で、市の北西部に位置し、西は不破郡垂井町と接しています。この地は、古来より東西交通の要衝とされてきた地域で、当遺跡の西南西から東北東にかけて江戸時代の中山道、古くは古代官道東山道と推定される道が通っています。古代においては、不破の関(不破郡閻ヶ原町)、美濃国府(不破郡垂井町)、美濃国分尼寺(不破郡垂井町)と連なる一帯は、美濃地域の政治の中心地でした。

このたび、大垣土木事務所による、平成28年度は公共社会資本整備総合交付金事業、平成29年度以降は県単道路新設改良事業(県道赤坂垂井線拡幅工事)に伴い、大垣市青野町に所在する国分寺遺跡の発掘調査を実施しました。

今回の調査は、対象が道路の拡幅であるため東西に長い発掘区でしたが、主に古代の遺構や遺物を確認し、掘立柱建物・柵などを検出しました。また遺物では、土器や瓦などの土製品、木製品などが出土し、墨書き土器・陶馬・斎串といった特徴的な遺物があります。墨書き土器は、県内の類似遺跡と比較すると、寺に関係する文字の割合が少ないと、多様な吉祥句や記号が見られること、数字に関するものが多いことなど、独自の傾向が見られました。陶馬は美濃須衛窯の製品と考えられ、県内の消費地遺跡からの出土は稀で、貴重な資料といえます。斎串は自然流路から出土し、陶馬とともに律令的な祭祀に用いられた可能性があります。こうした遺物が、当時の国分寺と直接的な関連があるかは不明ですが、国分寺の寺域外における活動の一端を考えるうえで、重要な資料を得ることができました。本報告書が埋蔵文化財に対する認識を深めるとともに、当地の歴史研究の一助となれば幸いです。

最後となりましたが、発掘調査及び出土遺物の整理・報告書作成に当たりまして、御支援・御協力をいただきました関係諸機関並びに関係者各位、大垣市教育委員会、地元地区の皆様に深く感謝申し上げます。

令和3年3月

岐阜県文化財保護センター
所長 森 勝利

例　　言

- 1 本書は、岐阜県大垣市青野町に所在する国分寺遺跡（岐阜県遺跡番号 21202-08548）の発掘調査報告書である。
- 2 本調査は、平成 28 年度は公共社会資本整備総合交付金事業、平成 29 年度以降は県単道路新設改良事業（県道赤坂垂井線拡幅工事）に伴うもので、岐阜県大垣土木事務所から岐阜県教育委員会が依頼を受けた。発掘作業及び整理等作業は、岐阜県文化財保護センターが実施した。
- 3 独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所林正憲氏の指導のもとに、発掘作業は平成 28・29 年度、整理等作業は平成 31 年度（令和元年度）に実施した。
- 4 発掘作業及び整理等作業の担当は、本書第 1 章第 2 節に一括して掲載した。
- 5 本書の執筆は杉野真平が行った。なお、第 3 章第 4 節・第 5 節については、佐竹正憲・澤村雄一郎の所見をもとに杉野が行った。また編集は杉野が行った。
- 6 発掘作業における現場管理、掘削、測量、景観写真撮影、出土遺物の洗浄・注記などの支援業務は、平成 28 年度は大成エンジニアリング株式会社、平成 29 年度は株式会社アコードに委託して行った。整理等作業における作業管理、出土遺物の整理作業、挿図・写真図版作成などの支援業務は、橋本技術株式会社に委託して行った。
- 7 遺物の写真撮影は、アートフォト右文に委託して行った。
- 8 鉄製品の成分分析及び漆状付着物成分分析は株式会社パレオ・ラボに、木製品の樹種同定及び保存処理は株式会社吉田生物研究所にそれぞれ委託して行い、第 4 章に掲載した。金属製品保存処理は株式会社イビソクに委託して実施した。第 4 章第 1 節は杉野が執筆した。
- 9 発掘調査及び報告書の作成に当たって、次の方々や諸機関から御指導・御協力をいただいた。記して感謝の意を表する次第である（敬称略・五十音順）。
- 井川祥子、近藤大典、高田康成、藤澤良祐、若尾江里菜、渡邊博人、大垣市教育委員会
- 10 本文中の方位は座標北であり、座標は国土交通省告示の平面直角座標系第VII系を使用する。
- 11 土層の色調は、小山正忠・竹原秀雄 2014『新版標準土色帖』（日本色研事業株式会社）による。
- 12 調査記録及び出土遺物は、岐阜県文化財保護センターで保管している。

目 次

巻頭図版

序

例言

第1章 調査の経過.....	1
第1節 調査に至る経緯.....	1
第2節 調査の方法と経過.....	3
第2章 遺跡の環境.....	7
第1節 地理的環境.....	7
第2節 歴史的環境.....	9
第3章 調査の成果.....	13
第1節 基本層序.....	13
第2節 遺構の概要.....	16
第3節 遺物の概要.....	18
第4節 A・B・G・H・I 地点の遺構・遺物.....	20
第5節 C・D・E・F 地点の遺構・遺物.....	60
第6節 遺物包含層出土遺物.....	68
第4章 自然科学分析.....	124
第1節 分析の概要と成果.....	124
第2節 鉄関連遺物の成分分析.....	125
第3節 木製品の樹種同定.....	127
第4節 漆状付着物成分分析.....	129
第5章 総括.....	133
第1節 時期区分.....	133
第2節 遺物について.....	134
第3節 遺構について.....	142
引用・参考文献.....	148
写真図版	
報告書抄録	

挿図目次

図 1 遺跡位置図	1	図 32 NR04 出土遺物実測図	48
図 2 試掘・確認調査坑、本発掘調査範囲	2	図 33 NR06 出土遺物実測図(1)	50
図 3 発掘区地区割図	4	図 34 NR06 出土遺物実測図(2)	51
図 4 G 地点の区割図	4	図 35 NR07 遺構図	53
図 5 発掘区周辺の地質概略図	7	図 36 NR08・NR09・NR10 遺構図、NR09・NR10 出土 遺物実測図	54
図 6 遺跡周辺の地形分類図	8	図 37 NR11・NR12・NR13 遺構図	55
図 7 遺跡周辺の地域詳細地図	8	図 38 NR14・NR15 遺構図、NR15 出土遺物実測図	57
図 8 周辺遺跡位置図	11	図 39 NR16・NR17 遺構図、NR16 出土遺物実測図	58
図 9 土層柱状図(北壁面)	14	図 40 SA06 遺構図	60
図 10 土層柱状図(南壁面)	15	図 41 SP08・SD07 遺構図	61
図 11 SB01 遺構図(1)	21	図 42 SD09 遺構図、遺物出土状況図、出土遺物実測図	63
図 12 SB01 遺構図(2)、出土遺物実測図	22	図 43 SD11 遺構図	64
図 13 SA01・SA02 遺構図	23	図 44 NR18・NR19 遺構図	65
図 14 SA03 遺構図、出土遺物実測図	25	図 45 NR18・NR19 出土遺物実測図、NR20 遺構図	67
図 15 SA04・SA05 遺構図	27	図 46 遺物包含層出土遺物実測図	68
図 16 SP01・SP02 遺構図	28	図 47 発掘区全域図 割付図	79
図 17 SD01・SD02・SK46・SK47 遺構図、SD01・SD02 出土遺物実測図	29	図 48 発掘区全域図 分割図(1)	80
図 18 SD03 遺構図	30	図 49 発掘区全域図 分割図(2)	81
図 19 SD04・SD05 遺構図	31	図 50 発掘区全域図 分割図(3)	82
図 20 SD04・SD05 出土遺物実測図	32	図 51 発掘区全域図 分割図(4)	83
図 21 SD10 遺構図	33	図 52 発掘区全域図 分割図(5)	84
図 22 SK08 遺構図、遺物出土状況図	34	図 53 発掘区全域図 分割図(6)	85
図 23 SK08 出土遺物実測図、SK09 遺構図、遺物出 土状況図	36	図 54 発掘区全域図 分割図(7)	86
図 24 SK09 出土遺物実測図	37	図 55 発掘区全域図 分割図(8)	87
図 25 SK17・SK25 遺構図、SK17 遺物出土状況図、 出土遺物実測図	38	図 56 発掘区全域図 分割図(9)	88
図 26 SK30・SK31・SK37 遺構図	39	図 57 発掘区全域図 分割図(10)	89
図 27 SK34・SK36・SK38・SK40 遺構図	41	図 58 発掘区全域図 分割図(11)	90
図 28 SK42・SK43・SK44・SK51 遺構図、SK42・SK43 出土遺物実測図	43	図 59 発掘区全域図 分割図(12)	91
図 29 NR01 遺構図	44	図 60 発掘区全域図 分割図(13)	92
図 30 NR02・NR03 遺構図、NR02 出土遺物実測図	45	図 61 発掘区全域図 分割図(14)	93
図 31 NR04～NR06 遺構図	47	図 62 発掘区全域図 分割図(15)	94
		図 63 発掘区全域図 分割図(16)	95
		図 64 発掘区全域図 分割図(17)	96
		図 65 発掘区全域図 分割図(18)	97

図 66	発掘区全域図 分割図(19)	98	図 81	発掘区全域図 分割図(34)	113
図 67	発掘区全域図 分割図(20)	99	図 82	発掘区全域図 分割図(35)	114
図 68	発掘区全域図 分割図(21)	100	図 83	発掘区全域図 分割図(36)	115
図 69	発掘区全域図 分割図(22)	101	図 84	発掘区全域図 分割図(37)	116
図 70	発掘区全域図 分割図(23)	102	図 85	発掘区全域図 分割図(38)	117
図 71	発掘区全域図 分割図(24)	103	図 86	発掘区全域図 分割図(39)	118
図 72	発掘区全域図 分割図(25)	104	図 87	発掘区全域図 分割図(40)	119
図 73	発掘区全域図 分割図(26)	105	図 88	発掘区全域図 分割図(41)	120
図 74	発掘区全域図 分割図(27)	106	図 89	発掘区全域図 分割図(42)	121
図 75	発掘区全域図 分割図(28)	107	図 90	発掘区全域図 分割図(43)	122
図 76	発掘区全域図 分割図(29)	108	図 91	発掘区全域図 分割図(44)	123
図 77	発掘区全域図 分割図(30)	109	図 92	付着物の赤外分光スペクトル図	131
図 78	発掘区全域図 分割図(31)	110	図 93	県内出土の土馬・陶馬	139
図 79	発掘区全域図 分割図(32)	111	図 94	国分寺遺跡遺構変遷図(1)	143
図 80	発掘区全域図 分割図(33)	112	図 95	国分寺遺跡遺構変遷図(2)	145

表目次

表 1	試掘・確認調査結果	2	表 19	土器観察表(4)	77
表 2	周辺遺跡一覧表	12	表 20	瓦・土製品観察表	78
表 3	遺構種別基數一覧表	17	表 21	金属製品観察表	78
表 4	出土遺物点数一覧表	18	表 22	木製品観察表	78
表 5	掘立柱建物一覧表	69	表 23	鉄関連遺物分析試料一覧	125
表 6	掘立柱建物付属遺構一覧表	69	表 24	XRF 分析による半定量値	126
表 7	樁一覧表	69	表 25	EDS 分析結果	126
表 8	樁付属遺構一覧表(1)	69	表 26	木製品同定表	127
表 9	樁付属遺構一覧表(2)	70	表 27	漆状付着物成分分析試料一覧	129
表 10	柱穴一覧表	70	表 28	生漆の赤外吸収位置とその強度	130
表 11	溝状遺構一覧表	70	表 29	国分寺遺跡出土墨書き土器一覧表(1)	135
表 12	土坑一覧表(1)	70	表 30	国分寺遺跡出土墨書き土器一覧表(2)	136
表 13	土坑一覧表(2)	71	表 31	墨書き土器種別一覧表	136
表 14	土坑一覧表(3)	72	表 32	墨書き土器器種一覧表	136
表 15	自然流路一覧表	73	表 33	墨書き土器時期別一覧表	137
表 16	土器観察表(1)	74	表 34	他遺跡との墨書き内容比較	137
表 17	土器観察表(2)	75	表 35	古代の美濃における灾害	140
表 18	土器観察表(3)	76			

挿入写真目次

写真1 鉄関連遺物の遺物写真、断面組織 SEM 反射電子像	126	写真2 木製品の顕微鏡写真	128
		写真3 付着状態と付着物の実体顕微鏡写真	132

写真図版目次

巻頭図版 国分寺遺跡発掘区遠景（南から）

SK42 出土陶馬

巻末図版

図版1 国分寺遺跡、A地点遠景	図版10 D地点の遺構(2)、E・F地点発掘区
図版2 A地点の遺構(1)	図版11 出土遺物(1)
図版3 A地点の遺構(2)	図版12 出土遺物(2)
図版4 A地点の遺構(3)、B地点発掘区	図版13 出土遺物(3)
図版5 B地点の遺構(1)	図版14 出土遺物(4)
図版6 G地点発掘区(1)	図版15 出土遺物(5)
図版7 G地点発掘区(2)、G地点の遺構(1)	図版16 出土遺物(6)
図版8 G地点の遺構(2)、H地点発掘区	図版17 出土遺物(7)
図版9 C・D・I地点発掘区、D地点の遺構(1)	

第1章 調査の経過

第1節 調査に至る経緯

国分寺遺跡は、史跡美濃国分寺跡及びその周辺に広がる遺跡で、大垣市青野町字八反田・丸山に所在する。大垣市は岐阜県の南西部、濃尾平野の北西部に位置する。遺跡のある青野町は、市の北西部に位置し、西は不破郡垂井町と接する（図1）。当遺跡は県道赤坂垂井線に沿っており、周囲は水田地帯で、北西から南東にかけて緩やかに傾斜している。

今回の発掘調査は、県道赤坂垂井線（以下、「県道」という。）の拡幅に伴う調査で、平成28年度は公共社会資本整備総合交付金事業、平成29年度以降は県単道路新設改良事業として実施した。この事業予定地は国分寺遺跡内を通るため、平成25・26年度に岐阜県大垣土木事務所長（以下「事務所長」という。）の依頼により、岐阜県教育委員会が試掘・確認調査を行った（図2）。平成25年度は、堅田・美濃国分尼寺東遺跡（岐阜県文化財保護センター2019）の試掘・確認調査とともに、県道北側の歩道部分に東からTr42・Tr43を設定した。平成26年度は県道北側の歩道部分東からTP01～TP04を、南側の歩道部分は西からTP05～TP12を設定した。その結果、Tr42・Tr43、TP01～TP04・TP06・TP08で土坑や溝状構造などの遺構を検出し、Tr42・Tr43、TP03・TP04・TP06～TP08で土器や須恵器などの遺物が出土した（表1）。

この試掘・確認調査の結果をもとに、岐阜県教育委員会社会教育文化課は、平成26年8月28日に平成26年度岐阜県埋蔵文化財発掘調査検討会を開催し、本発掘調査が必要であると結論づけた。平成27年度には、県道北側の歩道の最も東側の部分にTP13・TP14を追加設定した。その結果、遺構・遺物とも確認されなかつたため、試掘・確認調査の結果を元に発掘区の範囲を決定した。

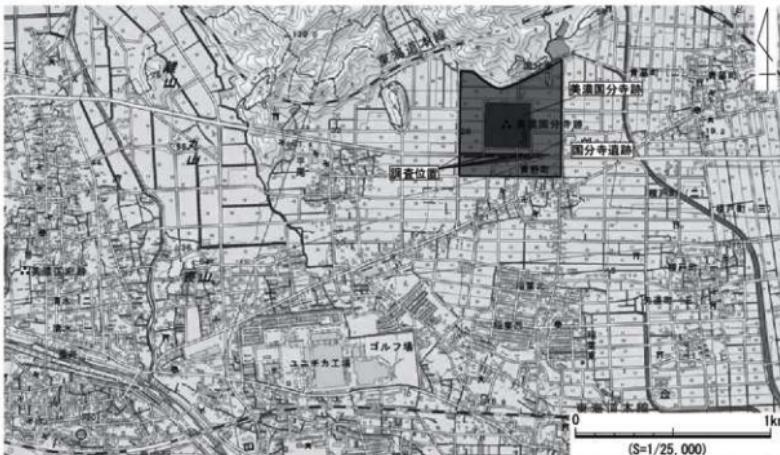


図1 遺跡位置図（平成30年度国土地理院発行の2万5千分1電子地形図「大垣」を使用したものである）

2 第1章 調査の経過

本工事は、文化財保護法第94条第1項の規定に基づき、事務所長から岐阜県教育委員会教育長（以下「県教育長」という。）あてに埋蔵文化財発掘の通知（平成28年3月22日付け大土第794号）が提出され、同条第4項の規定に基づき、県教育長は事務所長あて発掘調査実施勧告（平成28年3月31日付け社文第54号の210）をした。事務所長は県教育長に発掘調査の実施を依頼し、岐阜県文化財保護センター（以下「当センター」という。）が実施した。本発掘調査は、平成28年度に2,148m²、平成29年度に2,142m²を対象に、当センターが発掘調査を実施した。当センターは調査着手後、文化財保護法第99条第1項の規定に基づく発掘調査の報告（平成28年7月11日付け文財セ第117号、平成29年7月10日付け文財セ第161号）を県教育長に提出した。

表1 試掘・確認調査結果

年度	試掘坑 No.	検出遺構 (基数)	出土遺物(点数)					合計
			土師器	須恵器	灰軸陶器	瓦	石器	
H25	Tr42	土坑1、柱穴1	1	1	2	1	0	0
H25	Tr43	土坑1、溝1	3	4	2	0	0	9
H26	TP01	土坑3	0	0	0	0	0	0
H26	TP02	溝1	0	0	0	0	0	0
H26	TP03	自然流路1	4	0	0	0	0	4
H26	TP04	溝1	0	1	1	0	1	3
H26	TP05	なし	0	0	0	0	0	0
H26	TP06	土坑5	0	1	0	0	0	1
H26	TP07	なし	0	1	0	0	0	1
H26	TP08	道	0	13	0	0	0	18
H26	TP09	なし	0	0	0	0	0	0
H26	TP10	なし	0	0	0	0	0	0
H26	TP11	なし	0	0	0	0	0	0
H26	TP12	なし	0	0	0	0	0	0
H27	TP13	なし	0	0	0	0	0	0
H27	TP14	なし	0	0	0	0	0	0

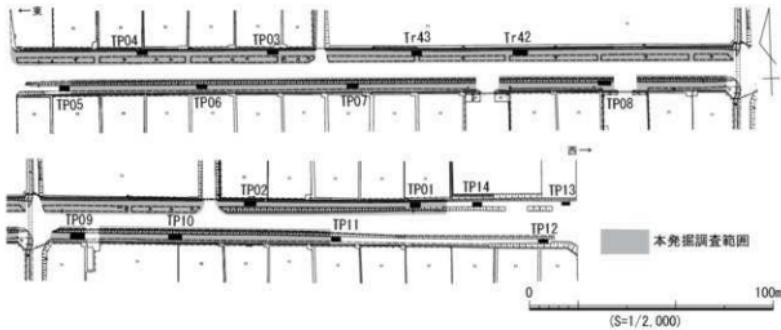


図2 試掘・確認調査坑、本発掘調査範囲

第2節 調査の方法と経過

1 調査の方法

県道拡幅工事に伴う発掘調査のため、今回の発掘区は東西に長く、県道の南北に配置される。現道の状況から、便宜的に平成28年度は4箇所、平成29年度は5箇所に発掘区を分け、A地点からI地点と呼称した(図3)。県道北側の耕作地に隣接する区域をA地点、市の所有地に隣接する区域をB地点、南側の私有地進入路西側の区域をC地点、東側の区域をD地点、県道北側の区域をE地点、F地点、南側の区域をG地点、H地点、I地点とした。なお、G地点は隣接耕作地で耕作が行われるため、進入路を確保するために発掘区を①～⑤に分け、時期をずらして調査を実施した(図4)。

発掘区には、世界測地系座標をもとに100m×100mの大グリッドを設定した。同事業によって調査を行った堅田・美濃国分尼寺東遺跡の発掘区の続きでグリッドを設定し、大グリッドは発掘区の西側からF～K、さらにその中に5m×5mの小グリッドに分割して、南北列にK～Qのアルファベット、東西列に1～20のアラビア数字を付けた(図3)。そのため、遺跡北西端のグリッドはFK8、南東端のグリッドはJQ11となる。

表土掘削は重機を用いて実施し、遺物包含層掘削・遺構検出・遺構掘削はスコップ・草削り鎌・移植ゴテなどを用いて人力で実施した。遺構埋土は半截又は4分割して土層堆積状況などの必要な記録を作成した後に完掘した。また、遺構基盤層と遺構埋土の識別が困難な場合は、必要最低限のサブトレンチを設定し、両者の識別を明確にした上で遺構埋土を掘削した。なお、発掘区内は湧水が激しいため、排水溝を発掘区内に掘削して、排水を行いつつ作業を実施した。

遺物包含層掘削及び遺構検出時に出土した遺物は、原則として層位、グリッド単位で取り上げた。また、遺構出土遺物は半截前後で取り上げ方法を変えた。すなわち、半截前は検出面から約5cm下までをa、約5～10cm下をb、というように遺構内を概ね5cm単位の人工層位として取り上げ、半截後は分層した層位ごとに取り上げた。また、溝については土層観察用畦の層位で取り上げ、それ以外を人工層位で取り上げた。なお、遺構の性格や時期が分かるなど、遺構との関係性が検討できる出土状況のものについては、出土状況図の作成あるいは、トータルステーションを用いた3次元測量による出土位置の測定を行い取り上げた。

遺構番号は、原則として検出順に通番を付し、平成28年度は、Sと3桁の数字で表記し、平成29年度は、Sと4桁の数字で表記した。この番号は二次整理作業時に遺構種別ごとに振り替えた。

遺構等の実測作業は、平面図・断面図ともデジタル測量にて実施した。図面の縮尺は20分の1を基本としつつ、実測対象に応じて適切な縮尺を選択した。

写真撮影は、35mmフィルムカメラ(リバーサルフィルム、モノクロフィルム)、6×4.5cm判フィルムカメラ(リバーサルフィルム、モノクロフィルム)、デジタルカメラを使用した。また、各地点の完掘後に景観写真撮影を実施した。

2 調査の経過

発掘調査日誌から抜粋して、週毎の調査経過を以下に記載する。

(1) 平成28年度

第1週(7/4～7/8) 重機によるA地点の表土掘削開始。FK8～FK14のグリッド杭打設。

4 第1章 調査の経過

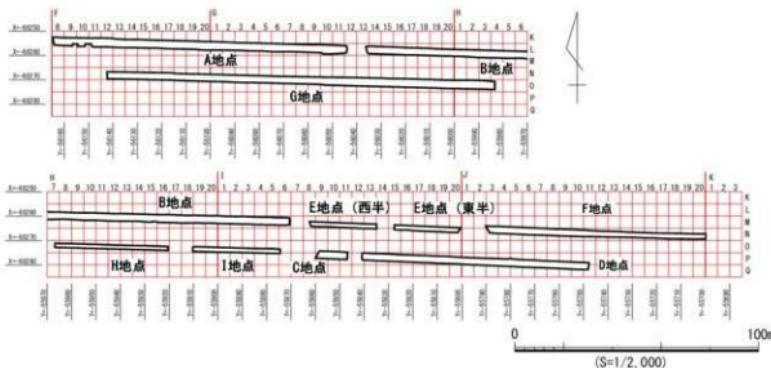


図3 発掘区地区割図 (1 : 2,000)

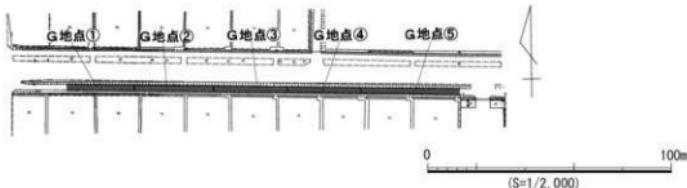


図4 G地点の区割図 (1 : 2,000)

- 第2週 (7/11～7/15) A地点の表土掘削終了。測量杭打設。排水溝掘削。
- 第3週 (7/18～7/22) 南壁際排水溝掘削。FK 8～GK 1の北側壁面整形。
- 第4週 (7/25～7/29) FK 9～FK16・18の遺物包含層掘削。
- 第5週 (8/1～8/5) FK・FL16～20の遺物包含層掘削。南側排水溝掘削。SB01-P05で丸瓦(8)出土。
- 第6週 (8/8～8/12) FK・FL21～GL 3の遺物包含層掘削。FK・FL18～20の遺構検出作業。SP01、SB01-P01・04・05検出状況写真撮影。SK02遺構掘削。
- 第7週 (8/15～8/19) 遺物包含層掘削継続。FL20～GL 2遺構検出作業。SB01-P01～03、SP01～03、SP07、SK02、SK04の遺構半載作業。
- 第8週 (8/22～8/26) SB01-P04・05掘削。柱穴列完掘。SB01-P04で环身(4)、盤(6)、SB01-P05で須恵器、繩文土器出土。A地点高所作業車による景観写真撮影。GL 3～11遺構検出作業。A地点調査終了。
- 第9週 (8/29～9/3) GL12遺物包含層掘削、遺構検出作業。A地点埋め戻し作業開始。
- 第10週 (9/5～9/9) B地点表土掘削開始。排水溝掘削、遺構検出作業、写真撮影。
- 第11週 (9/12～9/16) 表土掘削・排水溝掘削継続。SK08で須恵器が多量に出土。高田康成氏（大垣市教育委員会）による現地指導。
- 第12週 (9/19～9/23) B地点表土掘削終了。遺構検出作業、景観写真撮影。A地点路肩復旧工。

- 第13週（9/26～9/30） 林正憲氏（奈良文化財研究所）による現地指導。SK08・11・13・14掘削。
遺構検出作業継続。
- 第14週（10/3～10/7） SK08掘削。SK08で須恵器の盤（28・29・30・31・32）の取り上げ。
- 第15週（10/10～10/15） ラジコンヘリによる景観写真撮影実施。B地点西端から埋め戻し開始。
- 第16週（10/17～10/21） NR06で木製品（76～78）及び墨書のある灰釉陶器（71・72）出土。トレンチTR17～26掘削作業。B地点埋め戻し作業継続。
- 第17週（10/24～10/28） B地点埋め戻し作業終了。D地点の表土掘削、排水溝掘削作業。
- 第18週（10/31～11/4） D地点東端の南壁が崩落したため、記録作業を行った後、直ちに埋め戻し。D地点の表土掘削作業継続。JP3～6の遺構検出作業。
- 第19週（11/7～11/11） D地点の表土掘削、遺構検出作業、壁面成形作業、断面写真撮影。SP11・SK70～72完掘作業。SD09遺構掘削。土師器の甕（85）、須恵器（86～88）が重なって出土。D地点景観写真撮影。
- 第20週（11/14～11/18） D地点埋め戻し作業。高田康成氏（大垣市教育委員会）現地指導。TR44・45トレンチ掘削。
- 第21週（11/21～11/25） D地点埋め戻し作業継続。C地点表土掘削開始、遺構検出作業。C地点表土掘削終了。
- 第22週（11/28～12/2） C地点完掘及び全景写真撮影。C・D地点景観写真撮影。C地点埋め戻し。
- (2) 平成29年度
- 第1週（7/3～7/7） 重機によるH地点の表土掘削開始。壁面成形。排水溝掘削。
- 第2週（7/10～7/14） H地点西端部の遺構検出。遺物包含層掘削。遺構掘削開始。H地点景観写真撮影。
- 第3週（7/17～7/21） H地点埋め戻し。I地点表土掘削、壁面成形、排水路掘削、遺物包含層掘削。
- 第4週（7/24～7/28） I地点遺物包含層掘削継続。NR16・17遺構掘削。I地点景観写真撮影。
- 第5週（7/31～8/4） I地点埋め戻し。E地点東半部を表土掘削。グリッド杭の打設。
- 第6週（8/7～8/11） 台風5号接近のため、作業中止（8/7）。E地点表土掘削継続。壁面成形。
遺物包含層掘削。SK59・60遺構掘削。E地点東半部景観写真撮影。
- 第7週（8/14～8/18） E地点西半部表土掘削。壁面成形。排水溝掘削。
- 第8週（8/21～8/25） E地点西半部遺物包含層掘削。NR18遺構掘削。須恵器の壺（89）、灰釉陶器の段皿（91）出土。E地点遺構完掘後高所作業車による景観写真撮影。E地点西半部埋め戻し。
- 第9週（8/28～9/1） E地点東半部埋め戻し。F地点東部表土掘削、壁面成形、排水溝掘削、遺物包含層掘削。
- 第10週（9/4～9/8） F地点東半部遺物包含層掘削。NR20遺構掘削。F地点中央部表土掘削。
- 第11週（9/11～9/15） F地点中央部表土掘削継続。遺構完掘状況写真撮影。F地点東部埋め戻し。NR19遺構掘削。
- 第12週（9/18～9/22） F地点中央部埋め戻し。
- 第13週（9/25～9/29） F地点西部表土掘削、壁面成形、遺物包含層掘削。NR19遺構掘削。
- 第14週（10/2～10/6） F地点西部埋め戻し。G地点①表土掘削、遺物包含層掘削、景観写真撮

6 第1章 調査の経過

影、埋め戻し。

- 第15週（10/9～10/13） G地点④表土掘削、遺物包含層掘削継続。
- 第16週（10/16～10/20） G地点④NR10、SK53 遺構掘削。NR10で縄文土器(80)出土。景観写真撮影、埋め戻し。
- 第17週（10/23～10/27） G地点⑤表土掘削、壁面成形、遺物包含層掘削。NR11～13 遺構掘削。
- 第18週（10/30～11/3） SD05で土師器の甕(21・22)、NR13で縄文土器出土。G地点⑤景観写真撮影。
- 第19週（11/6～11/10） 林正憲氏（奈良文化財研究所）現地指導。G地点⑤埋め戻し。
- 第20週（11/13～11/17） G地点②表土掘削、壁面成形、遺物包含層掘削。SK40 遺構掘削。
- 第21週（11/20～11/24） SK42で陶馬(40)出土。SK17で土師器の甕(39)出土。G地点③表土掘削、遺構掘削。G地点②景観写真撮影、埋め戻し。
- 第22週（11/27～12/1） G地点③景観写真撮影、埋め戻し。
- 第23週以降 発掘区埋め戻し作業終了（12/18）。

出土遺物の洗浄や注記等の一次整理作業は平成28年度と平成29年度に、遺物実測や挿図作成等の整理等作業は平成31年度に、それぞれ当センターにおいて実施した。平成28年9月14日、平成28年11月14日、隣接する大垣市教育委員会の発掘調査との比較を高田康成氏（大垣市教育委員会）に、平成28年9月29日、平成29年11月7日、林正憲氏（奈良文化財研究所）に方形柱穴列や流路などの遺構の特徴や、出土遺物から考えられる遺構の性格についての指導を受けた。また、令和元年7月26日に渡邊博人氏（元各務原市教育委員会）に須恵器に関する指導を、同年9月4日に井川祥子氏（岐阜市教育委員会）に土師器に関する指導を、同年9月12日に藤澤良祐氏（愛知学院大学）に灰釉陶器と中近世陶磁器に関する指導を、同年11月29日に林正憲氏（奈良文化財研究所）に調査成果全体についての指導を受けた。なお、SA03-P01から出土した鉄関連遺物の成分分析、NR06から出土した木製品の保存処理及び樹種同定、NR16、NR19から出土した土器付着物成分分析を平成31年度に実施した。

3 調査体制

発掘調査及び整理等作業の体制は、以下のとおりである。

- センター所長 羽田能崇（平成28・29年度）、小林法良（平成31年度）
- 総務課長 二宮 隆（平成28年度）、加藤武裕（平成29～31年度）
- 調査課長 春日井恒（平成28～31年度）
- 調査担当係長 三輪晃三（平成28・29年度）、長谷川幸志（平成31年度）
- 担当調査職員 佐竹正憲（平成28年度）、澤村雄一郎（平成29年度）、杉野真平（平成31年度）

第2章 遺跡の環境

第1節 地理的環境

以下に国分寺遺跡の地理的環境について述べる¹⁾。

国分寺遺跡が所在する大垣市は、岐阜県の南西部、木曽三川（木曽川・長良川・揖斐川）によって形成された濃尾平野の北西部に位置する。濃尾平野は国内有数の面積をもつ平野であり、その大部分を沖積平野が占める。一般に上流部から扇状地帯、自然堤防地帯（氾濫平野）、三角州地帯に分けられるが、大垣市付近には、扇状地、自然堤防と後背湿地、三角州平野の地形が見られる。多くの土地が氾濫平野、三角州であり、市の北西部に扇状地、形成時期の古い段丘が見られる。この扇状地は、大谷川などの小河川が形成したものである（図5）。

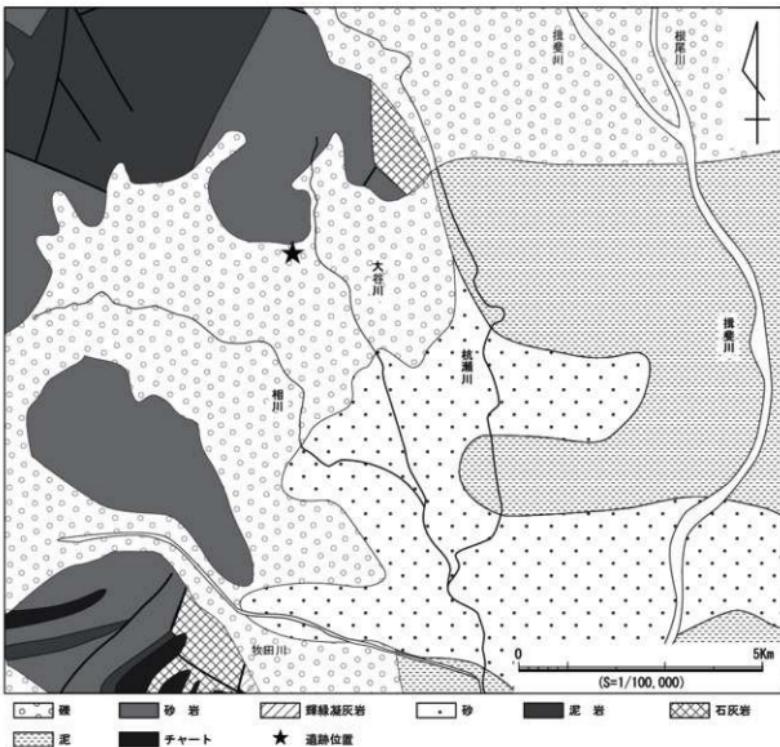


図5 発掘区周辺の地質概略図 (1 : 100,000) (地質調査所 1999『地質図 1/50,000 岐阜』を基に作成)

大垣市の河川は、揖斐川とその支流である相川、牧田川などが市域の外周を流れ、市内においては、杭瀬川、水門川、大谷川などが貫流している。また、地下水も豊富な地域で、市内各所に「ガマ」と呼ばれる自噴水が存在している。

当遺跡が立地する大垣市青野町（旧不破郡赤坂町青野）は、大垣市の北西端に位置する。遺跡の北側には伊吹山系のうち最も東南に張り出した低い丘陵があるが、遺跡はその低い丘陵南麓の、弥生時代以降に段丘化した扇状地上に位置する。そのため、周辺の地形は北西から南東にかけて緩やかに傾斜している（図6）。また、大垣市の遺跡詳細分布調査によって作成された地域詳細図では、国分寺遺跡周辺の旧河道を推定している（大垣市教育委員会 1997）。それによると、当遺跡がある扇状地の北部には大谷川が、南部には相川が形成した埋没旧中州と埋没旧河道が認められる（図7）。



図6 遺跡周辺の地形分類図(大垣市教育委員会
1997より転載、一部改変)



図7 遺跡周辺の地域詳細地図(大垣市教育委員会 1997
より転載、一部改変)

注

1)地質・地形に関する記述は、以下の文献を参考とした。

大垣市2011『大垣市史 考古編』

大垣市教育委員会2005『美濃国分寺跡一国分寺遺跡(伽藍南面隣接地の調査)一』(大垣市埋蔵文化財発掘調査報告書第15集)

大垣市教育委員会1997『大垣市遺跡詳細分布調査報告書一解説編一』(大垣市埋蔵文化財調査報告書 第5集)

大垣市教育委員会2005『史跡 美濃国分寺』

第2節 歴史的環境

当遺跡周辺には数多くの遺跡が分布しており、本節では各時期の主要な遺跡について、大垣市の近隣遺跡とともに、隣接する垂井町の遺跡についても併せて概要を時代順に記す¹⁾。なお、本文中の遺跡名に続く括弧内の番号は、表2、図8と一致する。

旧石器時代 当遺跡周辺では確認されていない。

縄文時代 堅田遺跡(69)・美濃国分尼寺東遺跡(67)は、平成26・27年度に当センターが発掘調査を行った。晚期の土坑から、深鉢などが出土している。東町田遺跡(43)からは、草創期の尖頭器が発見されている。同遺跡は平成3年度以降、大垣市教育委員会によって延べ約10,000m²の調査が実施された。出土した土器は、中期の遺物と考えられるものが確認されている。垂井町域では、数箇所の遺跡で遺物が採集されているが、詳細は不明である。

弥生時代 東町田遺跡において、中期後半の方形周溝墓群や後期から古墳時代初頭の墓域が確認されている。垂井町域では、数箇所の遺跡で遺物が採集されているが、詳細は不明である。

古墳時代 当遺跡周辺には多くの古墳が所在し、濃尾平野の中でも早い段階から古墳の築造が始まつた地域として知られるが、それに伴う集落については詳細が明らかになっていない。大垣市の北西部に大型の前方後円墳が集中して築造されている。星飯大塚古墳(44)は岐阜県最大（墳丘長150m）の前方後円墳で、4世紀後半に築造されたものである。粉糠山古墳(37)は、墳丘長100mの前方後方墳である。遊塚古墳(36)は前方後円墳（墳丘長80m）で、前方部頂の副葬品埋納施設から、多くの滑石製模造品や鉄製農耕具・武器類が出土している。矢道長塚古墳(61)は前方後円墳（墳丘長87m）で、2つの主体部からは、三角縁神獸鏡5面、內行花文鏡1面、石劍76点、石製合子、杵形石製品、勾玉、管玉、ガラス玉、鉄刀、銅鏡、鉄斧が出土している。矢道長塚古墳の北西50mには前方後円墳（墳丘長約60m）である矢道高塚古墳(60)がある。前期古墳の他、横穴式石室をもつ後期古墳も金生山麓を中心に築造され、そのほとんどは6世紀末から7世紀前半にかけてのものと考えられる。多くの古墳群が山中若しくは山裾部に作られ、ほとんどが円墳である。垂井町域では、4世紀後半に造営された親ヶ谷古墳(71)は全長85mの前方後円墳で、鍬形石や車輪石が出土している。親ヶ谷古墳が立地する池田山塊の平尾山には、5世紀初頭の前方後円墳である清塚4号古墳(76)や、5世紀前半の円墳である清塚1号古墳(73)等、古墳時代前期から中期にかけての主要な古墳が分布している。

古代 西から不破の関（閑ヶ原町）、美濃国府（垂井町）、美濃国分尼寺（垂井町）、美濃国分寺（大垣市）と連なるこの地域は、古代美濃の政治・文化の中心地であった。当遺跡の西南西から東北東にかけて江戸時代の中山道(91)、古くは古代官道東山道と推定される道が通り、交通の要衝でもあった。また遺跡に隣接する垂井町には、美濃国一宮である南宮大社と二宮である伊富岐神社・不破郡の大領、外從五位の下を授かった宮勝木実を祀る大領神社が所在する。史跡美濃国分寺跡は昭和43年度から昭和45年度にかけて、大垣市教育委員会による発掘調査が行われ、塔跡、金堂跡、鐘樓跡、南大門跡等が確認され、大官大寺式の伽藍配置であることが明らかになった。これを受け、昭和46年には寺域全体と瓦窯跡を含め追加指定された。当遺跡(1)でも、平成8年度から平成14年度にかけて大垣市教育委員会による調査が行われ、撞竿支柱や参道、井戸、掘立柱建物等、国分寺に関連する遺構が確認された。美濃国分尼寺跡(66)は、古くから古代瓦が散布することや地形・地名などから、垂井町平

尾に所在すると推定されていたが、詳細は不明であった。平成16年度から平成20年度にかけて、垂井町教育委員会による範囲確認を目的とした発掘調査が行われ、周辺に残る土壙から、寺域が東西約150m、南北150m以上の長方形になる可能性が指摘されている。堅田遺跡(69)・美濃国分尼寺東遺跡(67)は、平成26・27年度に当センターが発掘調査を行い、古墳時代から中世前期にかけての遺構を確認した。古代のやや大型の柱穴をもつ掘立柱建物3棟、壁際溝、竪穴建物2棟を検出した。この他、柵の柱穴、土坑、溝などからは、中世の土師器、中近世の陶磁器も出土している。

また、当遺跡周辺には古窯跡が多く所在する。大垣市域では、美濃国分寺跡の北東に位置する美濃国分寺附瓦窯跡(4)等がある。垂井町域では、古代の瓦窯である市之尾古窯跡(78)、美濃国分尼寺跡表採瓦と同様の瓦が出土したとされる平尾古窯跡(80)等がある。平尾古窯跡では、平成24年度から平成28年度にかけて垂井町教育委員会が行った遺跡詳細分布調査で、窯体の一部と考えられる遺構が確認されている。

中・近世 大垣市内でのこの時期の発掘調査はそれほど多くない。その中でも、当遺跡の北東部にある元円興寺跡(13)が所在する山間部には、中世の五輪塔が残されている。遺跡は主要遺構を中心に、最大東西約400m、南北約500mにおよび、多くの平坦面からなる山岳寺院である。礎石建物が存在したと考えられる箇所以外の平坦面については、詳細不明である。垂井町域の石越遺跡(85)では、明治時代に宋銭・明銭を含む備蓄銭が入った壺が出土しており、現在の垂井町平尾集落は、室町時代まで石越遺跡付近に所在していたという伝承がある。また、当遺跡の南には青野城跡(32)がある。『新撰美濃誌』には、「青野古城は、城主小寺掃部、いつの頃の人にや今定かならず。」という記述が見られる。江戸時代に稻葉正成の子・正次が青野に居城を構えたとされる。現在、推定地は水田となり、顕彰碑や墓碑が立っている。また、平成8・9年度の大垣市教育委員会の調査によって、大正5年以降の耕地整理時に消滅した青野集落から現美濃国分寺へと至る通称「国分寺道」が明らかとなった。大垣市の調査の際、「国分寺道」周辺からは「寛永通宝」がまとまって出土していることから、近世の国分寺参詣に関するものと考えられる。

注

1) 各遺跡の記述は、以下の文献を参考とした。

大垣市2011『大垣市史 考古編』

大垣市教育委員会2005『美濃国分寺跡一国分寺遺跡（御藍南面隣接地の調査）一』（大垣市埋蔵文化財発掘調査報告書第15集）

大垣市教育委員会1997『大垣市遺跡詳細分布調査報告書一解説編一』（大垣市埋蔵文化財調査報告書 第5集）

大垣市教育委員会2005『史跡 美濃国分寺』

垂井町1996『新修垂井町史 通史編』

垂井町教育委員会2017『垂井町遺跡詳細分布調査報告書（1）』

垂井町教育委員会2010『美濃国分尼寺発掘調査報告書』

なお、表2の遺跡名、種別、時代と、図7の遺跡位置、範囲は、岐阜県教育委員会2007『改訂版 岐阜県遺跡地図』を参考とした。また、その後の改訂については、岐阜県生活環境部県民文化局文化伝承課に確認した。



図8 周辺遺跡位置図（平成30年国土地理院発行2万5千分の1地形図「大垣」を使用したものである）

表2 周辺遺跡一覧表

NO.	遺跡名	時代	種別	NO.	遺跡名	時代	種別
1	国分寺遺跡	古代・中世・近世	散布地	47	大塚3号古墳	古墳	古墳
2	国分寺東遺跡	古代・中世	散布地	48	大塚4号古墳	古墳	古墳
3	美濃国分寺附1号瓦窯跡	古代	古窯跡	49	大塚5号古墳	古墳	古墳
4	美濃国分寺附瓦窯跡	古代	古窯跡	50	東畠遺跡	古代・中世	散布地
5	美濃国分寺附2号瓦窯跡	古代	古窯跡	51	東町田1号古墳	古墳	古墳
6	美濃国分寺附3号瓦窯跡	古代	古窯跡	52	東町田2号古墳	古墳	古墳
7	こいち谷古墳	古墳	古墳	53	東町田3号古墳	古墳	古墳
8	芳ヶ谷古墳群	古墳	古墳	54	東町田4号古墳	古墳	古墳
9	滝ヶ谷古墳	古墳	古墳	55	東町田5号古墳	古墳	古墳
10	深谷古墳	古墳	古墳	56	東町田6号古墳	古墳	古墳
11	石越古墳	古墳	古墳	57	西牧野遺跡	古代・中世	散布地
12	元円興寺谷古墳	古墳	古墳	58	榎戸A遺跡	弥生・古墳・古代・中世	散布地
13	元円興寺跡	古代・中世・近世	寺社跡	59	榎戸B遺跡	中世	散布地
14	地蔵古墳	古墳	古墳	60	矢道高塚古墳	古墳	古墳
15	陵山古墳群	古墳	古墳	61	矢道長塚古墳	古墳	古墳
16	東中道1号古墳	古墳	古墳	62	矢道A遺跡	古代・中世	散布地
17	西中道遺跡	古代・中世	散布地	63	矢道B遺跡	縄文・弥生	散布地
18	東中尾古墳群	古墳	古墳	64	矢道地蔵堂遺跡	古代・中世	散布地
19	西中尾古墳群	古墳	古墳	65	長松城跡・城下町	中世	城館跡
20	社宮司古墳群	古墳	古墳	66	美濃国分尼寺跡	古代	寺社跡
21	堤ヶ谷3号古墳	古墳	古墳	67	美濃国分尼寺東遺跡	古代・中世	散布地
22	堤ヶ谷4号古墳	古墳	古墳	68	美濃国分尼寺西遺跡	古代・中世	散布地
23	八幡山古墳	古墳	古墳	69	堅田遺跡	古代・中世	散布地
24	社宮司窯跡	古墳・古代	古窯跡	70	堅田古墳	古墳	古墳
25	丸山古墳群	古墳	古墳	71	親ヶ谷古墳	古墳	古墳
26	東山田窯跡	古墳	古窯跡	72	石仮谷遺跡	古代・中世	散布地
27	東山田古墳群	古墳	古墳	73	清塚1号古墳	古墳	古墳
28	西山古墳	古墳	古墳	74	清塚2号古墳	古墳	古墳
29	圓願寺跡推定地	中世	寺社跡	75	清塚3号古墳	古墳	古墳
30	山田古墳	古墳	古墳	76	清塚4号古墳	古墳	古墳
31	青野東浦遺跡	古代・中世	散布地	77	清塚5号古墳	古墳	古墳
32	青野城跡	近世	城館跡	78	市之尾古窯跡	古代	古窯跡
33	東中道古墳	古墳	古墳	79	不動北古墳	古墳	古墳
34	青葉沢町遺跡	古代・中世	散布地	80	平尾古窯跡	古代	古窯跡
35	青葉大堤遺跡	古代・中世	散布地	81	出目地山古墳	古墳	古墳
36	遊塚古墳群	古墳	古墳	82	喪山古墳	古墳	古墳
37	粉糠山古墳	古墳	古墳	83	四辻遺跡	古墳・古代	散布地
38	村北1号古墳	古墳	古墳	84	天皇遺跡	古代・中世	散布地
39	村北8号古墳	古墳	古墳	85	石越遺跡	古代・中世・近世	散布地
40	村北10号古墳	古墳	古墳	86	榎戸古墳	古墳	古墳
41	村北遺跡	古代・中世	散布地	87	一色八幡古墳	古墳	古墳
42	西町田遺跡	古代・中世	散布地	88	勝宮古墳	古墳	古墳
43	東町田遺跡	弥生・古墳・古代・中世	集落跡	89	鬼塚古墳	古墳	古墳
44	昇坂大塚古墳	古墳	古墳	90	糞平川船着場跡	中世・近世	その他の遺跡
45	大塚1号古墳	古墳	古墳	91	中山道	中世・近世	その他の遺跡
46	大塚2号古墳	古墳	古墳				

第3章 調査の成果

第1節 基本層序

基本層序は、平成25～27年度に岐阜県教育委員会が実施した試掘・確認調査で確認された層序を基に、以下のとおり設定した。発掘区の大半は、水田化や県道建設の影響を受けており、基盤層まで削平されている場所も多い。発掘区の標高は西から東に向かって低くなってしまっており、表土上面の標高は西端が約24.00m、東端が約20.00mと約4mの差がある（図9）。

I層 県道赤坂垂井線の建設に伴う道路造成土と、道路造成以前の表土を一括してI層とした。道路造成土にはぶい黄褐色の土や砂礫を多く含む土で、発掘区全域で確認した。道路造成以前の表土は黒褐色土で、B・C・D地点で認められた。層厚は0.30～1.50mである。道路造成や圃場整備によりII・III層が削平され、I層の直下がIV層となる範囲も多い。

II層 圃場整備以前の水田耕作に関連すると考えられる堆積をII層として一括した。いずれの地点も削平されており、各地点で部分的に残存している。古代から中世までの遺物を含む。A・D地点では灰白色や灰オリーブ色の土で、畦畔盛土と思われる箇所では黒色系の粘土が認められる。B地点はA・D地点と異なり、黄灰色土や黄褐色土を中心とする。層厚は約0.20mである。

III層 II層下層の堆積をIII層として一括した。また、上面が削平されている場合でも標高が対応すると考えられる場合はIII層に含めた。非常に遺存状態が悪く、詳細は不明である。縄文時代から中世までの遺物を含む。A地点中央部、B地点中央部、F地点西部のみで確認した。A地点はにぶい黄色土、B地点は灰色土や同色の砂質シルト、F地点では暗褐色粘質土であり、地点によって色調や土質が異なる。層厚は0.01～0.17mである。

IV層 今回の調査で検出された基盤と考えられる堆積をIV層として一括した。大半が旧薬師川・旧河原田川などの支流である小河川の埋土と考えられ、灰色系の粘土や砂質土、砂礫土が多い。A地点・G地点では、径1～18cmの円礫を多量に含む河床礫の高まりが認められる。

遺構はIV層の上面で検出したが、遺物包含層（III層）が存在しない箇所では、検出面の呼称として「I層基底面」又は「II層基底面」とした。

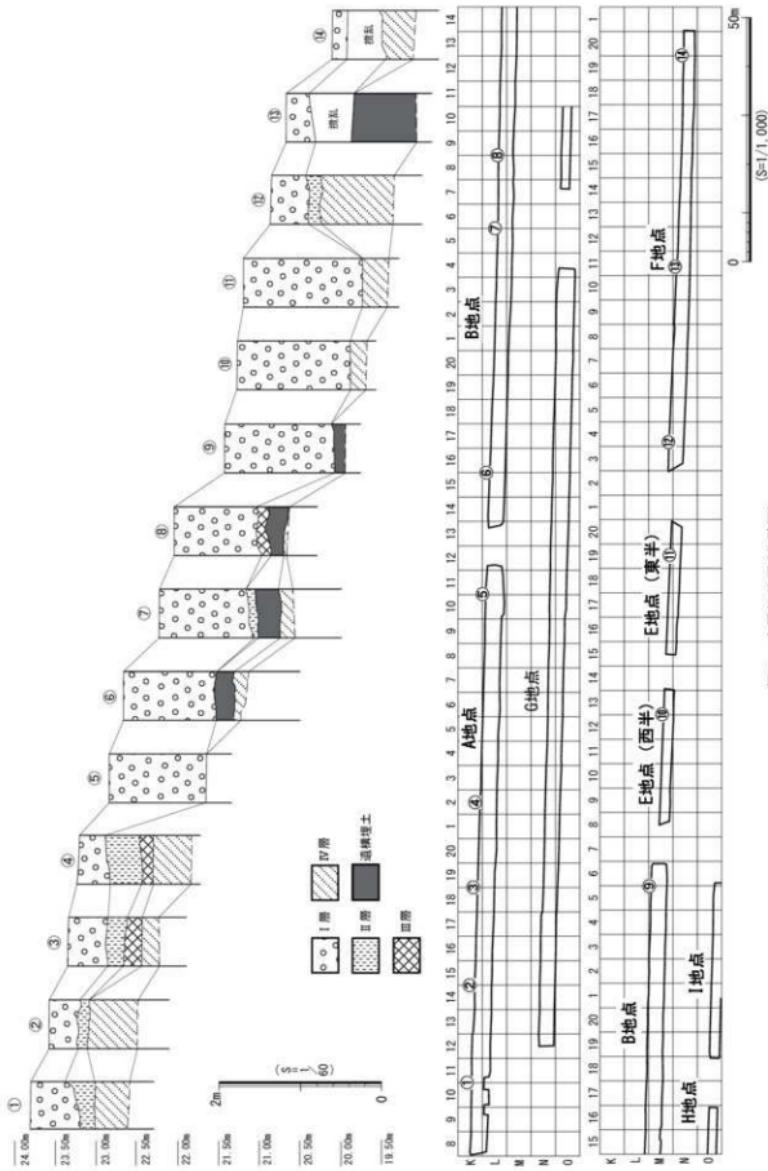


図9 土層柱状図(北壁面)

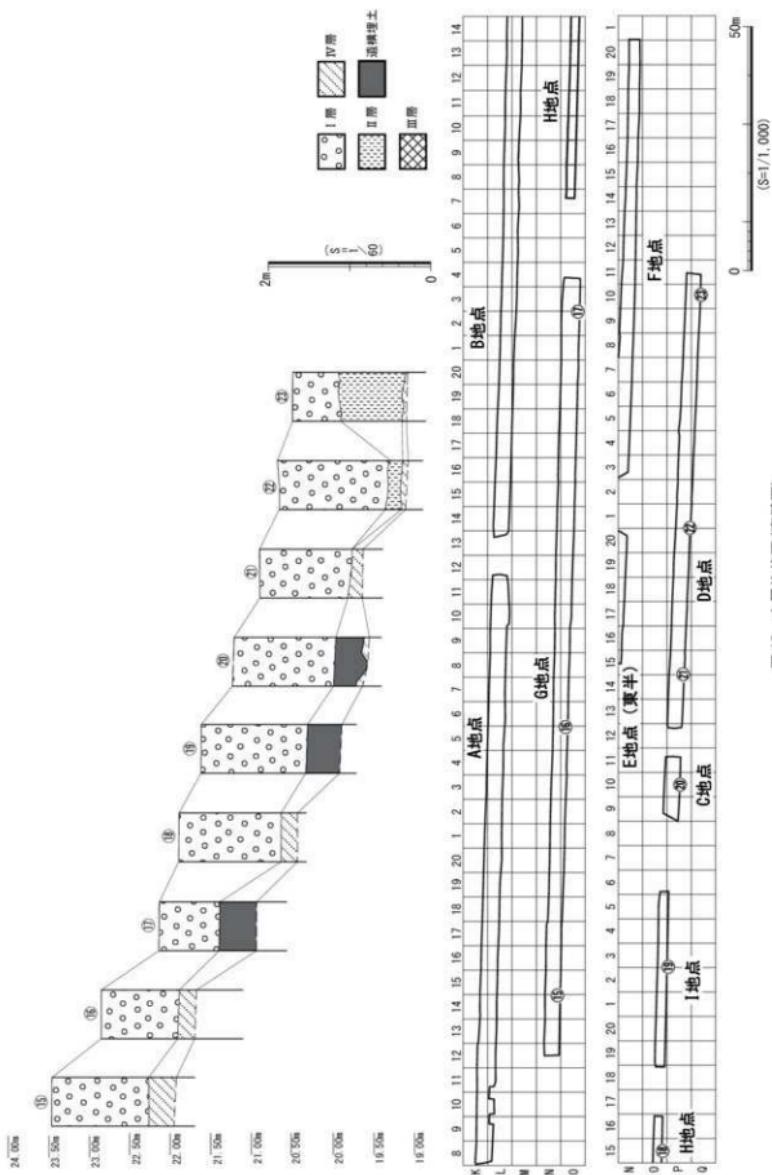


圖 10 土層柱狀圖(南壁面)

第2節 遺構の概要

1 概要

今回の調査では、古代以降の遺構を検出した。検出した遺構数は表3のとおりである。発掘区西部のA・B・G・H・I地点で112基、東部のC・D・E・F地点で37基を検出しており、東西で大きな差がある。遺構の時期決定は、出土遺物や遺構の重複関係、埋土の類似性などから判断した。また、出土遺物が複数の時代にまたがる場合は原則として新しい時期を選択したが、出土状況や出土量も判断材料とした。

本報告書では、これらの遺構のうち、遺跡の変遷や周辺の土地利用の移り変わりなどを検討する上で重要な遺構や、過去の調査と関わりの深い遺構、一括性の高い遺物が出土した遺構、出土例の少ない遺物が出土した遺構などを抽出して掲載した。なお、各遺構説明文の「遺物出土状況」に記載した出土点数は、接合前の破片数を示す。

2 遺構の分類

今回の調査で確認した遺構は、それぞれ形状と規模、構造から、掘立柱建物、柵、柱穴、溝状遺構、土坑、自然流路に分類した。各遺構の分類基準は以下のとおりである。

掘立柱建物 規則的に並んだ複数の柱穴によって構成され、上屋構造を有すると推定できる遺構を掘立柱建物とした。

柵 直線的に並んだ複数の柱穴によって構成された遺構を柵とした。

柱穴 柱根が残存しているものや土層に柱痕跡が確認できたもの、底部に礎盤石若しくは根石、柱あたりが確認できた遺構のうち、規則的な配列が確認できず、建物や柵として認定できなかったものを柱穴とした。

溝状遺構 人為的に掘られた、細長い平面形（短軸と長軸比=1：3以上）の遺構を溝状遺構とした。ただし、短軸と長軸比が1：3未満のものでも、発掘区外へ直線的に続くと判断できるもの、埋土に流水の痕跡が認められるなどを、溝状遺構としたものがある。

土坑 上記以外の人為的に掘り込まれた遺構を土坑とした。

自然流路 埋土に流水や帶水の痕跡が確認でき、人為的に掘削されていないと判断できる遺構を自然流路とした。

3 遺構番号の表記略号

遺構の略号は以下のとおりとし、原則として北西の遺構から種別ごとに通し番号を付与した。

SB—掘立柱建物、SA—柵、SP—柱穴、SD—溝状遺構、SK—土坑、NR—自然流路

なお、建物と柵に付属する柱穴は、「SB01-P03」のように付属する建物や柵の番号を先頭に記した。

4 遺構一覧表

各遺構の位置や規模などの基礎的情報は、それぞれ種別ごとに作成した遺構一覧表に示した。遺構種別により一覧表の項目は異なるが、共通する項目の内容は次のとおりである。

検出面 基本層序の層位名を使用し、Ⅲ層を除去してⅣ層上面で検出した遺構を「IV上」、それ以外は、その上面にあたる堆積によって「Ⅱ基」（Ⅱ層基底面検出）「Ⅰ基」（Ⅰ層基底面検出）と表記した。

表3 遺構種別基数一覧表

地点	SB	SB-P	SA	SA-P	SP	SD	SK	NR	合計
A	1	5	3	9	0	0	6	3	27
B	0	0	0	0	2	1	10	4	17
C	0	0	0	0	1	1	1	2	5
D	0	0	1	3	2	3	15	2	26
E	0	0	0	0	0	0	2	1	3
F	0	0	0	0	0	0	1	2	3
G	0	0	2	6	3	5	36	6	58
H	0	0	0	0	0	1	5	2	8
I	0	0	0	0	0	0	0	2	2
合計	1	5	6	18	8	11	76	24	149

平面形 形状を以下のとおり分類し、数字で表記した。

I－円形、II－方形、III－不定形、IV－不明

埋土 堆積状況を以下のとおり分類し、アルファベットで表記した。

A－埋土が單一層、B－ほぼ水平な堆積、C－中央がU字状に窪むような堆積、

D－窪みが偏った堆積、E－ブロック状に土が入る堆積、F－最上層が掘り込んだ状態となるもの、

G－柱痕状の土層があるもの、H－その他

断面形 形状を以下のとおり分類し、アルファベットで表記した。

a－半円形、b－方形、c－逆三角形、d－逆台形、e－その他

規模 () は残存長を示す。

重複関係 「新>旧」の関係を示す。「新」には、その遺構より重複が新しいもの、「旧」には、その遺構より重複が古いものを示した。

出土遺物 以下のとおり、記号化して表記した。

J－繩文土器、H－土師器、P－須恵器、K－灰釉陶器、Y－山茶碗、T－山茶碗以外の中近世陶磁器、D－土製品、R－瓦、S－石器類、W－木製品、I－金属製品、C－炭化物

第3節 遺物の概要

1 概要

今回の調査では、縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・灰釉陶器・中近世陶磁器などの土器類と、土製品、木製品、金属製品等が出土した。それらの出土数は表4のとおりである。本報告書では、これらの中の遺物のうち、遺構の性格や時期などを検討する上で必要な遺物や、遺跡の性格を端的に示す遺物、分類別の代表的な遺物を中心に抽出して報告した。以下、各遺物の概要を記す。なお、土師器・須恵器・灰釉陶器・中近世陶磁器類の年代観や器種分類等については、既存の研究¹¹⁾を参考とした。また、土師器は井川洋子氏(岐阜市教育委員会)、須恵器は渡邊博人氏(元各務原市教育委員会)、灰釉陶器と中近世陶磁器は藤澤良祐氏(愛知学院大学)に、それぞれ御指導をいただいたが、本書における記載内容の責任は編集者にある。

表4 出土遺物点数一覧表

	縄文 土器	弥生 土器	土師器	須恵器	灰釉 陶器	山茶碗	中近世 陶磁器	瓦	土製品	金属 製品	木製品	合計
接合後 破片数	73	1	330	1,167	571	36	22	263	4	1	10	2,478
割合	2.95%	0.04%	13.32%	47.09%	23.04%	1.45%	0.89%	10.61%	0.16%	0.04%	0.40%	100%

(1) 土器類

以下に、出土した土器類の概要を、種別ごとに述べる。なお、本節の記載は、接合後の破片数で示した。

縄文土器 器種が判断できた破片は9点で、深鉢のみである。

弥生土器 壺と思われる破片が1点のみ出土した。

土師器 器種を判断できた78点のうち、62点が壺で最も多い。その他、壺・坏・鉢・皿・清郷型鍋などが出土した。

須恵器 出土遺物の中では最も点数が多い。器種が判断できた627点のうち、壺が255点、坏類が213点と多くを占める。その他、蓋類・高坏・碗・盤・壺・鉢・趨などが出土した。なお、本文中において、蓋類は、かえりをもたない器形を「坏蓋」とし、口縁部内面や口縁端部にかえりをもつ器形を「蓋」として区別した。坏類は、蓋受けをもつものを「坏身」、受け部をもたないものを「坏」とし、無高台のものを「無台坏」、高台をもつものを「有台坏」として区別して記載した。

灰釉陶器 須恵器に次いで多く出土した。器種が判断できた449点のうち、408点が碗である。その他、双耳碗・皿・段皿・壺・瓶が出土した。

山茶碗 器種が判断できた29点のうち、25点が碗である。その他、小碗・小皿・片口鉢が出土した。

中近世陶磁器 近世以降の陶磁器が大半で、中世に遡るものは微量であった。

(2) 土製品

建築材として瓦が263点、塼が2点出土した。瓦では、器種が判断できた161点のうち、92点が平瓦、

40点が丸瓦であった。軒平瓦も4点出土した。この他、美濃須衛窯産の陶馬(40)が出土した。

(3) 木製品

出土した10点のうち、斎串と考えられるものが2点(77・78)出土した。斎串と考えられる2点と棒状木製品1点(76)については、保存処理及び樹種同定を行い、結果を第4章に記載した。

(4) 金属製品

不明製品(9)が1点出土した。当初鉄滓と考え成分分析を行ったが、鉄製品であることが判明した(第4章第2節)。

2 遺物観察表

本報告書に掲載した遺物の観察表は、それぞれ種別ごとに作成した。種別により一覧表の項目は異なるが、共通する項目の内容は次のとおりである。

出土位置 複数の地区(グリッド)や遺構から出土した遺物が接合した場合は、すべての出土位置を表記した。

出土層位 遺物の出土層位については、第1章第2節で明記したとおりである。なお、複数の土層から出土した遺物が接合した場合は、すべての層位を表記した。

法量 ()は復元長を示す。

胎土 色調は「新版標準土色帖」(小山・竹原2014)に基づき肉眼観察で判断した。

調整 磨滅等により不明な場合は「調整不明」と記載した。

注

1) 出土遺物の年代観や器種分類は、以下の文献を参考とした。

斎藤孝正1995「猿投、美濃、美濃須衛窯編年と他窯編年対比表」『須恵器集成図録 第3巻 東日本I』、雄山閣
城ヶ谷和広1996「総論 東海地方の古代煮炊具の様相と諸問題」、内堀信雄、井川祥子1996「美濃における古代土師器煮
炊具の様相」『第4回東海考古学フォーラム 鍋と甕 そのデザイン』、東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会
渡邊博人2008「美濃須衛窯について」『日本考古学協会2008年度愛知大会研究発表資料集』、日本考古学協会2008年度愛
知大会実行委員会

愛知県史編纂委員会2015『愛知県史 別編 窯業1 古代 猿投系』、愛知県

第4節 A・B・G・H・I 地点の遺構・遺物

1 堀立柱建物

SB01（図11・12）

検出状況 A地点FK18～FL19グリッドで検出した。遺物包含層掘削の際、発掘区の南北の幅が非常に狭いことや、P04・P05がやや暗い色調の土層に掘り込まれていたことから、遺構面を確定できないまま掘り下げ、地表面から1.06～1.18m下で遺構を検出した。その後発掘区壁面を精査した結果、遺構の掘り込みは検出面から0.29～0.37m上で、遺構埋土上にⅢ層が残存していた。そのため、掲載した平面図は掘り下げ過ぎた状況であり、P01・P02は検出した段階で、ほぼ埋土が残存していない。一方P03～P05は比較的の残存状態が良好であったが、いずれの柱穴も発掘区外に続いており、掘方全体は確認できなかった。他遺構とは、P04とSK01との重複関係から、SK01よりSB01の方が新しいと判断した。なお、掘削時は遺物包含層を掘り下げていると誤認しており、出土した遺物を一括して取り上げた。その後の土層観察により、これらの遺物は「IVa層出土遺物」として分離したが、須恵器等がSB01の柱穴掘方に含まれるものと時期差がないことから、SB01の柱穴掘方に含まれていた可能性がある。

規模・形状 P01・P02は、掘方の大半が発掘区外にあるため、他の3基と比較すると浅い。主軸方位はN-83°～Wで、P01～P05間の柱間の推定規模は約8m、柱間は約2.10mである。なお、1列しか検出できなかつたが、掘方や柱間の規模から、発掘区南若しくは北へ展開する堀立柱建物と判断した。

柱穴 5基の柱穴を検出した。P01・P02は前述のようにほとんどの部分を壁面で確認しており、平面形は不明である。P03～05も掘方北部が発掘区外であるが、検出した部分から平面形は方形と思われる。断面形は、P01・P02は大半が発掘区外であるため不明で、その他は明瞭な逆台形となるP04を除き、統一感のない形状である。P03は底面が狭くやや西に寄っており、P05は発掘区北壁で確認した断面では掘方西壁が掘方内に内傾する。発掘区北壁で計測すると、深さはP01とP02が0.51と0.57m、P03～05が0.60m～0.90mで、P01とP02が浅いが、これは掘方底面を確認できなかつたためと考えられる。埋土にはいずれも基盤層に由来する円礫を多く含むが、特にP01・P02・P04に多い。P04を除く埋土上層には、黄灰色土や暗灰色土がやや厚く堆積する共通点がある。柱痕跡はP05のみ(G-G' 1～4層)で確認したが、P03にも柱痕跡の可能性がある柱状の堆積(3層)が認められる。

遺物出土状況 P01は土師器2点、須恵器2点、灰釉陶器1点、P02は土師器2点、須恵器2点、灰釉陶器1点、P04は土師器3点、須恵器8点、P05は繩文土器1点、土師器7点、須恵器2点が出土した。7は、SB01-P02の埋土上層とGL4グリッドの遺物包含層の約40m離れた地点で出土した2つの破片を接合した。なお、「IVa層出土遺物」には繩文土器20点、土師器4点、須恵器24点、丸瓦2点、尾張系山茶碗が2点あるが、これは他の出土遺物から判断すると搅乱等の遺物も含まれている可能性がある。

遺物 出土した遺物のうち8点を図示した。なお、上記の経緯によりIVa層出土遺物についても併せて掲載する。1～7は須恵器である。1～3は美濃須衛窯V-1期の蓋である。4は美濃須衛窯IV-3期の壺である。体部にやや丸みがある。5は美濃須衛窯IV-3期の有台壺である。底部内部が摩耗している。6・7は美濃須衛窯V-1期の盤である。8は丸瓦である。凹面には細かい布目痕が見られる。凸面はナデ調整である。焼成は良好で、胎土は灰黄褐色である。

時期 出土した須恵器から、9世紀前半と考えられる。

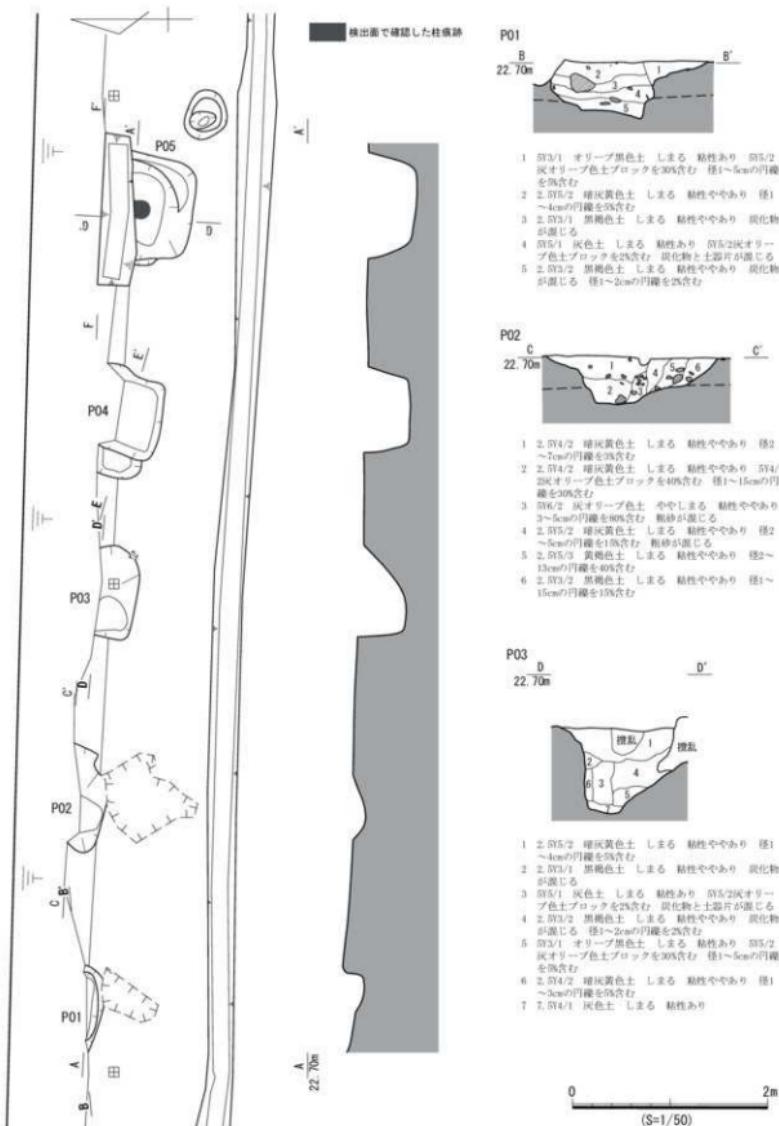


図11 SB1遺構図(1)

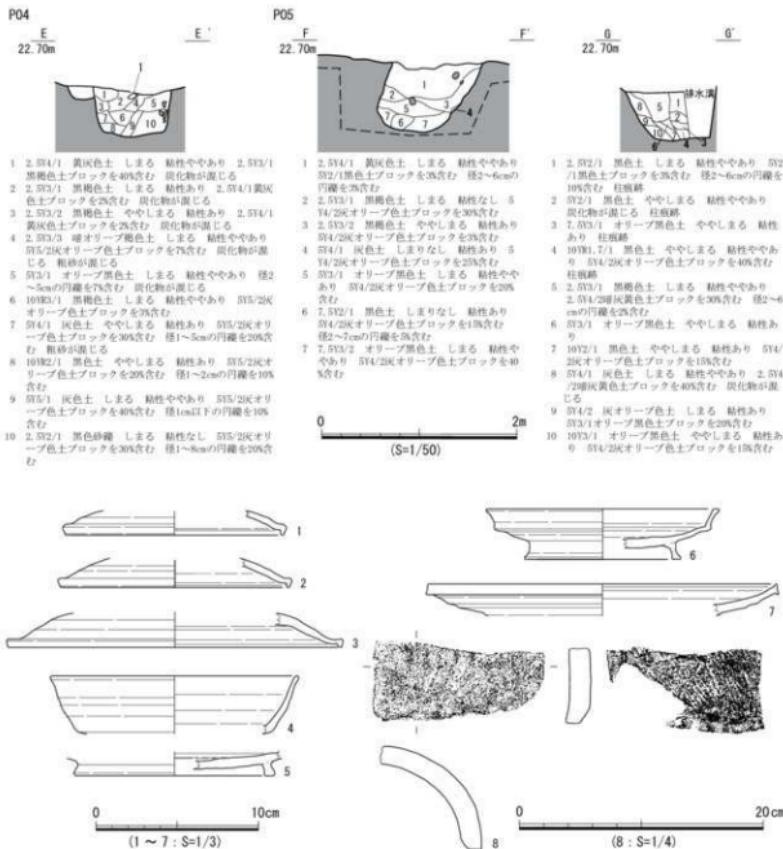


図12 SB01構造図(2)、出土遺物実測図

2 檻

SA01 (図13)

検出状況 A地点 FL19～GK1グリッド、IV層上面で検出した。3基の柱穴(P01～P03)が等間隔で直線的に配置されることから柵とした。SA01-P01とSA02-P01との重複関係から、SA01の方が新しいと判断した。P01はSB01-P05の南東約1mに位置し、検出した高さは現地表面から1.1～1.4m下である。SB01と同じ高さで検出したことから、SB01と同様に検出面を下げ過ぎたと考えられる。また、P03も発掘区壁面で検出した面から約0.5m上が掘り込み面であることを確認した。なお、柵周辺を掘削する過程で出土した遺物を一括して取り上げたが、その後の土層観察でSB01周辺の「IVa層」とは異

なる土質の堆積であることを確認したことから、これらを「IVb層出土遺物」とした。IVa層出土遺物と同様に、P01～P03の柱穴掘方に含まれるものと大きな時期差がないことから、III層や他のSAを含む柱掘方に含まれていた遺物と考えられる。

規模・形状 長軸の長さは6.20mで、柱間は3.10mである。主軸方位はN-81°-Eである。

柱穴 P01は当初2段に掘り込まれた1つの遺構と考えていたが、SA01とSA02の配置から、2つの遺構の重複と判断した。平面形は円形に近い。断面形は逆台形で、埋土の1層はやや東寄りに堆積して

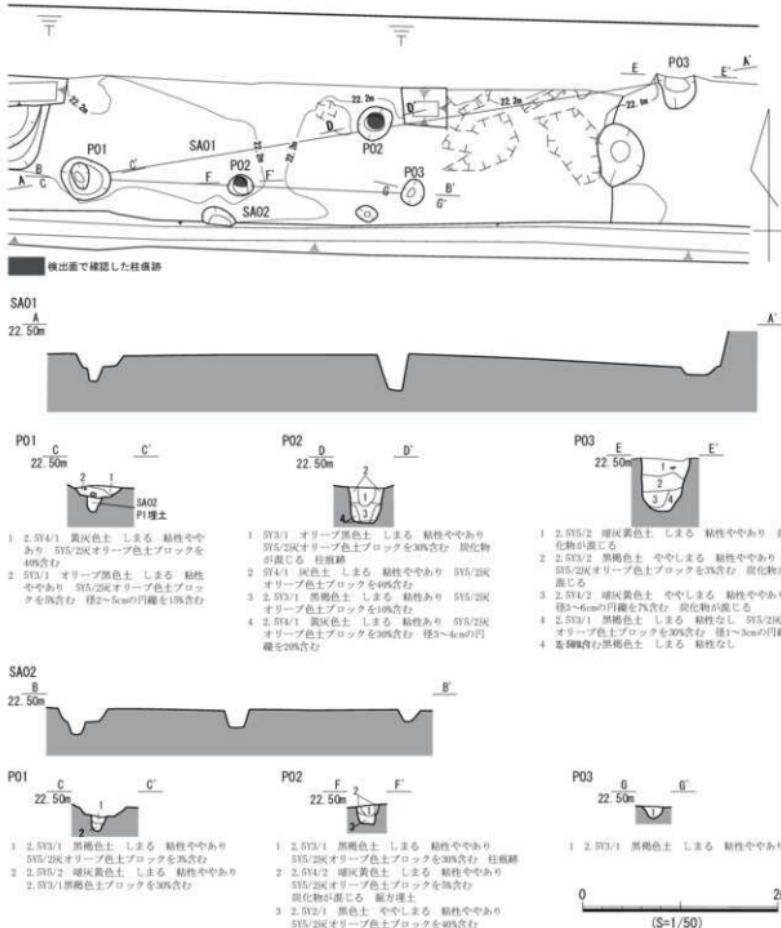


図13 SA01・SA02遺構図

いる。P02 の平面形は円形、断面形は長方形である。埋土は1層が柱痕跡で、1・2層の底面が他の柱穴の底面の高さとほぼ一致することから、3層・4層は高さ調整のために埋め戻された可能性がある。検出時に掘方のほぼ中央の埋土上面で直径0.17mの柱痕跡(1層)を確認した。P03の北端は発掘区外であり、平面形は不明である。掘方の壁面は垂直に立ち上がるが、底面は丸みを帯びる。埋土は2層が水平に堆積し、3層が4層を切るような堆積が確認できる。1層～3層には炭化物が、3層・4層には径1～6cmの円礫が含まれる。

遺物出土状況 P01上層から須恵器が1点、P02上層から縄文土器1点・土師器1点・須恵器2点・灰釉陶器1点、P03上層から縄文土器1点・須恵器2点・灰釉陶器1点が出土した。検出面から15cm下までに出土したものが多く、まとまった出土状況は認められなかった。なお、「IVb層出土遺物」には、土師器1点・須恵器6点がある。

出土遺物 実測可能な遺物は出土しなかった。

時期 灰釉陶器が出土することから、9世紀以降と考えられる。

SA02(図13)

検出状況 A地点FL19～GL20グリッド、IV層上面で検出した。SA01-P01とSA02-P01の重複関係から、SA02が古いと考えられる。遺構検出面についてはSA01と同様である。3基の柱穴(P01～P03)が等間隔で直線的に配置されることから柵とした。

規模・形状 長軸の長さは3.50mである。柱間はP01～P02で1.70m、P02～P03で1.80mである。主軸方位はN-87°～Wで、隣接するSB01の方位(N-83°～W)と類似する。

柱穴 P01はSA01で記述したとおり、SA01-P01とSA02-P01の柱穴の重複と考え、2段の掘り込みの下層をSA02-P01とした。平面形は南北に長い楕円形である。断面形は逆三角形で、底面は丸みを帯びる。

埋土は、1層はしまりのある黒褐色土で、2層は暗灰黄色土であり、1層と同色のブロックを含む。P02の埋土は基盤層と明確に異なる。平面形は円形に近く、断面形は長方形である。検出時に掘方の北寄りの埋土上面で直径0.16mの柱痕跡(1層)を確認した。1層・2層の下層には、灰オリーブ色土のブロックを含む黒色土(3層)が堆積している。P03は遺構の輪郭が不明瞭であった。平面形は円形に近く、断面形は不定で、底面が明瞭でない。埋土は単層で、しまりのある黒褐色土である。

遺物出土状況 P01上層から須恵器1点、P02上層から土師器5点が散在して出土した。

遺物 実測可能な遺物は出土しなかった。

時期 古代以降の遺構と考えられるが、詳細な時期は不明である。

SA03(図14)

検出状況 A地点GL1～2グリッド、IV層上面で検出した。遺構検出面はSA01と同様である。3基の柱穴が直線的に配置されることから柵と判断した。

規模・形状 長軸の長さは6.0mである。柱間はP01～P02で1.85m、P02～P03で4.15mである。柱間から推測するとP02～P03間にもう一基柱穴があった可能性がある。主軸方位はN-81°～Wであり、SA01とは方位が異なるが、SB01(N-83°～W)・SA02(N-87°～W)に類似する。

柱穴 P01の埋土は基盤層と明確に異なる。検出時に掘方中央の埋土上面で直径0.18mの柱痕跡を確認した。平面形は円形に近い不定な形状であり、断面形はV字形で底面が不明瞭である。埋土は、1層～3層が柱痕跡で、掘方埋土の上層である4層・5層には円礫を含む。P02の埋土も基盤層と明確に異

なる。検出時に掘方の中央よりやや東寄りの埋土上面で直径0.25mの柱痕跡(1層・2層)を確認した。平面形は南北に長い不定な形状で、中央部が一段深く掘り込まれる。底面は平坦である。埋土は1層・2層が黒褐色土で、3層には円窓を含む。P03の埋土も基盤層と明確に異なる。検出時に掘方の西寄りの埋土上面で直径0.17mの柱痕跡(1層)を確認した。平面形は円形、断面形は逆台形である。埋土は、2層の方が1層よりも明るい色調である。P03は深さが0.09mしかないが、検出面を下げすぎているため遺存状態が悪いと考えられ、P02とP03の間の柱穴がないことについても同様の理由である可能性が高いと思われる。

遺物出土状況 P01上層から土師器1点、下層から土師器4点、金属製品1点、P02上層から土師器4点が散在して出土した。P03からは遺物は出土していない。

遺物 9(鉄製品)は、当初鉄滓と考えたため切断して成分分析を実施した(第4章第2節)が、その結果鉄製品であることが判明した。図示したのは、保存処理の形状である。錆はほとんど進行してお

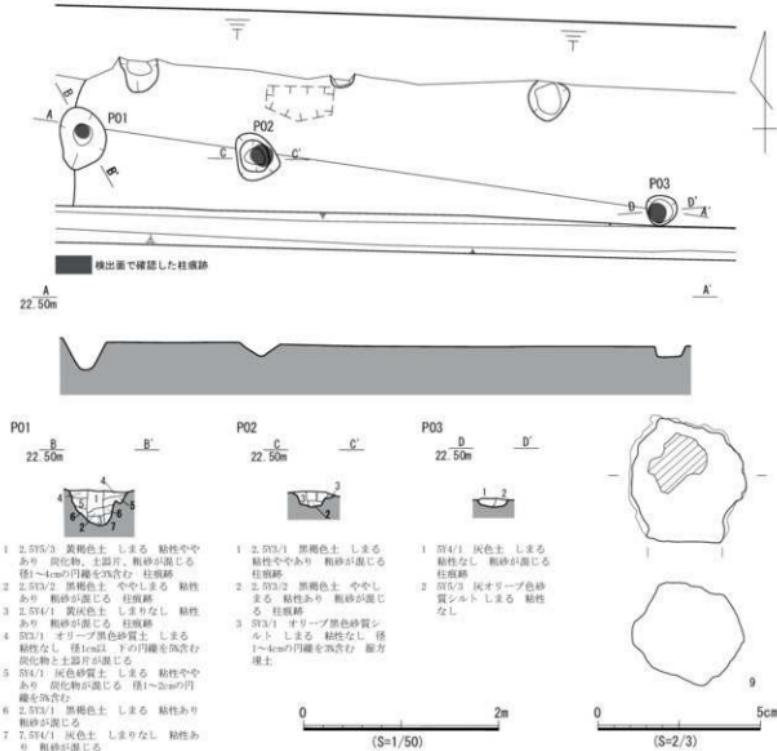


図14 SA03遺構図、出土遺物実測図

らず、鉄塊状の製品と考えられるが、用途は不明である。

時期 古代以降の遺構と考えられるが、詳細な時期は不明である。

SA04（図15）

検出状況 G地点FN20～GN1 グリッド、I層基底面で検出した。3基の柱穴が直線的に配置されることがから柵と判断した。P02はSK25～SK29と重複し、いずれの遺構よりも古い。また、P03はSK25と重複し、SK25より新しい。

規模・形状 長軸の長さは3.90mである。柱間はP01～P02で2.10m、P02～P03で1.80m、主軸方位はN-78°-W、現道を挟んで北側に位置するSB01と類似する。

柱穴 P01の埋土は基盤層と明確に異なり、平面形は円形に近い。断面形は逆台形である。埋土は単層で、浅黄橙色の粘質土ブロックを含む褐色灰色の粘土質である。P02の埋土も基盤層と明確に異なる。平面形は南北に長い楕円形で、断面は不定形である。埋土は単層であるが、P01と同じ土質であることやP01とP03の間に対応することから、北端の円形の凹みが柱穴で、調査時に重複を見落としたと判断した。P03の埋土も基盤層と明確に異なる。平面形は円形に近い形状で、底面は平坦であるが、検出面付近で壁面が開く。埋土は単層でP01・P02の埋土と同じ土質であるが、ブロックは含まない。柱穴の深さは0.08～0.26mと浅いが、遺構の上層が道路造成によって削平された影響と考えられる。

遺物出土状況 P01から須恵器が1点出土している。P02・P03からは遺物は出土していない。

遺物 実測可能な遺物は出土しなかった。

時期 古代以降の遺構と考えられるが、詳細な時期は不明である。

SA05（図15）

検出状況 G地点GN1～2 グリッド、I層基底面で検出した。3基の柱穴がほぼ等間隔で直線的に配置されることから柵と判断した。

規模・形状 長軸の長さは4.75mである。柱間はP01～P02で2.40m、P02～P03で2.35m、主軸方位はN-85°-Eである。SA04とは若干方位が異なる。

柱穴 P01の埋土は基盤層と明確に異なり、平面形は円形に近い。浅い皿状の遺構である。埋土は単層で、褐色灰色の粘土質である。P02も埋土が基盤層と明確に異なり、平面形は円形に近い。P01と同様に皿状である。埋土は単層で、P01の埋土と同じ土質である。P03の埋土も基盤層と明確に異なる。平面形は円形で、断面形は逆台形である。埋土は単層でP01・P02の埋土と同じ色調であるが、浅黄橙色の粘質土ブロックを含む。柱穴の深さはP01が0.04m、P02が0.06m、P03が0.23mと浅いが、SA04と同様に検出面が削平されているためと考えられる。

遺物出土状況 P01・P02からは遺物は出土していない。P03から土師器が2点出土した。

遺物 実測可能な遺物は出土しなかった。

時期 他の柵と同様古代以降の遺構と考えられるが、詳細な時期は不明である。

3 柱穴

SP01（図16）

検出状況 B地点HL1 グリッド、II層基底面で検出した。掘方南部は、排水溝にかかる。掘方埋土が基盤層と類似し、遺構の輪郭が不明瞭であった。検出時に掘方中央のやや西寄りの埋土上面で直径0.20mの柱痕跡を確認した。また、遺構掘削時に本遺構の東側で2層・3層を切るSK07を確認した。

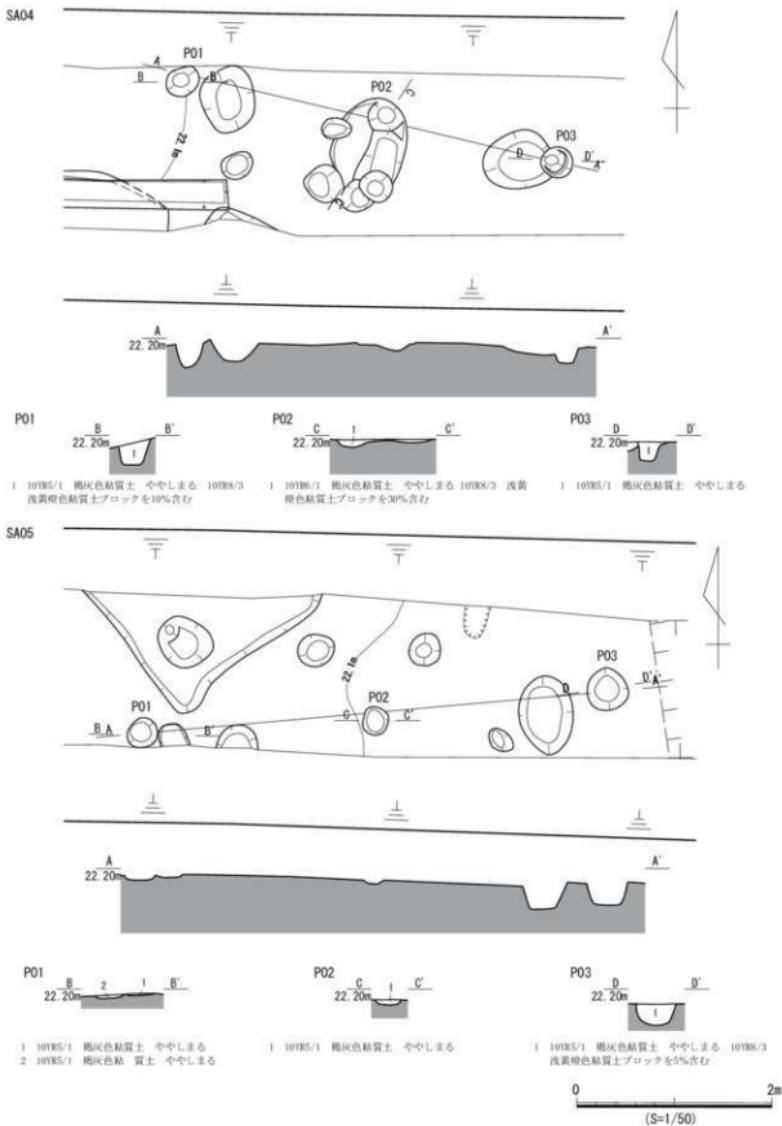


図15 SA04・SA05遺構図

SK07との重複関係から、SP01はSK07より古い。

規模・形状 堀方南部が発掘区外であるため本来の形状は不明であるが、検出された部分の平面形は椭円形に近い不定な形状である。断面形は逆台形に近い形状をとるが、底面は西から東に向かって傾斜する。

埋土 1層は柱痕跡と考えられるが、堀方の底面には達しない。暗灰黄色の砂質シルトブロックを多く含む。2層～4層は堀方埋土で、このうち2層は灰オリーブの砂質シルトブロックを含み、基盤層と類似する。3層はしまりのある黒色土、4層は1層と同様のブロックを多く含む。

遺物出土状況 遺構埋土のb層・d層で須恵器2点が散在して出土した。

遺物 実測可能な遺物は出土しなかった。

時期 古代以降の遺構と考えられるが、詳細は不明である。

SP02（図16）

検出状況 B地点HM13グリッド、I層基底面で検出した。北部は搅乱と重複する。堀方埋土が基盤層と類似し、遺構の輪郭は不明瞭であった。検出時に堀方中央の埋土上面で、直径0.18mの柱痕跡を確認した。

規模・形状 搅乱に切られるが、検出した部分の平面形は不定形で、断面形は逆台形である。

埋土 1層は柱痕跡で、埋土と同色の砂質シルトブロックを含む。2層・3層は同色・同質の暗灰黄色砂質シルトであるが、3層には黄灰色土のブロックが含まれる。4層は1層と同じブロックを含む黄灰色土である。

遺物出土状況 遺構埋土のc層で灰釉陶器が1点出土した。

遺物 実測可能な遺物は出土しなかった。

時期 灰釉陶器を含むことから、9世紀以降と考えられる。

4 溝状遺構

SD01（図17）

検出状況 B地点 HL 6 グリッド、II層基底面で検出した。NR06の範囲確認のためトレンチを掘削した際に、北壁でNR06の埋土下面に掘り込みがあることを確認し、その後平面を精査してSD01のプラン

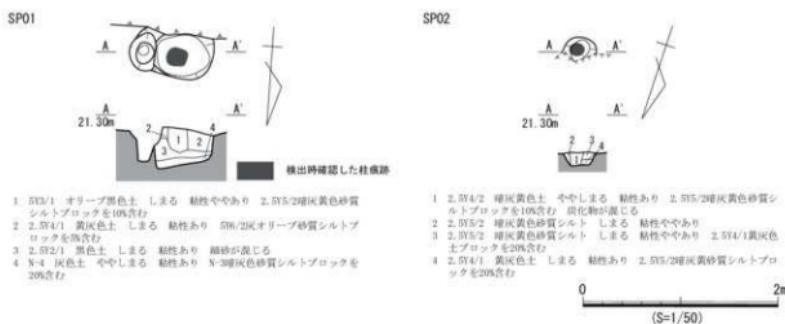


図 16 SP01・SP02 遺構図

を確定した。以上の経緯から、SD01はNR06より古い。

規模・形状 南北方向で直線的に設置される。南北端は発掘区外に延びる。幅は0.74m、長さは0.90m以上、深さは0.38mで、断面形は逆台形に近い。東西端部の底面標高はともに20.37mである。

埋土 単層で、粘性のあるオリーブ黒色土が堆積する。流水の痕跡は認められなかった。

遺物出土状況 土師器1点、須恵器3点、灰釉陶器4点、瓦2点が掘方北部の底面付近でまとまって出土した。

遺物 出土した遺物のうち4点を図示した。10は美濃須衛窯V-1期の須恵器の碗である。底部外面に文字と思われるが判読不能な墨書が認められる。11~13は灰釉陶器である。11は黒笹90号窯式の碗である。底部内面が摩耗している。底部外面には墨書が確認でき、「壹」の可能性がある。「壹」の文字については、異体字であるが、大垣市教育委員会による国分寺遺跡伽藍南面壁接地の調査(大垣市教育委員会2005、以下、「伽藍南面発掘区」という。)で出土した墨書土器に類例がみられる¹⁾。高台にはヘラ状工具による刻みが認められる。12は虎渓山1号～丸石2号窯式の碗である。13は丸石2号窯式の碗で、底部内面が摩耗している。底部外面には墨書が認められるが判読不能である。

時期 12、13から、11世紀以降に埋没した遺構と考えられる。

SD02(図17)

検出状況 G地点GN5～G05グリッド、I層基底面で検出した。本遺構の西側には、SD04が並行して

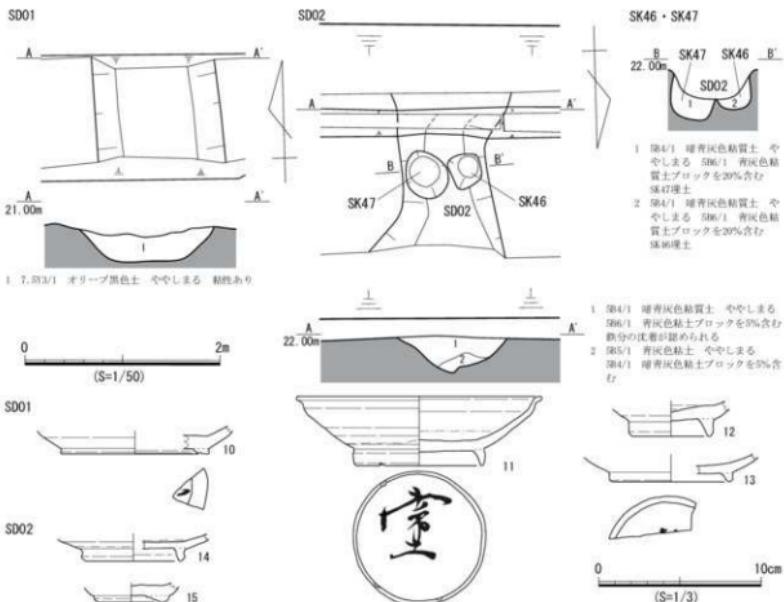


図17 SD01・SD02・SK46・SK47遺構図、SD01・SD02出土遺物実測図

設置される。遺構底面でSK45とSK46を検出した。

規模・形状 南北方向に設置される。南北端は発掘区外に延びる。南端の幅が0.40m、北端の幅が0.80m、深さは0.30mである。南壁で確認した断面形は三角形に近い形状であるが、底面の西部がくぼむ。掘方中央部は逆台形に近い。遺構底面で検出した2基の土坑(SK46、SK47)の内、SK46は、長軸長が0.36m、短軸長が0.32m、深さが0.33mで、平面形は方形に近い。一方、SK47は、長軸長が0.51m、短軸長が0.43m、深さが0.47mで、平面形は円形である。両遺構はSD02と埋土の土質・土色が類似するところから、本遺構と何らかの関係がある可能性がある。

埋土 SD02の埋土は2層に分層した。どちらも粘性があり、還元により青みが強い。1層には青灰色粘土のブロック、2層には暗青灰色粘土のブロックを含む。流水の痕跡は認められなかった。SK46、SK47の埋土は、SD02の1層と同じ土質・土色で、同様に青灰色粘土のブロックを含む。

遺物出土状況 SD02からは須恵器1点、灰釉陶器1点、山茶碗1点が掘方北部の埋土中から散在して出土した。SK46、SK47からは遺物は出土しなかった。

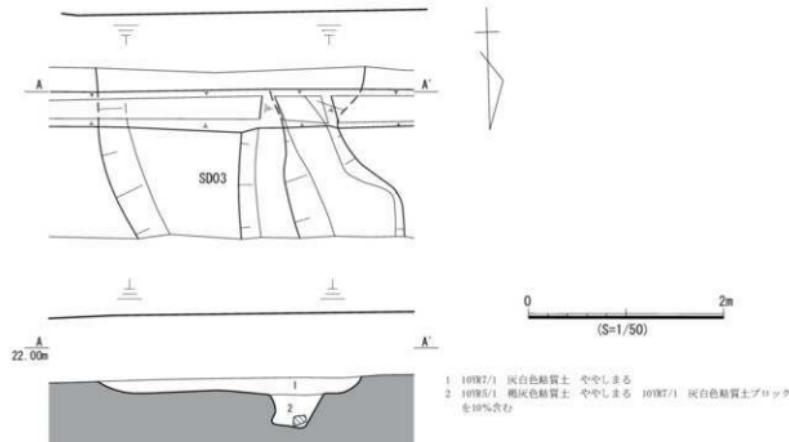
遺物 出土した遺物のうち2点を図示した。14は黒窯90号窯式の灰釉陶器の碗で、底面内部が摩耗している。15は、尾張型第4型式の小碗である。

時期 15から、13世紀以降に埋没した遺構と考えられる。

SD03（図18）

検出状況 G地点GN9～G09グリッドI層基底面で検出した。

規模・形状 南北方向に設置される。南北端は発掘区外に延びる。南壁では西寄りに2段となる掘り込みを確認し、完掘後平面では3段となったことから、複数の溝である可能性が高い。このうち南壁で確認した2条は、幅や掘方の形状、設置された方向も異なる。最も深い掘り込みの底面標高は南北端ともに21.23mである。



埋土 2層に分層した。1層はややしまりのある灰白色粘質土で、2層はややしまりのある褐灰色粘質土である。2層も、1層と同じ土質のブロックを含む。流水の痕跡は認められなかった。

遺物出土状況 遺物は出土しなかった。

時期 遺構の重複や出土遺物がないことから、所属時期は不明である。

SD04(図19・20)

検出状況 G地点GN4～G05グリッド、I層基底面で検出した。本遺構の東側にSD02が並行して設置される。

規模・形状 南北方向に設置される。南北端は発掘区外に延びる。幅は、南端1.70m、北端1.86m、深さは0.68mで、断面形は長方形に近い形状であるが、南壁では西肩はやや緩やかな傾斜になり、東肩がほぼ垂直に立ち上がる。底面は中央部より西は段差になっている。底面標高は東西端部が21.30m、中央部が21.19m～21.20mで、中央部の方が高い。

埋土 2層に分層した。1層は褐灰色粘質土、2層にはぶい黄橙色粘質土が堆積し、2層は褐灰色・灰色粘土のブロックを含む。流水の痕跡は認められなかった。

遺物出土状況 土師器1点、須恵器28点、灰釉陶器32点、山茶碗6点、中近世～近代の陶器7点、瓦2点が埋土中から散在して出土した。

遺物 出土した遺物のうち2点を図示した。16は須恵器の盤である。胎土から美濃須衛窯産ではない可能性がある。17は尾張型第3～4型式の片口鉢である。底部内部が摩耗している。

時期 出土遺物から、最終的に埋没したのは近代以降と考えられる。

SD04

SD05

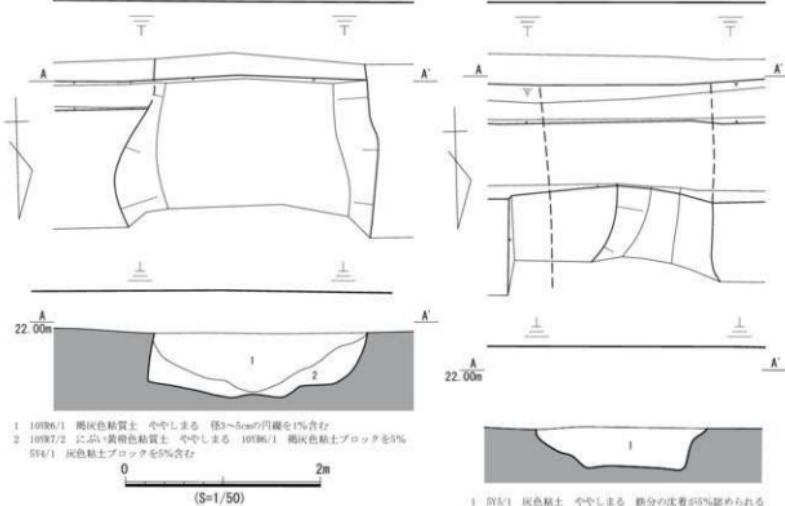


図19 SD04・SD05遺構図

SD05(図19・20)

検出状況 G地点G018グリッド、I層基底面で検出した。NR11～NR13を検出した後、NR11～NR13の範囲確認のためにトレンチを掘削した際に、南壁でNR11と重複する本遺構の掘り込みを確認した。その後掘り残した北壁側で精査を行ったが、西肩を確認できないまま掘り下げ、基盤層の上面でプランを確認した。なお、図で示した破線は、壁面で確認した上端から想定した遺構の範囲である。

規模・形状 南北方向に設置される。南北端は発掘区外に延びる。南端の幅が0.30m、北端の幅が0.42m、深さは0.36mである。底面は不定形、断面形は逆台形である。底面標高は東端20.97m、西端20.96mで大きな差はない。

埋土 単層で、ややしまりのある灰色粘土である。流水の痕跡は認められなかった。

遺物出土状況 土師器40点、須恵器31点、灰釉陶器1点、瓦14点が遺構埋土上層で散在して出土した。

遺物 出土した遺物のうち、5点を図示した。18～20は須恵器である。18は美濃須衛窯IV-3期の有台坏で、底部外面にヘラ記号が見られる。19は美濃須衛窯V-1期の碗である。20は美濃須衛窯V-1期の壺である。内面に同心円当具痕、外面に格子状のタタキ痕が見られる。21・22は土師器の壺である。21は口縁端部に平坦面を作出する。22は口縁部と底部の破片で、同一個体と考えられるが、接合しない。平底で、口縁部内面及び体部外面に粗いハケ調整を施す。外面・内面に煤が付着している。

時期 出土遺物から考えると9世紀以降の埋没と考えられるが、NR11との重複関係から、中世以降にNR11とともに埋没した遺構の可能性がある。

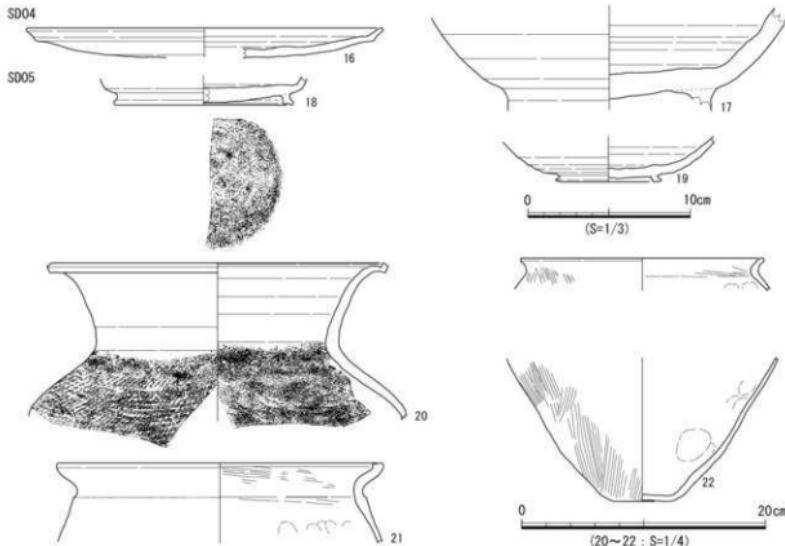


図20 SD04・SD05出土遺物実測図

SD10（図21）

検出状況 H地点HO15-16グリッド、I層基底面で検出した。遺構埋土が、重複するNR15の埋土と明確に異なり、範囲は明瞭であった。伽藍南面発掘区と照合すると、位置的に近世に再建された国分寺への参道、通称「国分寺道」の下部遺構の可能性がある。遺構の重複は、NR15の埋土上面に設置されていることから、SD10はNR15より新しい。

規模・形状 南北方向に設置される。南北端は発掘区外に延び、南壁面の土層で確認した東西の幅が3.16m、深さは0.45mである。断面形は逆台形に近い。底面標高は東端20.21m、西端20.38mである。

埋土 単層で円礫を多く含む砂礫土である。2層とした土層は、埋土と非常によく似た堆積であるが、2層を掘り込むようにしてSD10が掘削されたと判断した。

遺物出土状況 排水溝掘削の際、灰釉陶器1点、山茶碗1点が出土した。

遺物 実測可能な遺物は出土しなかった。

時期 NR15との関係から、近代以降に設置された遺構と考えられる。

5 土坑

SK08（図22・23）

検出状況 B地点HL2グリッド、I層基底面で検出した。遺構埋土が基盤層と明確に異なり、範囲は明瞭であった。SP01の西側に位置する。検出作業により、埋土上面で礫と遺物が露出した。

規模・形状 長軸長1.07m以上、短軸長0.76m以上、深さ0.26mであるが、南端は排水溝に切られるため本来の形状は不明であるが、土層や掘方の全掘状況から3つの土坑が重なっている可能性がある。

埋土 5層に分層した。このうち1層は、掘方中央部の比較的浅い部分の埋土で、2層～4層は掘方中央部の一層深くなった部分の掘り込みの埋土である。5層が最も古いと考えられる掘り込みの埋土で、掘方の東部に堆積する。

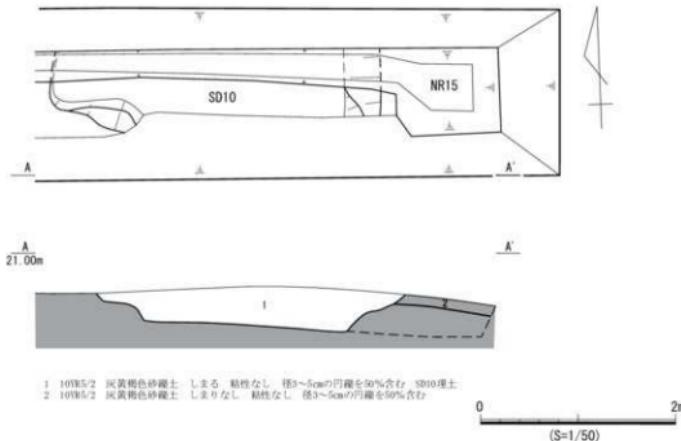
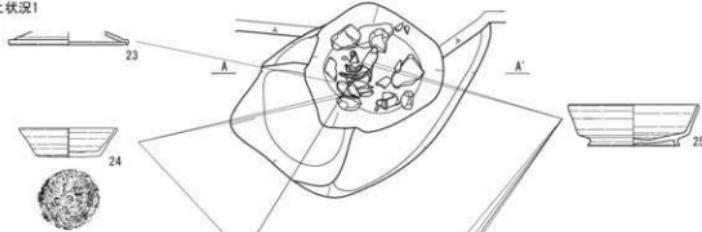


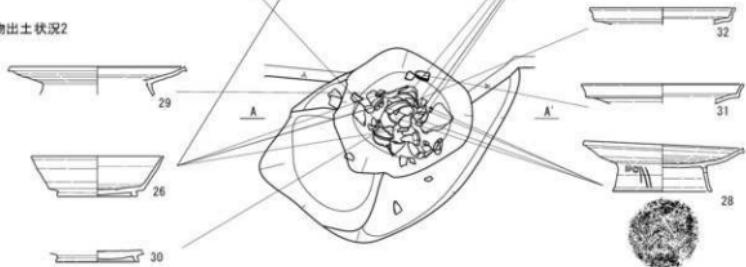
図21 SD10遺構図

遺物出土状況 A-A'断面の1層に含まれる範囲で、土師器2点、須恵器101点が出土した。遺物は2回に分けて取り上げ、それぞれ出土状況を記録した(第22図)。礫は中央の掘り込みに沿って一見すると円周になるように配置されており、その中央に比較的の残存状態のよいものも含め、須恵器の破片が集積していた。これらの内接合した破片は、比較的近接した位置で出土していること、完形となる個体はないことから、破損した状態で入れ込まれた破片が、土圧で割れた可能性がある。ただし、遺構

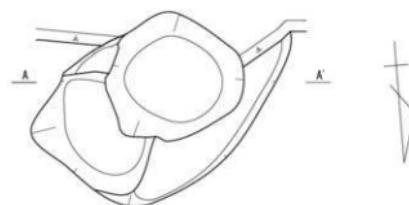
遺物出土状況1



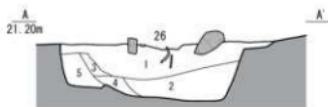
遺物出土状況2



完掘状況



0 20cm
(遺物 : S=1/6)



- 1 SY3/1 オリーブ黒色土 ややしまる 黏性あり
- 2 SY3/2 オリーブ黒色土砂質土 ややしまる 新生強い 塩化物が
測じる
- 3 2.SY4/1 黄灰色砂質土 ややしまる 黏性あり
- 4 SY5/1 黑色砂質土 しまりなし 黏性あり
- 5 2.SY5/1 黄灰色砂質シルト しまりなし 黏性なし

0 1m
(S=1/20)

図22 SK08遺構図、遺物出土状況図

の上面が削平されているため、破片が失われた個体が存在することも考えられる。2層～5層では遺物は出土しなかった。

遺物 出土した遺物のうち9点を図示した。23～32は須恵器である。23は美濃須衛窯V-1期の蓋である。24～27、30は美濃須衛窯の坏である。24はIV-3期の無台坏で、底部外面にヘラ記号が認められる。25はIV-3期～V-1期の有台坏である。26はIV-3期～V-1期の有台坏である。底部が小さく、体部が広がる形状は、碗の影響を受けている可能性がある。27はV-1期、30はIV-3期～V-1期の有台坏である。28、29、31、32は美濃須衛窯の盤である。28・29は口縁部が直線的に開き、31・32は口縁部が上方に折り返す形状をとる。28はV-1期で、底部外面に線刻、脚部の三方に円形の透かしが認められる。29はIV-3期、31・32はV-1期に比定した。

時期 23～32から、9世紀前半と考えられる。

SK09(図23・24)

検出状況 B地点HL4グリッド、I層基底面で検出した。NR06の範囲確認のためのトレンチ掘削の際に、トレンチの壁面でNR06の埋土を掘り込む土層と、壁面から露出する瓦を確認したため、平面を精査してプランを確認した。

規模・形状 長軸長1.60m以上、短軸長1.56m以上、深さ0.20mであるが、北端は発掘区外へ続くため、本来の形状は不明である。断面は方形に近いが、掘方西壁は底面から外に向かって開く。

埋土 5層に分層した。3層～5層はそれぞれ色調の異なる土のブロックを含み、特に4層・5層が多い。なお、5層は堆積状況から別遺構の可能性がある。

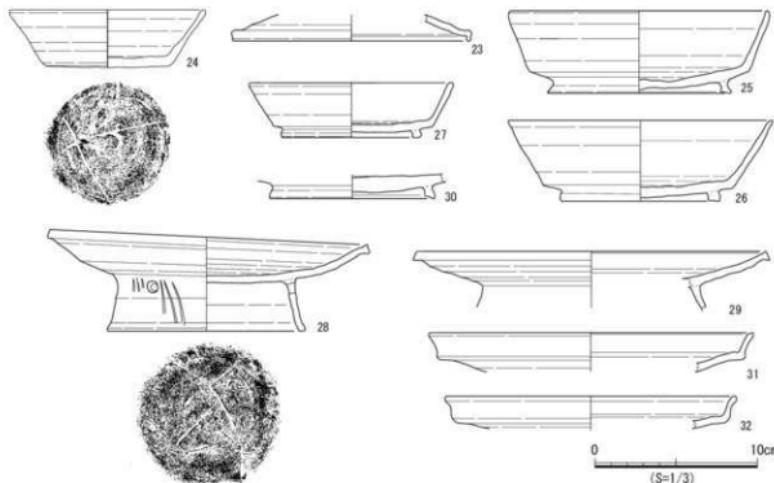
遺物出土状況 3層の中層よりや下部、標高20.76m～20.59m付近から、平瓦が18点、丸瓦が3点の他、分類不明の瓦が2点出土した。完形となる個体はなく、破片の隙間に埋土があまり入り込んでいないことから、破損した状態でまとまって入れ込まれた可能性が高い。また、これらの遺物取り上げ後、遺構の北壁にかかる部分の埋土中から土師器9点、須恵器19点、灰釉陶器1点、丸瓦15点、軒平瓦2点、分類不明の瓦5点がまとまって出土したが、発掘区壁面が崩壊するおそれがあり一括で取り上げたため、詳細な出土状況は確認できなかった。

遺物 出土した遺物のうち6点を図示した。33は美濃須衛窯IV-3期の須恵器の有台坏である。底部内面が摩耗している。34・35は丸瓦である。34は玉縁付の丸瓦で、凸面はナデ調整、凹面には布目痕が観察できる。焼成は良好で、胎土は褐灰色である。35は無段式の丸瓦で、凸面は繩目叩きののちナデ調整を施したと考えられる。狭端にタタキ痕と思われるものが見られる。凹面は摩滅しているため、調整は不明である。広端と側縁が一部残存しており側縁端部はヘラ削りが施される。焼成は不良で、胎土は灰白色である。36・37は平瓦である。36の凸面は、繩目叩きののちにハケ調整が施される。凹面は凸面と同様なハケ調整が施される。広端が一部残存しており、ヘラ削りが施される。焼成は良好で、胎土は灰白色である。37の凸面は、広狭方向に幅約3.5cmの単位で繩目の叩き痕、凹面には布目痕が認められる。広端と側縁の一部が残存しており、ヘラ削りが施される。焼成は良好で、胎土は灰白色である。38は軒平瓦である。瓦当部に唐草文が確認できる。国分寺創建期とされる均整唐草文を持つ瓦に類似する²⁾。凸面は摩滅しており、凹面に布目痕が見られる。どちらの面にも煤が付着している。側縁が一部残存しており、ヘラケズリが施される。焼成は不良で胎土は灰白色である。

時期 33は美濃須衛窯IV-3期であり、38も国分寺創建時のものと考えられるため出土遺物の時期に

はまとまりがあるが、重複関係にあるNR06が11世紀以降に埋没した遺構と考えられ、それよりも新しい本遺構も11世紀以降と考えられる。

SK08



SK09

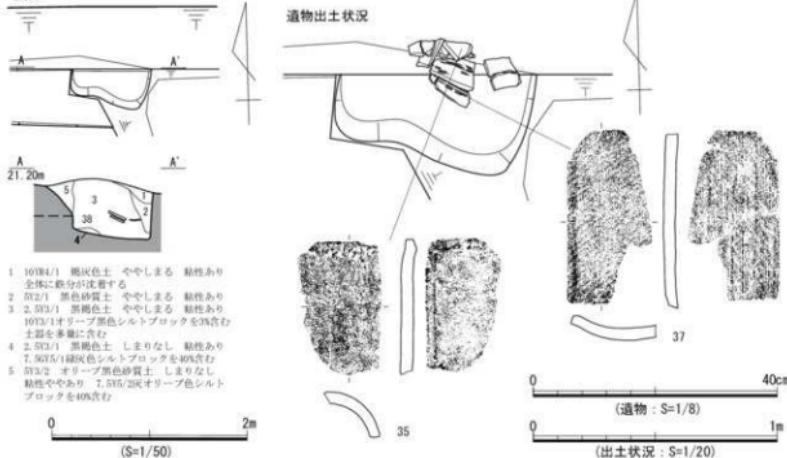


図23 SK08出土遺物実測図、SK09遺構図・遺物出土状況図

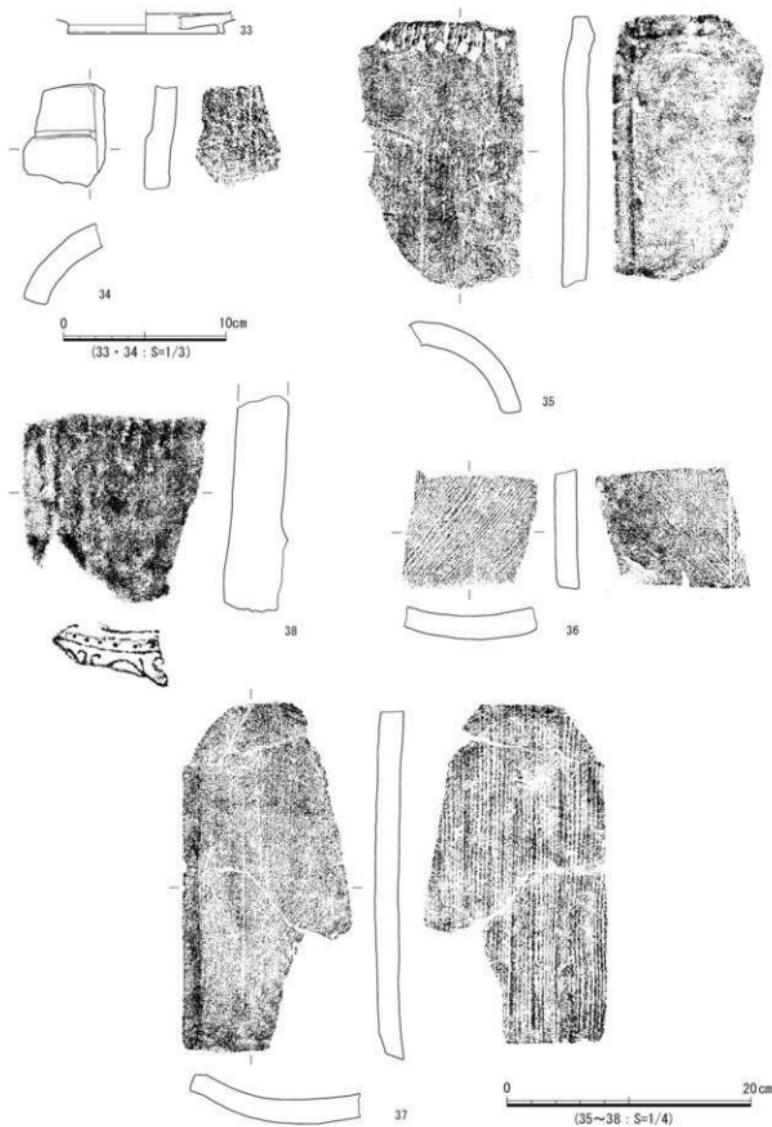


図24 SK09出土遺物実測図

SK17(図25)

検出状況 G地点FN18グリッド、I層基底面で検出した。遺構埋土が基盤層と明確に異なり、遺構の範囲は明瞭であった。NR09の西側に位置する。検出時に埋土中の土師器の甕(39)が露出した。

規模・形状 長軸長0.29m、短軸長0.24m、深さ0.15mである。平面は楕円形、断面は半円形である。

埋土 3層に分層した。いずれもブロック土を含み、2層・3層は特に多い。なお、39の内側は1層と同色・同質の埋土であることを確認した。

遺物出土状況 土師器の甕(39)のみが、底面を上にした状態で出土した。底部から体部が半周程度残存していた。2・3層が埋没した後、1層の土と共に39を入れ込んだと考えられる。

遺物 39は土師器の丸底甕である。内面に指押さえの痕跡、外面にハケ調整が確認できる。

時期 39から、古代の遺構と考えられるが、詳細な時期は不明である。

SK25(図25)

検出状況 G地点GN1グリッド、I層基底面で検出した。遺構埋土が基盤層と明確に異なり、遺構の範囲は明瞭であった。他遺構との重複関係は、SA04-P03よりも古い。

規模・形状 長軸長0.72m、短軸長0.60m、深さ0.06mである。平面は東西に長い楕円形に近い形状で、断面は緩やかに壁が立ち上がる皿状である。

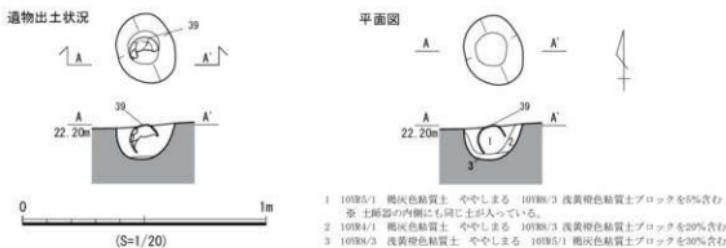
埋土 単層で、浅黄褐色粘質土のブロックを含む。

遺物出土状況 器種不明の縄文土器が1点埋土中から出土した。

遺物 実測可能な遺物は出土しなかった。

時期 縄文時代の遺構の可能性はあるが、詳細な時期は不明である。

SK17



- 1 101B5/1 浅灰色粘質土 ややしまる 101B8/3 浅黄褐色粘質土ブロックを5%含む
※ 土師器の内側に同じ土が入っている。
- 2 101B4/1 浅灰色粘質土 ややしまる 101B8/3 浅黄褐色粘質土ブロックを20%含む
- 3 101B8/3 浅黄褐色粘質土 ややしまる 101B5/1 浅灰色粘質土ブロックを30%含む

SK17出土遺物

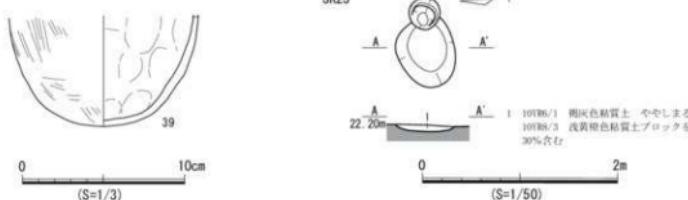


図25 SK17・SK25遺構図、SK17遺物出土状況図・出土遺物実測図

SK30・SK37(図26)

検出状況 SK37はG地点GN1-2グリッド、I層基底面で検出した。遺構埋土が基盤層と明確に異なり、輪郭が明瞭であった。SA04の東部、SA05の北部に位置する。SK30はSK37の底面で検出した。

規模・形状 SK37は長軸長1.90m以上、短軸長1.72m以上、深さ0.06mである。北端は発掘区外へ続くため、本来の形状は不明であるが、直線的な2辺がほぼ直交することから平面形は方形又は長方形である可能性がある。断面形は皿状である。SK30は長軸長0.57m、短軸長0.50m、深さ0.16mである。平面は北西・南東に長い楕円形、断面は緩やかに壁が立ち上がる逆台形に近いが、掘方北西部の底面が一段深くなっている。SK37を堅穴建物とした場合、SK30が主柱穴の可能性もあるが、今回の調査範囲では認定できなかった。

埋土 SK37は単層で、浅黄橙色粘質土のブロックを含む。SK30は2層に分層し、1層にはSK37と同様の浅黄橙色粘質土のブロックを含む。2層は灰白色粘質土のブロックを含む。

遺物出土状況 SK37から器種不明の須恵器が1点埋土中から出土した。SK30からは出土しなかった。

遺物 実測可能な遺物は出土しなかった。

時期 古代以降の遺構と考えられるが、詳細な所属時期は不明である。

SK31(図26)

検出状況 G地点GN2グリッド、I層基底面で検出した。遺構埋土が基盤層と明確に異なり、遺構の範囲は明瞭であった。検出した際に埋土中の川原石が中央部に露出していた。

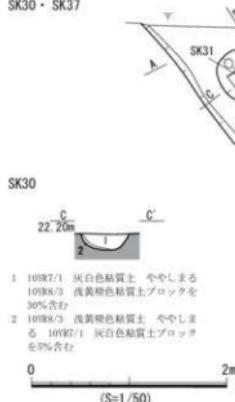
規模・形状 長軸長0.34m、短軸長0.33m、深さ0.25mである。平面は円形、断面は逆台形に近い。

埋土 単層で、褐灰色の粘質土である。扁平な川原石が掘方の中央部より東寄りの底面から若干浮いた状態で、掘方に対して立った状態で出土した。

遺物出土状況 遺物は出土しなかった。

時期 遺構の重複や出土遺物がないことから、所属時期は不明である。

SK30・SK37



SK31

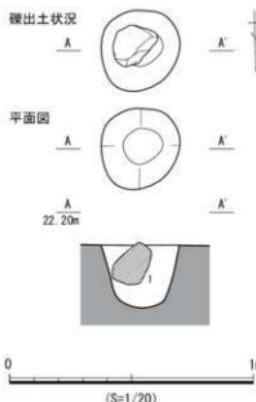


図26 SK30・SK31・SK37遺構図

SK34（図27）

検出状況 G地点GN3グリッド、I層基底面で検出した。遺構埋土が基盤層と明確に異なり、輪郭が明瞭であった。南端をSK40に切られることから、SK34の方がSK40よりも古い。

規模・形状 長軸長1.95m以上、短軸長1.14m以上、深さ0.07mである。北端は発掘区外へ続き、東端は搅乱に切られるため、本来の形状は不明である。断面形は浅い皿状で、底面は平坦である。

埋土 単層で、浅黄橙色粘質土のブロックを含む。

遺物出土状況 遺物は出土しなかった。

時期 SK40より古い遺構であるが、詳細な所属時期は不明である。

SK36（図27）

検出状況 G地点GN4グリッド、I層基底面で検出した。SK36・SK43・SK44・SK51の4つの土坑が重複している。他遺構の重複は、SK43より新しい。

規模・形状 長軸長0.84m、短軸長0.75m、深さ0.36mである。平面は円形に近い。断面は逆台形に近いが、底面は丸みを帯びる。

埋土 2層に分層した。1層は灰白色粘質土、2層は浅黄色粘質土で共にブロックを含む。

遺物出土状況 遺物は出土しなかった。

時期 SK43より新しいことから、9世紀前半以降と考えられる。

SK38（図27）

検出状況 G地点GN2-GO2グリッド、I層基底面で検出した。範囲は不明瞭であったが、埋土上面で直径約32cmの扁平な角礫を検出したため周囲を精査し、範囲を確定した。SA05-P03の西部に隣接する。

規模・形状 長軸長0.82m、短軸長0.55m、深さ0.28mである。平面は南北に長い梢円形、断面は逆台形で、底面は東端がやや高い。なお、掘方の底面でも直径14cmの角礫が出土した。

埋土 2層に分層し、表面の縁は2層上面に設置されていた。1層・2層共にブロックを含む。

遺物出土状況 器種不明の繩文土器1点、土師器2点、灰釉陶器1点が埋土中から散在して出土した。

遺物 実測可能な遺物は出土しなかった。

時期 灰釉陶器が出土したことから、9世紀以降と考えられる。

SK40（図27）

検出状況 G地点GN2-GO2グリッド、I層基底面で検出した。他遺構との重複関係はSK34より新しい。

規模・形状 長軸長0.27m、短軸長0.21m、深さ0.22mである。平面は北東・南西に長い梢円形、断面は擂鉢状、底面は円形である。

埋土 単層で、褐灰色の粘質土で、浅黄橙色粘質土のブロックを含む。

遺物出土状況 土師器1点、灰釉陶器4点が埋土中より散在して出土した。

遺物 実測可能な遺物は出土しなかった。

時期 灰釉陶器が出土したことから、9世紀以降と考えられる。

SK42（図28）

検出状況 G地点GN3-GO3グリッド、I層基底面で検出した。

規模・形状 長軸長0.50m以上、短軸長0.49m以上、深さ0.28mである。西端が搅乱と重複するため本来の形状は不明である。断面は逆台形に近く、底面は平坦である。

埋土 単層で、褐色灰色の粘質土である。浅黄橙色粘質土のブロックを含む。図示していないが、埋土の浅いところから長さ25cm、幅10cm程度の短冊形の川原石も出土している。

遺物出土状況 美濃須衛窯産の陶馬(40)が、埋土中ほどの側面に張り付くように1点、底面から1点が出土した。同一個体で接合することを確認した。

遺物 40は美濃須衛窯IV-3期～V-1期の須恵器の陶馬である。胴体中心部付近で折れており、頭部と左側の脚は欠損している。棒に粘土をまきつけて整形したと考えられ、断面や尾の下部にその痕跡が確認できる。粘土によって鞍が、沈線でたすなが表現されている。

時期 40が埋納若しくは使用後の廃棄遺物とすれば、8世紀後葉から9世紀前半と考えられる。

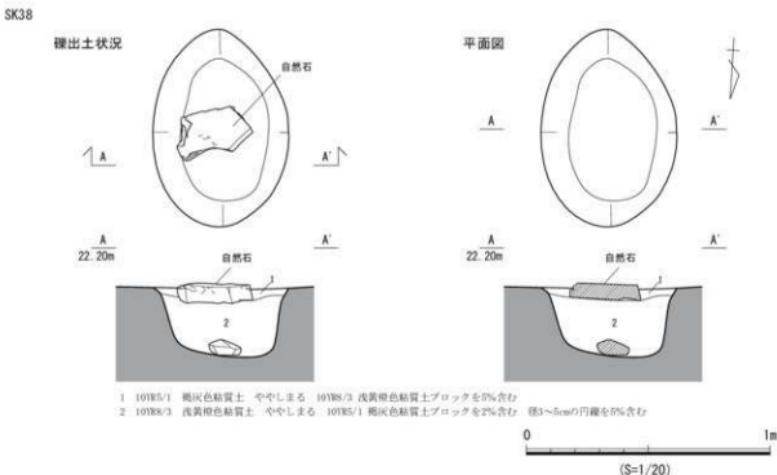
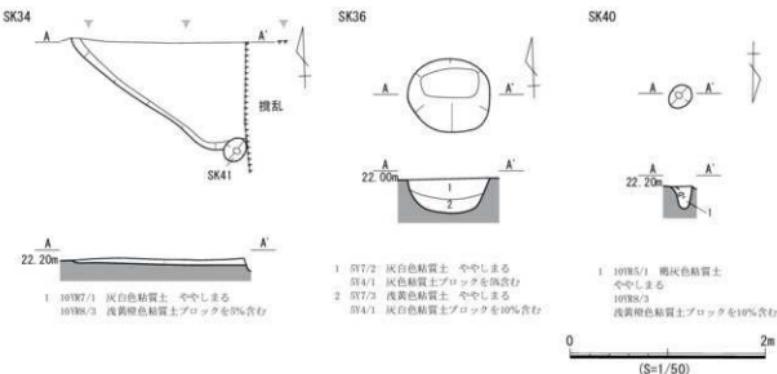


図27 SK34・SK36・SK38・SK40遺構図

SK43（図28）

検出状況 G地点のGN 4-G0 4 グリッド、I層基底面で検出した。SK36・SK44・SK51と重複し、いずれの遺構より古い。

規模・形状 長軸長1.03m以上、短軸長0.98m以上、深さ0.44mである。北端をSK36に、東端をSK44・SK51に掘り込まれているため、本来の形状は不明である。断面は逆台形である。

埋土 3層に分層した。どの層も褐灰色の粘質土で、ブロックを含む。特に3層に多い。

遺物出土状況 埋土中から須恵器2点(41)が出土し、同一個体であることを確認した。

遺物 41は美濃須恵窯IV－3期～V－1期の須恵器の有台坏である。

時期 41から、8世紀後葉から9世紀前半以降と考えられる。

SK44（図28）

検出状況 G地点GN 4-G0 4 グリッド、I層基底面で検出した。SK36・SK43・SK51が隣接し、他遺構の重複は、SK43・SK51より新しい。

規模・形状 長軸長0.39m、短軸長0.38m、深さ0.45mである。平面形は円形に近く、断面は長方形である。

埋土 2層に分層した。どちらも褐灰色粘質土であるが、2層よりも1層には浅黄橙色粘質土のブロックを多く含む。

遺物出土状況 埋土中から須恵器1点が出土した。

遺物 実測可能な遺物は出土しなかった。

時期 SK43より新しいことから、9世紀前半以降と考えられる。

SK51（図28）

検出状況 G地点G0 4 グリッド、I層基底面で検出した。SK36・SK43・SK44が隣接している。他遺構の重複は、SK43より新しく、SK44より古い。

規模・形状 長軸長0.54m、短軸長0.49m、深さ0.42mである。平面形は円形に近く、断面は長方形である。

埋土 3層に分層した。1層・2層は褐灰色の粘質土で、1層は2層よりも浅黄橙色粘質土のブロックを多く含む。3層は、1層・2層とは色調が異なる黒褐色の粘質土である。

遺物出土状況 須恵器2点が埋土中から散在して出土した。

遺物 実測可能な遺物は出土しなかった。

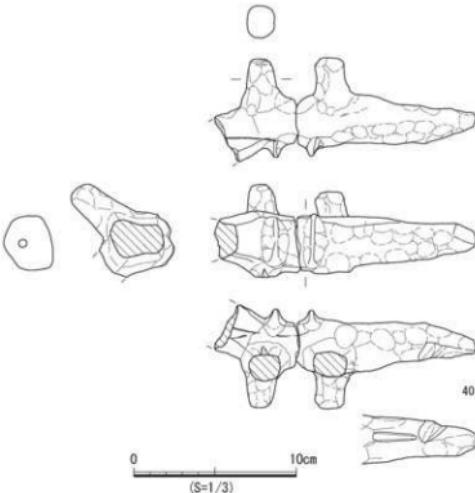
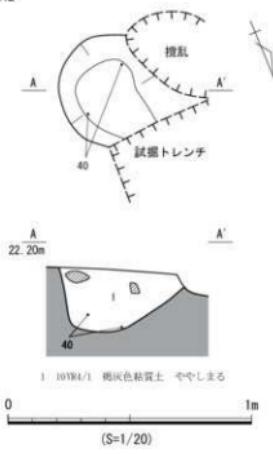
時期 SK43より新しいことから、9世紀前半以降と考えられる。

6 自然流路**A 地点****NR01（図29）**

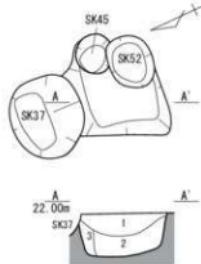
検出状況 A地点FK 8～FL13グリッド、II層基底面で検出した。A地点西部の黒褐色土が広がる一帯をNR01とした。発掘区の断面のみで掘り込みを確認したため、図示した東端の上端線は復元線である。

規模・形状 遺構の範囲は、西端がI層の造成により搅乱されており明確でないが、南北や西側の発掘区外に広がると考えられる。北壁の土層で確認した東西の幅26.1m、深さは0.60m、東岸に河床礫の盛り上がりが認められる。なお、発掘区壁面が崩壊する恐れがあつたため、それ以上の掘削は行わ

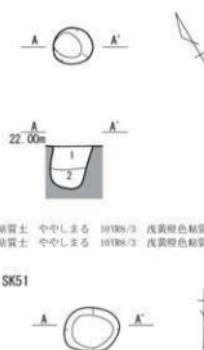
SK42



SK43



SK44



SK51

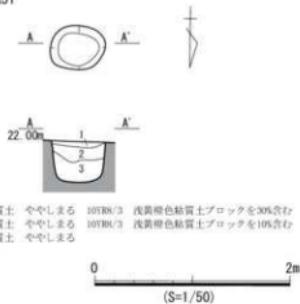


図28 SK42・SK43・SK44・SK51遺構図、SK42・SK43出土遺物実測図

なかつた。

埋土 粘性の強い黒褐色土の単層で、径2～7cmの亜円礫を比較的多く含む。また、図示していないが、西端部の底面で径5～20cmの川原石を確認したため、東岸の河床礫に対応する西岸の可能性がある。埋土の特徴から、ほとんど流れのない湿地状の低地であったと考えられる。

遺物出土状況 遺物は出土しなかつた。

時期 遺構の重複や出土遺物がないことから、所属時期は不明である。

NR02・NR03(図30)

検出状況 A地点GL3-12グリッド、西部はIV層上面、東部はI層基底面で検出した。遺構検出作業で範囲が不明瞭であったため、発掘区北壁に沿って5カ所のトレンチを掘削して土層確認を行い、壁面で両遺構の埋土を確認した。その後平面を再精査して遺構の範囲を確認したが、湧水が激しいことや発掘区が狭小であることから、それ以上の掘削を行わなかつた。NR02の東端をNR03の埋土が掘り込むことから、NR02はNR03より古い。

規模・形状 NR02は、西端以外は発掘区外へ展開する。北壁の土層で確認した東西の幅は8.0mである。最も深い場所で0.68m掘り下がつたが、底面には達しなかつた。NR03の遺構の範囲は、西端以外は発掘区外へ展開する。北壁で検出した東西の幅は37.5m、最も深い場所で0.80m掘り下がつたが、底面には達しなかつた。なお、発掘区壁面が崩壊する恐れがあつたため、それ以上の掘削は行わなかつた。伽藍南面発掘区と照合すると、NR02・NR03は大垣市教育委員会がNR02・NR04とした遺構(平安時代以降に埋没したと推定される)に接続すると考えられる(第5章3節)。

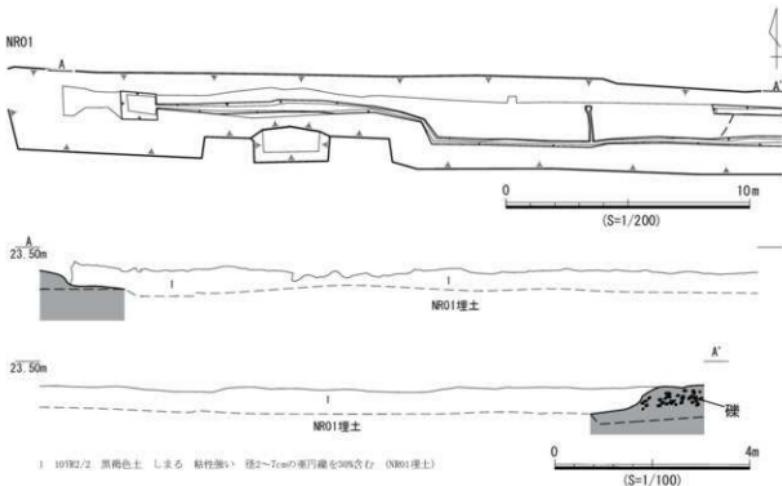


図29 NR01遺構

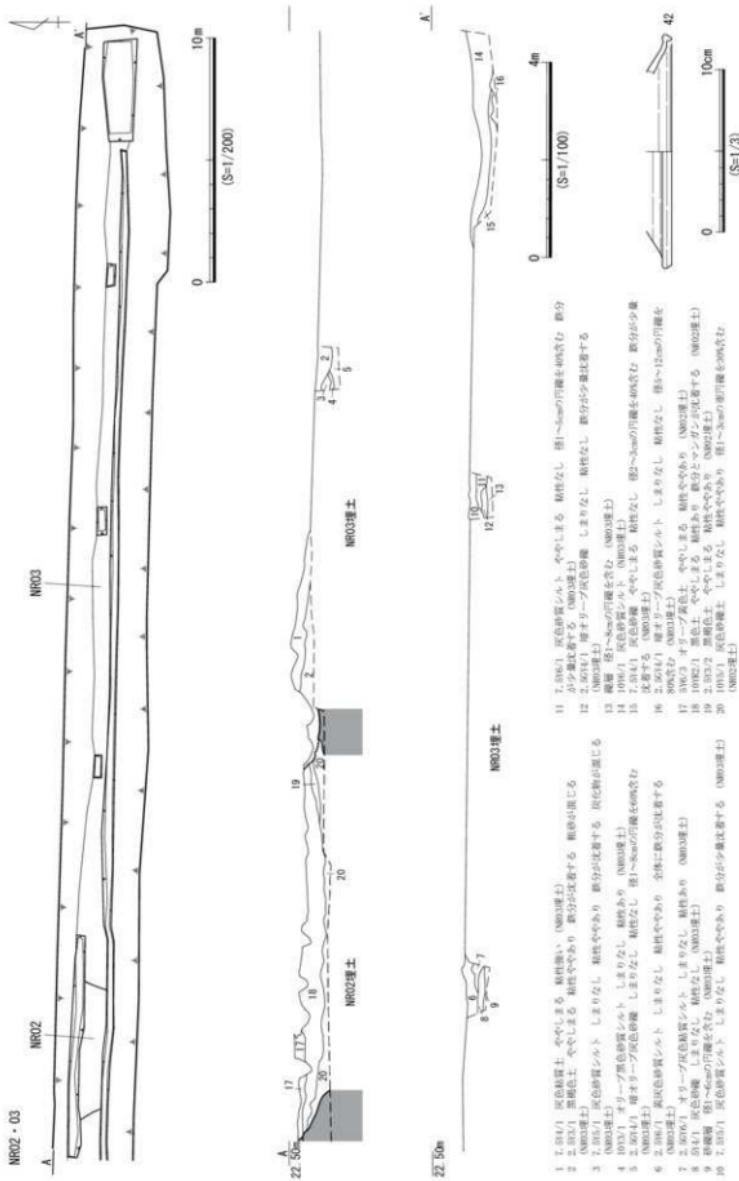


図30 NR02・NR03遺跡図、NR02出土遺物実測図

埋土 NR02は4層に分層した。2層・3層が黒色土・黒褐色土で、4層は亜円礫を含む砂礫土である。NR03はトレンチによって多少の差はあるが、大きく分けると上層には砂質シルト、下層には砂礫が堆積している。また、砂礫層に含まれる円礫の直径は、東へ行くほど大きくなる傾向がある。礫が多く含まれ、砂質の強い堆積であることから、一定の流水があった可能性が高い。

遺物出土状況 NR02は遺構上層より縄文土器5点、須恵器2点が散在して出土した。NR03からは遺物が出土しなかった。

遺物 NR02から出土した遺物のうち、1点を図示した。42は美濃須衛窯V-1期の蓋である。

時期 伽藍南面発掘区のNR02・NR04と同一の遺構とすれば、12世紀以降に埋没したと考えられる。

B地点

NR04・NR05(図31・図32)

検出状況 B地点GL13~18グリッド、I層基底面で検出した。遺構検出作業で遺構の範囲が不明瞭であったため、発掘区北壁に沿って東西約23mのトレンチを掘削して土層確認を行い、遺構の範囲を確認した。トレンチ掘削の際遺物が比較的多く出土したが、発掘区が狭小で壁面が崩落する恐れがあつたため、景観写真撮影後に補足調査として重機で埋土の掘削を行った。図示したのは重機掘削後の状況である。遺構の重複から、NR04はNR05よりも新しい。

規模・形状 NR04は南北端は発掘区外へ展開する。北壁の土層で確認した東西の幅は、16.92mである。重機掘削後にGL12グリッドで最も深い部分の立ち上がりを確認しており、その深さは0.80mである。NR05はB地点のGL15グリッドより東側一帯がすべて埋土であり、南北や西側の発掘区外に展開する。北壁の土層で確認した幅は東西11.20mである。最も深い場所で0.50m掘り下げたが、底面には達しなかった。伽藍南面発掘区と照合すると、NR04とNR05は大垣市教育委員会がNR02・NR04とした遺構に接続すると考えられる(第5章3節)。

埋土 NR04は9層に分層した。このうち1層は最終的な埋土で、東西に幅広く堆積している。その下層には3段階の埋没過程が確認できる。色調の暗い土と明るい土が互層で堆積しており、流水があつた可能性が高い。また、9層は円礫を多く含む。NR05は6層に分層した。砂質シルトが上層に厚く堆積し、下層に灰色砂礫が認められる。埋土の特徴から、一定の流水があつた可能性が高い。

遺物出土状況 NR04から出土した遺物の多くは、重機掘削の際に取り上げたものである。土層確認のために掘削したトレンチからは、土師器13点、須恵器10点、灰釉陶器43点、中近世陶磁器2点、分類不明な瓦5点が散在して出土した。この他、重機掘削中に縄文土器2点、土師器43点、須恵器41点、灰釉陶器142点、中近世陶磁器1点、埠2点、平瓦10点、丸瓦3点、分類不明の瓦5点が散在して出土した。瓦は埋土の深いところから出土しているものが多い。なお、NR05からは遺物が出土しなかった。

遺物 出土した遺物のうち、18点を図示した。43~45は土師器である。43は清郷型鍋である。内面はナデ調整、外面上には指壓さえ痕が確認できる。内外面とも煤が付着している。44は甕で、口縁端部が丸みを帯びており、外面上に煤が付着する。内外面とも摩滅しており調整は不明である。45は鉢と考えられる。外面上に煤が付着している。46・47は須恵器である。46は美濃須衛窯V-1期の有台坏である。

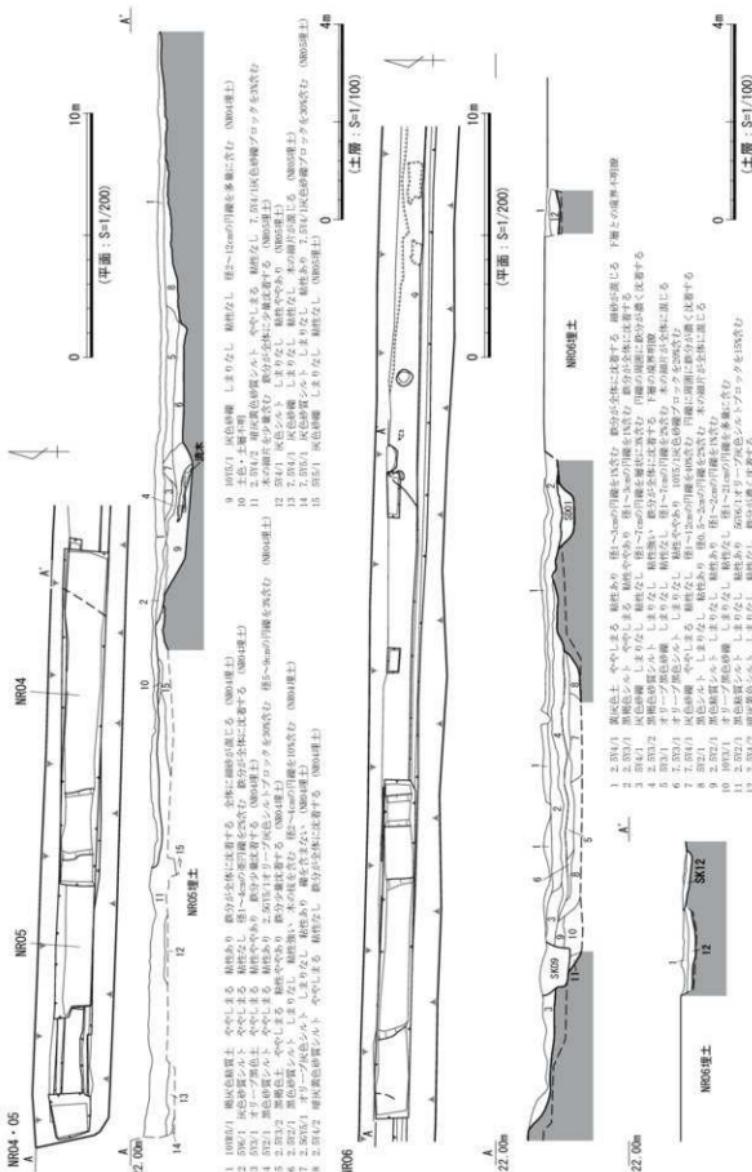


図31 NR04～NR06遺構図

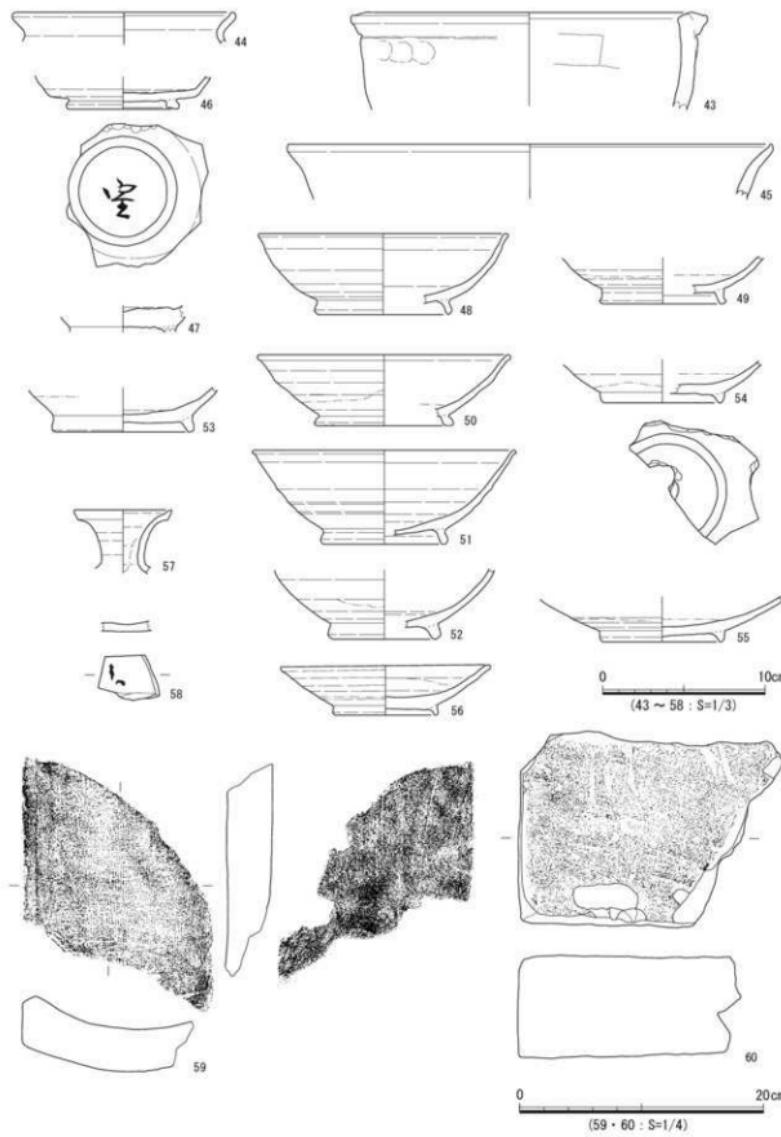


図32 NR04出土遺物実測図

底部外面に「室」の可能性がある墨書が認められる。47は美濃須衛窯産の碗で、V-1期以降と考えられる。48~58は灰釉陶器である。48~54は碗である。48は黒窯90号窯式で、底部内面が摩耗している。49~51は大原2号窯式である。51は底部内面が摩耗している。52は虎渓山1号窯式で、内面底部が摩耗している。53は折戸53号窯式、54は丸石2号窯式である。54は底部内面が摩耗して煤が付着しており、底部には打ち欠きによる穿孔した痕跡が確認できる。55・56は皿である。55は虎渓山1号窯式で、底部内面が摩耗している。56は丸石2号窯式で、底部内面が摩耗している。高台にツメ状の圧痕がみられる。57は黒窯90号窯式の小瓶である。58は器種不明の灰釉陶器である。底部外面には判読不明の墨書が認められる。59は平瓦である。凹面には布目痕、凸面には縦方向に幅約2cmのケズリ痕が確認できる。焼成は不良で、胎土は灰白色である。60は埠である。片面が摩滅しているが、拓本で図示した面には、整形時の圧痕が認められる。焼成は不良で、胎土はにぶい黄橙色である。

時期 NR04・NR05は、伽藍南面発掘区のNR02・04と同一である可能性があることから、12世紀以降に埋没したと考えられる。

NR06(図31・図33・図34)

検出状況 B地点HL3～HM9グリッド、西部はIV層上面、東部はII層基底面で検出した。遺構検出作業で遺構の範囲が不明瞭であったため、発掘区北壁に沿って4カ所のトレンチを掘削して土層確認を行い、壁面で埋土を確認した。その後、重機により西端部から約13mにわたって掘削し、そこから東側は掘削しなかった。遺構を検出した際、平面でSD01のプランを確認し、トレンチの壁面でSK09・SK12が検出した。他遺構の重複は、SK09・SK12より古く、SD01より新しい。

規模・形状 遺構の範囲は、東西端以外は発掘区外へ展開する。北壁の土層で確認した東西の幅は26.32m、最も深い場所で0.80m掘り下げたが、底面には達しなかった。伽藍南面発掘区と照合すると、大垣市教育委員会がNR02・NR04とした遺構に接続すると考えられる(第5章3節)。

埋土 11層に分層した。黒っぽい色調の土が多いが、土質が砂質シルトや砂礫であることから一定の流水があったと考えられる。

遺物出土状況 遺構の範囲確認のために掘削したトレンチから、繩文土器4点、土師器14点、須恵器105点、灰釉陶器15点、山茶碗1点、平瓦4点、丸瓦8点、軒平瓦1点、分類不明な瓦11点が出土した。また、重機掘削中に繩文土器4点、土師器40点、須恵器203点、灰釉陶器24点、中近世陶磁器1点、平瓦35点、軒平瓦1点、丸瓦6点、分類不明な瓦24点、木製品5点が散在して出土した。

遺物 出土した遺物のうち、18点を図示した。61は土師器の甕である。内面は摩滅しており調整は不明で、外面は粗いハケ目が残る。口縁端部はつまみ上げられている。62~70は須恵器である。62・63は蓋で、62は美濃須衛窯V-1期である。内面に自然釉が付着している。また、内面には「十四口」の可能性がある墨書が確認できる。63は、胎土から、美濃須衛窯産ではない可能性があるが、形態から美濃須衛窯V-1期に相当する時期と考えられる。64・65は埠である。64は美濃須衛窯産の無台埠である。外部底面にヘラによる不定方向のケズリが確認できる。体部外面に2条の線刻が確認できる。また、わずかに煤が付着している。65はIV-1期の有台埠である。底部内面が摩耗しており、口縁部外面に煤が付着する。高台には乾燥によるひび割れ、底部外面に2条の線刻が確認できる。66は美濃須衛窯V-1期の碗である。底部内面が摩耗している。底部外面に判読不明の二文字の墨書が確認できる。67は美濃須衛窯産の盤である。SB01-P04から出土した6と形状が類似していることから、同器

種と考えられる。底部内面が摩耗している。底部外面に「僧口」の墨書が確認できる。68・69は猿投窯産の甕である。68は7世紀代と考えられる。内面に自然釉が付着している。体部外面に幅2.6cmの櫛状工具による連続刺突文や横方向の沈線が見られる。69は9世紀代と考えられる。内面はハケによる当て具痕のナデ消し、外面は格子状のタタキ痕が確認できる。70は底部内面に放射状の指オサエ痕、外面に自然釉が確認できる。71～73は灰釉陶器である。71・72は碗である。71は黒篋14号窯式で、底

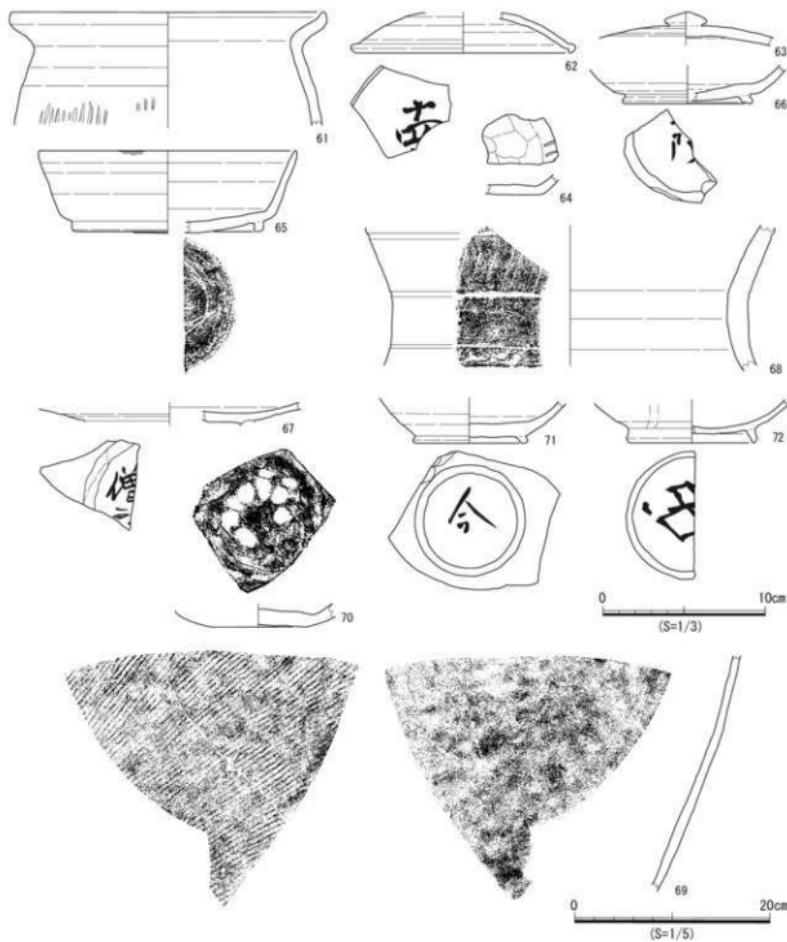


図33 NR06出土遺物実測図(1)

部外面に「今」の可能性がある墨書が確認できる。72は黒鉢90号窯式で、底部内面が摩耗している。底部外面には菱形状の記号を記した墨書が見られる。この記号は、大垣市教育委員会による国分寺遺跡伽藍南面隣接地の調査で出土した墨書き土器に類例がみられる³⁾。73は黒鉢14号窯式の段皿である。底部内面が摩耗している。体部・底部外面、断面に煤が付着している。74は尾張型第3～4型式の山茶碗である。高台に粗穀痕が見られ、底部内面が摩耗している。底部外面に「音」の可能性がある墨書が確認できる。75は軒平瓦である。広端部に唐草文が確認できる。頸部が残存しており、曲線頸と思われる。凹面に布目痕が見られ、凸面はわずかにケズリ痕が確認できる。両面に煤が付着する。焼成は不良で胎土は灰白色である。76～78は木製品である⁴⁾。76は棒状の木製品である。長さ26.3cm、幅約1.9cmで、厚みは下部ほど薄くなる。断面は長方形である。上端は欠損し、長さ2cmほど表面が裂けている。下端は残存しており、丸みを帯びる。側面は1箇所のみ切削痕が確認できる。樹種はコウヤマキである。77・78は軒車の可能性がある。77は長さ11.9cm、幅1.8cmで、断面は長方形である。上端の表面が一部欠損している。上端から約3.8cmの部分に肩が左右に作り出されている。下端は欠損しており、さらに続いていた可能性がある。樹種はヒノキ科ヒノキ属である。78は長さ13.35cm、幅1.8cmで、断面は長方形に近い。下端が先細りになるように加工している。上端は欠損している。欠損範囲以外に、切削痕が残る。上端と下端は炭化していることから、火付木として転用されたと考えられる。樹種はヒノキ科アスナロ属である。

時期 SD01との重複関係から、11世紀以降に埋没したと考えられる。

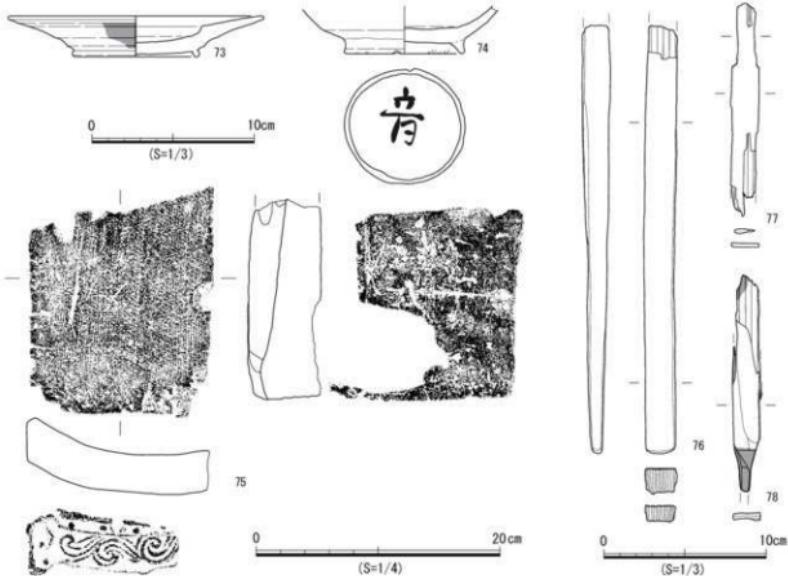


図34 NR06出土遺物実測図(2)

NR07(図35)

検出状況 B地点HM15～IL6グリッド、I層基底面で検出した。遺構検出作業で遺構範囲が不明瞭であったため、発掘区北壁に沿って3ヵ所のトレンチを掘削して土層確認を行い、壁面で遺構の埋土を確認した。多量の遺物が出土したもの、発掘区が狭小で壁面崩落の恐れがあったため、それ以上の掘削は行わなかった。

規模・形状 遺構の範囲は、東端以外は発掘区外へ展開する。北壁の土層で確認した東西の幅は57m、最も深い場所で0.20m掘り下げたが、底面には達しなかった。伽藍南面発掘区と照合すると、大垣市教育委員会がNR01・03とした遺構に接続すると考えられる。なお、このNR01・03は近世に埋め立てられた、旧河原田川とされている。

埋土 黒っぽい色調の土と灰色の土が互層となって堆積しており、土質が砂質シルトや砂礫であることから、一定の流水があったと考えられる。

遺物出土状況 遺構の範囲確認のために掘削したトレーニングから、縄文土器1点、須恵器35点、灰釉陶器12点、平瓦4点、分類不明な瓦11点が散在して出土した。また重機掘削中に土師器2点、須恵器30点、灰釉陶器18点、中近世陶磁器2点、丸瓦1点、木製品2点が散在して出土した。埋土上面で検出した杭の取り上げ時に須恵器14点、灰釉陶器16点、丸瓦1点、木製品6点が出土した。

遺物 実測可能な遺物は出土しなかった。

時期 伽藍南面発掘区のNR01・03と同一であれば、近世に埋没したと考えられる。

G地点**NR08・NR09(図36)**

検出状況 G地点FN18～20グリッド、I層基底面で検出した。両遺構とも遺構埋土が基盤層と明確に異なり、範囲は明瞭であった。また、NR08とNR09は重複するが、その埋土は異なっていた。両遺構の東側には、SA04も含め多数の柱穴や土坑を検出した。遺構の重複は、NR08がNR09より新しい。また、NR09の底面からSP03・SP04・SK18・SK19・SK20を検出したことから、NR09はこれらの遺構より新しい。

規模・形状 NR08の範囲は、南端が発掘区外に展開し、発掘区南壁の土層で確認した東西の幅は11.6m、深さは0.22mである。NR09の範囲は、南北端が発掘区外に展開し、発掘区南壁の土層で確認した東西の幅は10.4m、深さは0.34mである。

埋土 両遺構とともに単層で、NR08は青灰色粘土、NR09はブロック土を含む褐色灰色粘土である。

遺物出土状況 NR08の埋土中からは、土師器2点、須恵器9点、灰釉陶器3点、天目茶碗1点、分類不明な瓦1点が散在して出土した。また、NR09の埋土中からは、土師器10点、須恵器41点、灰釉陶器2点、平瓦1点が散在して出土した。

遺物 NR09から出土した遺物のうち1点を図示した。79は美濃須衛窯V-1期の須恵器の有台坏である。底部内面が摩耗している。

時期 出土遺物から、NR08は中世以降、NR09は9世紀以降に埋没したと考えられる。

NR10(図36)

検出状況 G地点GN11～13・G011～19グリッド、I層基底面で検出した。遺構埋土が基盤層と明確に異なり、遺構の範囲は明瞭であった。

規模・形状 遺構の範囲は、南北端が発掘区外に展開し、発掘区南壁の土層で確認した東西の幅は17.8

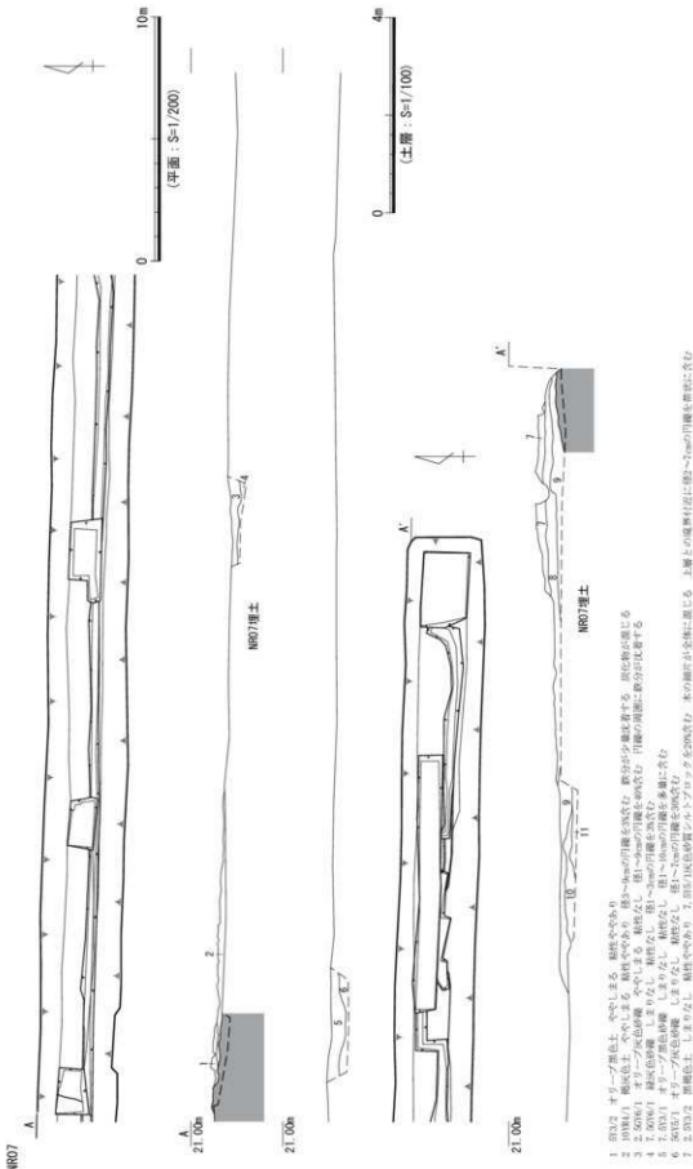


図 35 NR07 遺構図

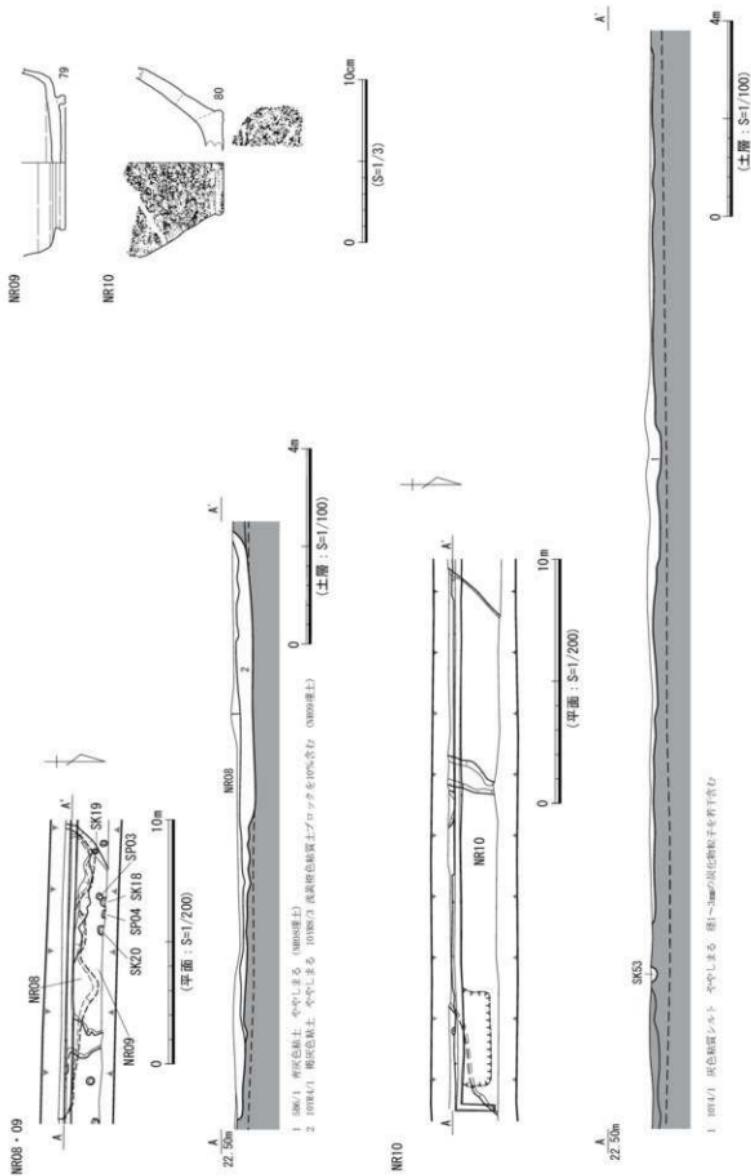


図 36 NR08・NR09・NR10遺構図、NR09・NR10出土遺物実測図

m、深さは0.32mである。遺構中央部分が南北方向にやや深い溝状になっている。位置的に、B地点で検出したNR04と接続する可能性が高い。

埋土 単層で、径1～3mmの炭化物粒子を含む。

遺物出土状況 埋土中から縄文土器8点、土師器1点、須恵器1点、灰釉陶器1点、中近世陶器2点が散在して出土した。

遺物 出土した遺物のうち1点を図示した。80は縄文土器の深鉢である。底部外面に網代痕が認められる。

時期 NR04と同じ遺構とすれば、12世紀以降に埋没したと考えられる。

NR11・NR12・NR13(図37)

検出状況 G地点G018～H03グリッド、I層基底面で検出した。遺構埋土が基盤層と明確に異なり、遺構の範囲は明瞭であったが、それぞれの重複については識別が困難であった。NR11～NR13を検出した後、発掘区南壁に沿って土層確認のためのトレンチを掘削し、壁面で埋土を確認した。重複は、NR12が最も古く、またSD05はNR11の埋土を掘り込んでいるため、NR11はSD05より古い。

規模・形状 NR11の範囲は、南北端は発掘区外へ展開する。NR11の西肩は、SD05の西側が基盤層であることから、SD05と重複して消失したと考えられる。南壁の土層で確認した東西の幅は7.02m、深さは0.57mである。NR12の範囲は、南北端が発掘区外へ展開する。東端はNR13、西端はNR11と重複しており、本来の幅は不明であるが、南壁の土層で確認した東西の幅は22.7mである。最も深い場所で0.65m掘り下げたが、底面には達しなかった。NR13の範囲は、西端以外は発掘区外へ展開し、南壁の土層で確認した東西の幅は2.46mである。最も深い場所で0.61m掘り下げたが、底面には達しなかった。

埋土 埋土はいずれも単層である。NR11は青灰色粘土、NR12は円礫を含む砂礫土、NR13は灰白色の粘土である。埋土の特徴から、NR11・NR13はほとんど流れがなく、NR12は一定の流水があったと考えら

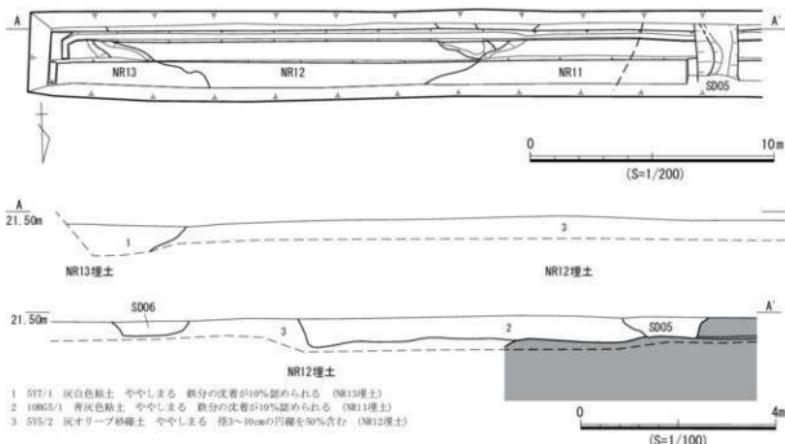


図37 NR11・NR12・NR13遺構図

れる。

遺物出土状況 NR11の埋土中から土師器3点、須恵器20点、灰釉陶器3点、平瓦2点、NR12の埋土中から須恵器2点、灰釉陶器1点、山茶碗2点、NR13の埋土中から縄文土器1点、土師器3点、須恵器5点、灰釉陶器5点が散在して出土した。

遺物 実測可能な遺物は出土しなかった。

時期 最も古いNR12から山茶碗が出土しているため、いずれも中世以降の遺構と考えられるが詳細な時期は不明である。

H地点

NR14・NR15(図38)

検出状況 H地点H07～16グリッド、I層基底面で検出した。両遺構とも遺構埋土が基盤層と明確に異なり、範囲は明瞭であった。NR14・NR15を検出した後、発掘区北壁に沿って土層確認のためのトレーニングを掘削し、壁面で埋土を確認した。遺構の重複は、SK54～SK58がNR14の埋土を掘り込んでいることから、NR14がこれらの遺構より古い。また、SD10がNR15の埋土上面に設置されていることから、NR15がSD10より古い。

規模・形状 NR14の範囲は、東端以外が発掘区外に展開し、南壁面の土層で確認した東西の幅は13.1mである。最も深い場所で0.21m掘り下げたが、底面には達しなかった。NR15の範囲は、西端以外は発掘区外に展開し、南壁面の土層で確認した東西の幅は29.1mである。最も深い場所で0.32m掘り下げたが、底面には達しなかった。位置的に、NR14はB地点で検出したNR06と、NR15は同じくB地点のNR07と接続する可能性が高い。

埋土 NR14は単層の円礫を含む粘質シルトである。NR15は2層に分層した。1・2層とも粘質シルトで、1層は円礫を含む。

遺物出土状況 NR14の埋土から、土師器1点、須恵器12点、灰釉陶器8点、分類不明な瓦1点、NR15の埋土から、縄文土器1点、土師器6点、須恵器17点、灰釉陶器17点、丸瓦1点が散在して出土した。

遺物 NR15から出土した遺物のうち1点を図示した。81は丸石2号窓の灰釉陶器の皿である。

時期 NR14はNR06と同じ遺構とすれば、8世紀後半以降と考えられる。NR15は旧河原田川と推定したNR07と同じ遺構とすれば、近世以降に埋没したと考えられる。

I地点

NR16・NR17(平面図・土層図：図39)

検出状況 H地点H019～I06グリッド、I層基底面で検出した。検出した時点で基盤層を確認できなかったため、発掘区全体が流路であると認識した。その後、全体をトレーニング状に掘り下げて調査したが、壁面の精查で発掘区のほぼ中央でNR16とNR17の重複を確認したことから、2条の自然流路と判断した。遺構の重複は、NR17がNR16より古い。

規模・形状 NR16の範囲は、東端以外が発掘区外に展開し、南壁面の土層で確認した東西の幅は20.5mである。最も深い場所で0.41m掘り下げたが、底面には達しなかった。NR17の範囲は、西端がNR16に掘り込まれているが、それ以外の南北東端は発掘区外に展開し、南壁面の土層で確認した東西の幅は13.6mである。最も深い場所で0.44m掘り下げたが、底面には達しなかった。

埋土 NR16は3層に分層した。どの層も砂質シルトで、3層に円礫を含む。NR17も3層に分層した。

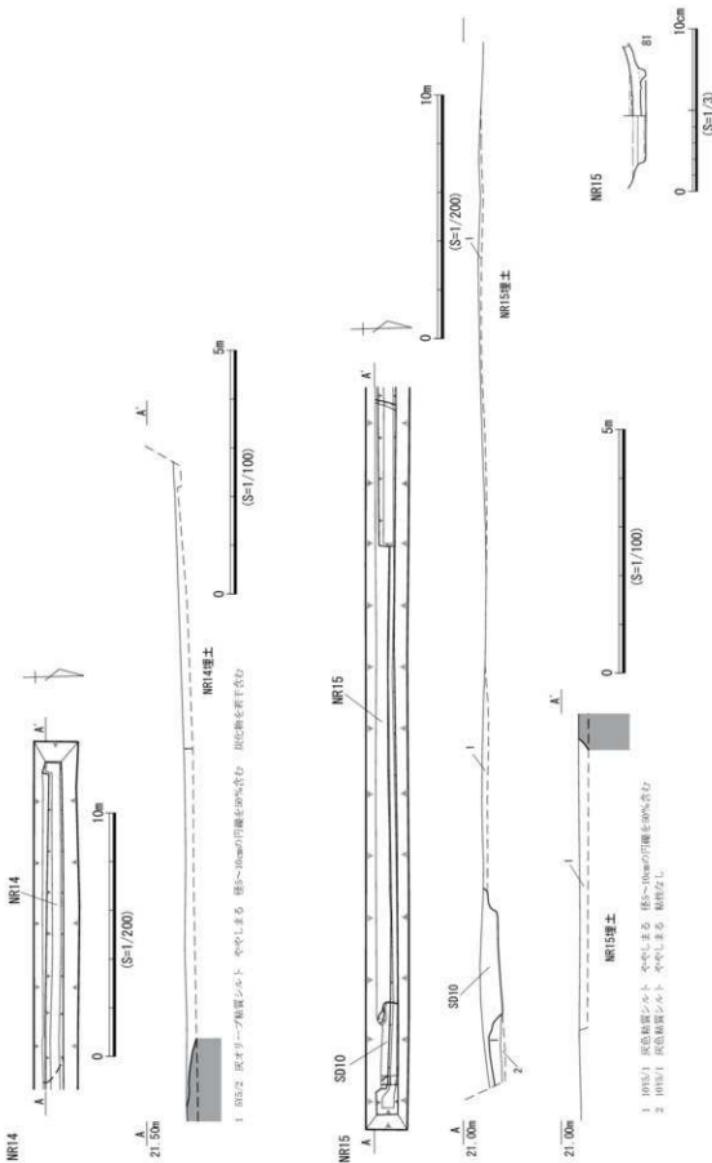


図 38 NR14・NR15 遺構図、NR15 出土遺物実測図

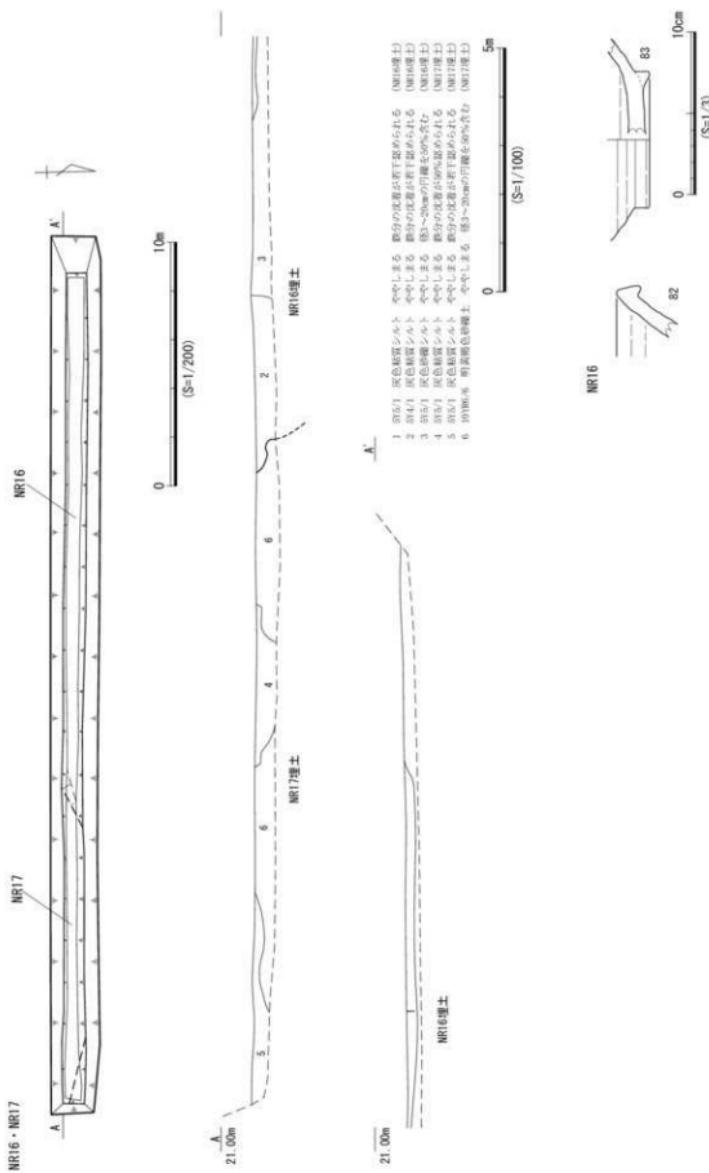


図39 NR16・NR17過構図、NR16出土遺物実測図

1・2層は粘質シルトで、3層は円礫を含む砂礫土である。埋土の特徴から、どちらも一定の流水があつた可能性がある。

遺物出土状況 NR16の埋土から、土師器1点、須恵器10点、灰釉陶器7点、山茶碗1点、中近世陶磁器1点、平瓦1点、NR17の埋土から、縄文土器1点、土師器1点が散在して出土した。

遺物 NR16から出土した遺物のうち2点を図示した。82は猿投窯産の須恵器の甕である。83は尾張型第3型式の山茶碗である。底部内面が摩耗している。

時期 出土遺物から、NR16は12世紀以降に埋没し、NR17はそれより古いと考えられるが、詳細な時期は不明である。

注

1) 大垣市教育委員会2005『美濃国分寺-国分寺遺跡(伽藍南面隣接地の調査-』(大垣市埋蔵文化財発掘調査報告書 第15集)P78 遺物番号493は墨書きで「壺」と解される1文字がみられる。

2) 大垣市教育委員会2005『美濃国分寺-国分寺遺跡(伽藍南面隣接地の調査-』(大垣市埋蔵文化財発掘調査報告書 第15集)P129

3) 大垣市教育委員会2005『美濃国分寺-国分寺遺跡(伽藍南面隣接地の調査-』(大垣市埋蔵文化財発掘調査報告書 第15集)P71-遺物番号328・329や、P73-遺物番号387に類似。

4) 樹種同定の結果は、第4章3節に記載した。

第5節 C・D・E・F地点の遺構・遺物

1 横

SA06(図40)

検出状況 D地点IP16グリッド、I層基底面で検出した。3基の柱穴がほぼ等間隔で直線的に配置されることから柵と判断した。

規模・形状 長軸の長さは4.00mである。柱間はP01-P02で1.95m、P02-P03で2.05m、主軸方位はN-88°-Eで、東西方向に近い。

柱穴 P01は南端が発掘区外へ展開するため、全体の形状は不明である。断面形は逆台形に近い。1層・2層は、3層～5層を掘削するような堆積であり、柱の抜き取り穴の可能性がある。P02は南端が発掘区外へ展開するため、全体の形状は不明である。断面形は逆台形に近い。上層の埋土を5cm程度水平に掘り下げた段階で、柱痕跡と思われる円形の範囲を確認した(図40)。埋土は2層・3層が柱痕跡と考えられる堆積で、2層・5層にはブロック土、2層～4層、6層・7層には白色角礫を含む。P03

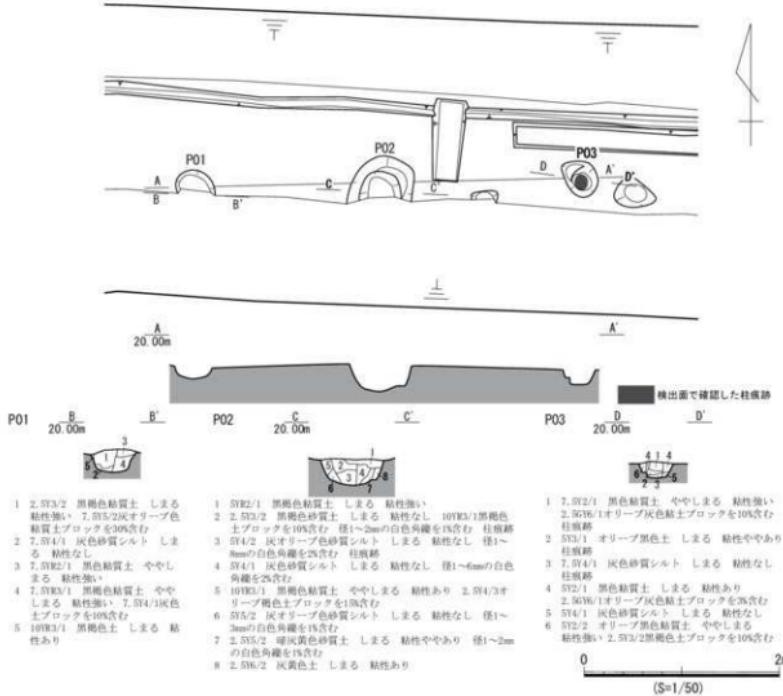


図40 SA06遺構図

1. 2.SV3/2 黒褐色粘質土 しまる 粘性強い 7.SV5/2灰土+オーブル色粘質土ブロックを10%含む
2. 7.SV4/1 灰色砂質シルト しまる 粘性なし
3. 7.SV2/1 黒褐色粘質土 ややしまる 粘性なし
4. 7.SV3/1 黑褐色粘質土 ややしまる 粘性強い
5. 7.SV3/1 黑褐色粘質土+10%灰土ブロックを10%含む

1. DV2/1 黒褐色粘質土 しまる 粘性強い
2. DV2/2 黑褐色粘質土 しまる 粘性なし 10%BS/1黑褐色土ブロックを10%含む
3. DV4/2 底オーブル色砂質シルト しまる 粘性なし 径1~2mmの白色角礫を1%含む 柱痕跡
4. DV4/1 灰色砂質シルト しまる 粘性なし 径1~6mmの白色角礫を2%含む
5. 10%BS/1 黑褐色粘質土 ややしまる 粘性あり 2.SV4/3オーブル色粘質土ブロックを1%含む
6. 5.SV4/1 灰色砂質シルト しまる 粘性なし 径1~2mmの白色角礫を1%含む
7. 2.SV5/1 灰褐色粘質土 しまる 粘性ややあり 径1~2mmの白色角礫を1%含む
8. 2.SV6/2 灰黄色土 しまる 粘性あり

1. DV2/1 黑褐色粘質土 ややしまる 粘性強い 2.SV6/1オーブル色粘土ブロックを10%含む 柱痕跡
2. SV3/1 オーブル黑色土 しまる 粘性ややあり 柱痕跡
3. 1.SV4/1 灰色砂質シルト しまる 粘性なし 柱痕跡
4. 5.SV4/1 黑褐色粘質土 しまる 粘性あり 2.SV6/1オーブル色粘土ブロックを10%含む
- 5.SV4/1 灰色砂質シルト しまる 粘性なし
6. SV2/2 オーブル黑色粘質土 ややしまる 粘性強い 2.SV3/2黑褐色土ブロックを10%含む

(S=1/50)

の平面形は円形に近いが、北西部に張り出しがある。張り出し部分には6層が堆積しており、1段浅いことから別遺構の可能性がある。断面形は逆台形に近い形状をとる。検出時に掘方中央のやや南寄りの埋土上面で柱痕跡と思われる円形の範囲を確認した。埋土は1層～3層が柱痕跡と考えられる。1層は粘土ブロック土を含む黒色の粘質土であるが、2層はしまりのある黒色土、3層はしまりのある灰色砂質シルトである。4層・5層は柱掘方埋土で、5層は灰色砂質シルト、4層・6層はブロック土を含む黒色の粘質土である。

遺物出土状況 P01のa層で灰釉陶器1点、P03のa層で土師器1点が出土した。P02からは遺物は出土していない。

遺物 実測可能な遺物は出土しなかった。

時期 P01で灰釉陶器が出土していることから、9世紀以降の遺構と考えられるが、詳細な時期は不明である。

2 柱穴

SP08 (図41)

検出状況 D地点IP19グリッド、I層基底面で検出した。掘方埋土が基盤層と類似し、遺構の輪郭は不明瞭であった。土層断面で柱痕跡と思われる堆積を確認したが、検出面では認識できなかった。

規模・形状 北端が発掘区外へ展開するため、全体の形状は不明である。断面形は逆台形に近い。

埋土 1層・2層は柱痕跡と考えられる。すべて黒っぽい土で、いずれもブロック土を含む。

遺物出土状況 遺物は出土しなかった。

時期 遺構の重複や出土遺物がないこと、周辺遺構からも時期を特定する出土遺物がないことから、所属時期は不明である。

3 溝状遺構

SD07 (図41)

検出状況 D地点IP15グリッド、II層基底面で検出した。遺構埋土が基盤層と明確に異なり、範囲は明瞭であった。南壁で、畦畔状の土層(1層)を確認しており、その上面から掘り込まれていることから、遺構に隣接するSA06やSK64より新しいと考えられる。

規模・形状 北東～南西方向に設置され、南北端は発掘区外に延びる。幅は北端0.50m、南端0.70m、

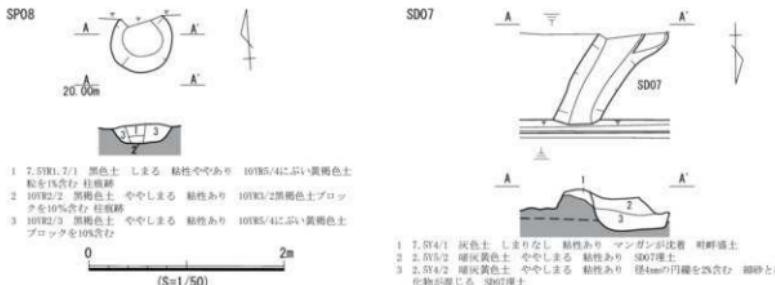


図41 SP08・SD07遺構図

深さは0.34mで、断面形は逆台形に近いが、南端の西肩に段があり、幅は広がっている。底面標高は北端が19.59m、南端が19.57mで大きな差はない。

埋土 2層に分層した。どちらも粘性のある暗灰黄色土で、2層には円礫・細砂を含むことから、流水があった可能性がある。

遺物出土状況 遺物は出土しなかった。

時期 畦畔はII層に伴う可能性が高いため、周囲が水田化した遺構に水路として掘削されたと考えられる。

SD09(図42)

検出状況 D地点JP2グリッド、II層基底面で検出した。遺構検出作業で範囲が不明瞭であったため、トレンチ状に0.20mほど掘り下げ、壁面で遺構の埋土を確認した。その後、平面を精査して遺構の範囲を確認したが、湧水が激しいことや発掘区が狭小であることから、トレンチ状に埋土を掘り下げて遺物の取り上げと土層記録の作成を行った。そのため、本来の遺構上端や下端は明確にできず、図で示した破線は、壁面で確認した上端をつないで想定した遺構の範囲である。

規模・形状 南北方向に設置される。南北端は発掘区外に延びる。南端の幅が1.29m、北端の幅が1.53m、深さは0.41mである。南壁で確認した断面形は逆台形に近い。底面の標高は、トレンチの底面で18.76mである。なお、図42では、断面と平面で遺構の幅が一致していないが、0.24m程度検出面が掘り下がった位置で平面図を図化したことによる。

埋土 3層に分層した。いずれの層も粘性が強く、ブロックが含まれる。

遺物出土状況 A-A'断面の1層に含まれる範囲で、土師器11点、須恵器15点、灰釉陶器2点が出土した。このうち須恵器12点が遺構掘削の際に遺構の底面から0.06m上の南壁で掘方の東寄りから出土した。その後、南壁にかかる埋土を除去し、出土状況を記録してから取り上げた(図42)。須恵器は3個体あり内面を上にした須恵器の甕(88)の上に、正位の坏身(87)と逆位の蓋(86)が重なって出土した。88は接合できる破片が隣接していたこと、いずれも破損した完形となる個体はないことから、破損した状態で入れ込まれた破片が土圧で割れた可能性がある。なお、出土状況図における88の南西部は、発掘区壁面保護のための鋼管打設によって一部が破損した状況を示している(図42)。

遺物 出土状況を記録した遺物も含めて、5点を図示した。84は弥生土器の壺と考えられる。外面に黒班が沈着しており、全面に赤彩の痕跡が残る。85は土師器の甕で、詳細な時期は不明である。外面にハケによる調整痕が確認できる。86～88が南壁から出土した遺物で、須恵器である。86は猿投窓若しくは尾北窓の須恵器の蓋である。内部に煤が付着していることから、灯明皿として転用されていた可能性がある。外部に自然釉が付着している。内部底面が摩耗している。86は产地不明の須恵器の坏身である。86・87ともに7世紀後半と考えられる。88は猿投窓産の甕である。内面に同心円の当て具痕が見られる。外面には格子状のタタキ痕が見られる。

時期 出土した須恵器は甕(88)も含め時期的にまとまりがあると考えられ、それらが比較的下層で出土していることから、7世紀後半頃に掘削された可能性がある。なお、灰釉陶器は細片2点が上層で出土したのみであるため、混入と考えられる。

SD11(図43)

検出状況 C地点IP9グリッド、I層基底面で検出した。NR23との重複関係を確認するためトレンチ

遺物出土状況図

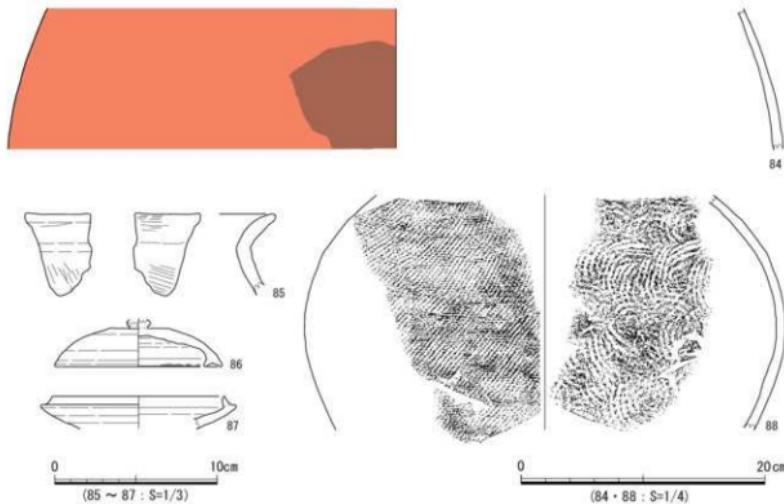
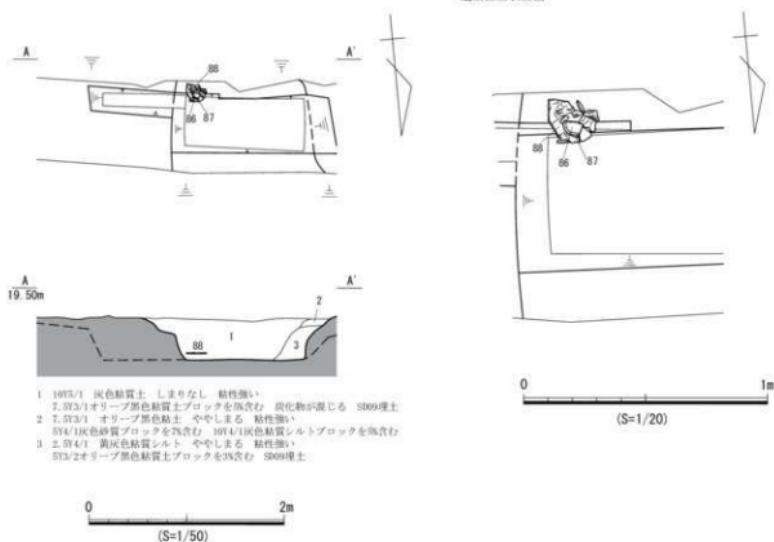


図42 SD09遺構図・遺物出土状況図・出土遺物実測図

を掘削して壁面を精査し、遺構の埋土を確認した。形状からは土坑の可能性もあるが、埋土の状況から溝と判断した。

規模・形状 南北方向に設置される。西端以外は発掘区外に延びる。幅は北端・南端とも1.54mであるが、東の肩の中央付近が東方向へ湾曲する。深さは0.48mで、断面形は逆台形に近いが、西端の底面は不定形となっている。底面標高は西端が19.64m、東端が19.52mである。

埋土 4層に分層した。東部に円窓を含む黒褐色粘土層(A-A'4層、B-B'3層)があり、堆積の状況から、この埋土は1層～3層とは別遺構の可能性がある。西部の1層～3層は砂質シルトである。埋土の特徴から、西部は一定の流水があった可能性がある。

遺物出土状況 土器器が2点散在して出土した。

遺物 実測可能な遺物は出土しなかった。

時期 出土遺物から、古代以降に埋没したと考えられるが、詳細な時期は不明である。

4 自然流路

E 地点

NR18(平面図・土層図: 図44)

検出状況 E地点IM8～12グリッド、I層基底面で検出した。遺構埋土が基盤層と明確に異なり、遺構の範囲は明瞭であった。排水溝掘削後に、壁面で遺構の埋土を確認した。その後、平面を精査して遺構の東端を確認し、排水溝を拡張するように遺構埋土の掘削を行った。

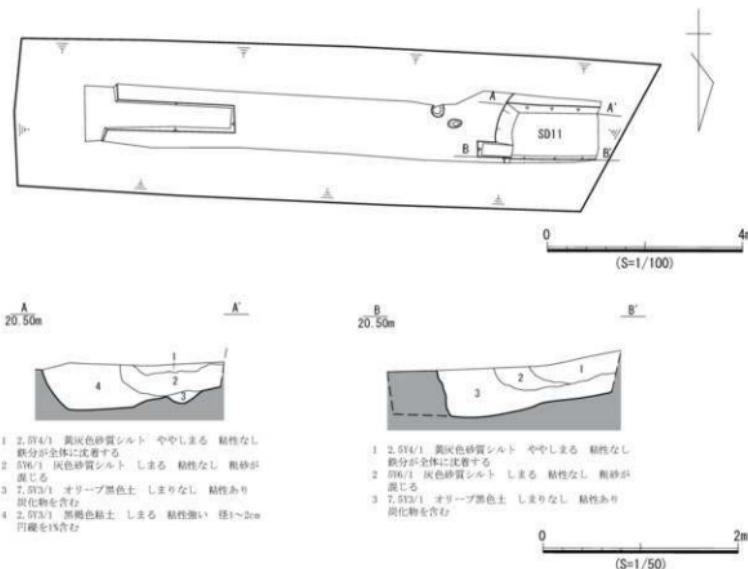


図43 SD11遺構図

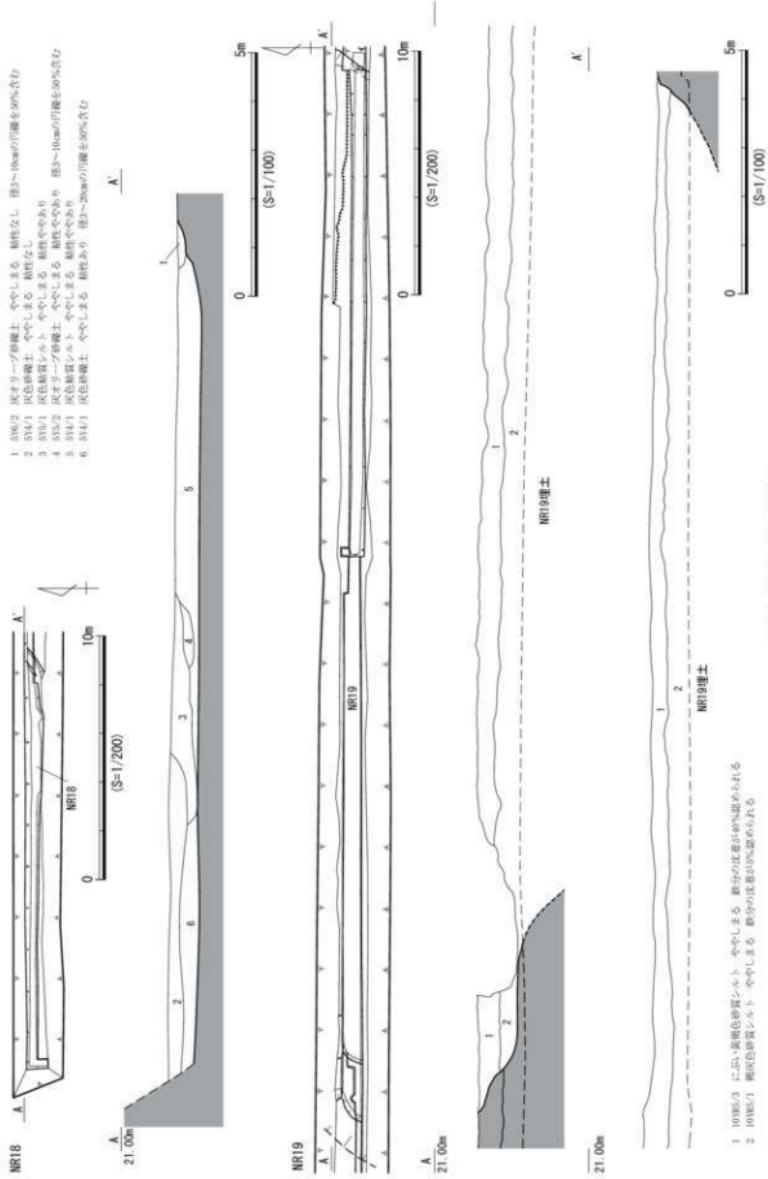


図44 NR18・NR19遺構図

- 1 1095/3 に以下の赤褐色質砂層土、ややしめる、粘性の泥状の鉱層が認められる
- 2 1095/1 褐灰色質砂層土、ややしめる、粘性の泥状の鉱層が認められる

規模・形状 遺構の範囲は、東端以外は発掘区外へ展開する。北壁の土層で確認した東西の幅は、18.60m、深さは0.60mである。伽藍南面発掘区と照合すると、NR18は大垣市教育委員会がNR01(旧河原田川)とした遺構に接続すると考えられる(第5章3節)。

埋土 6層に分層した。砂礫土と粘質シルトが互層で堆積し、円礫を含む層が多い。埋土の特徴から、一定の流水があった可能性が高い。

遺物出土状況 排水溝掘削の際に、土師器1点、須恵器8点、灰釉陶器1点、山茶碗1点、中近世陶磁器1点、分類不明の瓦1点が出土した。5層から土師器1点、須恵器10点、灰釉陶器14点、中近世陶磁器2点、軒平瓦1点、丸瓦1点、平瓦1点が出土した。6層から土師器1点、須恵器12点、灰釉陶器9点、山茶碗5点、中近世陶磁器2点、平瓦3点が出土した。

遺物 出土した遺物のうち、5点を図示した。89は猿投窯の須恵器の壺で、口縁部と体部から底部にかけての破片で、同一個体と考えられるが接合しない。90・91は灰釉陶器である。90は明和27号窯式の碗である。底部内面が摩耗している。91は黒竪90号窯式の段皿である。内面に重ね焼き痕が確認できる。底部外面や高台などの広範囲に墨痕が残る。底部内面は摩耗している。92は古瀬戸の擂鉢である。93は白磁の碗である。

時期 伽藍南面発掘区のNR01(旧河原田川)に接続すると推定されることから、近代以降に埋没したと考えられる。

F地点

NR19(平面図・土層図:図44)

検出状況 E地点JM3～JN13グリッド、西部はI層基底面、東部はII層基底面で検出した。NR20の西に位置する。遺構の東から発掘区南壁に沿って延びる搅乱を重機で掘り下げた後に壁面で埋土を確認した。なお、重機掘削の際に搅乱の範囲を誤認しており、検出面から約1.00mを掘り過ぎてしまった。その後、排水溝を拡幅するように遺構埋土を掘削したが、底面には達しなかった。発掘区が狭小で壁面が崩落する恐れがあつたため、それ以上の掘削を行わなかった。

規模・形状 遺構の範囲は、南北端は発掘区外へ展開する。東西の幅は44.16mである。最も深い場所で遺構上面から1.20m掘り下がたが、底面には達しなかった。

埋土 2層に分層した。どちらも砂質シルトである。埋土の特徴から、一定の流水があったと考えられる。

遺物出土状況 遺構埋土2層から、土師器18点、須恵器116点、灰釉陶器75点、山茶碗5点、丸瓦2点、平瓦3点、分類不明の瓦2点が散在して出土した。

遺物 出土した遺物のうち、3点を図示した。94は美濃須衛窯V-1期の須恵器の鉢である。95・96は灰釉陶器である。95は黒竪90号窯式の皿である。底部内面が摩耗し、重ね焼き痕が確認できる。底部外面に判読不明の墨書が認められる。96は虎渕山1号窯式の稜碗である。底部内面に重ね焼き痕が確認できる。

時期 山茶碗が出土していることから、中世以降に埋没したと考えられる。

NR20(平面図・土層図:図45)

検出状況 E地点JN15～18グリッド、I層基底面で検出した。NR19の東に位置する。発掘区南壁に沿って検出した大規模な搅乱を重機で掘り下げた後に、掘削した排水溝の壁面で埋土を確認した。その

後、排水溝を拡張するように遺構埋土の掘削を行った。

規模・形状 遺構の範囲は、南北端は発掘区外へ展開する。北壁の土層で確認した東西の幅は15.12mで、深さは0.82mである。

埋土 2層に分層した。どちらも砂質シルトである。埋土の特徴から、一定の流水があったと考えられる。

遺物出土状況 埋土中から土師器1点、須恵器7点、灰釉陶器2点、平瓦1点が散在して出土した。

遺物 実測可能な遺物は出土しなかった。

時期 灰釉陶器が出土したことから、9世紀以降に埋没したと考えられる。

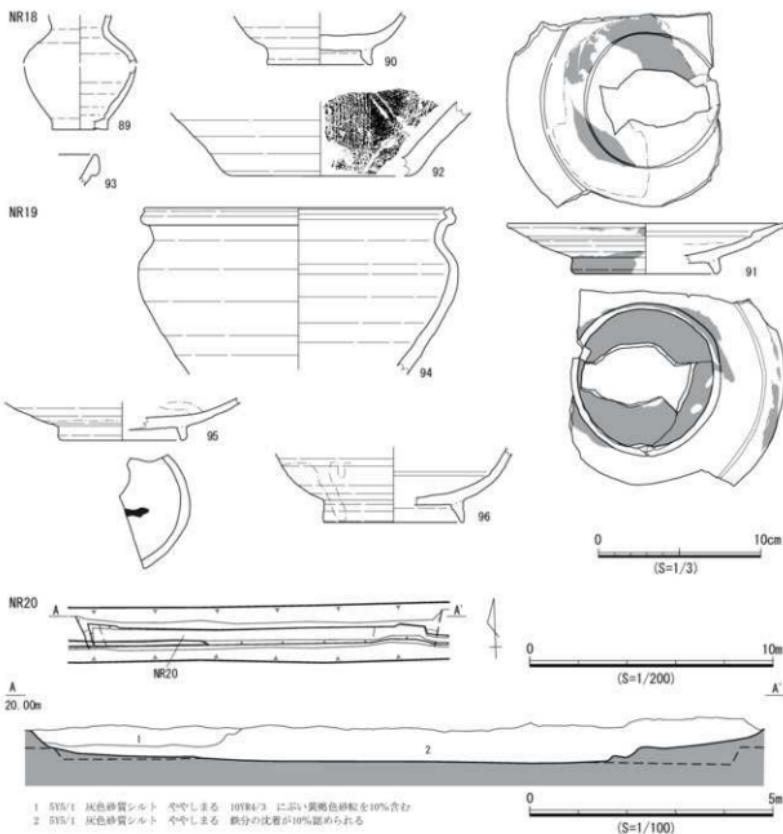


図45 NR18・NR19出土遺物実測図、NR20造構図

第6節 遺物包含層出土遺物

B地点5点(97~101)、D地点8点(102~109)、H地点1点(110)の計14点を図示した(図46)。97・98は須恵器である。97は美濃須衛窯V-1期の有台坏である。98は美濃須衛窯産の無台坏と考えられる。底部外面に線刻と「寺」の可能性がある墨書が認められる。99・100は灰釉陶器の碗である。99は虎渓山1号窯式で、底部内面が摩耗している。底部外面に「寺」の可能性がある墨書、高台に圧痕が認められる。100は大原2号窯式で、底部内面が摩耗している。底部外面に「寺」の可能性がある墨書が認められる。101は尾張型第3型式の山茶碗の小碗である。内面に自然釉が付着する。102・103は須恵器である。102は美濃須衛窯V-1~V-2期の有台坏である。底部外面に判読不明の墨書が認められる。体部外面に煤が付着する。103は美濃須衛窯III期後半の高坏である。内面にシボリ痕が認められる。104~109は灰釉陶器である。104・105は折戸53号窯式の碗である。ともに底部内面が摩耗している。104は底部内面に線刻、底部外面に「講」の可能性がある墨書が認められる¹⁾。105は、出土した碗の中でも残存状態がよいため図示した。106は黒塗14号窯式の双耳碗である。107は黒塗14号窯式の段皿である。同時期の段皿は他に1点しか出土例がないため図示した。110は美濃須衛窯V-1期の碗である。口縁部外面に煤が付着する。

1) 大垣市教育委員会2005『美濃国分寺・国分寺遺跡(伽藍南面隣接地の調査一)』(大垣市埋蔵文化財発掘調査報告書 第15集)P78に掲載されている遺物番号501の「前講闘」を参考にすると、「講」に類似する。

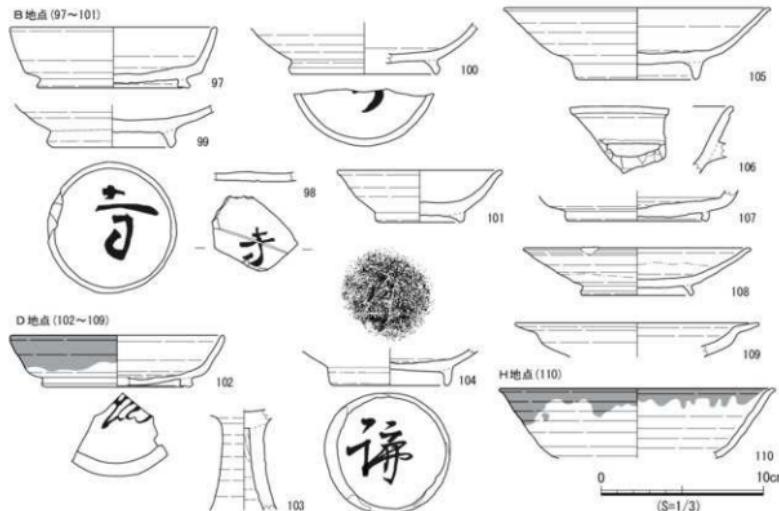


図46 遺物包含層出土遺物実測図

表 5 挖立柱建物一覧表

造構番号	調査時 No.	調査区画	検出面	柱間	規模		主軸方位	垂轍関係		桟回 番号	調査 番号
					幅行	梁行		新	旧		
SB01	S172	FK18~19	IV上	4間	8.00	—	N-5°~W			11, 12	2

表 6 挖立柱建物付属造構一覧表

造構番号	調査時 No.	調査区画	検出面	平面 形状	断面 形状	埋土	上端		下端		深さ	垂轍関係		桟回 番号	調査 番号
							長軸	短軸	長軸	短軸		新	旧		
SB-P01	S060	FK18	IV上	III	e	H	(0.86)	(0.13)	(0.57)	(0.08)	0.51			11	2
SB-P02	S061	FK18	IV上	II	e	H	1.05	0.25	0.37	0.22	0.57			11	
SB-P03	S063	FK18	IV上	III	e	H	0.95	(0.40)	0.35	(0.32)	0.90			11	
SB-P04	S064	FK19	IV上	II	d	H	0.85	(0.45)	0.63	(0.38)	0.60			SK01	12
SB-P05	S065	FL19	IV上	II	e	G	1.18	(0.61)	0.66	(0.30)	0.70				12

表 7 桁一覧表

造構番号	調査時 No.	調査区画	検出面	柱間	規模		主軸方位	垂轍関係		桟回 番号	調査 番号
					長軸	短軸		新	旧		
SA01	—	FL19~GL1	IV上	2間	6.20	—	N-81°~E			13	3
SA02	—	FL19~GL20	IV上	2間	3.50	—	N-87°~W			13	3
SA03	—	GL1~2	IV上	2間	6.00	—	N-81°~W			14	
SA04	—	FN20~GN1	I基	2間	3.90	—	N-78°~W			15	
SA05	—	GN1~2	I基	2間	4.75	—	N-85°~E			15	
SA06	—	IP16	I基	2間	4.00	—	N-88°~E			40	

表 8 桁付属造構一覧表(1)

造構種別	調査時 No.	調査区画	検出面	平面 形状	断面 形状	埋土	上端		下端		深さ	垂轍関係		桟回 番号	調査 番号
							長軸	短軸	長軸	短軸		新	旧		
SA01-P01	S060	FL19	IV上	I	d	G	0.49	0.14	0.11	0.08	0.27	SA02-P01		13	3
SA01-P02	S067	FL20	IV上	I	b	G	0.39	0.21	0.32	0.17	0.37			13	3
SA01-P03	S068	GL1	IV上	IV	e	B	0.39	0.19	(0.32)	(0.14)	0.43			13	
SA02-P01	S066	FL19	IV上	I	c	B	0.49	0.14	0.11	0.08	0.27	SA01-P01	13	3	
SA02-P02	S067	GL20	IV上	I	b	G	0.26	0.22	0.18	0.15	0.21			13	3
SA02-P03	S069	FL20	IV上	I	e	A	0.27	0.10	0.23	0.06	0.13			13	4
SA03-P01	S0652	GL1	IV上	III	e	G	0.59	0.21	0.46	0.20	0.37			14	4
SA03-P02	S0653	GL1	IV上	III	e	G	0.49	0.21	0.33	0.17	0.15			14	4
SA03-P03	S0655	GL2	IV上	I	d	G	0.31	0.24	0.24	0.23	0.09			14	4
SA04-P01	S0669	FN20	I基	I	d	A	0.36	0.29	0.17	0.14	0.26			15	
SA04-P02	S0665	GN1	I基	I	e	A	(0.96)	0.73	(0.38)	0.25	0.68	SK26 + SK27 SK28 + SK29		15	7
SA04-P03	S0658	GN1	I基	I	e	A	0.33	0.32	0.12	0.11	0.19	SK25	15		
SA05-P01	S0655	GN1	I基	I	e	A	0.33	0.29	0.21	0.19	0.04			15	
SA05-P02	S0651	GN2	I基	I	e	A	0.29	0.26	0.23	0.18	0.06			15	
SA05-P03	S0647	GN2	I基	I	c	A	0.43	0.42	0.26	0.25	0.23			15	
SA06-P01	S155	IP16	I基	IV	d	E	0.40	0.21	0.30	0.16	0.13			40	9

表9 框付属造構一覧表(2)

造構番号	調査時 年	調査区画	検出面	平面 形状	断面 形状	理土	上端		下端		深さ	重複関係		種別 番号	固版 番号		
									長軸	短軸		長軸	短軸	新	旧		
SA06-P02	S154	IP16	I系	IV	d	G	0.67	0.42	0.27	0.18	0.28					40	9
SA06-P03	S152	IP16	I系	I	d	G	0.40	0.34	0.21	0.15	0.17					40	10

表10 柱穴一覧表

造構番号	調査時 年	調査区画	検出面	平面 形状	断面 形状	理土	上端		下端		深さ	重複関係		種別 番号	固版 番号		
									長軸	短軸		長軸	短軸	新	旧		
SP01	S098	H.1	II系	III	d	G	0.81	0.44	0.49	0.42	0.29	SB07				16	5
SP02	S100	HN13	I系	III	d	G	0.34	0.23	0.19	0.17	0.13						16
SP03	S0076	PN18	I系	II	a	D	0.27	0.24	0.18	0.18	0.22	SB09					
SP04	S0074	PN19	I系	II	a	A	0.34	(0.15)	(0.18)	(0.07)	0.30	SB09					
SP05	S0066	PN29	I系	-	c	A	(0.65)	(0.27)	(0.19)	(0.12)	0.19						
SP06	S166	IP9	I系	II	a	C	0.28	0.18	0.13	0.08	0.14						
SP07	S159	IP15	II系	II	a	E	0.38	0.25	0.29	0.19	0.44						
SP08	S135	IP19	I系	IV	d	G	0.61	0.51	0.42	0.34	0.17					41	10

表11 溝状造構一覧表

造構番号	調査時 年	調査区画	検出面	平面 形状	断面 形状	理土	上端		下端		深さ	重複関係		種別 番号	固版 番号			
									長軸	短軸		長軸	短軸	新	旧			
SD01	S129	H.6	II系	IV	d	A	-	1.29	-	0.76	0.38	SB06				17	5	
SD02	S0064	GN5-005	I系	IV	c	E	(1.70)	1.41	(1.70)	0.77	0.30					SB45 + SB46	17	7
SD03	S0090	GN9-009	I系	IV	e	H	(1.71)	2.72	(1.71)	0.65	(0.52)						18	
SD04	S0080	GN4-005	I系	IV	b	C	(1.74)	2.71	(1.74)	1.83	0.68						19	
SD05	S0036	GD18	I系	IV	d	A	(2.29)	1.71	(1.74)	0.48	0.36	SB11					19	
SD06	S0034	GD20	I系	IV	b	A	(2.41)	1.61	(2.41)	0.78	0.32	SB12	SB11					
SD07	S158	IP15	II系	IV	d	B	-	0.74	-	0.34	0.34					SA06 SB64	41	
SD08	S160	IP15	II系	IV	-	-	-	-	-	-	-							
SD09	S133	JP2	II系	IV	d	B	-	1.48	-	0.68	0.41						42	10
SD10	S0001	HO15-16	I系	IV	d	B	(0.85)	(4.10)	-	-	0.45					SB15	21	
SD11	S167	IP9	I系	IV	e	B	-	-	-	-	0.48	SB23					43	

表12 土坑一覧表(1)

造構番号	調査時 年	調査区画	検出面	平面 形状	断面 形状	理土	上端		下端		深さ	重複関係		種別 番号	固版 番号		
									長軸	短軸		長軸	短軸	新	旧		
SK01	S009	PK19	IV上	II	d	A	(0.46)	0.29	(0.27)	(0.20)	0.13	SB01-P04					
SK02	S046	PK20	IV上	I	c	A	0.23	0.17	0.06	0.05	0.10						
SK03	S048	PK20	IV上	III	b	B	0.36	(0.19)	0.20	(0.09)	0.26						
SK04	S050	OK1	IV上	III	d	E	0.24	(0.09)	0.15	(0.07)	0.10						
SK05	S058	OK1	IV上	-	-	-	0.42	-	0.30	-	0.23						
SK06	S051	OK2	IV上	I	-	A	0.42	(0.31)	(0.41)	(0.24)	0.08						

表13 土坑一覧表(2)

造構番号	調査年月 No.	調査区画	検出面	平面 形状	断面 形状	埋土	上端		下端		深さ	重複関係		特徴 番号	説明 番号			
							長軸	短軸	長軸	短軸		新	旧					
SK07	5008	BL1	1基	I	d	A	0.39	0.27	0.10	0.09	0.22			SP01	5			
SK08	5006	BL2	1基	III	e	B	1.07	0.76	0.38	0.34	0.26				22			
SK09	5113	BL4	1基	III	b	B	1.60	1.56	(0.85)	(0.68)	0.29			NB06	23			
SK10	5111	BL6	IV上	IV	c	A	0.44	0.25	(0.14)	0.09	0.14							
SK11	5081	BL9	1基	I	d	E	0.69	0.66	0.44	0.43	0.20							
SK12	5109	BL8-9	IV上	IV	-	B	(1.12)	(0.42)	(1.00)	(0.36)	0.12	NB06						
SK13	5083	BL12	1基	IV	d	A	0.52	0.37	0.34	0.26	0.18							
SK14	5084	BL12	1基	I	d	C	0.24	0.21	0.14	0.14	0.13							
SK15	5101	BL13	1基	IV	d	A	0.18	0.12	(0.10)	0.04	0.08							
SK16	5102	BL13	1基	IV	e	E	(0.19)	0.11	(0.00)	0.07	0.14							
SK17	50070	PN18	1基	I	a	C	0.29	0.24	0.16	0.14	0.15				25			
SK18	50075	PN18	1基	-	a	B	0.41	(0.21)	0.21	(0.09)	0.11	NB09						
SK19	50077	PN18	1基	I	b	D	0.21	0.19	0.12	0.09	0.22	NB09						
SK20	50073	PN19	1基	-	b	D	0.39	(0.24)	0.25	(0.16)	0.23	NB09						
SK21	50060	PN20	1基	I	b	A	0.33	0.32	0.22	0.17	0.36							
SK22	50067	PN20	1基	I	a	B	0.34	0.26	0.23	0.19	0.13							
SK23	50068	PN20	1基	II	a	C	0.63	0.56	0.37	0.27	0.23							
SK24	50054	GN1	1基	-	a	A	(0.30)	0.29	(0.25)	0.24	0.02							
SK25	50059	GN1	1基	I	e	A	0.72	0.60	0.48	0.39	0.06	SAG4-P03		25				
SK26	50061	GN1	1基	I	a	A	0.31	0.21	0.24	0.13	0.03	SAG4-P02		7				
SK27	50062	GN1	1基	I	a	A	0.33	0.39	0.17	0.15	0.02	SK29	SAG4-P02	7				
SK28	50063	GN1	1基	I	a	A	0.42	0.37	0.25	0.21	0.18	SK29	SAG4-P02	7				
SK29	50064	GN1	1基	I	a	A	0.32	0.31	0.19	0.16	0.08	SAG4-P02S	E27 SK28	7				
SK30	50072	GN1	1基	I	d	D	0.57	0.50	0.09	0.09	0.16	SK27		26				
SK31	50050	GN2	1基	I	b	B	0.34	0.33	0.17	0.15	0.25				26			
SK32	50052	GN2	1基	I	a	A	0.39	0.34	0.24	0.19	0.06							
SK33	50053	GN2	1基	-	a	A	0.43	(0.20)	0.31	(0.16)	0.07							
SK34	50041	GN3	1基	IV	e	A	1.90	(1.14)	(0.82)	(0.99)	0.07	SK40		27				
SK35	50046	GN3	1基	-	a	A	0.40	(0.17)	0.34	(0.09)	0.11							
SK36	50081	GN4	1基	I	d	C	0.84	0.75	0.61	0.36	0.36	SK43		27				
SK37	50056	GN1-2	1基	IV	e	B	(1.90)	(1.72)	(1.76)	(1.53)	0.06	SK39		26				
SK38	50048	GN2-002	1基	I	d	B	0.82	0.55	0.58	0.37	0.28				27			
SK39	50078	GN2-002	1基	I	a	B	0.30	0.21	0.20	0.11	0.14							
SK40	50042	GN3-003	1基	I	e	A	0.27	0.21	0.07	0.06	0.22	SK34		27				
SK41	50043	GN3-003	1基	I	a	A	0.20	0.18	0.07	0.06	0.06							
SK42	50045	GN3-003	1基	IV	d	A	0.50	0.49	0.40	0.27	0.28				26			

表14 土坑一覧表(3)

道構番号	調査時 No.	調査区画	検出面	平面 形状	断面 形状	埋土	上端		下端		深さ	重複関係		博団 番号	国版 番号			
							長軸	短軸	長軸	短軸		新	旧					
SK43	50093	GN4-004	I 基	IV	d	B	(1, 03)	0.98	0.75	0.70	0.44	SK36 SK44 SK51		28				
SK44	50093	GN4-004	I 基	I	b	B	0.39	0.38	0.28	0.24	0.45		SK43 SK51	28				
SK45	50094	GN5-005	I 基	II	b	A	0.36	0.32	0.22	0.21	0.33	SD02		17	7			
SK46	50095	GN5-005	I 基	I	b	A	0.51	0.43	0.30	0.30	0.47	SD02		17	7			
SK47	50095	GN6-006	I 基	I	b	A	0.22	0.21	0.10	0.10	0.19							
SK48	50098	GN9-009	I 基	I	a	A	0.50	0.36	0.27	0.16	0.07							
SK49	50044	G03	I 基	-	a	A	0.75	0.34	0.35	(0.18)	0.44		SK50					
SK50	50071	G03	I 基	-	a	A	(0.61)	(0.18)	0.35	(0.17)	0.28	SK49						
SK51	50082	G04	I 基	I	b	B	0.54	0.49	0.42	0.32	0.42	SK44	SK43	28				
SK52	50087	G08	I 基	-	a	A	0.64	(0.18)	0.34	(0.16)	0.14							
SK53	50031	G015	I 基	-	a	A	(0.33)	(0.12)	(0.11)	(0.03)	0.14							
SK54	50007	H09	I 基	I	b	A	0.17	0.15	0.12	0.12	0.05	SH14						
SK55	50008	H09	I 基	I	a	A	0.23	0.20	0.18	0.16	0.03	SH14						
SK56	50009	H09	I 基	I	b	A	0.32	0.30	0.25	0.22	0.06	SH14						
SK57	50011	H09	I 基	I	a	A	0.23	0.19	0.12	0.08	0.05	SH14						
SK58	50006	H09	I 基	I	a	A	0.37	0.32	0.32	0.21	0.05	SH14						
SK59	50015	H016-H017	I 基	III	d	A	(0.82)	0.67	(0.68)	0.51	0.38	SD00						
SK60	50016	H017-H017	I 基	III	-	A	2.91	(0.82)	1.12	(0.82)	0.10		SK59					
SK61	50022	J29	IV 上	I	b	A	0.25	0.16	0.18	(0.16)	0.12							
SK62	S168	IP9	I 基	I	a	G	(0.23)	0.16	(0.16)	0.14	0.06							
SK63	S162	IP14	I 基	II	b	A	(1.06)	0.51	(0.68)	0.44	0.27							
SK64	S151	IP16	I 基	II	a	A	0.44	0.39	0.23	0.19	0.14							
SK65	S153	IP16	I 基	II	d	A	0.29	(0.11)	0.18	(0.07)	0.08							
SK66	S147	IP17	I 基	I	b	A	0.33	0.32	0.26	0.21	0.10							
SK67	S148	IP17	I 基	I	d	A	0.40	0.25	0.27	0.14	0.07							
SK68	S149	IP17	I 基	I	d	A	0.40	0.34	0.23	0.21	0.18							
SK69	S150	IP17	I 基	IV	d	A	0.52	0.35	0.41	0.27	0.16							
SK70	S139	IP18	I 基	IV	-	-	2.56	(0.55)	0.98	(0.36)	0.33							
SK71	S145	IP18	I 基	IV	-	A	0.95	0.43	0.29	0.39	0.11							
SK72	S136	IP19	I 基	IV	-	-	0.83	(0.14)	0.24	(0.12)	0.07							
SK73	S137	IP19	I 基	IV	d	-	0.91	(0.42)	0.73	(0.16)	0.17							
SK74	S143	IP19	I 基	I	d	E	0.44	0.32	0.39	0.30	0.12							
SK75	S144	IP19	I 基	IV	d	A	0.38	0.23	0.12	0.12	0.10							
SK76	S142	IP20	I 基	I	d	B	0.59	0.49	0.43	0.30	0.18							

表15 自然流路一覧表

造構番号	調査年月 No.	調査区画	横出面	平面 形状	断面 形状	堆土	上端		下端		深さ	重複関係		越流 番号	貯留 番号
							長軸	短軸	長軸	短軸		新	旧		
NR01	S001	FR8-PL13	II基	-	-	A	-	-	-	-	(0, 60)			29	
NR02	S057	GL3-4	IV上 I基	-	-	-	(1, 90)	(1, 40)	-	-	(0, 68)	NR03		30	
NR03	S062	GL4-12	I基	-	-	-	-	-	-	-	(0, 80)		NR02	30	
NR04	S112	GL15-18	I基	-	-	-	-	-	-	-	(0, 80)		NR05	31	
NR05	S171	GL14-18	I基	-	-	-	-	-	-	-	(0, 50)	NR04		31	
NR06	S123	HL3-BM9	IV上 II基	-	-	-	-	-	-	-	(0, 80)	SK09 SK12	SD01	31	
NR07	S078	HM15-TL6	I基	-	-	-	-	-	-	-	(0, 20)			35	
NR08	S0638	FN19-20	I基	-	-	A	(11, 92)	(1, 52)	-	-	(0, 22)		NR09	36	
NR09	S0609	FN18-20	I基	-	-	A	(10, 53)	(1, 65)	-	-	(0, 34)	NR08	SP03・SP04 SK18・SK19 SK20	36	
NR10	S0630	GN11-13 GN11-16	I基	-	-	A	(4, 89)	(20, 47)	-	-	(0, 32)			36	
NR11	S0635	GO18-20 BM1	I基	-	-	A	(5, 27)	(11, 19)	-	-	(0, 57)	SD05	SD06 NR12	37	
NR12	S0602	GO19-20 BM1-3	I基	-	-	A	(2, 70)	(20, 10)	-	-	(0, 65)	SD06 NR11・NR13		37	
NR13	S0633	HO2-3	I基	-	-	A	(4, 93)	(6, 60)	-	-	(0, 61)		NR12	37	
NR14	S0610	HO7-10	I基	-	-	-	(1, 29)	(13, 13)	-	-	(0, 21)		SK54・SK55 SK56・SK57 SK58	38	
NR15	S0605	HO10-16	I基	-	-	-	(0, 87)	(29, 3)	-	-	(0, 32)	SD10		38	
NR16	S0613	HO19-TO3	I基	-	-	-	(1, 85)	(12, 9)	-	-	(0, 41)		NR17	39	
NR17	S0612	TO3-6	I基	-	-	-	(2, 86)	(22, 7)	-	-	(0, 44)	NR16		39	
NR18	S0618	TM8-12	I基	-	-	-	(1, 45)	(17, 4)	-	-	(0, 60)			44	
NR19	S0625	JN02-JN13	I基 II基	-	-	-	(1, 52)	(43, 0)	-	-	(1, 20)			44	
NR20	S0620	JN15-18	I基	-	-	-	(1, 57)	(15, 0)	-	-	(0, 82)			45	
NR21	S164	HP11	I基	-	-	-	-	-	-	-	-		NR22		
NR22	S165	HP10-11	I基	-	-	-	-	-	-	-	-	NR21			
NR23	S163	HP13	I基	-	-	-	-	-	-	-	-		SD11		
NR24	S131	JO10-JO11	II基	-	-	-	-	-	-	-	-				

表16 土器観察表(1)

揭露 点 No.	地 点	遺構名 グリッド	層位	種別	器種	産地・ 分類等	法量 (cm)		始土	焼成	調整	備考	種 別 No.	回 数 No.
							口径	底径						
1 A	S801 FL19	I	須恵器	蓋	美濃須南 V-1期	(13.4)	—	(1.5)	密	良好	内: 回転ナデ 外: 回転ケズリ		12	
2 A	S801 FL19	IV	須恵器	蓋	美濃須南 V-1期	(14.0)	—	(1.8)	密	良好	内: 回転ナデ 外: 回転ナデ		12	
3 A	S801 FL19	c	須恵器	蓋	美濃須南 V-1期	—	(20.4)	(2.2)	密	良好	内: 回転ナデ 外: 回転ナデ、回転ケズリ		12	
4 B	S801 FL19	a	須恵器	片	美濃須南 V-3Ⅱ期	(15.4)	—	(3.6)	密	良好	内: 回転ナデ		12	
5 B	S801 FL19	—	須恵器	有台环	美濃須南 V-3Ⅱ期	—	(12.2)	(1.5)	密	良好	内: 回転ナデ、静止ナデ 外: 回転ナデ、高台貼付 回転ケズリ		12 13	
6 B	S801 FL20	a	須恵器	盤	美濃須南 V-1期	(14.4)	(9.6)	3.1	密	良好	内: 回転ナデ 外: 回転ナデ、高台貼付 回転ケズリ		12 13	
7 A	S801-P02 FL19 G4	I	須恵器	盤	美濃須南 V-1期	(21.4)	—	(1.9)	密	良好	内: 回転ナデ 外: 回転ナデ		12	
10 B	S801 H.7	k	須恵器	碗	美濃須南 V-1期	—	(9.0)	(1.7)	密	良好	内: 回転ナデ 外: 回転ナデ、高台貼付	底部外面剥離	17 12	
11 B	S801 H.7	k	灰釉陶器	碗	鉢段 K99	(14.1)	(7.8)	1.3	密	良好	内: 回転ナデ、直輪 外: 回転ナデ、直輪、高台貼付 回転ケズリ	底部外面剥離	17 12	
12 B	S801 H.7	k	灰釉陶器	碗	美濃 丸石25号鹿越 山	—	(5.2)	(2.2)	密	良好	内: 回転ナデ 外: 回転ナデ、高台貼付		17 13	
13 B	S801 H.7	k	灰釉陶器	碗	美濃 丸石2	—	(7.6)	(1.6)	密	良好	内: 回転ナデ 外: 回転ナデ、高台貼付	底部外面剥離	17 12	
14 G	S802 G05	—	灰釉陶器	碗	鉢段 K99	—	(8.2)	(1.7)	密	良好	内: 回転ナデ、直輪 外: 回転ケズリ、直輪、 高台貼付、回転ケズリ		17 13	
15 G	S802 G05	—	山茶瓶	小瓶	足型 第4型式	—	(4.6)	(1.2)	密	良好	内: ナデ 外: ナデ、高台貼付、ナデ 底部移設板		17	
16 G	S804 G04	—	須恵器	盤	—	(21.8)	—	(1.8)	密	良好	内: 回転ナデ 外: 回転ナデ、回転ケズリ		28	
17 G	S804 G05	—	山茶瓶	片口瓶	足型 第3-4型式	—	—	(6.3)	密	良好	内: 回転ナデ 外: 回転ケズリ、高台貼付 回転ナデ		28 13	
18 G	S805 G018	I	須恵器	有台环	美濃須南 V-3期	—	(11.0)	(1.8)	密	良好	内: 回転ナデ 外: 回転ナデ、高台貼付、 回転ケズリ	底部に墨痕 底部外面にヘラ記号	28 13	
19 G	S805 G018	I	須恵器	盤	美濃須南 V-1期	—	(5.6)	(2.8)	密	良好	内: 回転ナデ 外: 回転ナデ、回転ケズリ、 高台貼付、回転ケズリ		28 13	
20 G	S805 G018	I	須恵器	盤	美濃須南 V-1期	(28.0)	—	12.9	密	良好	内: 回転ナデ、圓心凹凸で具痕 のものナデ 外: 回転ナデ、平行タキ痕		28 11	
21 G	S805 G018	I	土師器	甕	—	(28.6)	—	(6.0)	密	良好	内: ハケ、指サエ 外: 猪(子)、(重威)	口縁内面に埋	28 13	
22 G	S805 G018	I	土師器	甕	—	(20.0)	(1.8)	—	やや密	良好	内: 指サエ、ハケ、指サエ 外: ハケ、エ、ハケ	外縁と内面に埋	28 11	
23 B	S808 H.2	a	須恵器	蓋	美濃須南 V-1期	(14.6)	—	(1.6)	密	良好	内: 回転ナデ		23	
24 B	S808 H.3	a	須恵器	無台环	美濃須南 V-3期	(12.0)	7.6	3.6	密	良好	内: 回転ナデ、静止ナデ 外: 回転ナデ、回転ケズリ	底部外面剥離	23 11	
25 B	S808 H.2	a	須恵器	有台环	美濃須南 V-3～V-1	(16.0)	5.1	11.2	密	良好	内: 回転ナデ、静止ナデ、 回転ケズリ、 高台貼付		23 11	
26 B	S808 H.4	a	須恵器	有台环	美濃須南 V-3～V-1	(16.4)	5.9	9.0	密	良好	内: 回転ナデ、指オサエのち 静止ナデ 外: 回転ナデ、回転ケズリ、 高台貼付		23 11	
27 B	S808 H.1	III	須恵器	有台环	美濃須南 V-1期	(12.6)	(8.6)	3.4	密	良好	内: 回転ナデ 外: 回転ナデ、高台貼付、 回転ケズリ		23 11	
28 B	S808 H.2	a	須恵器	盤	美濃須南 V-1期	19.8	6.2	12.2	密	良好	内: 回転ナデ、静止ナデ 外: 回転ナデ、回転ケズリ 高台貼付	三方透し 底部外面剥離	23 11	

表17 土器観察表(2)

遺構 No.	地 点	遺構名 グリッド	層位	種別	器種	遺地・ 分類等	法量 (cm)		始土	焼成	調整	備考	回 復 率 No.	
							口径	底径						
29	B	SK08 HL2	a	破壊器	盤	美濃須衛 IV-3期	(21.2)	—	(3.5)	密	良好	内：回転ナデ 外：回転ナデ、回転ケズリ 高台貼付	23 13	
30	B	SK08 HL2	a	破壊器	有台坪	美濃須衛 IV-3～V-1 期	10.2	—	(1.5)	密	良好	内：回転ナデ 外：回転ケズリ、高台貼付	23 13	
31	B	SK08 HL2	a	破壊器	盤	美濃須衛 V-1期	(20.0)	—	(2.4)	密	良好	内外：回転ナデ	23	
32	B	SK08 HL2	a	破壊器	盤	美濃須衛 V-1期	(17.0)	—	(2.0)	密	良好	内：回転ナデ 外：回転ナデ、回転ケズリ	23	
33	B	SK09 HL4	3	破壊器	有台坪	美濃須衛 IV-3期	—	(9.6)	(1.4)	密	良好	内：回転ナデ 外：回転ナデ、回転ケズリ 高台貼付	24 13	
39	G	SK17 FN18	—	土師器	便	—	—	4.0	(7.9)	密	良好	内：指サエ 外：ハケ	25 11	
41	G	SK14 GN4	—	破壊器	有台坪	美濃須衛 IV-3～V-1 期	(16.0)	(11.0)	3.8	密	良好	内：回転ナデ 外：回転ナデ、回転ケズリ 高台貼付	26 13	
42	A	AB02 GL4	IV	破壊器	蓋	美濃須衛 V-1期	(14.0)	—	(1.5)	密	良好	内：回転ナデ 外：回転ナデ	30	
43	B	NB04 GL15	a～c	土師器	罐	後藤型罐	(22.2)	—	(6.0)	やや粗	良好	内：板ナデ 外：ナデ、指サエ、ナデ	内部に埋	32 14
44	B	NB04 GL15	a～b	土師器	便	—	(13.0)	—	(1.9)	密	良好	内外：摩減で調整不明	外面に埋	32
45	B	NB04 GL17	a～c	土師器	鉢か	—	(20.0)	—	(3.3)	密	良好	内外：ナデ	外面に埋	32 14
46	B	NB04 GL16	—	破壊器	有台坪	美濃須衛 V-1期	(6.7)	—	(2.0)	密	良好	内：回転ナデ 外：回転ナデ、回転ケズリ 高台貼付	底部外面墨書き	32 12
47	B	NB04 GL16	a～b	破壊器	碗	美濃須衛	—	—	(1.7)	密	不良	内：回転ナデ 外：回転ナデ、高台貼付か ケズリ？	32	
48	B	NB04 GL16	a～c	灰釉陶器	瓶	施設 K90	(15.0)	(8.2)	5.0	密	良好	内：回転ナデ 外：回転ナデ、回転ケズリ 高台貼付	32 14	
49	B	NB04 GL16	a～c	灰釉陶器	瓶	美濃 大里2	—	(2.0)	(7.8)	密	良好	内：回転ナデ、施輪 外：回転ナデ、施輪、高台貼付	32	
50	B	NB04 GL17	a～c	灰釉陶器	瓶	美濃 大里2	(15.0)	(8.8)	(4.4)	密	良好	内：回転ナデ、施輪 外：回転ナデ、施輪、回転ケズリ、高台貼付 底部斜面	32 14	
51	B	NB04 GL16	b	灰釉陶器	瓶	施設 6G3	—	(8.0)	(2.8)	密	良好	内：回転ナデ 外：回転ナデ、高台貼付、 回転ナデ切痕	32 14	
52	B	NB04 GL16	a～c	灰釉陶器	瓶	美濃 虎渓山	—	(6.2)	(4.3)	密	良好	内：回転ナデ 外：回転ナデ、施輪、高台貼付 回転ケズリ	32 14	
53	B	NB04 GL16	b	灰釉陶器	瓶	美濃 大里2	(16.2)	(7.8)	5.8	密	良好	内：回転ナデ 外：回転ナデ、高台貼付、 回転ケズリ	32 14	
54	B	NB04 GL16	b	灰釉陶器	瓶	美濃 丸久2	—	(7.2)	(2.7)	密	良好	内：回転ナデ、施輪、静ナデ 外：回転ナデ、施輪、高台貼付 回転ケズリ	底部穿孔 底部内面に埋	32 14
55	B	NB04 GL16	a～c	灰釉陶器	皿	美濃 虎渓山	—	(7.4)	(2.8)	密	良好	内：回転ナデ、施輪 外：回転ナデ、施輪、 回転ケズリ、高台貼付	32 14	
56	B	NB04 GL7	c	灰釉陶器	皿	美濃 丸久2	13.0	6.3	3.1	密	良好	内：回転ナデ、施輪 外：回転ナデ、施輪、高台貼付	32 11	
57	B	NB04 GL16	a～c	灰釉陶器	小瓶	施設 K90	6.0	—	(3.9)	密	良好	内：回転ナデ、施輪 外：回転ナデ、施輪	32 14	
58	B	NB04 GL16	a～c	灰釉陶器	—	美濃 虎渓山	—	—	—	密	良好	内：回転ナデ、施輪 外：回転ケズリ	底部外面墨書き	32 12
61	B	NB06 HL3	a～b	土師器	便	—	(19.0)	—	(7.0)	やや粗	良好	摩減で調整不明 外：ハケ	33 11	
62	B	NB06 HL5	2	破壊器	蓋	美濃須衛 V-1期	(13.2)	—	(2.5)	密	良好	内：回転ナデ 外：回転ケズリ、回転ナデ	底部内面墨書き	33 12
63	B	NB06 HL5	b	破壊器	蓋	美濃須衛か V-1期か	—	—	(2.0)	密	良好	内：ナデ、回転ナデ 外：細み追付、回転ケズリ	33 14	

表18 土器観察表(3)

揭露 点 No.	地 点	遺構名 アリット	層位	種別	器種	遺产地・ 分類等	法量 (cm)		胎土	焼成	調査	備考	種 類 No.	回 収 No.	
							口径	底径							
61	B	NB06 BLA	a-b	須恵器	無台环 美濃須衛	—	—	(1.2)	密	良好	内：回転ナデ 外：回転ナデ、ケズリ	底部外面削除	33	33	
65	B	NB06 BL5	2	須恵器	有台环 美濃須衛 V-1期	(16.0)	(11.0)	(5.1)	密	良好	内：回転ナデ 外：回転ナデ、高台貼付 回転ケズリ	底部外面削除	33	14	
66	B	NB06 BL5	—	須恵器	碗	美濃須衛 V-1期	—	(7.8)	(2.3)	密	良好	内：回転ナデ 外：回転ナデ、高台貼付 回転ケズリ	底部外面削除	33	12
67	B	NB06 BL5	3	須恵器	盤	美濃須衛	—	(1.4)	密	良好	内：回転ナデ 外：回転ナデ、回転ケズリ	底部外面削除	33	12	
68	B	NB06 BL6	f~h	須恵器	甕	破壊 7世紀か	—	—	—	密	良好	外：外に 内：ナデ	外側に沈鉢 縦横斜文	33	14
69	B	NB06 BL6	e	須恵器	甕	破壊 9世紀か	—	—	(21.2)	密	良好	内：同心円当て具痕のちナデ 外：棒子状のタキナ	内：ナデ、底部削オサエ 外：ケズリ、ナデのち施釉	33	11
70	B	NB06 BL5	h	灰釉陶器	—	—	(6.0)	(1.9)	密	良好	内：ナデ	内：ナデ	33	33	
71	B	NB06 BL5	1	灰釉陶器	碗	破壊 E14	—	(7.0)	(2.7)	密	良好	内：回転ナデ 外：回転ナデ、高台貼付 回転ケズリ	底部外面削除	33	12
72	B	NB06 BL2	j	灰釉陶器	瓶	破壊 E90	—	(7.6)	(2.7)	密	良好	内：回転ナデ 外：回転ナデ、高台貼付 回転系切痕	底部外面削除	33	12
73	B	NB06 BL5	h	灰釉陶器	段皿	破壊 E14	(15.8)	(7.8)	2.55	密	良好	内：回転ナデ 外：回転ナデ、回転ケズリ 高台貼付	外側と底部墨痕	34	14
74	B	NB06 BL4	a-b	山形碗	碗	尾張型 第3-4型式	—	(7.0)	(2.0)	密	良好	内：回転ナデ 外：回転ナデ、高台貼付	底部外面削除、墨書	34	12
79	G	NB09 PN19	—	須恵器	有台环 美濃須衛 V-1期	—	(8.2)	(2.7)	密	良好	内：回転ナデ 外：回転ナデ、回転ケズリ 高台貼付、回転ケズリ	36	14		
80	G	NI10 G014	1	圓土器	深鉢	—	—	(6.4)	(5.4)	中中密	不良	内：ナデ 外：底面網代紋	36	11	
81	B	NI15 H012	a	灰釉陶器	皿	美濃 丸石2	—	(5.6)	(1.6)	密	良好	内：回転ナデ 外：回転ナデ、高台貼付 回転系切痕のちナデ	38	14	
82	I	NI16 H019	e	須恵器	甕	破壊	—	—	—	密	良好	内：回転ナデ	39	14	
83	I	NI16 H12	b	山形碗	碗	尾張型 第3型式	—	(8.0)	(2.6)	密	良好	内：回転ナデ 外：回転ナデ、高台貼付 回転系切痕	39	14	
84	D	S899 JP2	h	舞生土器	壺	—	—	—	—	中中密	良好	内：壺底 外：壺底、ケズリ	外面に赤彩	42	13
85	D	S899 JP2	a	土師器	壺	—	—	—	(5.0)	密	良好	内：ナデ 外：壺ナデ、ハク	42	13	
86	D	S899 JP2	c	須恵器	蓋	破損著しくは 見えない 7世紀 後半	(16.4)	—	(2.9)	密	良好	内：回転ナデ、停止ナデ 外：壺入貼付、回転ケズリ	口縁内面に壊	42	13
87	D	S899 JP2	c	須恵器	壺身	壺底不明 7世紀後半	(10.6)	—	(2.5)	密	良好	内：回転ナデ 外：回転ケズリ、回転ナデ	42	13	
88	D	S899 JP2	c	須恵器	甕	破壊	—	—	(19.5)	密	良好	内：同心円当て具痕 外：棒子状のタキナ	42	11	
89	E	NI18 DM1	6	須恵器	小壺	破壊	—	(3.4)	(7.0)	密	良好	内：回転ナデ 外：回転ナデ、回転系切痕	45	14	
90	E	NI18 DM9	7	灰釉陶器	碗	美濃 昭和27	—	(6.4)	(3.2)	密	良好	内：回転ナデ 外：回転ナデ、高台貼付、 回転ケズリ	45	14	
91	E	NI18 DM11	6	灰釉陶器	段皿	破壊 E90	(17.1)	8.8	3.1	密	良好	内：回転ナデ、施釉 外：回転ナデ、施釉、高台貼付 回転ケズリ	底部内面と外面に 墨痕	45	11
92	E	NI18 DM10	6	中近世 陶磁器	擂鉢	古瀬戸	—	(11.0)	(4.6)	密	良好	内：瀬戸 外：回転ケズリ	45	14	
93	E	NI18 DM9	7	中近世 陶磁器	白磁碗	中国	—	—	(2.6)	密	良好	内：施釉	45	14	
94	F	NI19 JN7	2	須恵器	盆	美濃須衛 V-1期	(19.0)	—	(10.3)	密	良好	内：回転ナデ 外：回転ナデ、 施釉	45	14	
95	F	NI19 JN5	2	灰釉陶器	皿	破壊 E90	—	(7.6)	(2.7)	密	良好	内：回転ナデ、施釉 外：回転ナデ、回転ケズリ 施釉、高台貼付	底部外面削除	45	12

表19 土器観察表(4)

調査 No.	地 点	遺構名 グリッド	層位	種別	器種	差地・ 分類等	法量 (cm)			始土	焼成	調整	備考	回 復 No.
							口径	底径	器高					
96	F	NH19 JN5	2	灰釉陶器	罐	美濃 虎尾山	—	(8.8)	(4.7)	密	良好	内：回転ナデ 外：回転ナデ、高台貼付、 回転ケズリ		45 14
97	B	包含層 BL9	III	器底部	有台环	美濃須衛 V-1期	(12.8)	(9.5)	3.8	密	良好	内：回転ナデ 外：回転ナデ、回転ケズリ 高台貼付、回転ケズリ		46 12
98	B	包含層 BL16	III	器底部	無台环 少	美濃須衛	—	—	—	密	良好	内：回転ナデ 外：回転ナデ、回転ケズリ	底部外面縦割、墨書き	46 12
99	B	包含層 BL15	III	灰釉陶器	碗	美濃 虎尾山	—	7.4	(2.6)	密	良好	内：回転ナデ 外：回転ナデ、高台貼付、 回転ケズリ	底部外面墨書き	46 12
100	B	包含層 BL15	III	灰釉陶器	碗	美濃 虎尾2	—	(9.0)	(3.2)	密	良好	内：回転ナデ 外：回転ナデ、高台貼付、 回転ケズリ	底部外面墨書き	46 12
101	B	包含層 BL14	III	山茶瓶	小瓶	尾張型 第3式型	(10.2)	(5.4)	3.2	密	良好	内：回転ナデ 外：回転ナデ、高台貼付 回転系切痕		46
102	B	包含層 JP3	a	器底器	有台环	美濃須衛 V-1～V-2	(13.2)	(9.0)	3.2	密	良好	内：回転ナデ、静止ナデ 外：回転ナデ、高台貼付、 回転ケズリ	底部外面墨書き	46 12
103	B	包含層 JP2	a	器底器	高杯	美濃須衛 Ⅲ型接半	—	—	(6.4)	密	良好	内：ナデ、シボリ痕		46
104	B	包含層 JP3	a	灰釉陶器	碗	尾張 653	—	(7.0)	(2.2)	密	良好	内：回転ナデ 外：回転ナデ、高台貼付、 回転系切痕	底部外面縦割 底部外面墨書き	46 12
105	B	包含層 JP3	a	灰釉陶器	碗	尾張 E90	(16.0)	7.8	4.4	密	良好	内：回転ナデ 外：回転ナデ、施輪、高台貼付 回転ケズリ	自然軸付着	46
106	B	包含層 JP2	a	灰釉陶器	双耳瓶	尾張 K14	(15.0)	—	(4.1)	密	良好	内：回転ナデ 外：回転ナデ、把手貼付、 回転ケズリ		46
107	B	包含層 JP3	a	灰釉陶器	有台环	尾張 K14	—	(8.6)	(1.9)	密	良好	内：回転ナデ 外：回転ナデ、施輪、高台貼付 回転ケズリ	形状が底底器に似似 している。	46
108	B	包含層 JP4	a	灰釉陶器	皿	美濃 虎尾山	(14.2)	2.95	(7.0)	密	良好	内：回転ナデ、施輪 外：回転ナデ、施輪、高台貼付 回転ケズリ		46
109	B	包含層 JN10	a	灰釉陶器	段皿	尾張 K14	(15.6)	—	(2.1)	密	良好	内：回転ナデ		46
110	B	包含層 HO13	III	器底器	碗	美濃須衛 V-1期	(17.0)	—	(4.3)	密	良好	内：回転ナデ 外：回転ナデ、回転ケズリ	口縁墨痕	46

表20 瓦・土製品観察表

掲載番号	地点	遺構名 グリッド	層位	種類	器種	分類・ 時期等	法量 (cm)			粘土	焼成	調査	備考	種図 番号	図版 番号
							長さ	幅	厚さ						
8 A	SD01 FL19	IVa	瓦	丸瓦			(8.3)	(8.4)	1.7	やや粗	良好	前面：布目痕、ケズリ 凸面：ケズリのちナデ		12	15 16
34 B	SK09 HL4	d	瓦	丸瓦			(6.5)	(6.0)	1.6	密	良好	前面：布目痕 凸面：ナデ	瓦縫付丸瓦	24	15 16
35 B	SK09 HL4	b	瓦	丸瓦			(22.0)	(17.0)	2.0	密	不良	前面：溝底で不明 凸面：溝目タタキのちナデ		23	15 16
36 B	SK09 HL4	3	瓦	平瓦			(9.6)	(10.0)	2.0	密	良好	前面：ハケ 凸面：溝目タタキのちハケ		24	15 16
37 B	SK09 HL4	c	瓦	平瓦			(28.5)	(14.0)	1.9	密	良好	前面：布目痕、端部ケズリ 凸面：溝目タタキ		24	15 16
38 B	SK09 HL4	3	瓦	軒平瓦			(15.0)	(13.0)	4.8	やや粗	不良	前面：布目痕 凸面：溝底で不明		24	17
40 G	SK43 GN3	—	陶馬	—	先濃須期 W=3～V=1		(16.3)	(15.8)	(3.4)	密	良好	外面：ナデ、指オサエ		28	参照
59 B	SK04 GL16	III	瓦	平瓦			(16.0)	(18.7)	4.1	密	不良	前面：布目痕 凸面：ケズリ		32	15 16
60 B	SK01 GL17	r	磚	—			(21.5)	(15.0)	8.5	密	不良	外面：溝底、側面にケズリ		32	17
75 B	SK06 HL5	1	瓦	軒平瓦			(16.0)	(15.0)	6.0	密	不良	前面：布目痕、ケズリ 凸面：ケズリ		34	17

表21 金属製品観察表

掲載番号	地点	遺構名 グリッド	層位	材質	器種	法量 (cm)			質量 (g)	時期・空式 等	形態・特徴	備考	種図 番号	図版 番号
						長さ	幅	厚さ						
9 A	SA03-P01 GL1	d	鉄	不明	(3.8)	3.15	3.31	51.0	不明	鉛塊状	重量：質量は復元後後の数値である。		14	11

表22 木製品観察表

掲載番号	地点	遺構名 グリッド	層位	用途	器種	法量 (cm)			木取り	焼種	形態・特徴	備考	種図 番号	図版 番号
						長さ	幅	厚さ						
76 B	SK06 HL7	k	不明	棒状 製品	(26.3)	(1.9)	1.6	紐目か コウヤマキ		橋脚の部材の可能性がある。上部 は次級、先端に向かってやや薄くなるよう成形する。			34	17
77 B	SK06 HL7	k	祭祀具	壺串	(11.9)	1.8	0.3	不明	ヒノキ科	肩部を明確に作り出す。先端部分 は欠損するが、先を細く成形する。			34	17
78 B	SK06 HL7	k	祭祀具	壺串	(13.35)	1.8	4.5	板目	ヒノキ科	上部は欠損。一部放熱で炭化する。 全体的に切削痕が認められる。			34	17

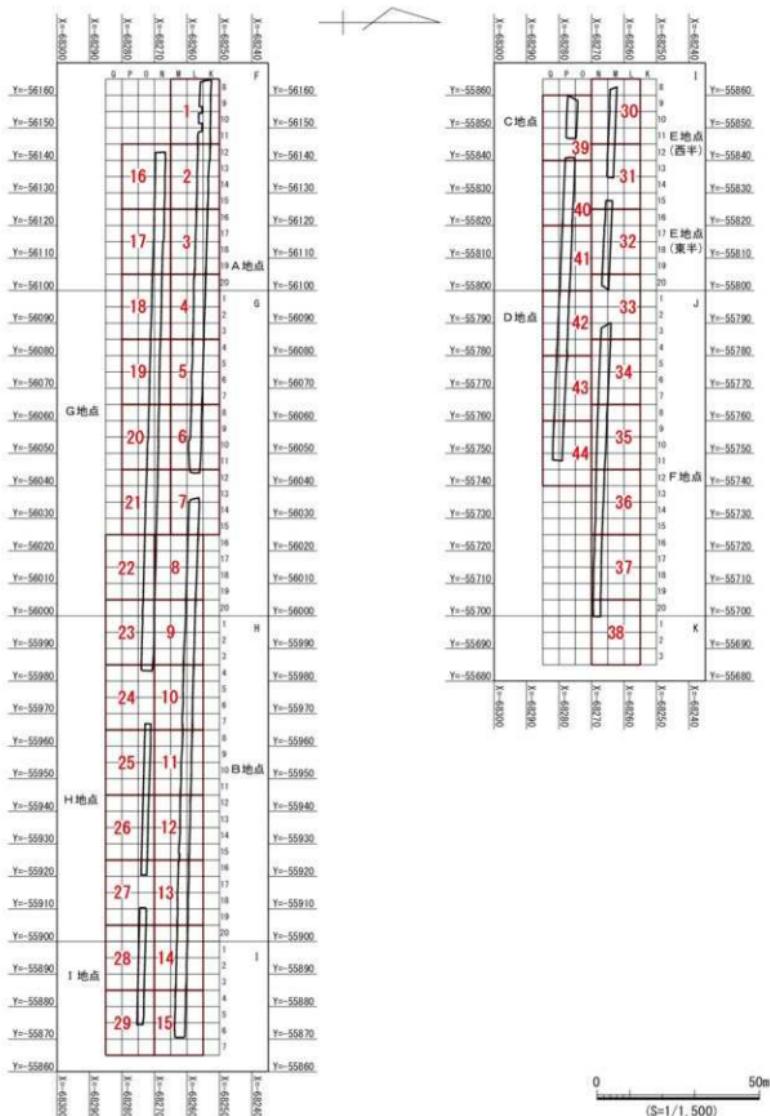


図 47 発掘区全城図 割付図

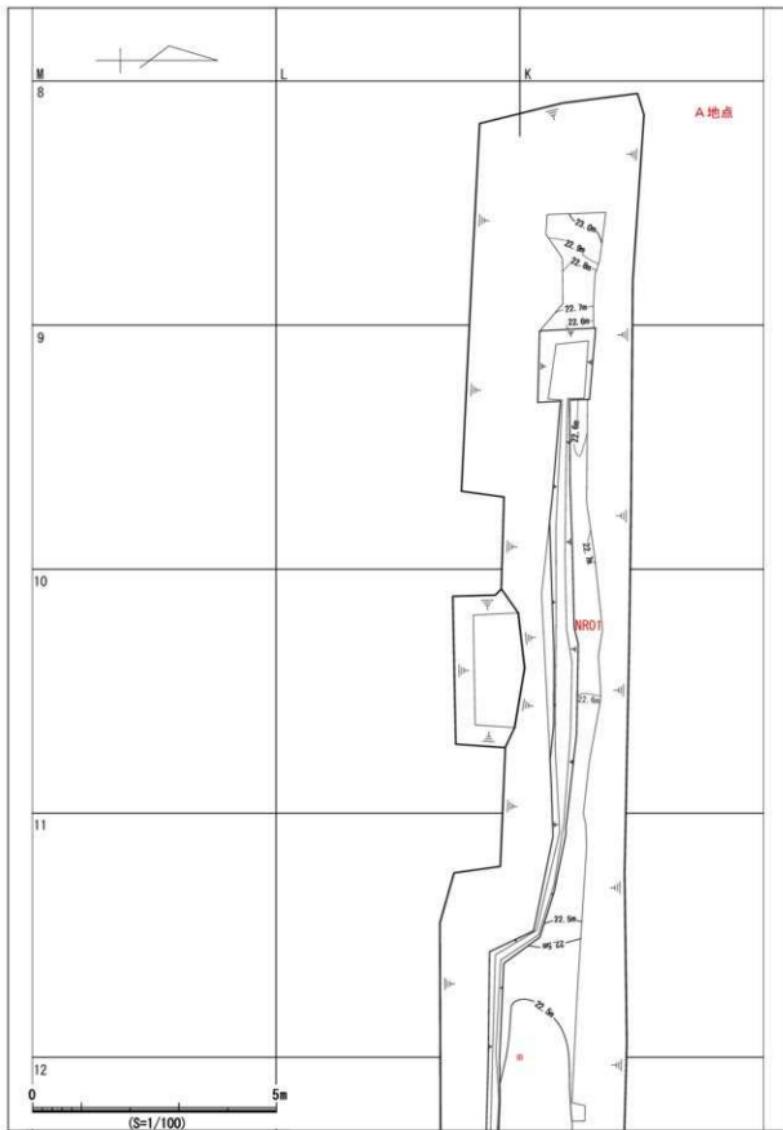


図48 発掘区全域図 分割図（1）

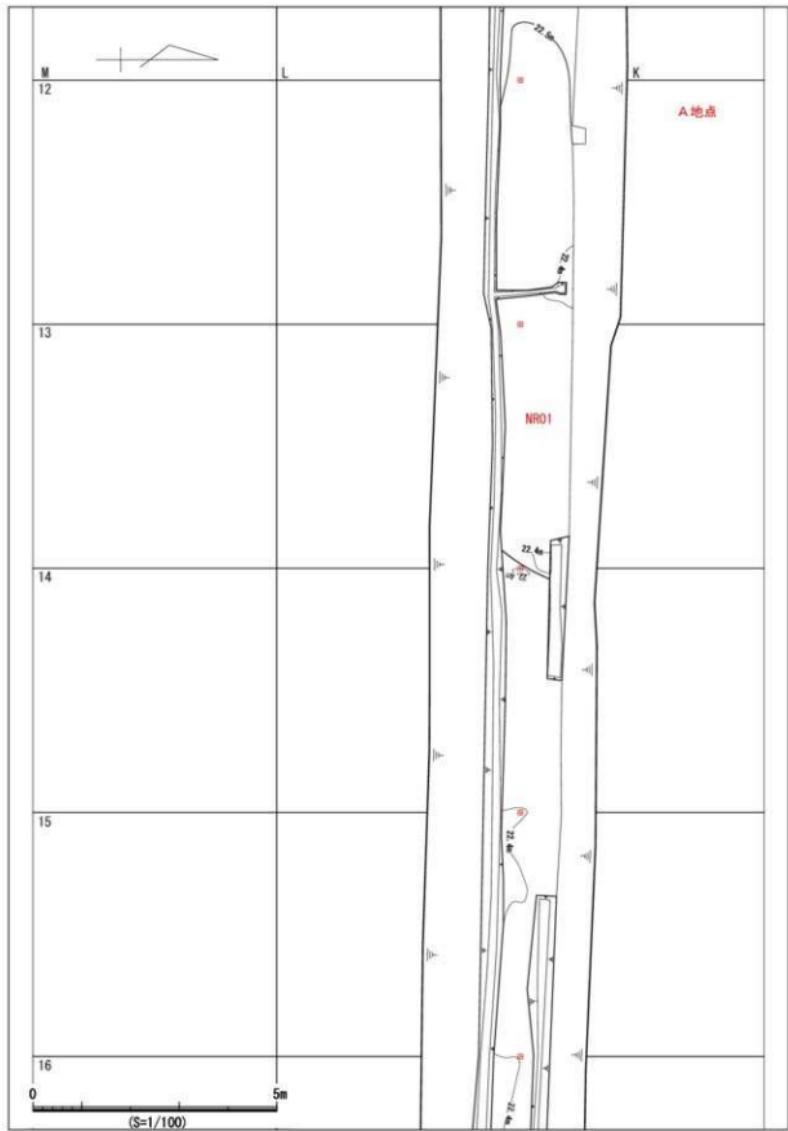


図49 発掘区全域図 分割図（2）

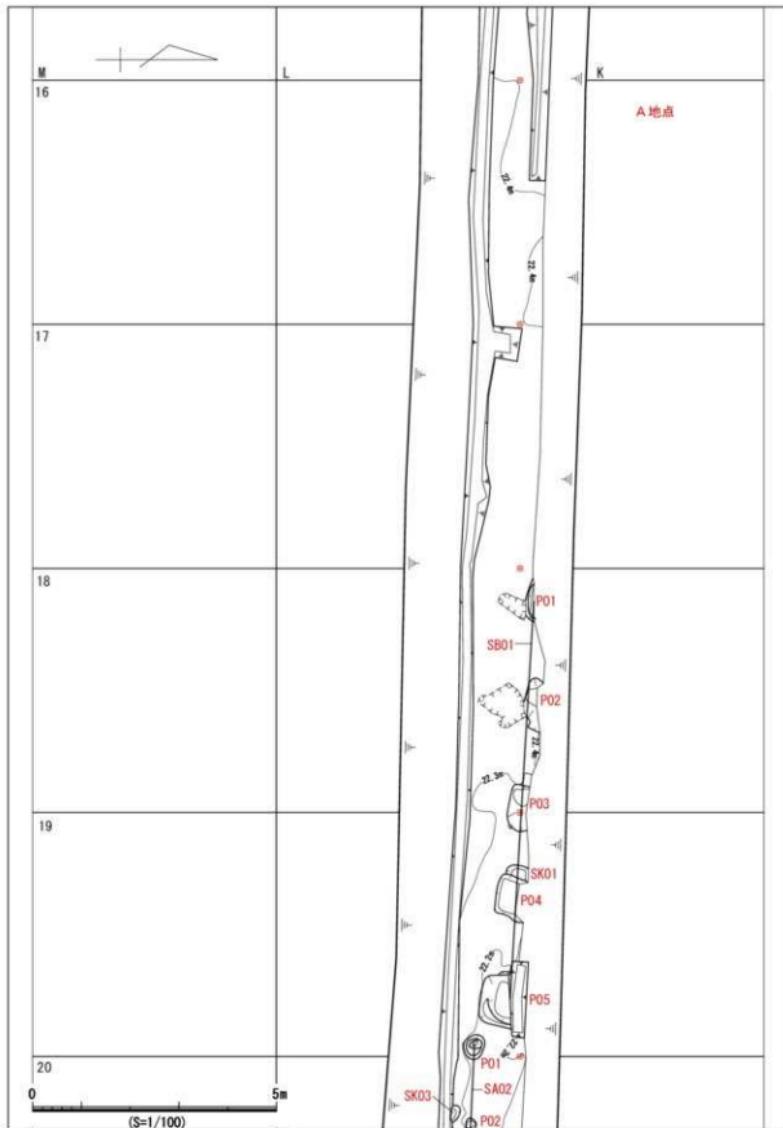


図 50 発掘区全域図 分割図（3）

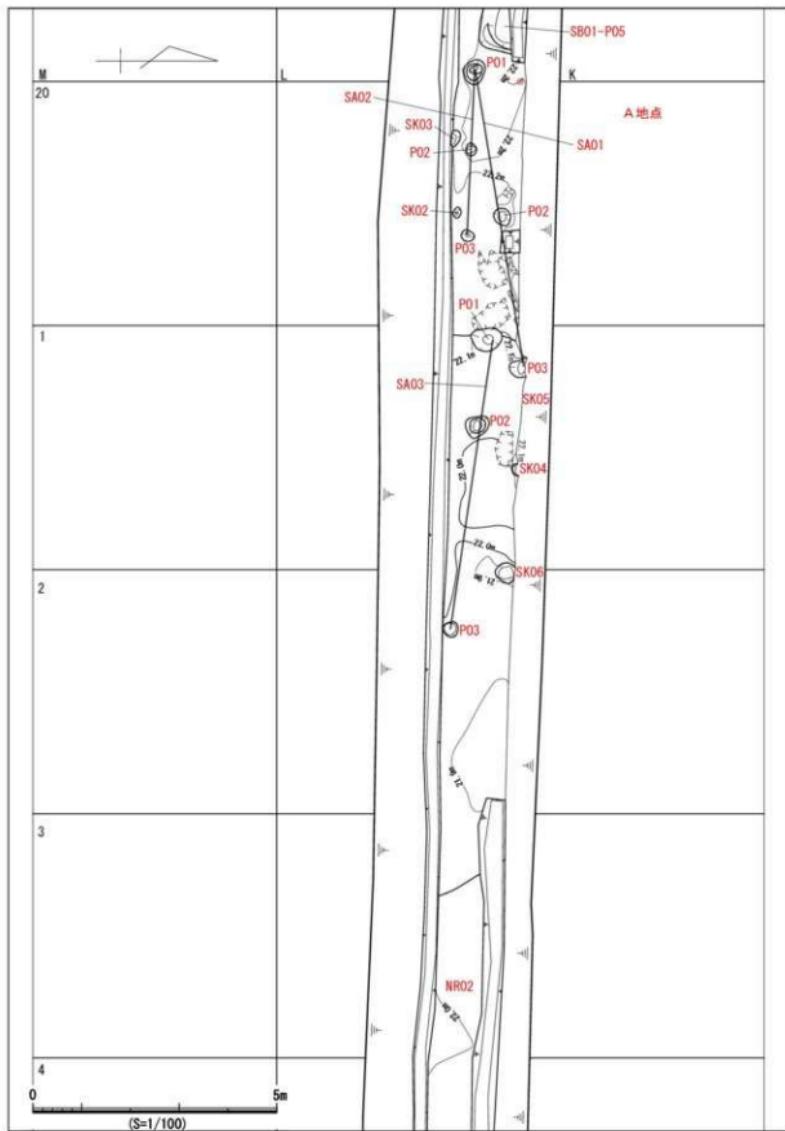


図 51 発掘区全城図 分割図 (4)

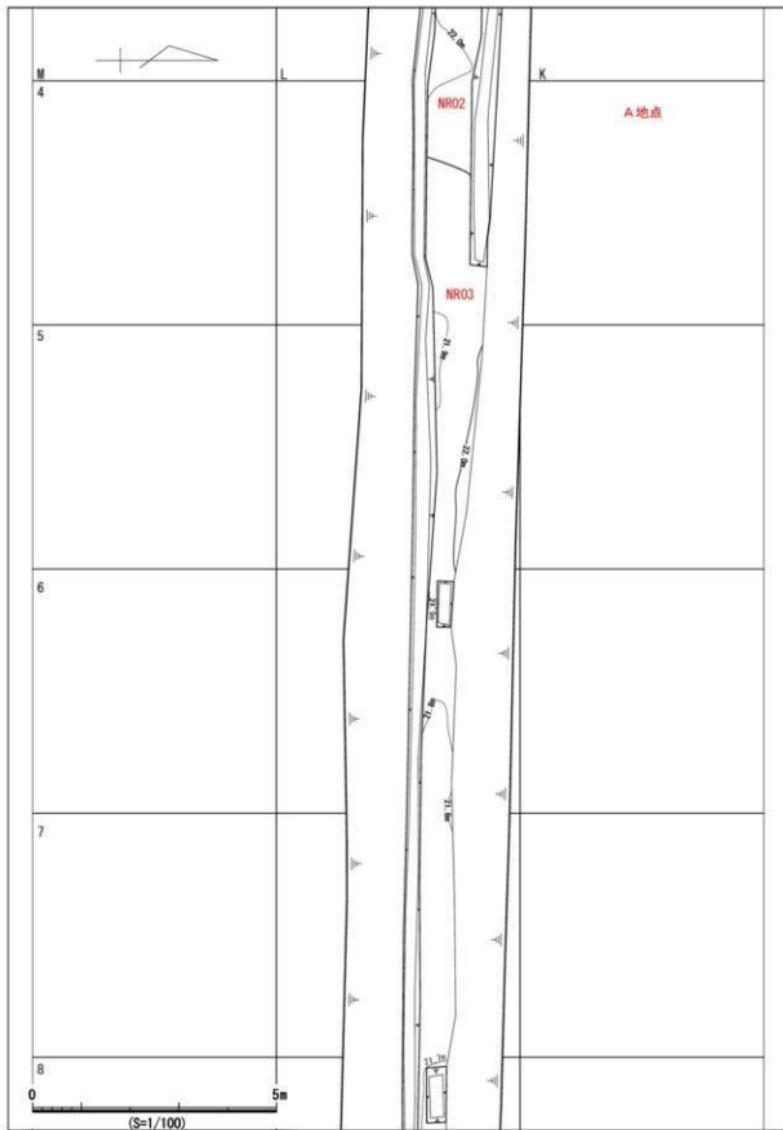


図52 発掘区全域図 分割図(5)

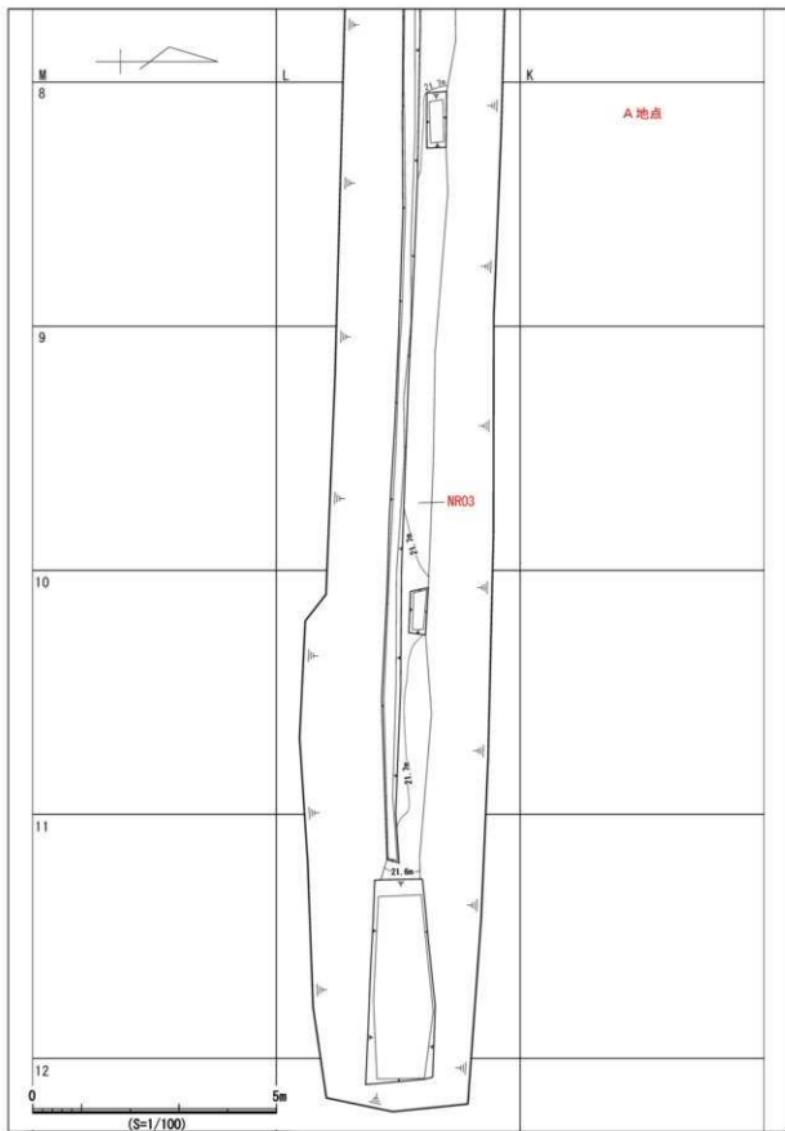


図53 発掘区全域図 分割図（6）

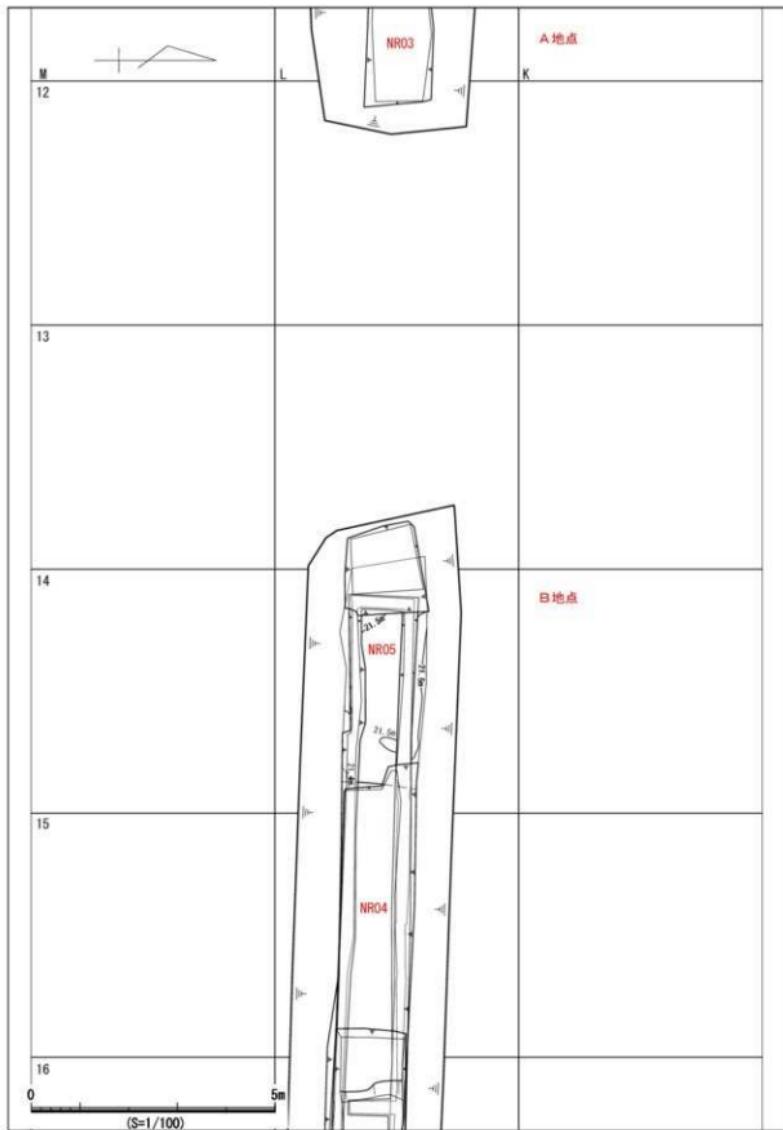


図54 発掘区全域図 分割図（7）

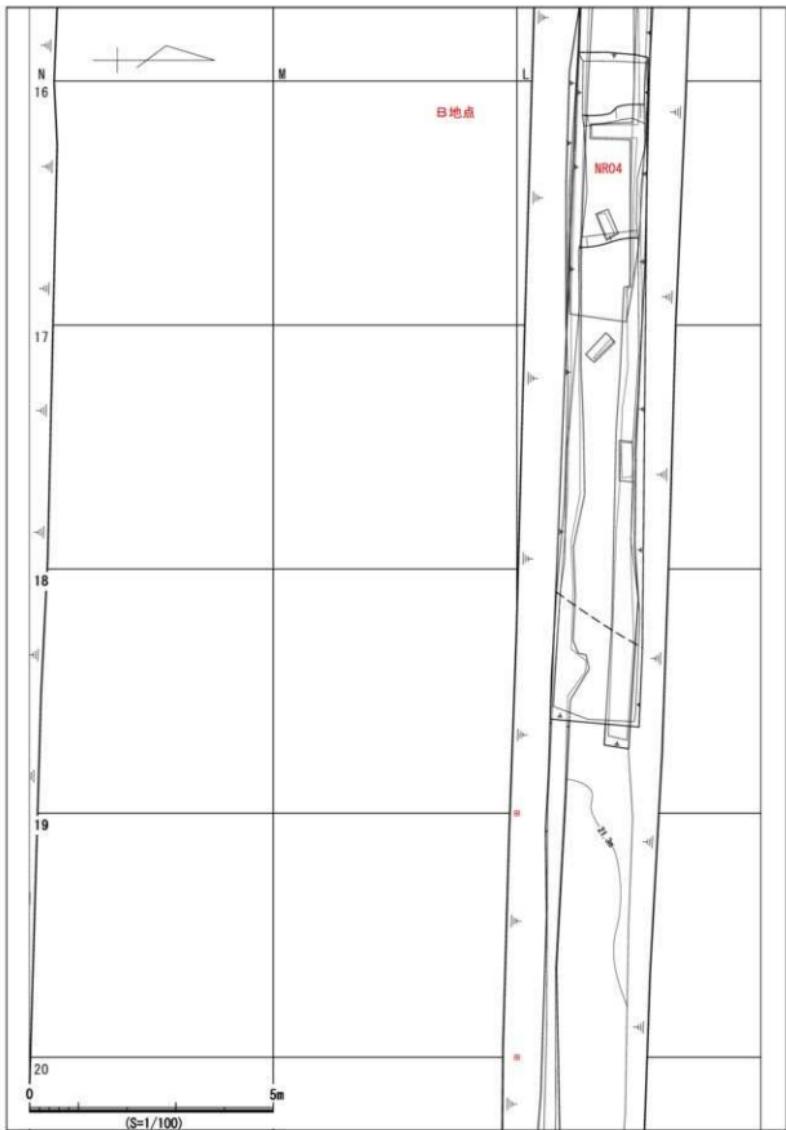


図55 発掘区全域図 分割図（8）

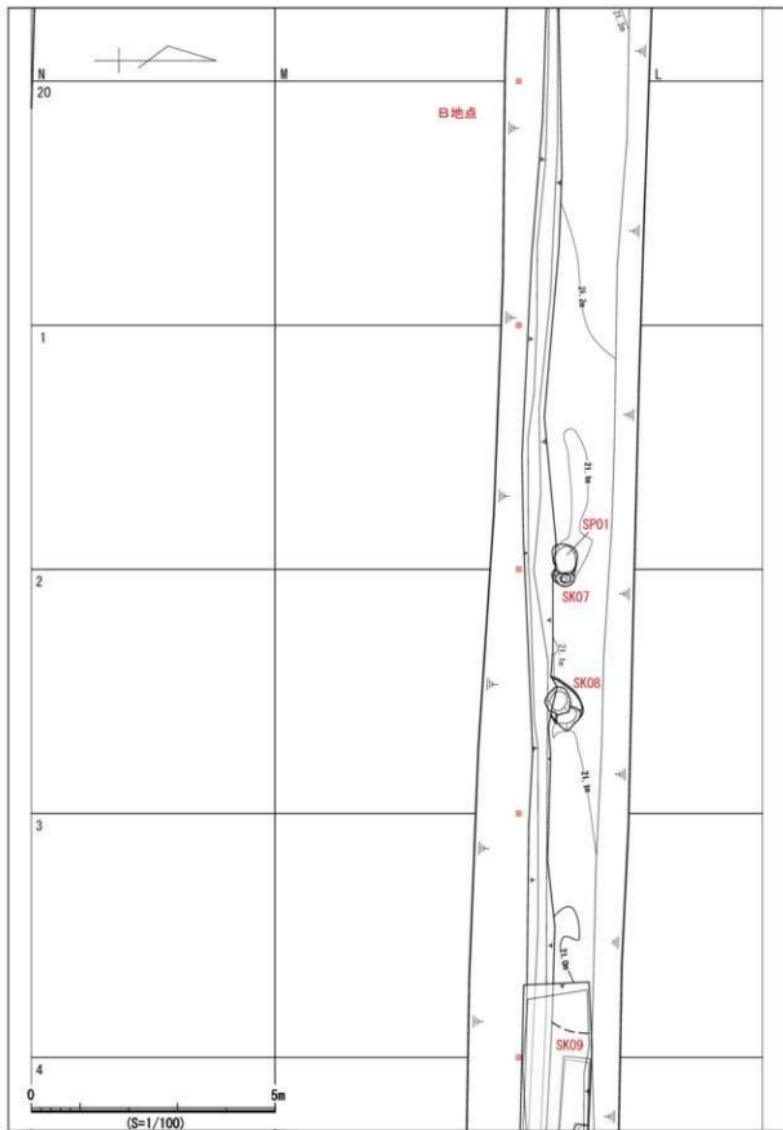


図 56 免掘区全域図 分割図（9）

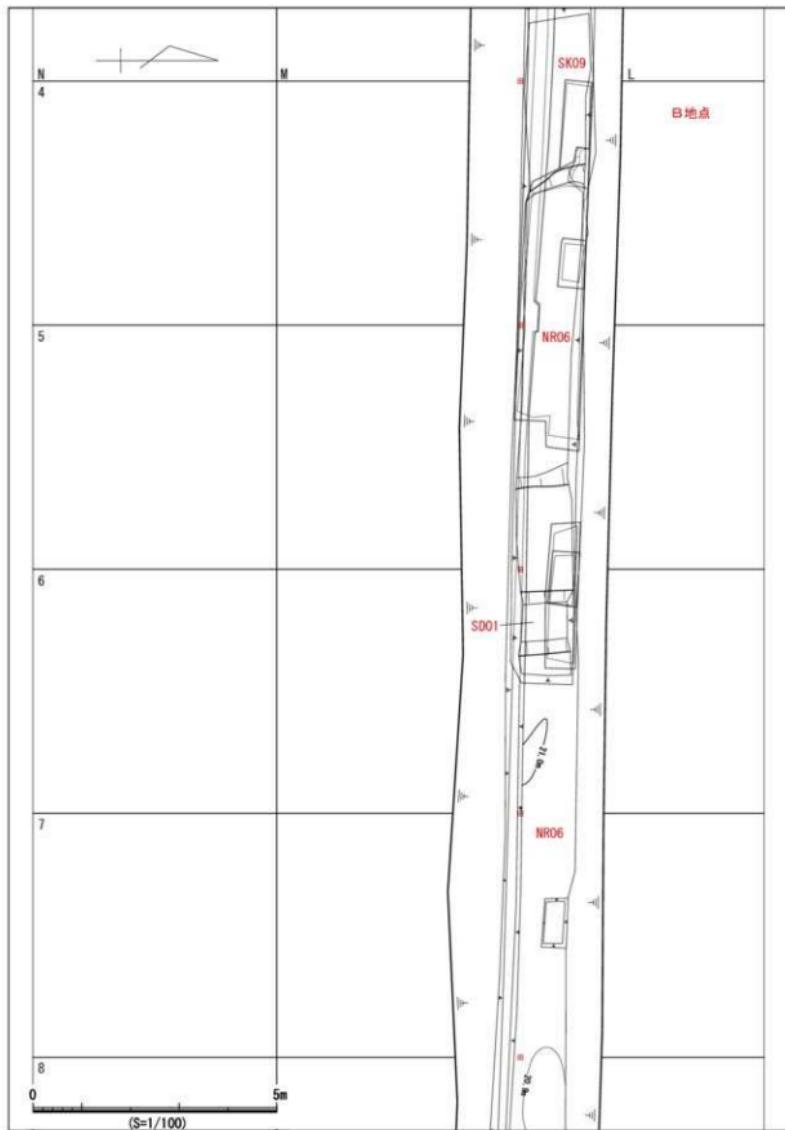


図 57 発掘区全域図 分割図 (10)

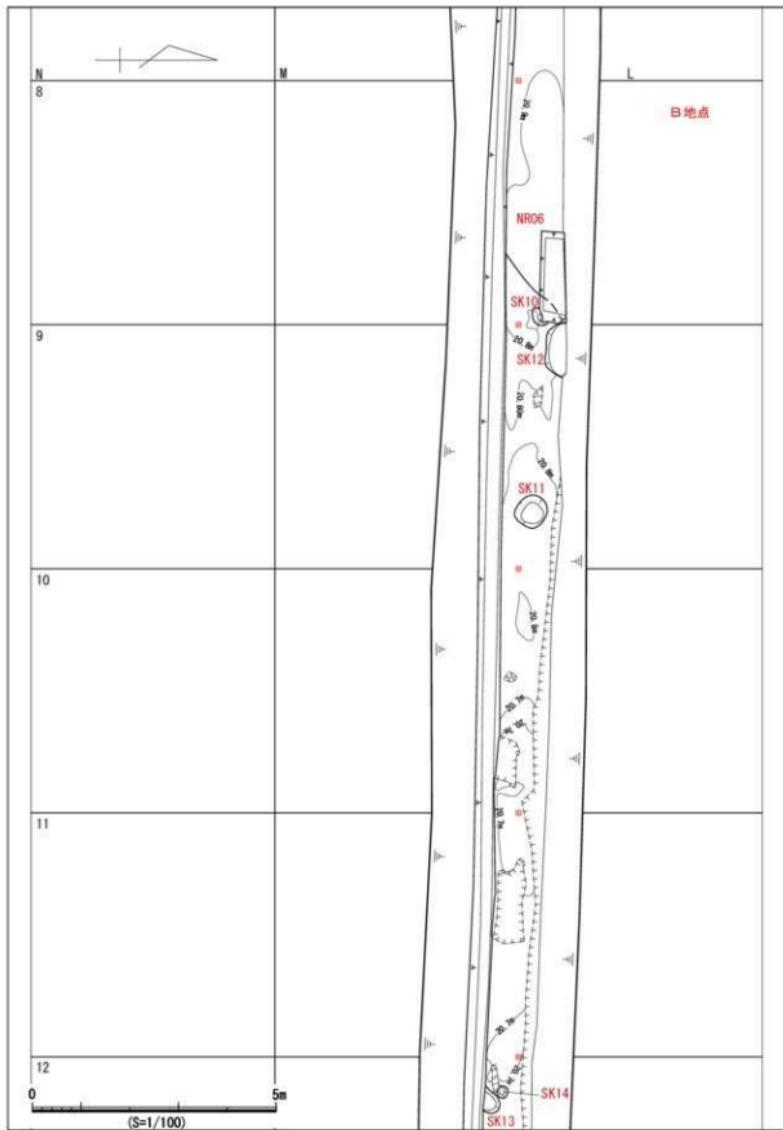


図58 発掘区全域図 分割図(11)

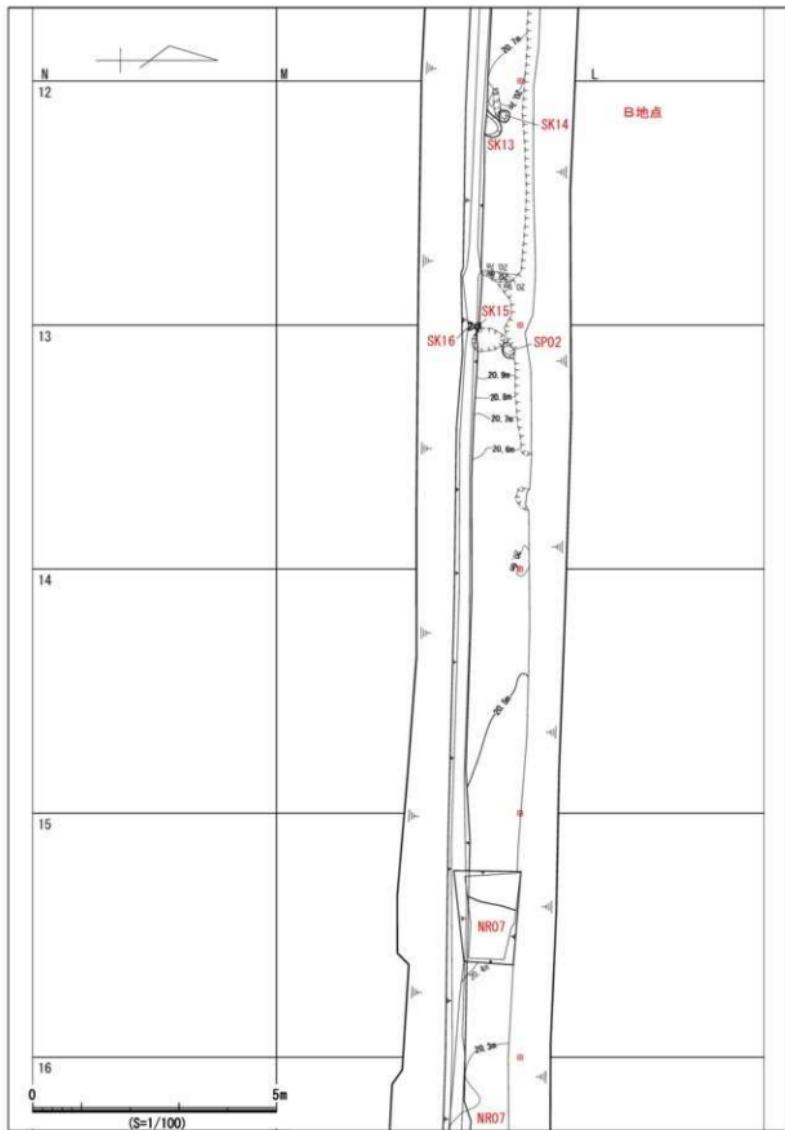


図59 発掘区全域図 分割図 (12)

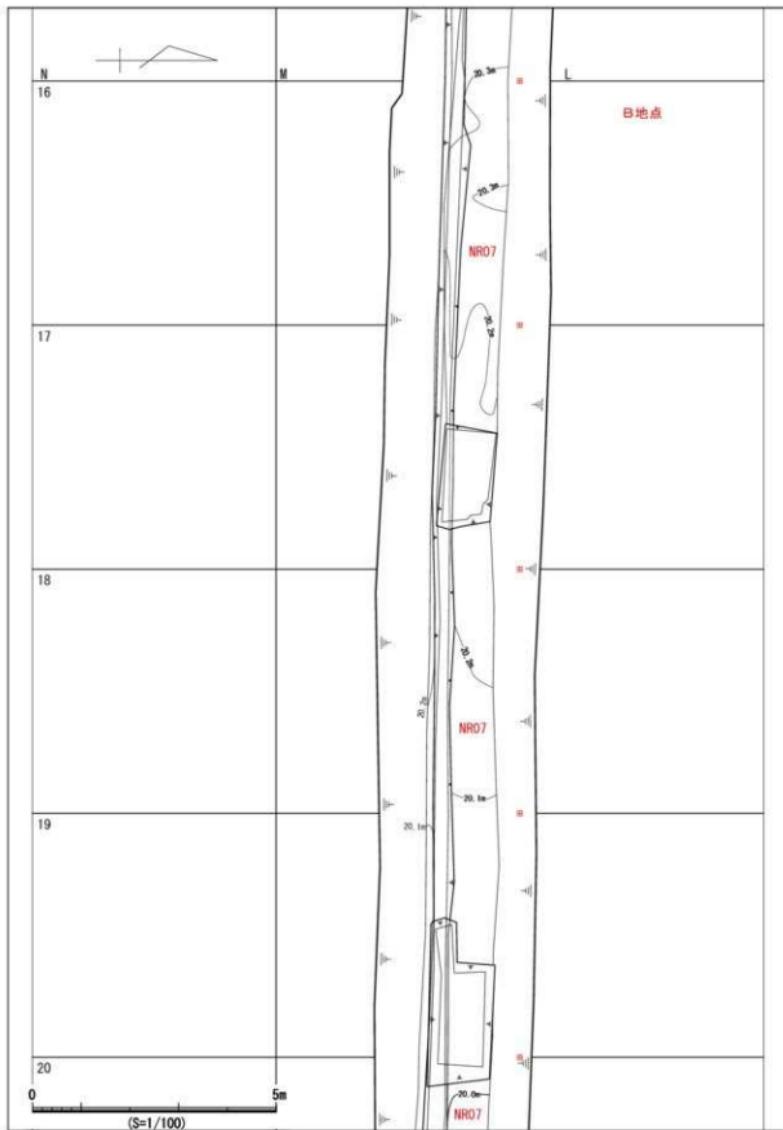


図60 発掘区全域図 分割図(13)

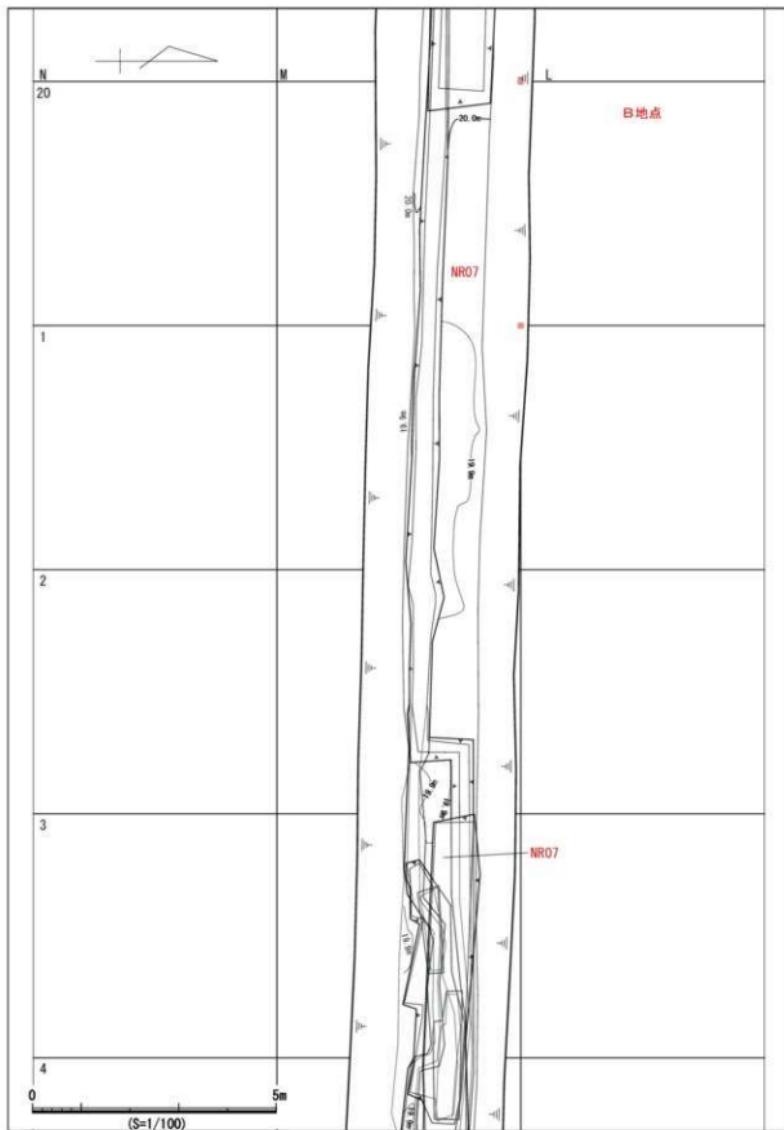


図 61 発掘区全城図 分割図 (14)

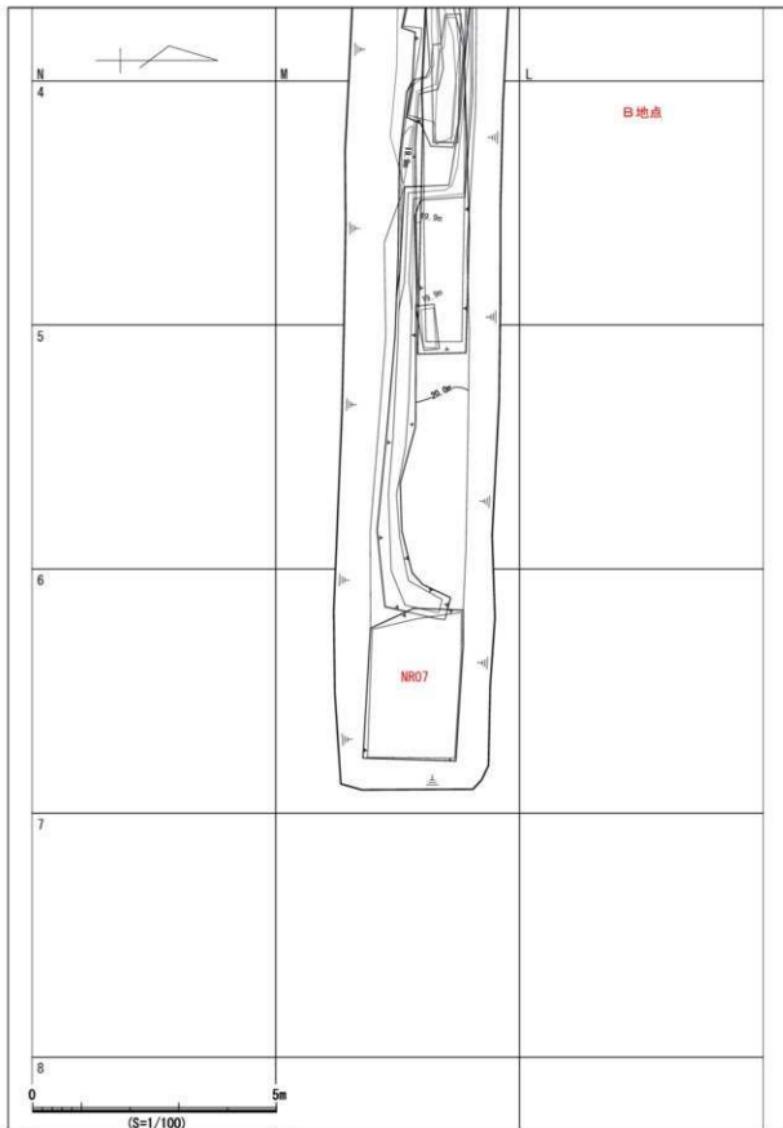


図62 発掘区全域図 分割図(15)

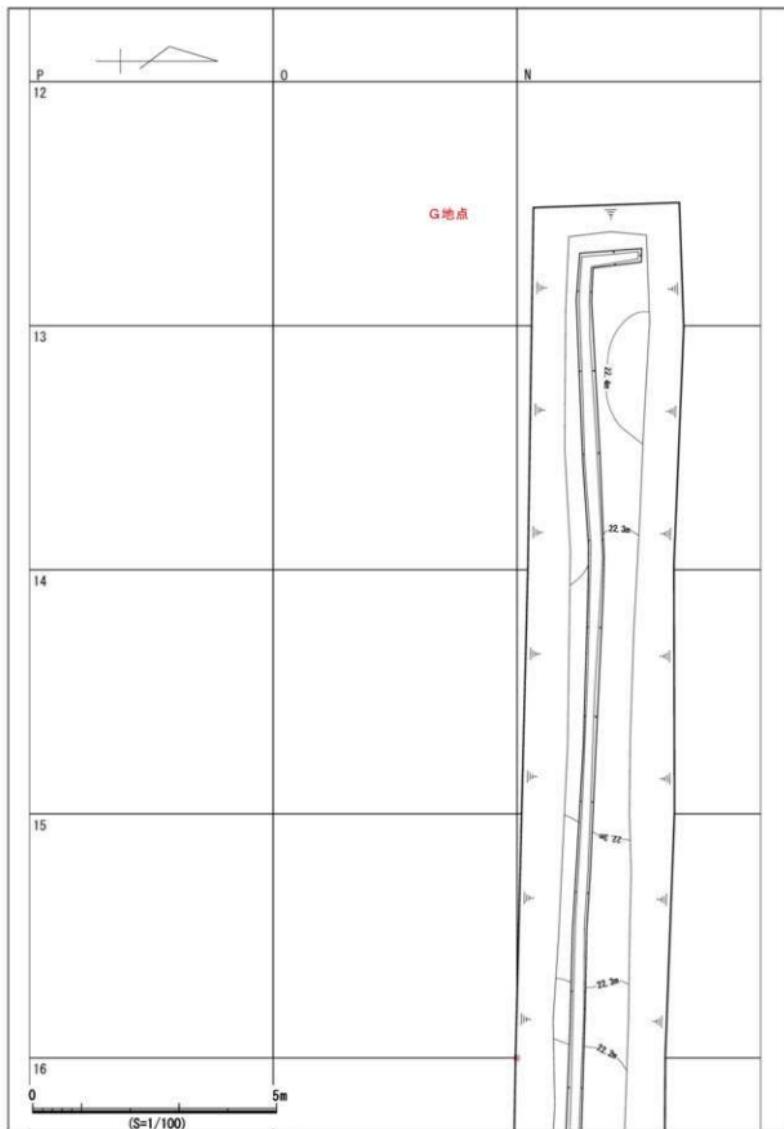


図 63 発掘区全域図 分割図 (16)



図 64 発掘区全域図 分割図 (17)

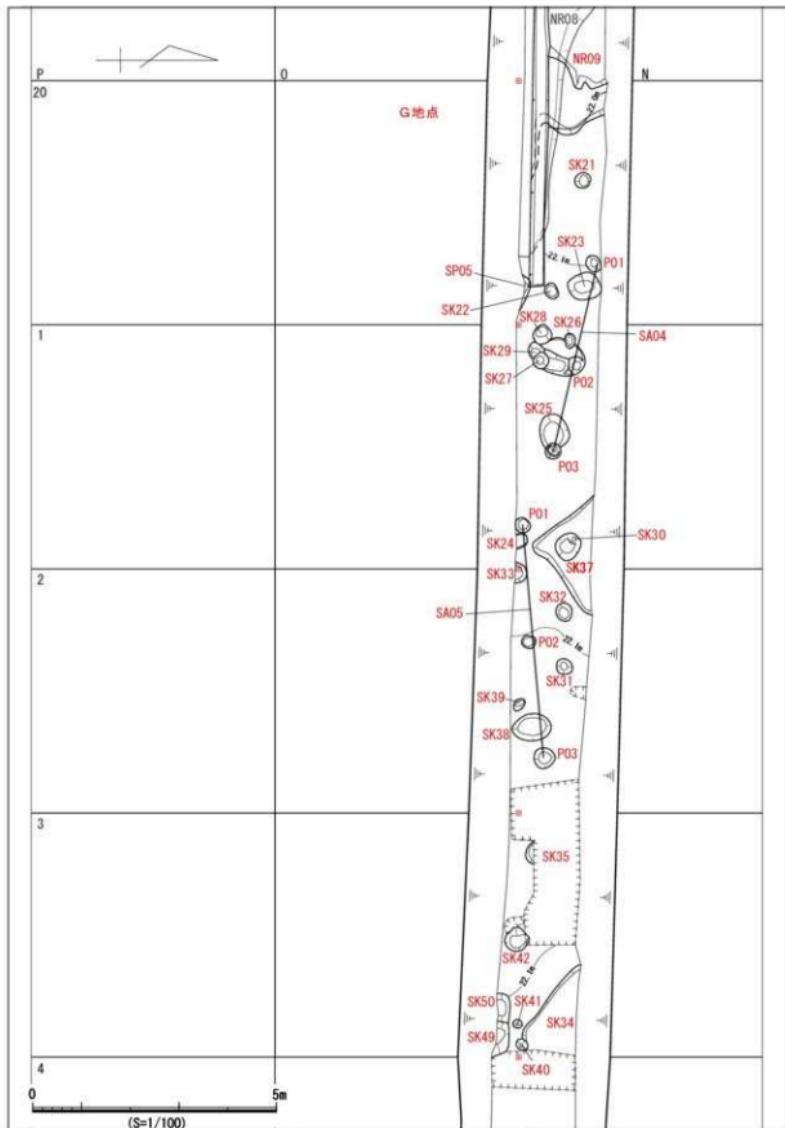


図 65 発掘区全城図 分割図 (18)

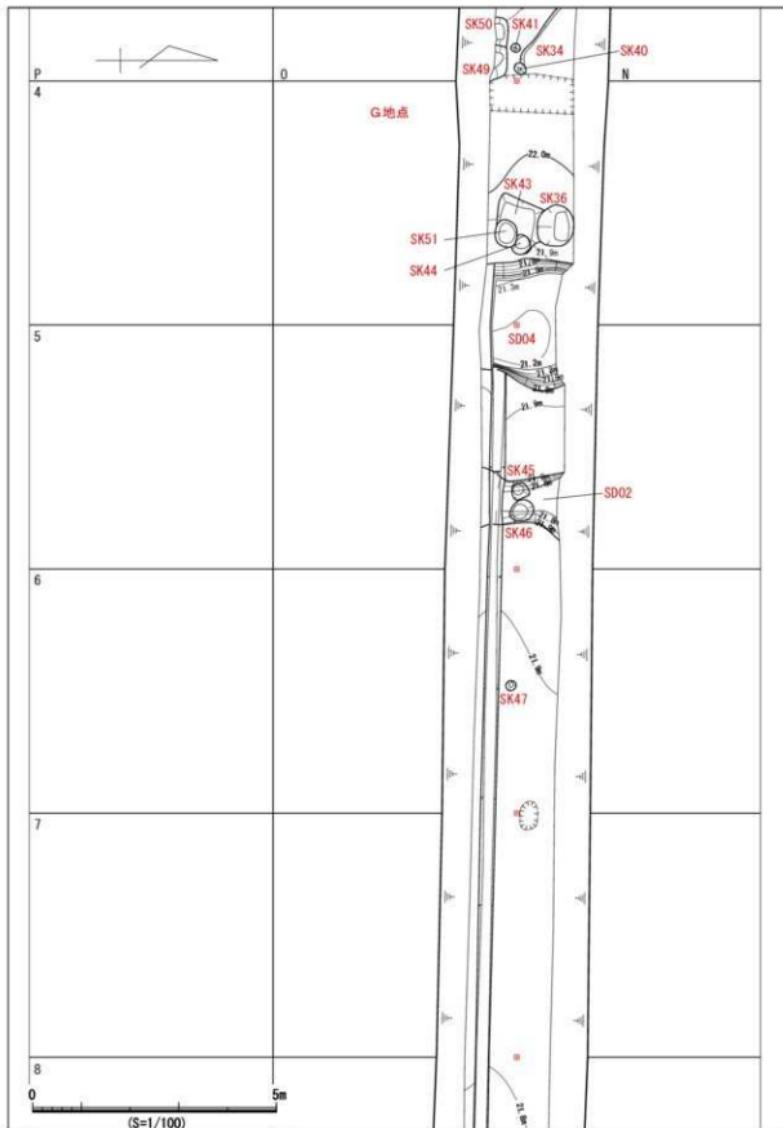


図66 発掘区全域図 分割図(19)

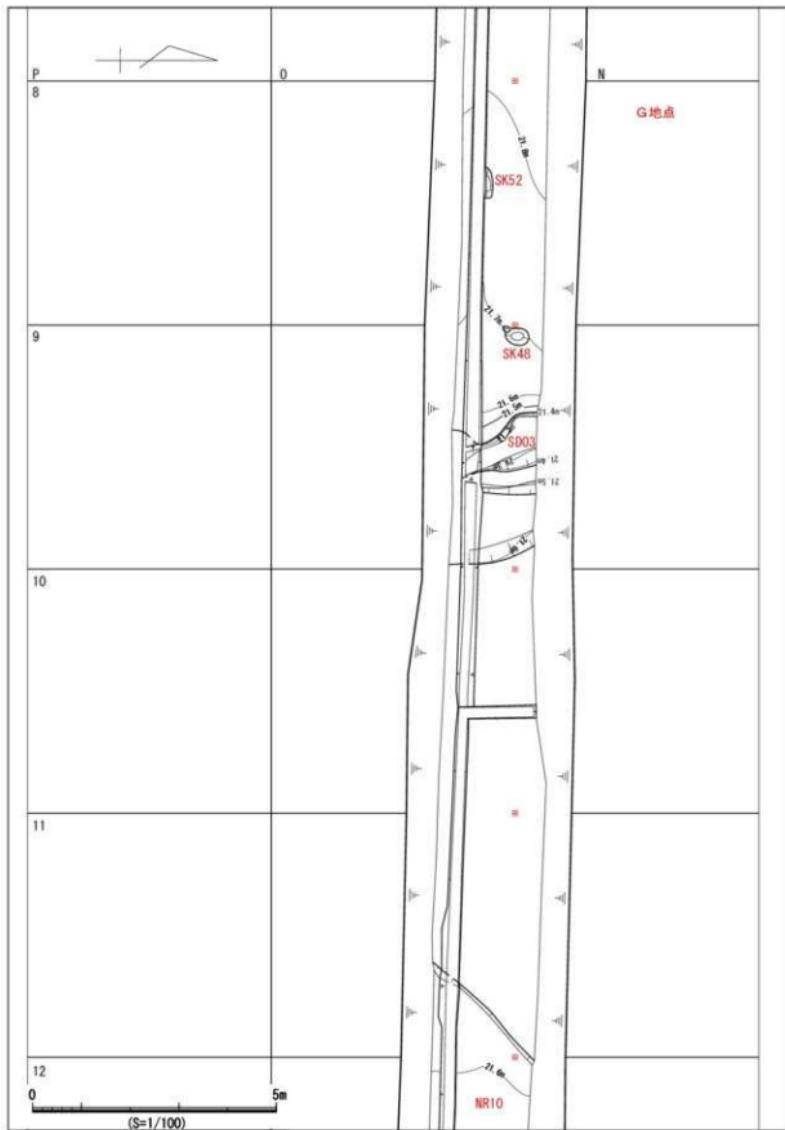


図67 発掘区全域図 分割図 (20)

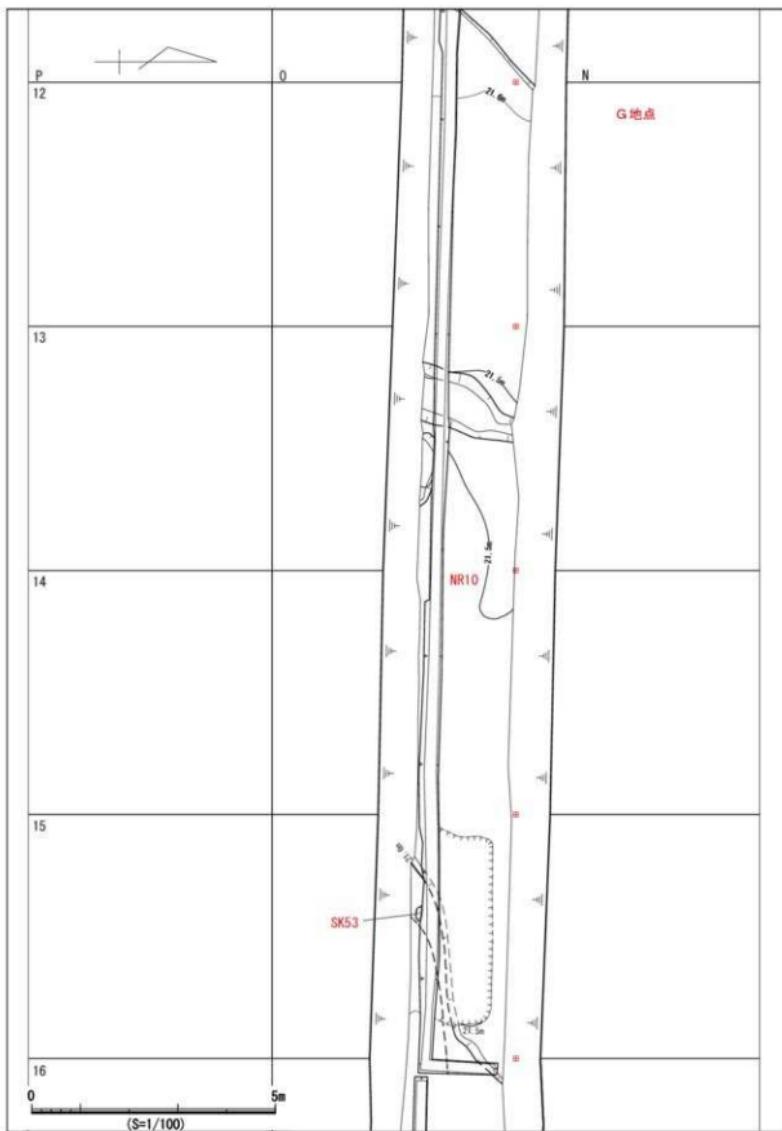


図 68 発掘区全域図 分割図 (21)

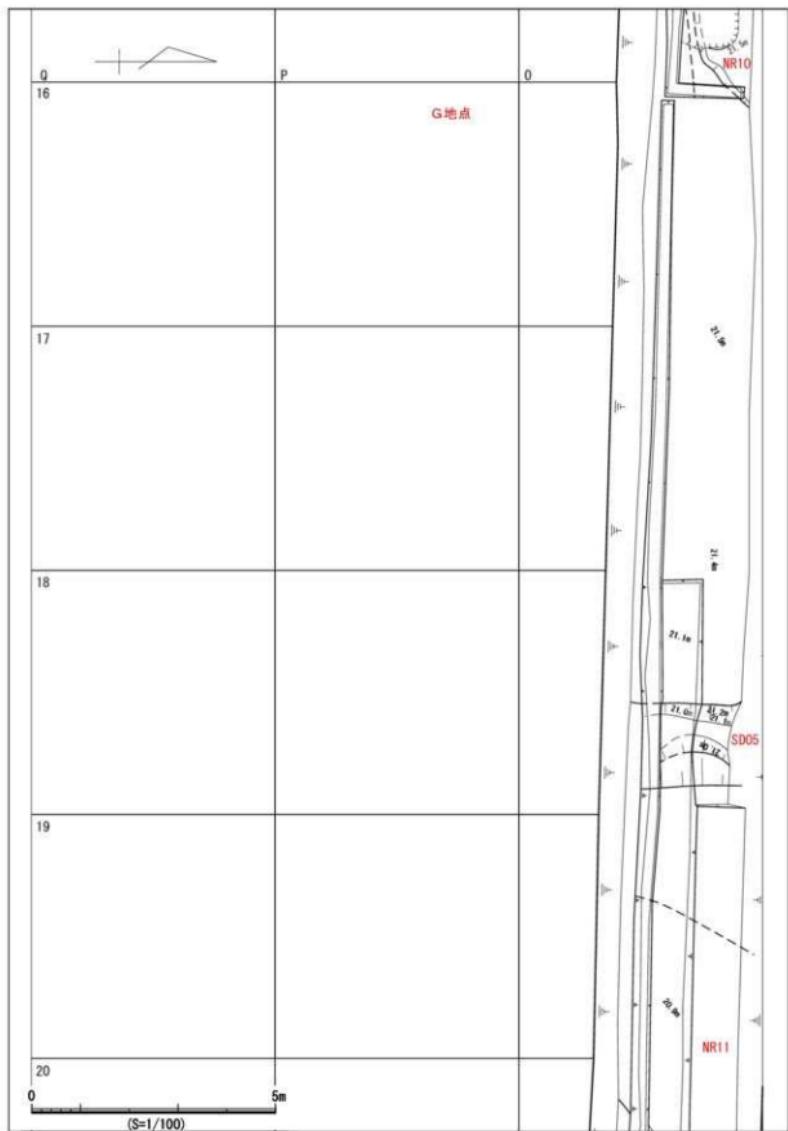


図 69 発掘区全域図 分割図 (22)

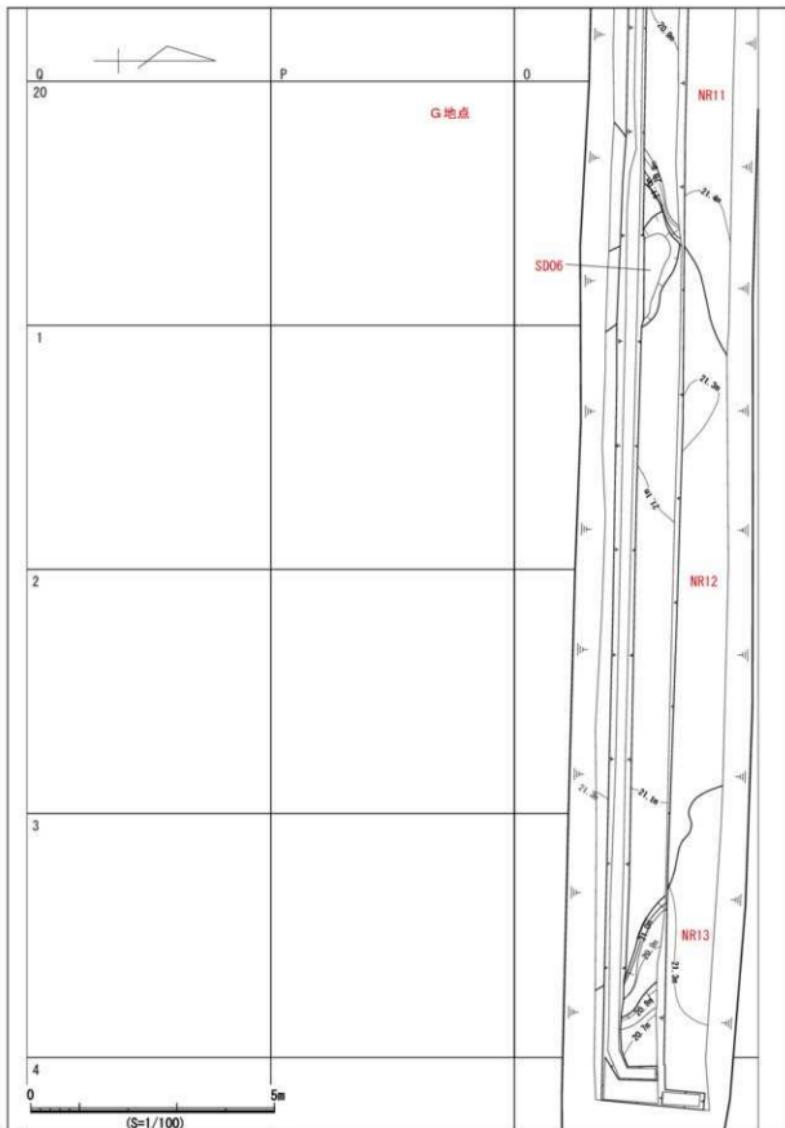


図70 発掘区全域図 分割図(23)

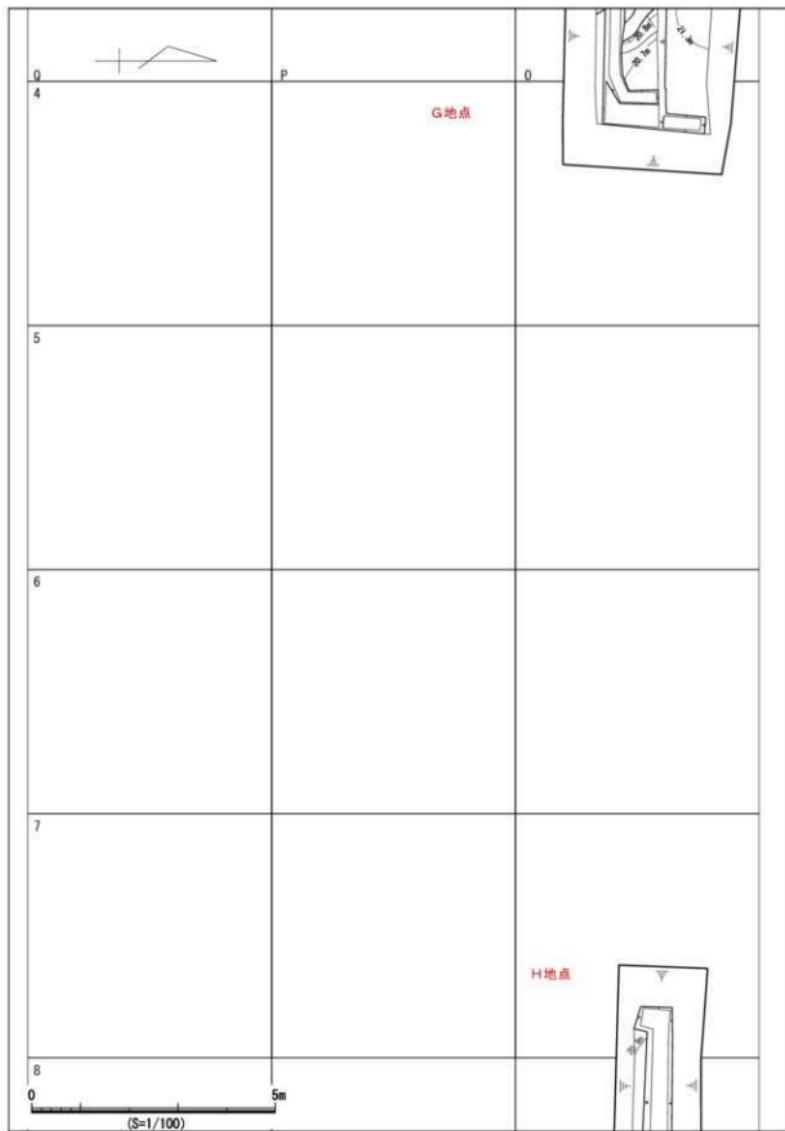


図71 発掘区全域図 分割図(24)

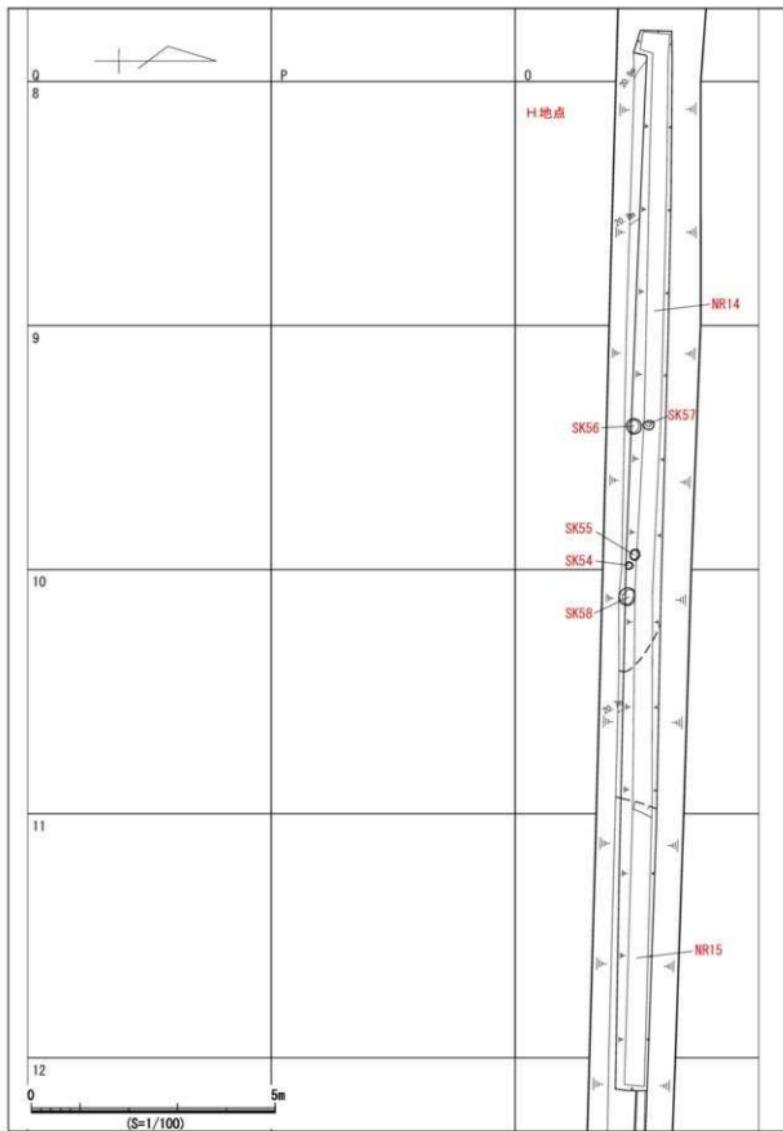


図 72 発掘区全域図 分割図 (25)

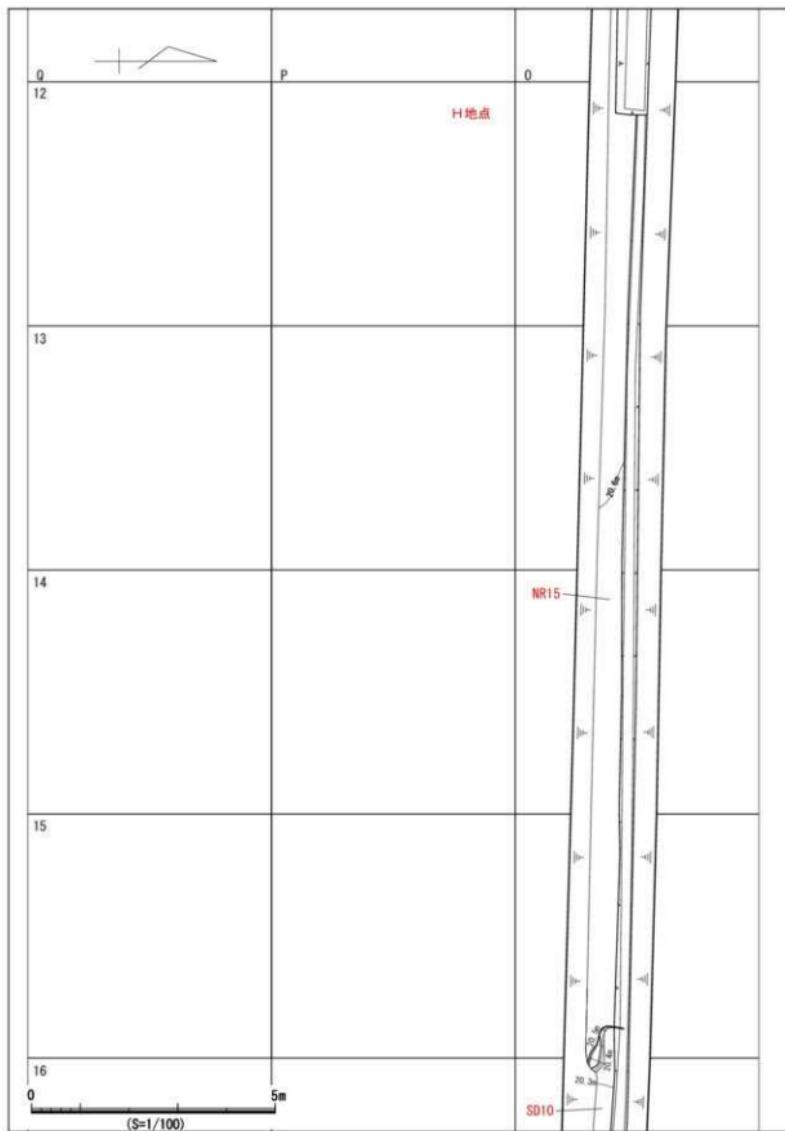


図 73 発掘区全域図 分割図 (26)

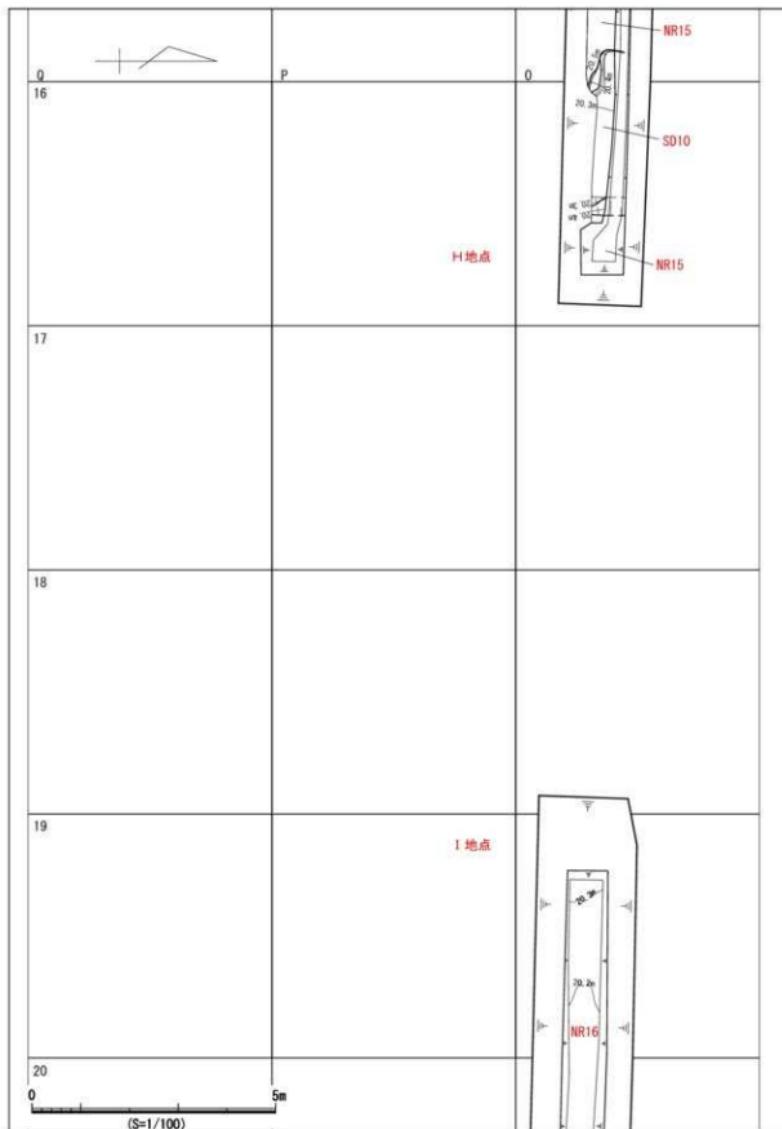


図74 免掘区全域図 分割図(27)

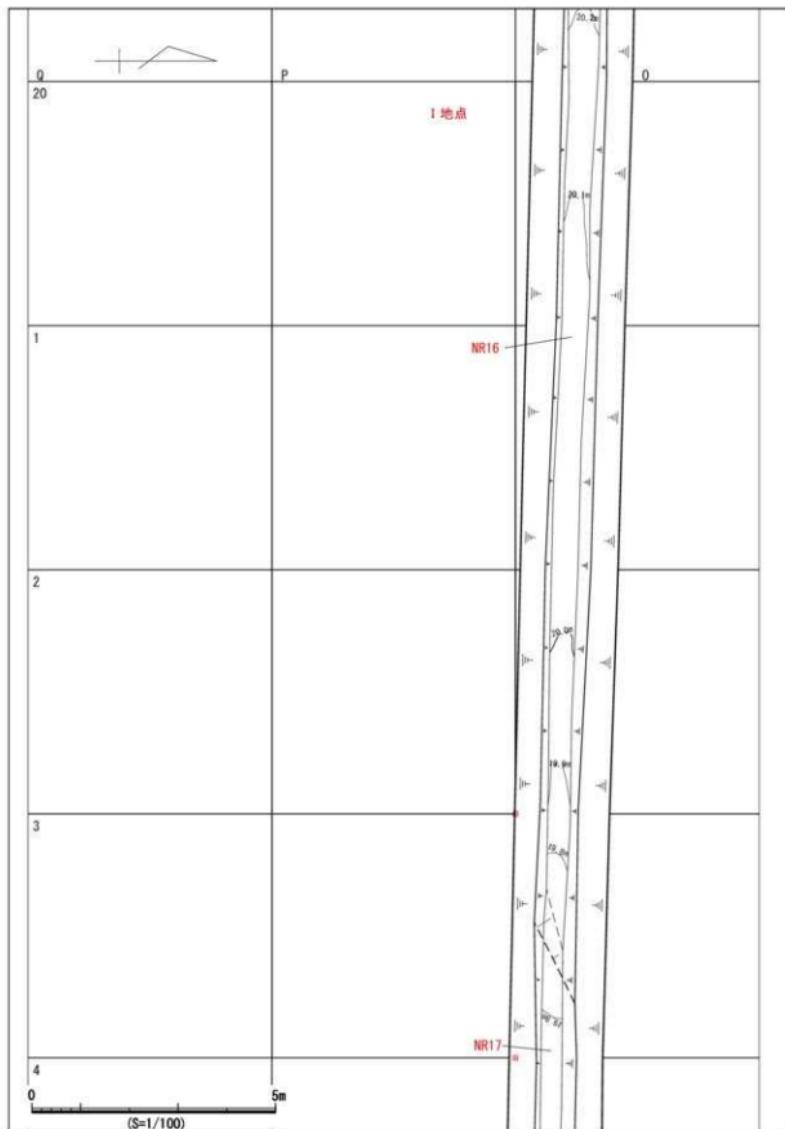


図 75 発掘区全域図 分割図 (28)

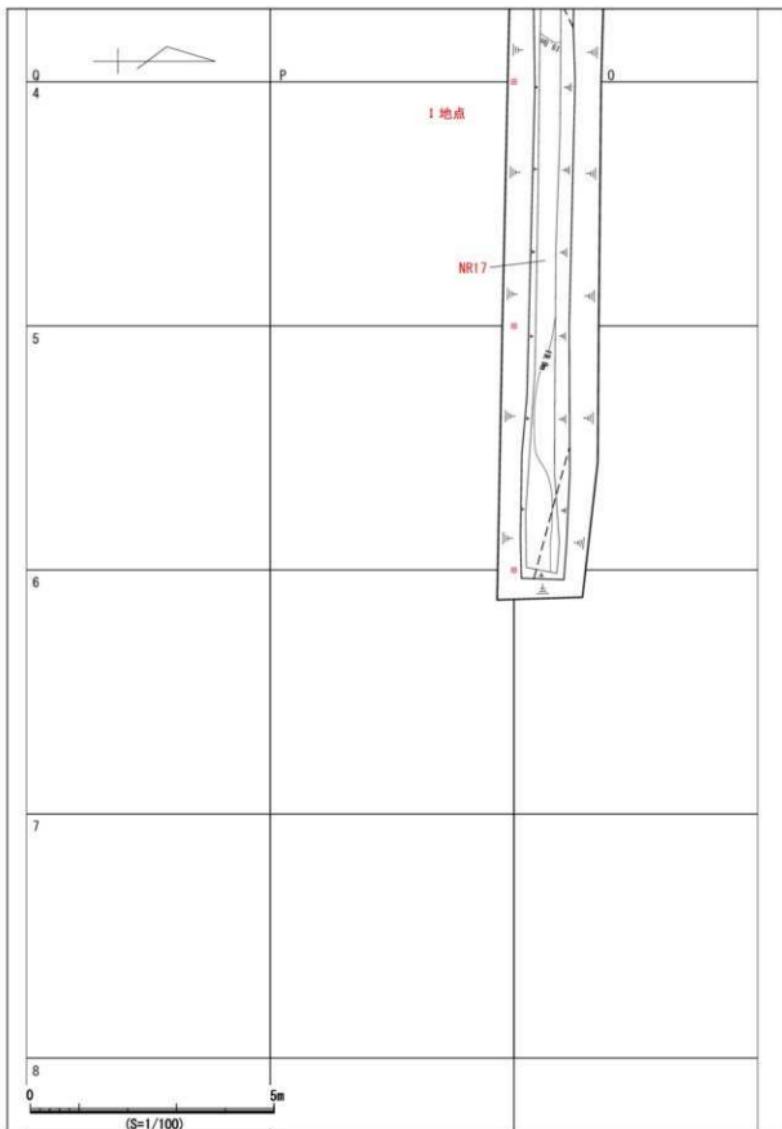


図 76 発掘区全域図 分割図 (29)

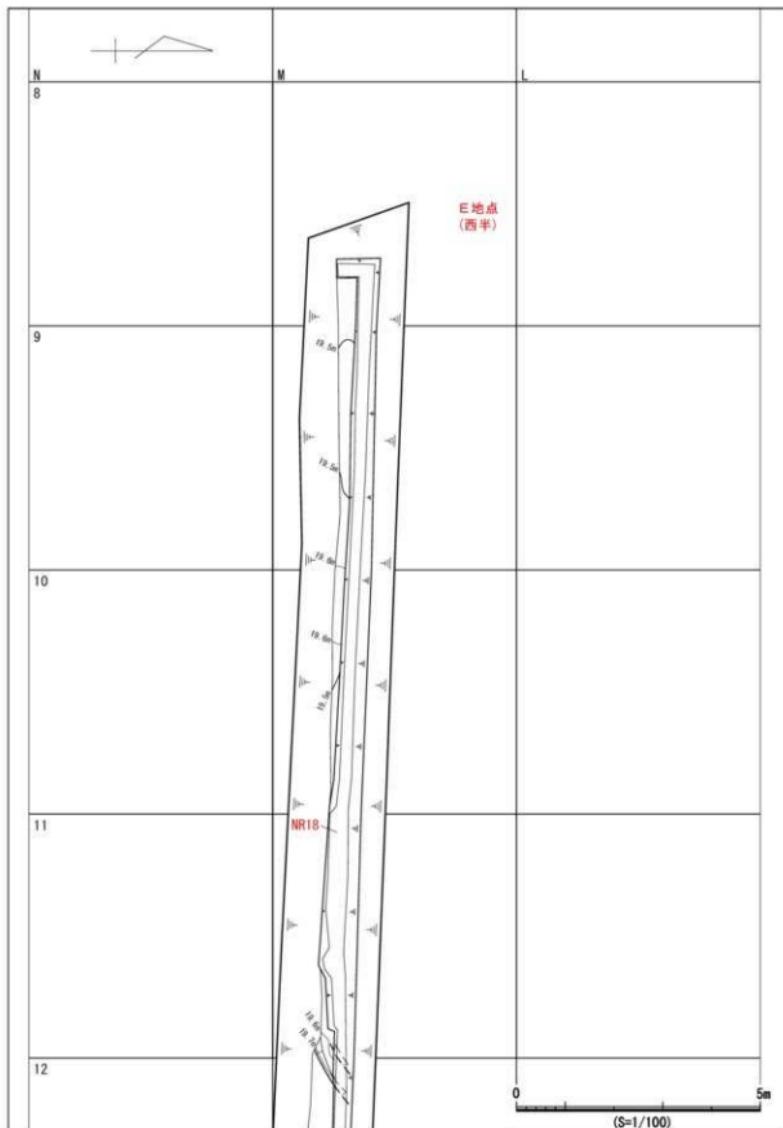


図 77 発掘区全域図 分割図 (30)

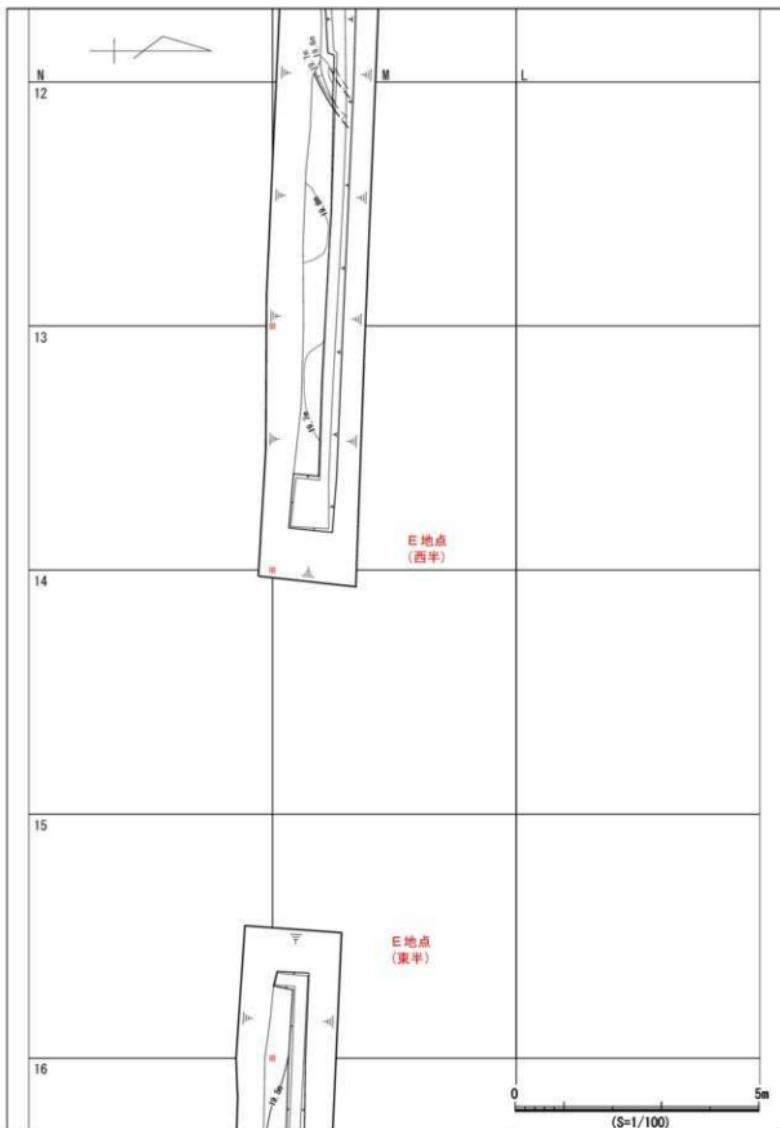


図 78 発掘区全域図 分割図 (31)

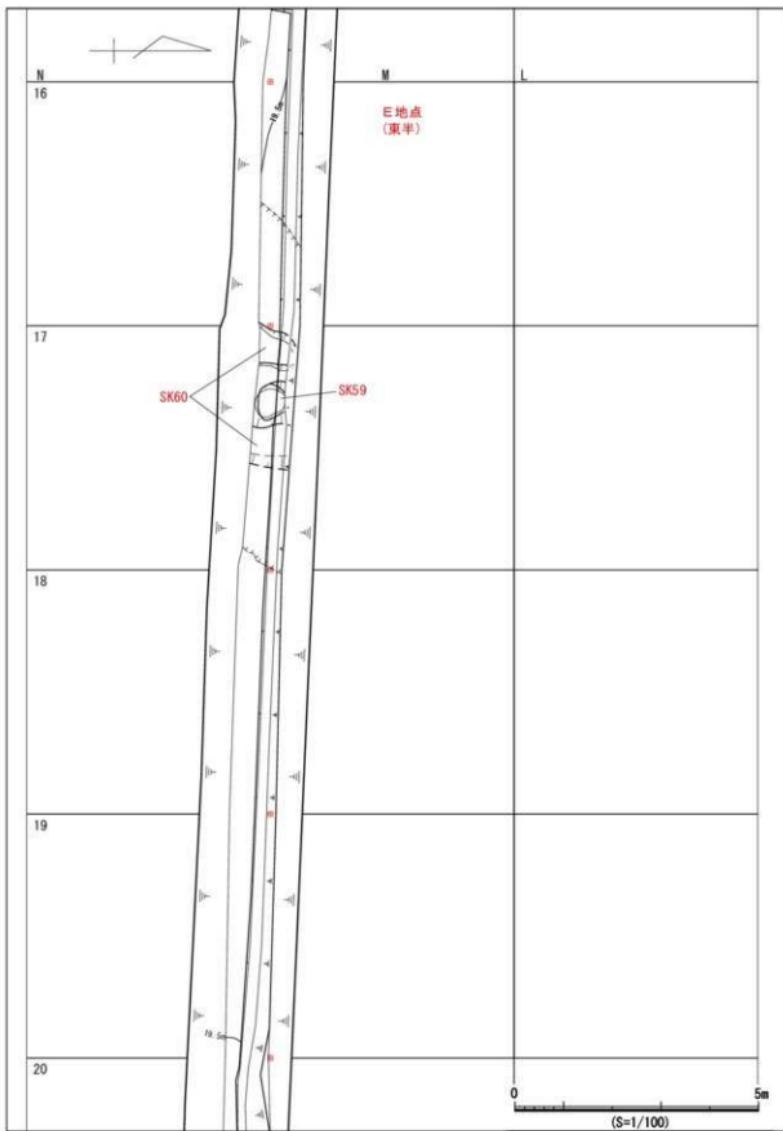


図 79 発掘区全域図 分割図 (32)

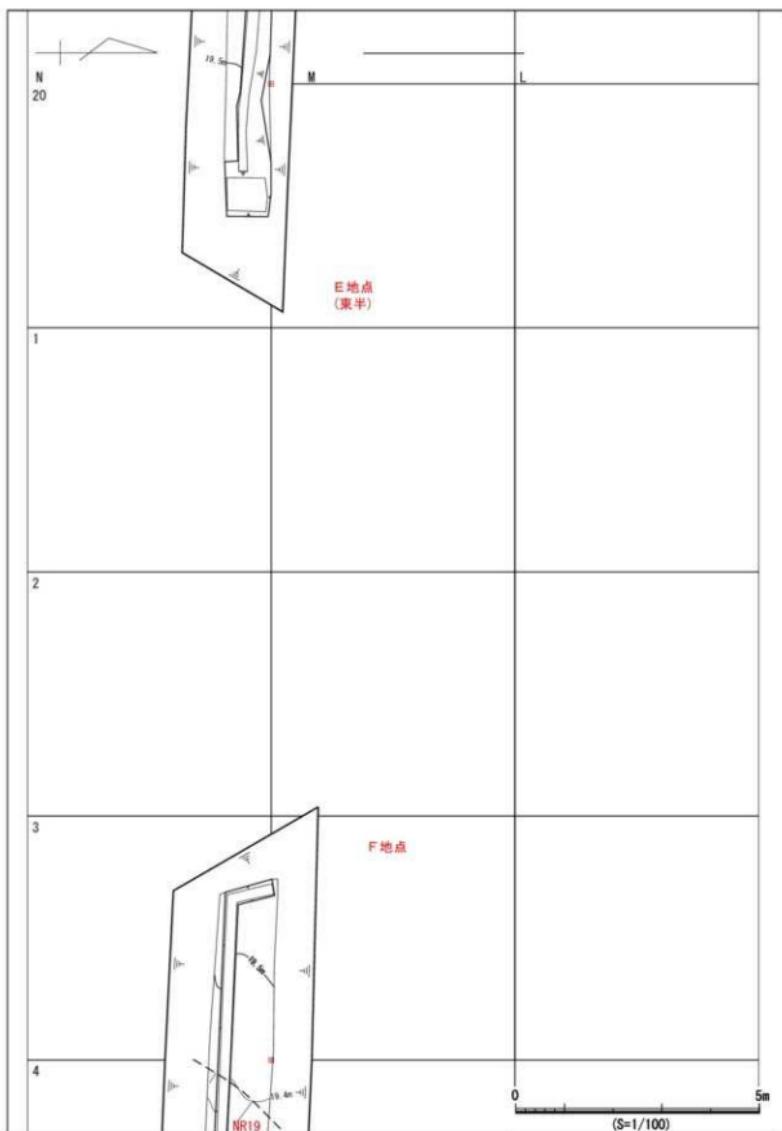


図 80 免掘区全域図 分割図 (33)

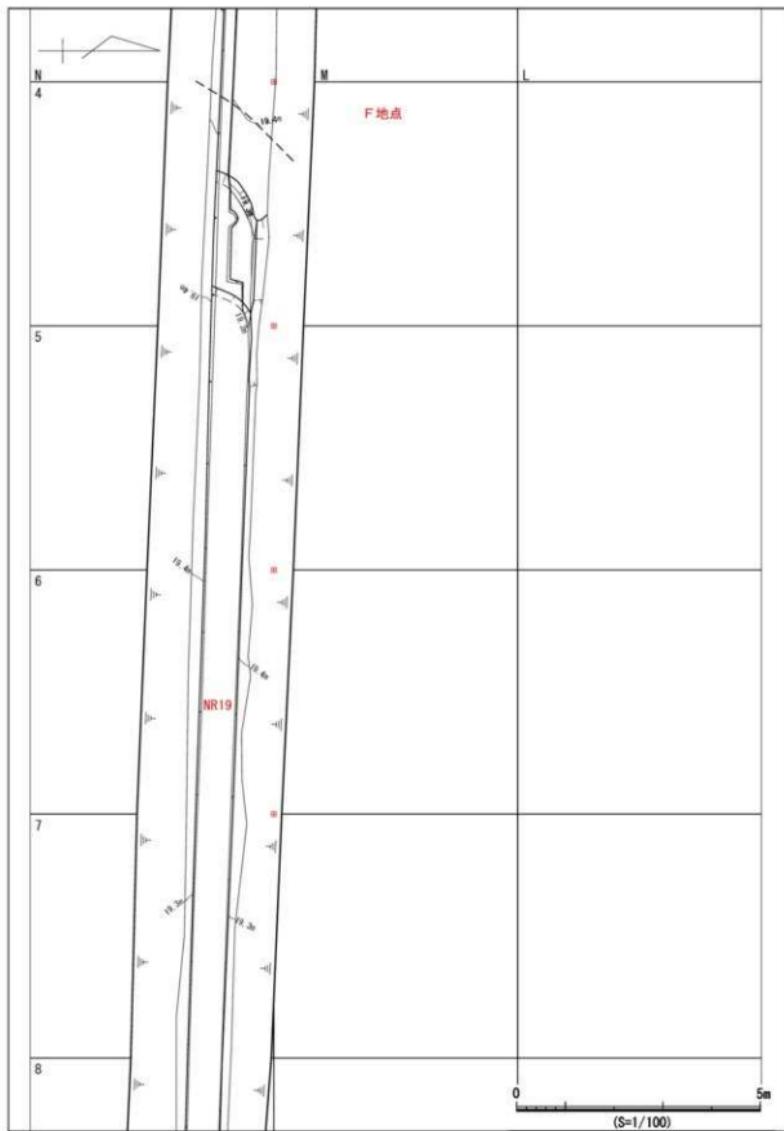


図 81 発掘区全域図 分割図 (34)

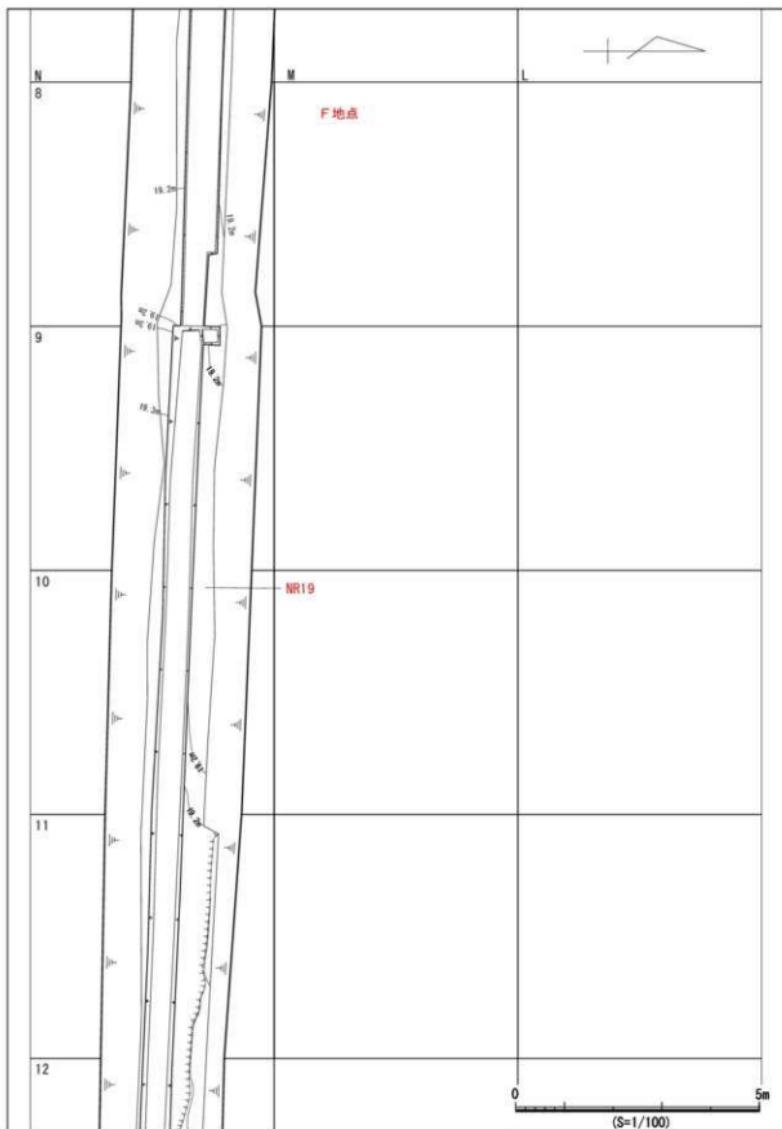


図82 発掘区全域図 分割図(35)

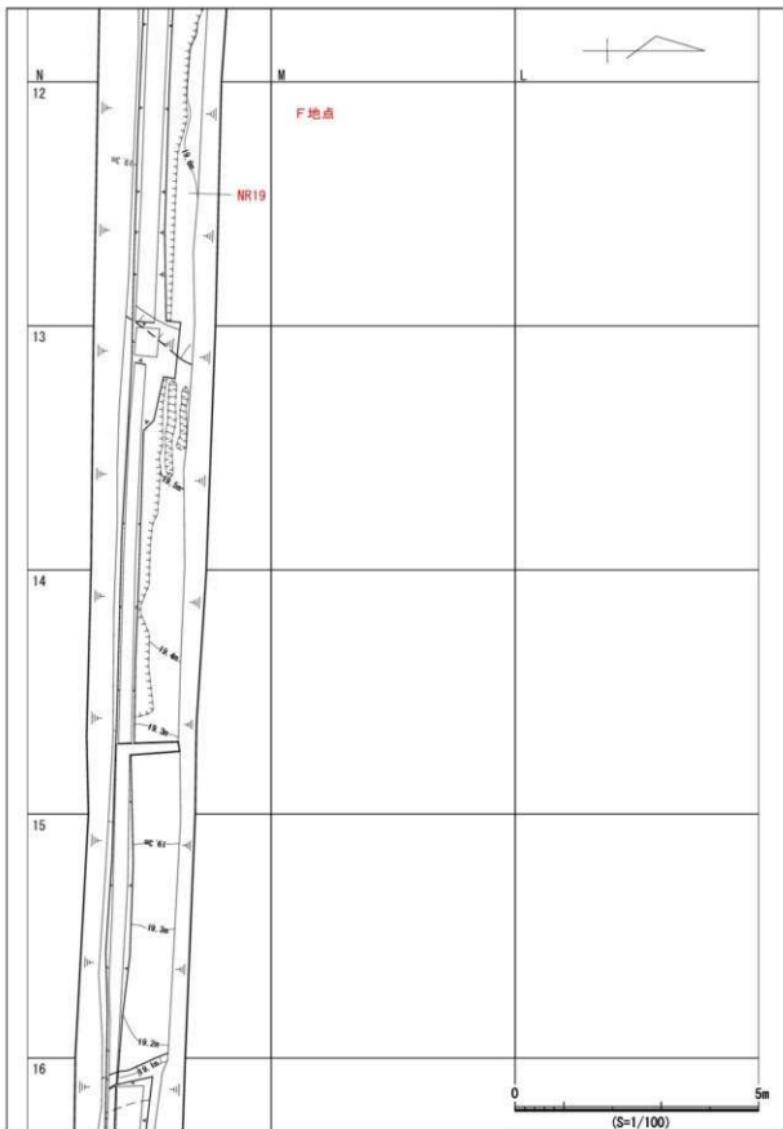


図 83 発掘区全域図 分割図 (36)

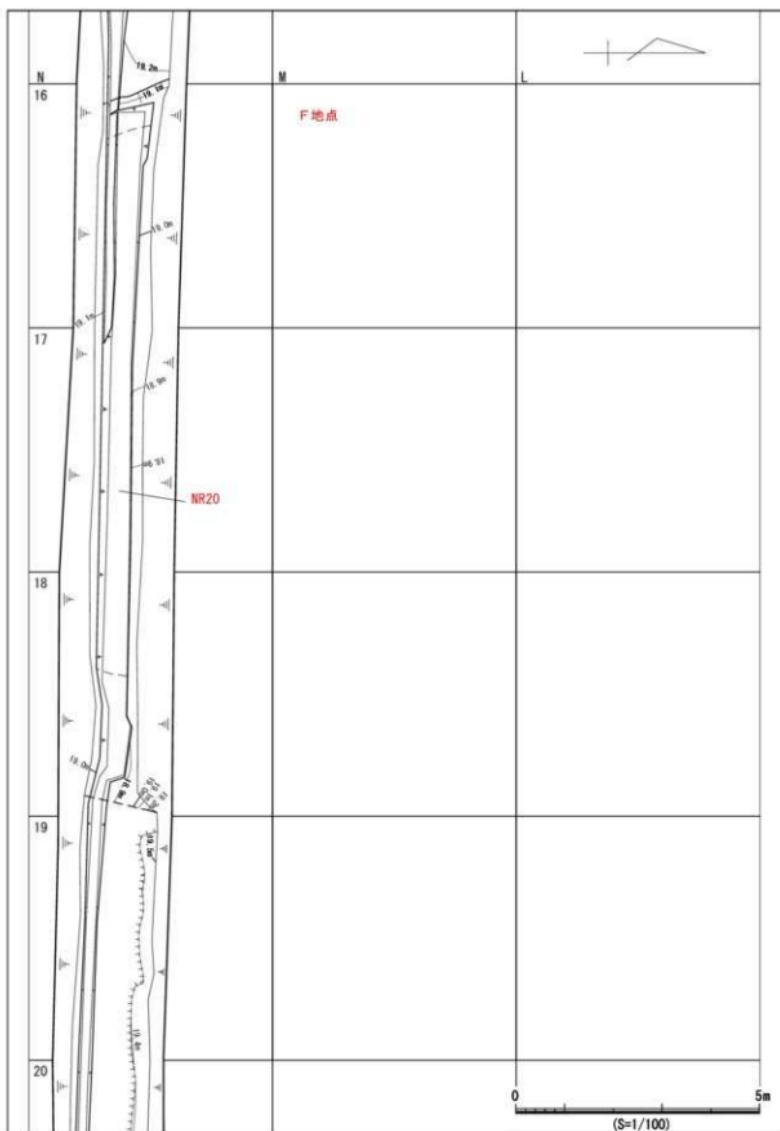


図 84 発掘区全域図 分割図 (37)

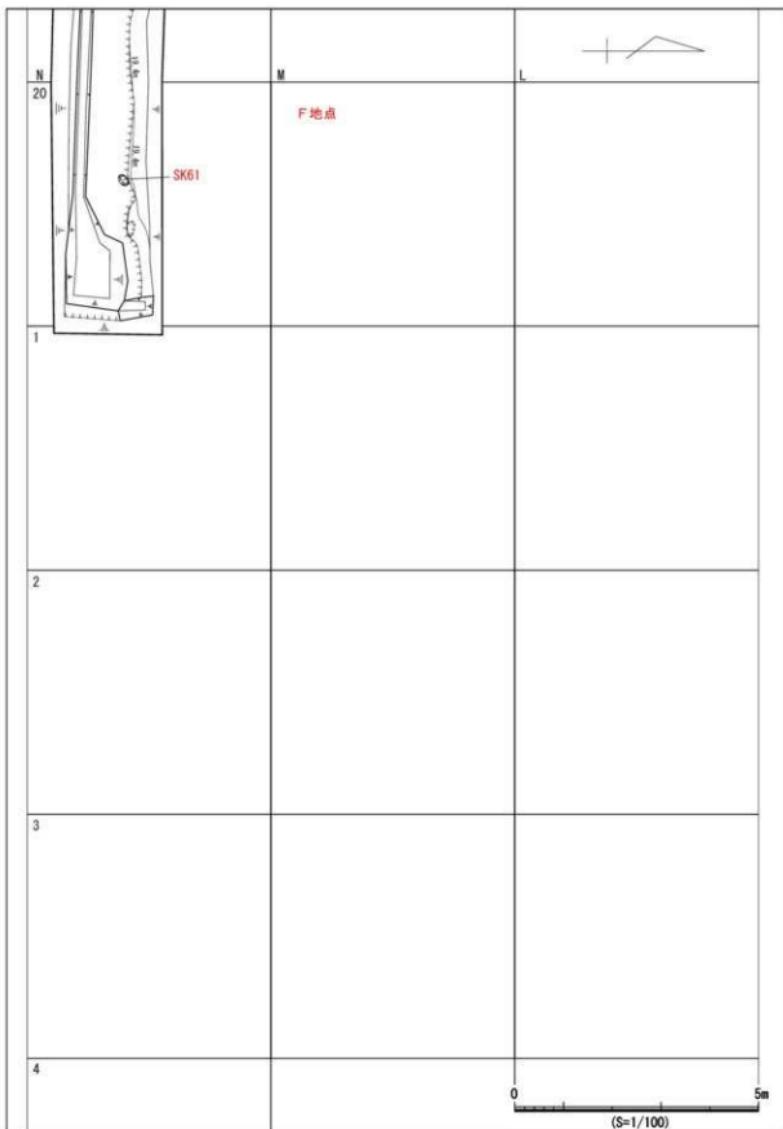


図 85 発掘区全域図 分割図 (38)

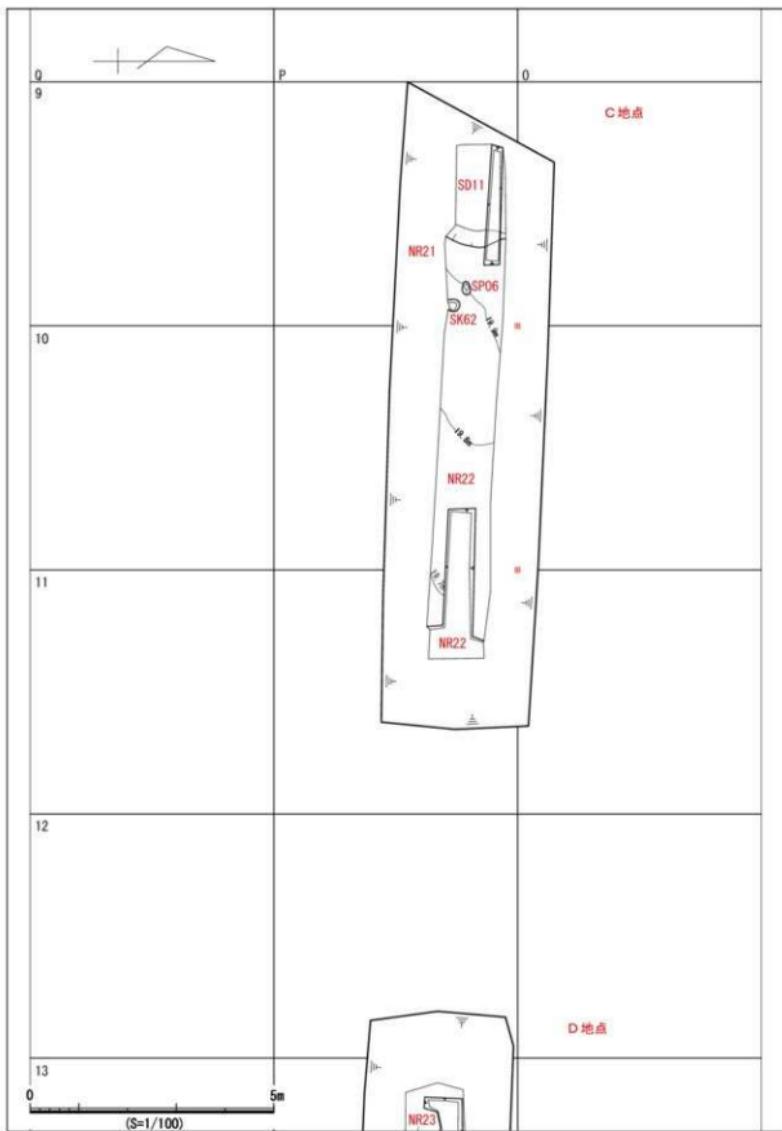


図 86 発掘区全域図 分割図 (39)

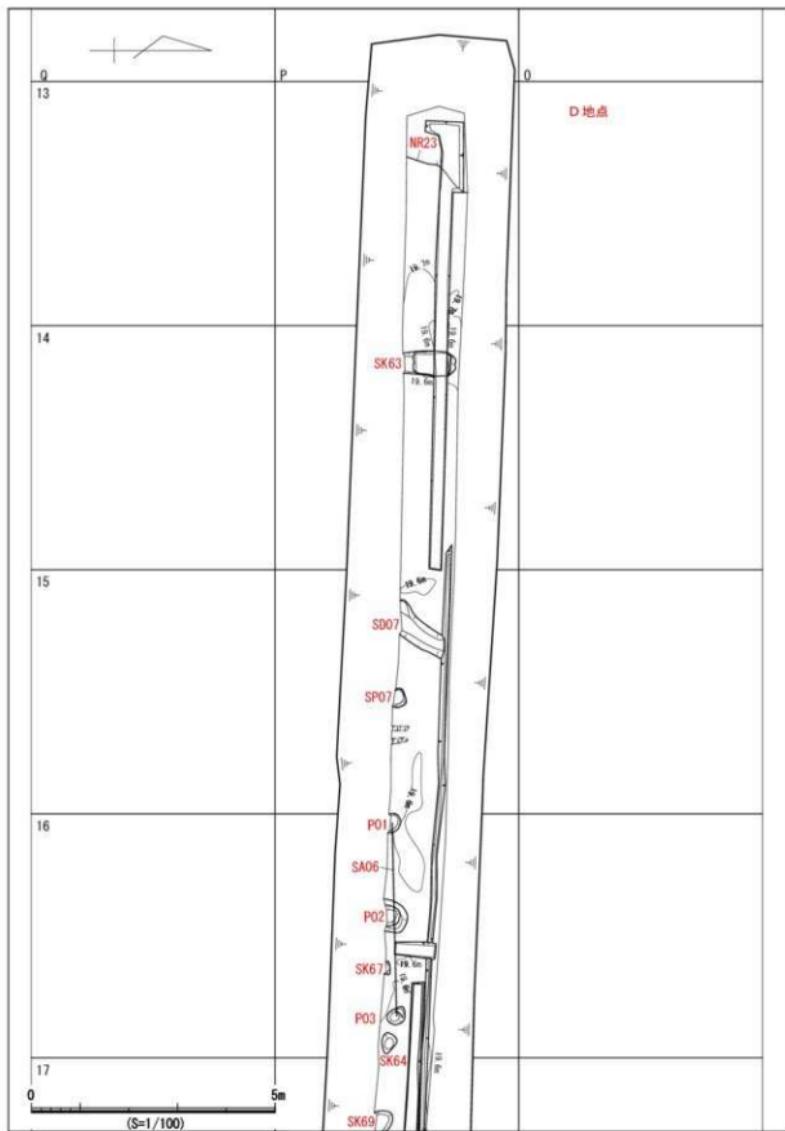


図 87 発掘区全域図 分割図 (40)

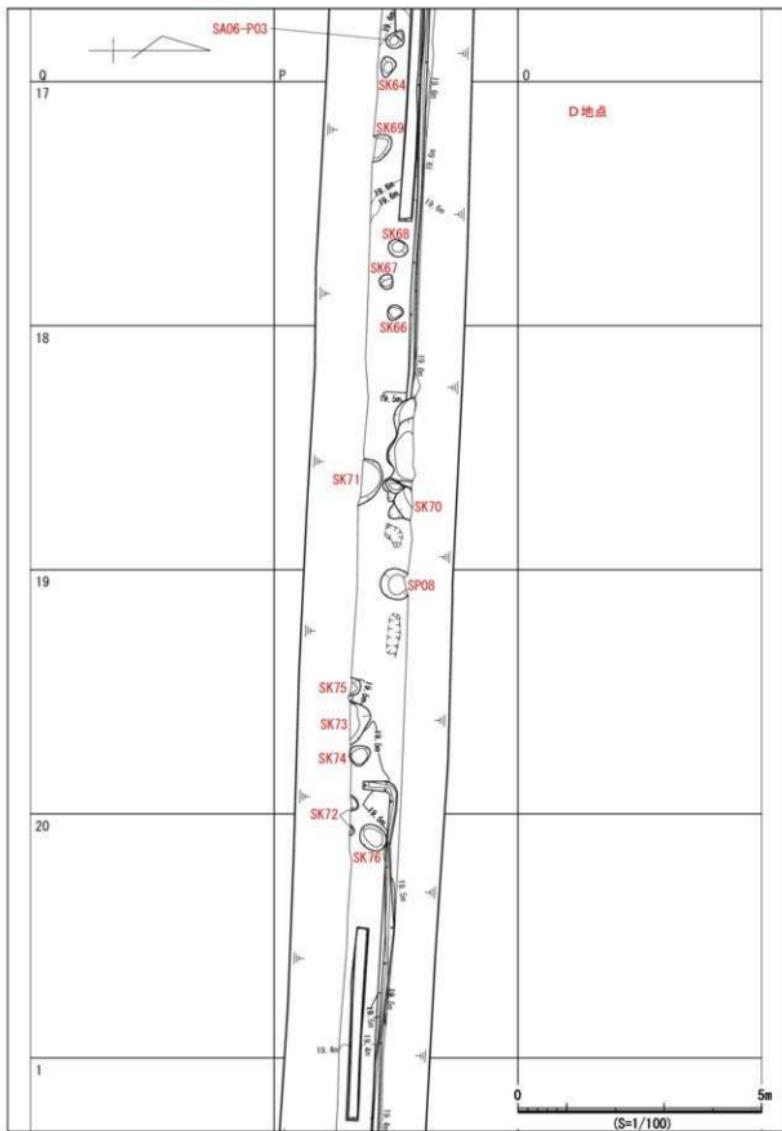


図 88 発掘区全域図 分割図 (41)

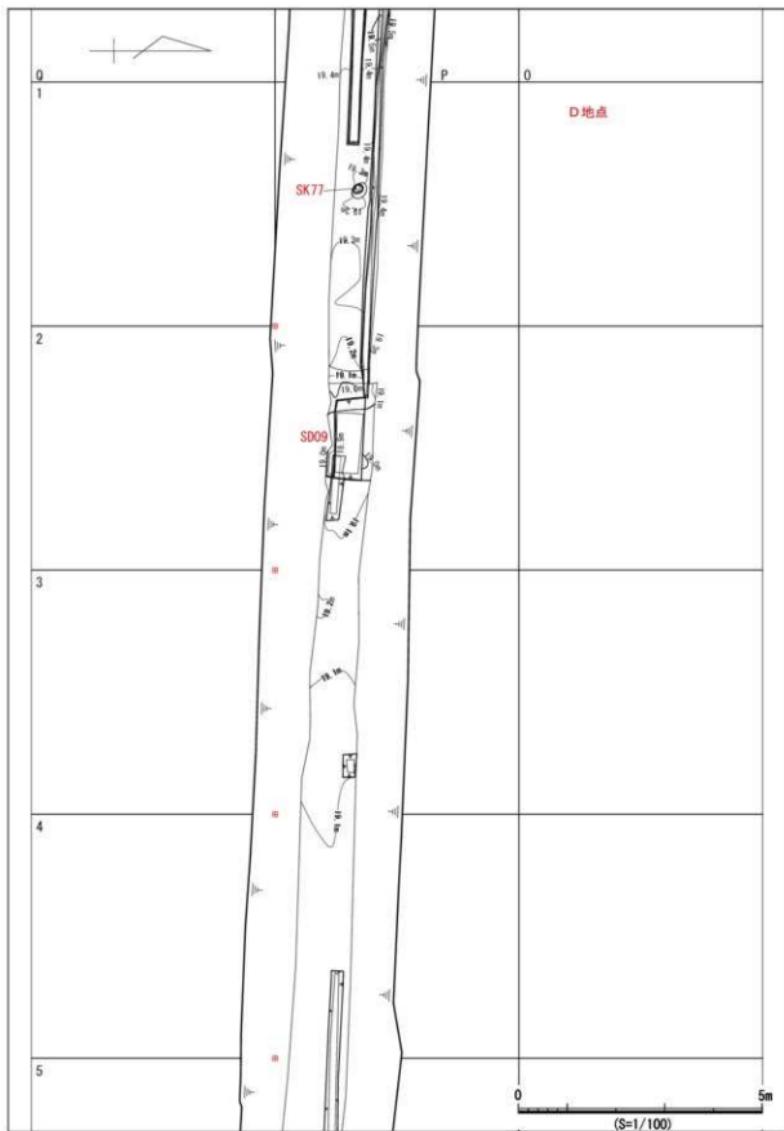


図 89 発掘区全城図 分割図 (42)



図90 発掘区全域図 分割図(43)

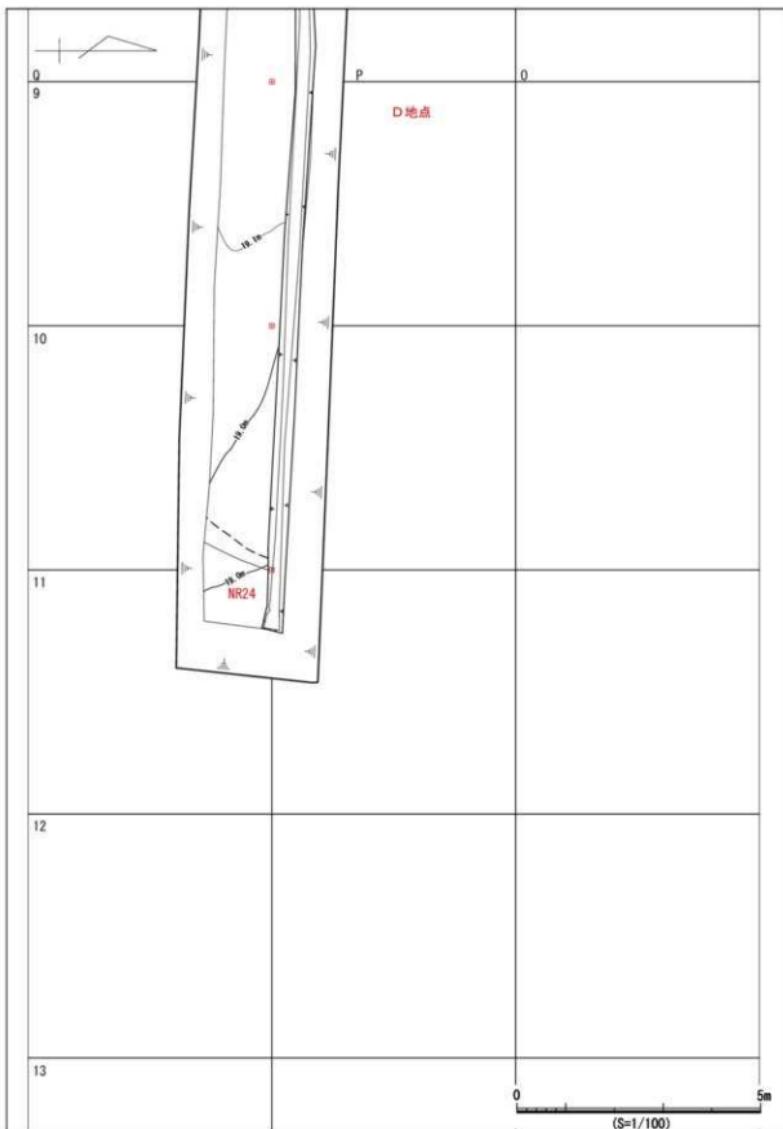


図 91 発掘区全域図 分割図 (44)

第4章 自然科学分析

第1節 分析の概要と成果

1 鉄関連遺物の成分分析

分析の経緯 分析の対象とした試料(図14-9)はSA03-P01から出土した。隣接する堅田遺跡・美濃国分尼寺東遺跡では輪の羽口や椀型鉄滓が出土しており、美濃国分尼寺や美濃国分寺に関連する鍛冶関連施設があったことが想定されている¹⁾。そのため、今回の調査で出土した試料も当初は鉄滓の可能性が高いと考えた結果、美濃国分寺の周辺施設の性格を考える上で重要と判断し、分析を実施することとした。

結果の概要と所見 成分分析の結果、対象試料は鉄滓で析出する鉱物組織は観察されず、鉄滓ではなく、鉄の成分が多く含まれることなどから鉄関連遺物であることが判明した。そのため、器種不明であるが、結果的に今回の調査で出土した唯一の金属製品となった。なお、伽藍南発掘区の調査では、銅錢・器種不明の銅製品などは出土しているが鉄関連遺物についての報告はなく²⁾、類例は確認できなかった。隣接する堅田遺跡では、角釘・鉄鎌・刀子などが、計20点出土している³⁾。

2 木製品樹種同定分析

分析の経緯 分析の対象とした試料は、NR06から出土した木製品3点(図34-76~78)である。NR06からは、土師器・須恵器・灰釉陶器・瓦を中心として多くの遺物が出土した。当遺跡は美濃国分寺に隣接することから、出土した木製品は木製祭祀具の可能性が高く、美濃国分寺に関連した遺物であると考えられるため、遺跡の性格を考える上で重要であると考え、分析を実施することとした。

結果の概要と所見 分析の結果、76はコウヤマキ、77はヒノキ科ヒノキ属、78はヒノキ科アスナロ属であった。伽藍南発掘区の調査のうち、平成13年度の調査で自然流路から出土した斎串3点もヒノキであった⁴⁾。また、当センターの調査では、興福地遺跡・北方京水遺跡・柿田遺跡で出土した平安～鎌倉時代の斎串もヒノキに同定されており、これについて興福地遺跡の報告書では木製祭祀具の材としてヒノキが広域的に利用されていた可能性があることが指摘されている⁵⁾。なお、当時の植生から、これらの木材は遺跡周辺でも比較的容易に入手できたと推定される。

3 漆状付着物成分分析

分析の経緯 分析の対象とした試料は、NR16から出土した須恵器の碗、NR19から出土した須恵器・山茶碗の碗に付着した漆状付着物である。今回対象とした遺物の漆状付着物の成分分析を行うことで、県内で同種のものが出土している遺跡と比較することにより、遺跡の性格を明らかにすることができると考え、分析を実施することとした。

結果の概要と所見 須恵器・山茶碗の付着物については材質の特定はできなかったが、灰釉陶器の付着物は漆であることが判明した。当センターの調査では、寺平遺跡・寺屋敷遺跡・上原遺跡第2地点で、漆が付着した灰釉陶器が出土している他⁶⁾、与島C地点遺跡でも、漆が付着した平安時代頃の須恵器が出土した⁷⁾。これらの報告書では、漆付着物のある土器類について、当時の宗教施設と関連付けられており、美濃国分寺と関係の深い当遺跡から出土したことについて整合的と考える。

注

- 1) 岐阜県文化財保護センター2020『堅田遺跡・美濃国分尼寺東遺跡』(岐阜県文化財保護センター調査報告書第146集)
- 2) 大垣市教育委員会2005『美濃国分寺跡・国分寺遺跡(伽藍南面隣接地の調査)ー』(大垣市埋蔵文化財発掘調査報告書第15集)
- 3) 岐阜県文化財保護センター2020前載
- 4) 大垣市教育委員会2005前載
- 5) 財団法人岐阜県教育文化財団2005『柿田遺跡』(岐阜県文化財保護センター調査報告書第92集)
岐阜県文化財保護センター2015『興福寺遺跡』(岐阜県文化財保護センター調査報告書第132集)
岐阜県文化財保護センター2015『北方京水道跡』(岐阜県文化財保護センター調査報告書第133集)
- 6) 財団法人岐阜県教育文化財団2003『寺平遺跡』(岐阜県文化財保護センター調査報告書第83集)
- 7) 岐阜県文化財保護センター2013『与島B地点遺跡・与島C地点遺跡』(岐阜県文化財保護センター調査報告書第125集)

第2節 鉄関連遺物の成分分析

1はじめに

当遺跡から出土した鉄関連遺物(図14-9)について、断面観察及びX線分析を行い、材質を検討した。分析は竹原弘展(株式会社パレオ・ラボ)が担当した。

2試料と方法

分析対象は、SA03-P01から出土した鉄関連遺物1点である(表23)。対象試料に磁着が認められたため、観察・測定面には比較的磁着の強い箇所を選び、断面试料を作製して観察、分析を行った。

表23 鉄関連遺物分析試料一覧

No.	取上番号	掲載番号	出土遺構	層位	破片数	重量	備考
1	86-0	9	SA03-P01	d	1	67.8	磁着あり

まず、試料の一部を岩石カッターで切り取り、超音波洗浄後、断面の蛍光X線分析(エスアイアイ・ナノテクノロジー株式会社製SEA1200VX、照射径1mm;以後XRF分析)を行い、断面の化学組成を調べた。続いて、注型用高透明エポキシ樹脂で包埋した。写真1の遺物写真に断面の部位を示す。包埋試料は、ディスクプランで研磨した後、超精密研磨フィルムの#1000、4000、8000の順で研磨し、観察、分析面とした。走査型電子顕微鏡(日本電子株式会社製JSM-5900LV、以後SEM)による反射電子像の観察及び付属するエネルギー分散型X線分析装置(同JED-2200、以後EDS)による鉱物組織の定性分析を行った。

3分析結果

XRF分析による半定量値を表24に示す。また、SEM反射電子像を写真1に、SEM反射電子像に示したポイント(a)のEDS分析結果を表25に示す。

[No. 1] 鉄製品

No. 1は、SEM反射電子像の観察では、鉄滓で析出するウスタイトやファイヤライトなどの鉱物組織

は観察されず、鉄滓ではなかった（写真1）。XRF分析では、鉄が約95%と多く検出された（表24）。なお、XRF分析の結果は、錫による付着土砂の影響も多少あるとみられる。EDS分析では、主に鉄(Fe)が検出された（表25）。腐食が進んでおり、金属組織は観察できなかつた。

以上の結果より、No. 1は鉄滓ではなく、鉄関連遺物であった。断面は方形で、固着した土砂とともに木質も少し観察されたため、例えば鉄釘の一部である可能性などが考えられる。

表 24 XRF 分析による半定量値 (mass%)

No.	照射径	Al	Si	P	Ca	Ti	Cr	Fe	Co	Cu	As	Mo	Sn	測定位置
1	1mm	0.59	0.47	0.79	0.19	0.22	0.03	95.48	0.35	1.32	0.14	0.01	0.41	鈑化鉄

表 25 EDS 分析結果

No.	ポイント	検出元素	組織	所見
1	a	O, Fe	鈑化鉄	鉄製品（器種不明） 断面方形、木質あり

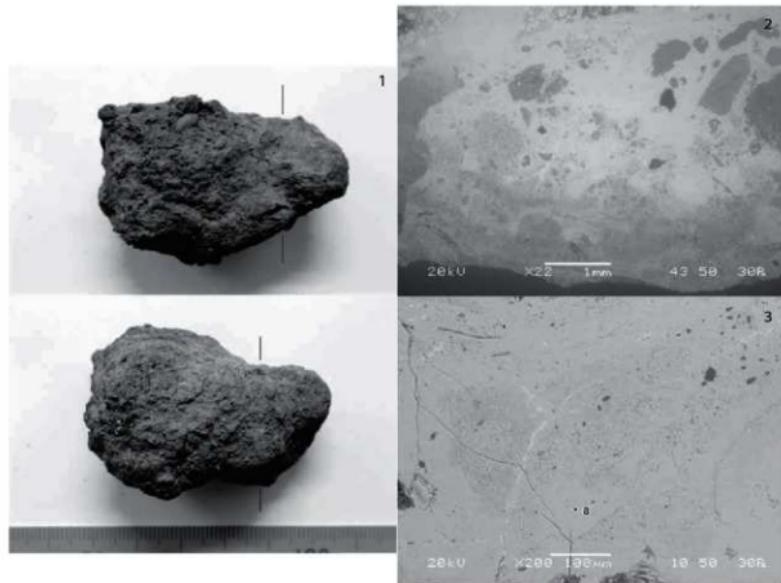


写真1 鉄関連遺物の遺物写真、断面組織SEM反射電子像

第3節 木製品の樹種同定

1 はじめに

当遺跡から出土した木製品について、樹種同定を行った。分析は藤田秀臣（株式会社吉田生物研究所）が担当した。

2 試料と方法

分析対象は、NR06 から出土した棒状木製品 1 点(76)、柵串 2 点(77・78)の計 3 点である(図 34)。剝刀で木口(横断面)、柵目(放射断面)、板目(接線断面)の各切片を採取し、永久プレパラートを作製した。これらのプレパラートを顕微鏡で観察して同定を試みた。No. 2 の形代については木口が遺物の形態的にサンプリングできなかった。

3 分析結果

樹種同定結果(針葉樹 3 種)の表と顕微鏡写真を示し、以下に各種の主な解剖学的特徴を記す。なお、使用的した顕微鏡はNikon DS-F11である。

(1)コウヤマキ科コウヤマキ属コウヤマキ(*Sciadopitys verticillata* Sieb. et Zucc.) (写真 No.-1)

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行はやや緩やかで晩材部の幅は極めて狭い。柵目では放射組織の分野壁孔は小型の窓状で 1 分野に 1 ~ 2 個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。コウヤマキは本州(福島以南)、四国、九州(宮崎まで)に分布する。

(2)ヒノキ科ヒノキ属(*Chamaecyparis* sp.) (写真 No.-2)

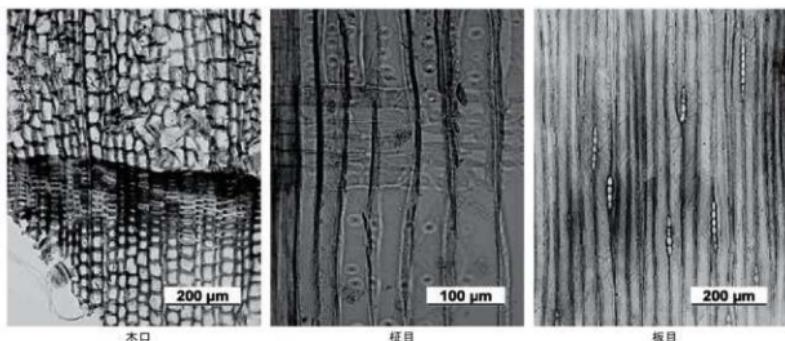
木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行が急であった。樹脂細胞は晩材部に偏在している。柵目では放射組織の分野壁孔はヒノキ型で 1 分野に 1 ~ 2 個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。数珠状末端壁を持つ樹脂細胞がある。ヒノキ属はヒノキ、サワラがあり、本州(福島以南)、四国、九州に分布する樹種である。

(3)ヒノキ科アスナロ属(*Thujopsis* sp.) (写真 No.-3)

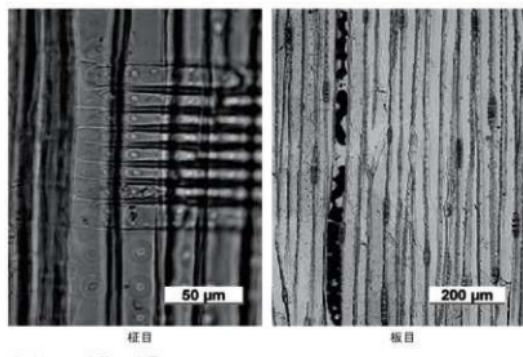
木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行は緩やかであった。樹脂細胞は晩材部に散在または接線配列である。柵目では放射組織の分野壁孔はヒノキ型からややスギ型で 1 分野に 2 ~ 4 個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。数珠状末端壁を持つ樹脂細胞がある。アスナロ属にはアスナロ(ヒバ、アテ)とヒノキアスナロ(ヒバ)があるが顕微鏡下では識別困難である。アスナロ属は本州、四国、九州に分布する。

表 26 木製品同定表

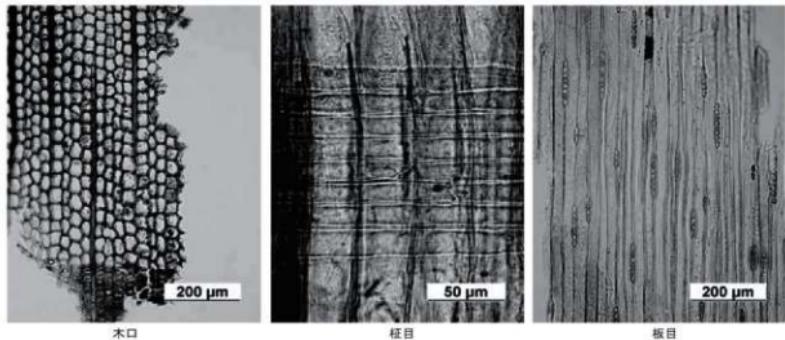
No.	取上番号	掲載番号	出土遺構	層位	器種	樹種
1	439-1	76	NR06	k	棒材	コウヤマキ科コウヤマキ属コウヤマキ
2	439-2	77	NR06	k	柵串	ヒノキ科ヒノキ属
3	439-3	78	NR06	k	柵串	ヒノキ科アスナロ属



No-1 コウヤマキ科コウヤマキ属コウヤマキ



No-2 ヒノキ科ヒノキ属



No-3 ヒノキ科アスナロ属

写真2 木製品の顕微鏡写真

第4節 漆状付着物成分分析

1 はじめに

当遺跡から出土した漆質物が付着する須恵器や灰釉陶器、山茶碗について、これらの土器の付着物の材質について赤外分光分析を行った。分析は藤根久（パレオ・ラボ）が担当した。

2 試料と方法

分析対象は、須恵器及び灰釉陶器、山茶碗（いずれも器種は碗）における付着物3点である（表27）。

表27 漆状付着物成分分析試料一覧

No.	取上番号	掲載番号	出土遺構	層位	遺物	器種	付着物の特徴	分析対象
1	0058-3	-	NR16	d	須恵器	碗	口縁内面～外面、黑色光沢の炭質様物、一部肥厚した褐色部有	内面の光沢褐色物
2	0123-1	-	NR19	2	山茶碗	碗	内面・口縁外面、光沢黄褐色～黒色、光沢のない浅黄色、割れ目内に充填	内面の光沢黄褐色物
3	0138-1	-	NR19	2	灰釉陶器	碗	内面、光沢黒褐色、肥厚・突起状皺	内面の光沢黒褐色物

赤外分光分析は、手術用メスを用いて付着物表面から薄く削り取り、厚さ1mm程度に裁断した奥化カリウム（KBr）結晶板に押しつぶして挟み、油圧プレス器を用いて約7トンで加圧整形した。測定は、フーリエ変換型顕微赤外分光光度計（日本分光（株）製FT/IR-410、IRT-30-16）を用いて、透過法により赤外吸収スペクトルを測定した。

なお、比較試料として、生漆、菜種油、麻油、エゴマ油、松脂、膠、アスファルトのスペクトルも測定し、比較した。

3 分析結果

以下に、各試料の特徴と赤外分光分析の結果について述べる。なお、図92の赤外吸収スペクトル図の縦軸は透過率（%R）、横軸は波数（Wavenumber (cm^{-1})；カイザー）である。また、吸収スペクトルに示した数字は、生漆の主な赤外吸収位置を示す（表28）。

[No. 1（須恵器碗、内面の光沢褐色物）]

付着物は、口縁部の内面から外面にかけて見られ、光沢のある黒色で炭質様物であり、一部の肥厚した褐色部が見られる（写真3）。内面の光沢褐色物の赤外分光分析では、生漆を特徴づけるウルシオールの一部吸収（吸収No. 6～No. 8）は確認されなかった。炭化水素の吸収No. 1とNo. 2が見られたため、有機質物である。波数1315 cm^{-1} 付近に見られるシャープな吸収は、メタノールなどに見られる吸収である（図92）。その他、黒色部を測定した結果、同様のスペクトルが得られた。このスペクトルを、生漆のほかに、菜種油、麻油、エゴマ油、松脂、膠、アスファルトのスペクトルと比較したが、類似するスペクトルは見当たらなかった。

[No. 2（山茶碗、内面の光沢黄褐色物）]

付着物は、内面や口縁部外面などに見られ、光沢黄褐色～黒色物や光沢のない浅黄色物である。付着物は、割れ目内にも充填していた（写真3）。

表 28 生漆の赤外吸収位置とその強度

吸収No.	生漆			吸収No.	生漆		
	位置	強度	ウルシ成分		位置	強度	ウルシ成分
1	2925.48	28.5337	—	6	1351.86	50.8030	ウルシオール
2	2854.13	36.2174	—	7	1270.86	46.3336	ウルシオール
3	1710.55	42.0346	—	8	1218.79	47.5362	ウルシオール
4	1633.41	48.8327	—	9	1087.66	53.8428	—
5	1454.06	47.1946	—	10	727.03	75.3890	—

内面の光沢褐色物の赤外分光分析では、生漆を特徴づけるウルシオールの吸収（吸収 No. 6～No. 8）は確認されなかった。炭化水素の吸収 No. 1 と No. 2 が見られたため、有機質である。波数 1315 cm⁻¹付近に見られるシャープな吸収は、メタノールなどに見られる吸収である（図 92）。

このスペクトルは、分析 No. 1 とほぼ同様のスペクトルであり、生漆のほか、菜種油、麻油、エゴマ油、松脂、膠、アスファルトのスペクトルと比較したが、類似するスペクトルは見当たらなかった。

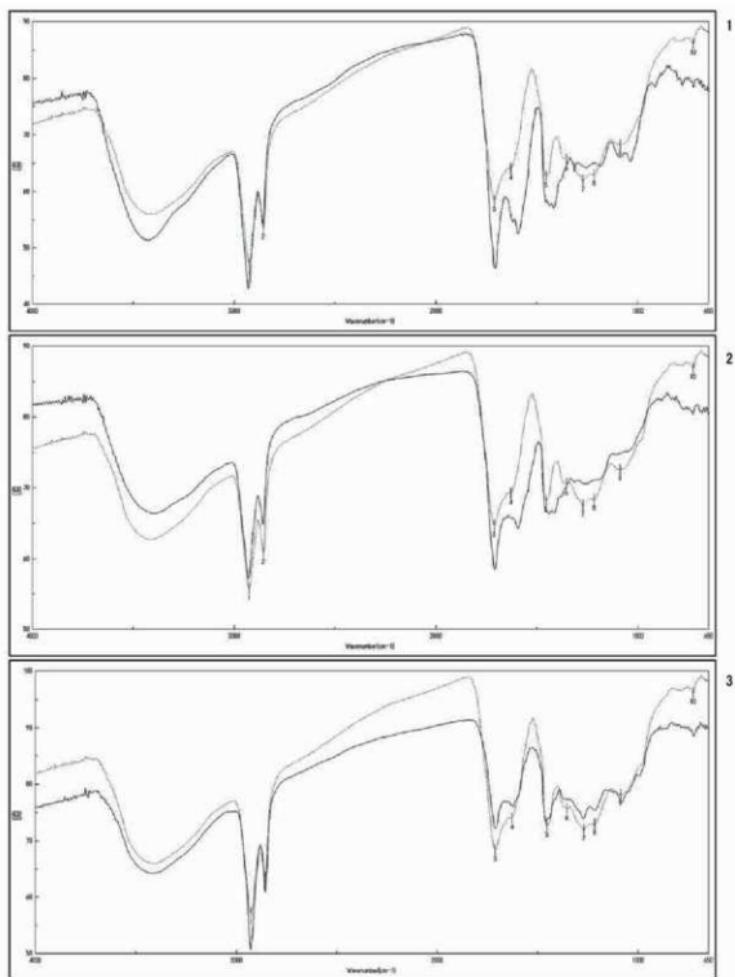
[No. 3 (灰釉陶器碗、内面の光沢黒褐色物)]

灰釉陶器碗の内面に、光沢のある黒褐色の付着物が肥厚して付着する。また、付着物には突起状態も見られる。

この光沢黒褐色物の赤外分光分析では、生漆を特徴づけるウルシオールの吸収（吸収 No. 6～No. 8）が明瞭に認められ、ウルシオール以外の吸収も一致した（図 92）。以上の結果から、漆と同定される。

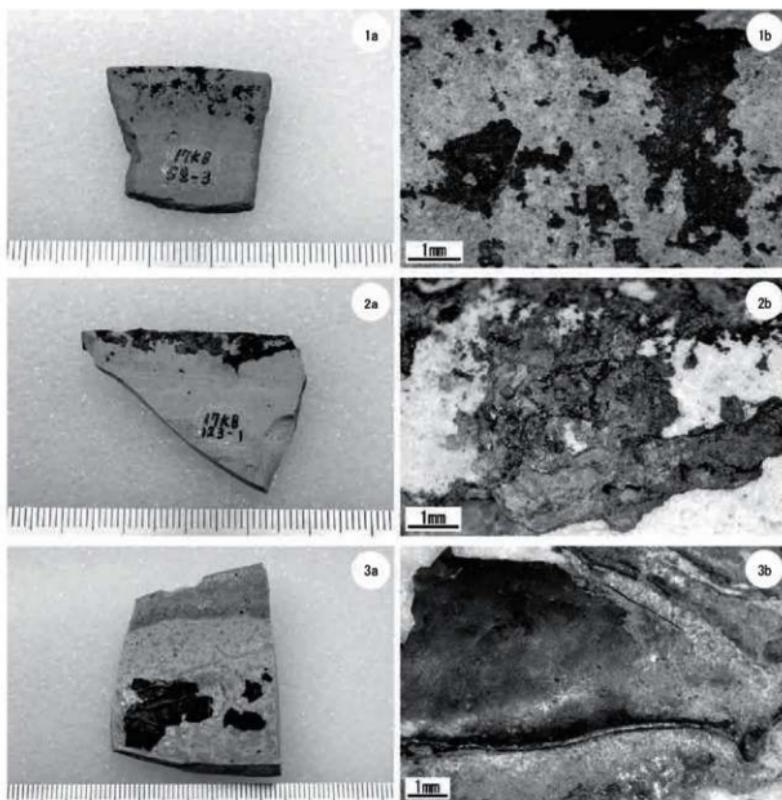
分析結果をまとめると、以下のとおりである。

須恵器碗と山茶碗の付着物については、材料の特定はできなかった。これらの付着物は、時間が経過しているにもかかわらず、有機質（炭化水素の吸収）の痕跡が確認できた。菜種油などの油系付着物は、埋没後、微生物により分解され易いが、漆は分解されにくいため、これらの付着物は漆に夾雜物が混和したものであった可能性が考えられる。一方、灰釉陶器碗の付着物は、生漆と同様のスペクトルが得られ、漆と同定した。



- 1 須恵器口縁部の内面付着物（分析No. 1）
- 2 山茶碗口縁部の内面付着物（分析No. 2）
- 3 須恵器内面の付着物（分析No. 3）

図92 付着物の赤外分光スペクトル図（縦軸が透過率（%R）、横軸が波数（Wavenumber (cm^{-1}) : カイザー）



1a-1b. 須恵器口縁部の内面付着物（分析No. 1）

2a-2b. 山茶碗口縁部の内面付着物（分析No. 2）

3a-3b. 須恵器内面の付着物（分析No. 3）

写真3 付着状態と付着物の実体顕微鏡写真

第5章 総括

第1節 時期区分

国分寺遺跡の時期区分については、伽藍南面調査の報告によってまとめられている¹⁾。本報告の時期区分についても、これに従って記述する。

I期 国分寺前身寺院が建立される以前

伽藍南面調査の時期区分では、I期に縄文時代は含まれていないが、今回の調査では縄文土器が出土しているため、縄文時代から古墳時代後期をI期とした。伽藍南面調査では、明確な遺構は確認されていないが、弥生時代前期～古墳時代前期、6世紀末葉～7世紀中葉の遺物が出土している。

II期 国分寺前身寺院建立以降から、国分寺創建まで

古墳時代末期～奈良時代前半(美濃須衛窯第III－3期～第IV－2期前半)がII期である。美濃国分寺前身寺院が建立された時期とされているが、伽藍南面調査では明確な遺構は確認されていない。ただし、出土した7世紀末葉～8世紀前半の遺物について、一般集落とは異なった様相が認められるとされる。

III期(IIIa～IIIc期) 国分寺創建以降

奈良時代後半から平安時代末期(美濃須衛窯IV－2期後半～尾張型山茶碗第4型式)がIII期である。伽藍南面調査では、国分寺の創建・焼失・移転・再建などの変遷から4つの時期に細分されている。伽藍南面の遺構としては、創建期のIIIa期では掘立柱建物や土坑が、焼失及び移転・再建期のIIIb・c期では掘立柱建物や轆轤支柱の柱穴と考えられる遺構や井戸が確認されている。また、IIIb・c期のものと思われる自然流路が検出されており、時期によって流路を変えていたと考えられている。なお、再建後のIIId期の12世紀中頃～後半の可能性がある遺構も検出されているが、国分寺とどのように関わっているかは不明である。また、今回の調査と伽藍南面調査では、大原2号窯式～虎渓山1号窯式期の遺物が多く出土していることから、IIIb・c期には国分寺は再建されたものと考えられる。

IV期(IVa期・IVb期) 国分寺廢絶後

鎌倉時代から江戸時代初頭がIV期である。伽藍南面調査における出土遺物の状況から2つの時期に細分されている。伽藍南面調査の遺構としては、鎌倉時代のIVa期では柵や道路などが検出されているが、国分寺に関わる遺構かどうかは断定できない。遺物は尾張型山茶碗第5型式～第8型式のものが出土しているが、それまでの時期に比べ極端に減少している。室町時代から江戸時代初頭のIVb期では、これまでの調査では明確な遺構は確認されていない。陶器・銅錢などが出土しているが、国分寺との関わりは不明である。この時期には、伽藍内も含めて水田化されていた可能性が高いとされる。

V期 現在の国分寺が再興された元和元(1615)年以降

元和元(1615)年、現在の美濃国分寺が再興されてからがV期である。伽藍南面調査では国分寺にかかる明確な遺構はなく、自然流路(河原田川)跡と青野集落から現国分寺へ至る通称「国分寺道」のみ確認されている。遺物としては近世陶磁器や寛永通宝などの出土はあるものの、伽藍南面での国分寺に関わる積極的な活動は認められない。伽藍内も含め、引き続き水田であったと考えられている。

第2節 遺物について

1 墨書土器について

今回の調査における出土遺物の約89%が土器類で、時期はⅢ期からⅣ期のものである。その中でも、今回の発掘区は美濃国分寺跡に隣接するためか、墨書土器が比較的多く出土している。ここでは墨書土器について、時期・内容の視点から検討する。分析については、今回の調査で出土した17点、伽藍南面調査によって出土した174点、寺域内である美濃国分寺跡発掘調査報告書²⁾に掲載された3点を含む、計194点の墨書土器³⁾を対象とした（表29、30）。なお、表中の掲載番号は「伽-掲載番号」が伽藍南面調査の出土遺物、「美-図番号-掲載番号」が美濃国分寺跡発掘調査の出土遺物である。

（1）墨書土器の時期について

種別では、土師器約1%、須恵器約48.7%、灰釉陶器約44.5%、山茶碗約5.2%、白磁約0.5%となり、大半が須恵器と灰釉陶器で、土師器は器種が明確なものは坏が1点のみである（表31）。須恵器では、坏類（坏・有台坏・無台坏）が約47%、蓋類（坏蓋・蓋）が約12%、碗が約24%、灰釉陶器では碗類（碗・深碗・輪花碗）が約72%、皿類（皿・段皿）が20%である。山茶碗は碗が70%、皿が30%である（表32）。いずれも小型の食器類が用いられており、壺や甕のような大型の器種は認められない。時期別に見ると、Ⅲ期が最も多く約96%を占めている。の中でもⅢa期が約50%と最も多かった。須恵器はほとんどがこの時期である。Ⅲb・c期も35%程度の出土が見られることから、焼失後も国分寺としての何らかの活動が行われていたことがうかがわれる。灰釉陶器は多くがこの時期である。一方で、文献上の記述が途絶えるⅢd期が5%以下、中世に入るⅣ期が約3%と大きく減少している。創建以前のⅡ期や、近世以降のⅤ期のものは出土しなかった（表33）。のことから、墨書は小型の食器、特に坏類・碗類に多く施されていること、国分寺が機能していたと考えられる時期の墨書土器が多く、国分寺の消長に伴って出土量が減少していた可能性がある。

（2）墨書の内容について

書かれた文字が判読できた墨書の内容を分類するに当たり、以下を参考とした。

A 「寺」に関連する文字

伽藍南面調査の出土例の解釈に従い、今回出土したものを分類した。また、伽藍南面調査で出土していない文字でも、明らかに寺院の活動や施設に関わると思われる文字はこちらに含めた。

B 吉祥文字

伽藍南面調査における出土例に加え『古代北陸と出土文字資料』⁴⁾の分類に従った。

その他、「C 数字に関連したもの」、「D 記号と思われるもの」、「E その他分類不能なもの」については、伽藍南面調査の出土例に従った。

（3）他遺跡の出土例との比較

この結果について、今回の調査と同様に寺院やその周辺の調査を行い、墨書土器が多く出土している杉崎庵寺跡（飛騨市古川町）⁵⁾を取り上げ、内容を比較した（表34）。また、寺院周辺地の調査事例として、弥勒寺西遺跡（閔市）の調査で出土した墨書土器⁶⁾の分類とも比較した。その結果を表33に示した。なお、文字の内容の分類については前述のとおりであるが、（2）の分類に当てはまらないものはそれぞれの報告書の分類に従った。

表29 国分寺遺跡出土墨書き土器一覧表(1)

通番	収蔵番号	時代区分	種類	器種	内容	内部分類
1	10	IIIa	須恵器	碗	□	不明
2	46	IIIa	須恵器	有台坏 容器	E	不明
3	62	IIIa	須恵器	蓋 十四□カ	C	不明
4	66	IIIa	須恵器	碗	2文字の可能性。2文字目は「ニ」と見。カ	E
5	67	IIIa	須恵器	盤 僧□	A	不明
6	98	IIIa	須恵器	無台坏カ 寺	A	不明
7	102	IIIa	須恵器	有台坏 □	不明	不明
8	11	IIIb	灰釉陶器	碗 豊(いから)カ	C	不明
9	71	IIIa	灰釉陶器	碗 今カ	E	不明
10	72	IIIb	灰釉陶器	碗 菱形記号	D	不明
11	95	IIIc	灰釉陶器	碗 □	不明	不明
12	13	IIIc	灰釉陶器	碗 □	不明	不明
13	58	IIIc	灰釉陶器	一 □	不明	不明
14	99	IIIc	灰釉陶器	碗 寺	A	不明
15	100	IIIb	灰釉陶器	碗 寺	A	不明
16	104	IIIb	灰釉陶器	講カ	D	不明
17	74	IIId	山茶碗	碗 「十」「万」カ	C	不明
18	側-234	III	土師器	一 拝カ	A	不明
19	側-235	IIIab	土師器	坏 三	C	不明
20	側-201	IIIa	須恵器	碗 片	C	不明
21	側-206	IIIa	須恵器	碗 垣カ質カ	E	不明
22	側-207	IIIa	須恵器	碗 山	B	不明
23	側-208	IIIa	須恵器	碗 又・花・在ほか	E	不明
24	側-240	IIIa	須恵器	蓋 □	不明	不明
25	側-241	IIIa	須恵器	無台坏 免カ	E	不明
26	側-242	IIIa	須恵器	碗 □	不明	不明
27	側-243	IIIa	須恵器	碗 □	不明	不明
28	側-244	IIIa	須恵器	碗 南カ曹	A	不明
29	側-245	IIIa	須恵器	蓋 □	不明	不明
30	側-246	IIIa	須恵器	蓋 □	不明	不明
31	側-247	IIIa	須恵器	碗 女	E	不明
32	側-248	IIIa	須恵器	碗 中	E	不明
33	側-250	IIIa	須恵器	皿 □	不明	不明
34	側-251	IIIa	須恵器	有台坏 本	E	不明
35	側-252	IIIa	須恵器	有台坏 国分寺	A	不明
36	側-272	IIIa	須恵器	有台坏 私途	E	不明
37	側-286	IIIa	須恵器	碗 万可	C	不明
38	側-289	IIIa	須恵器	碗 □	不明	不明
39	側-320	IIIa	須恵器	有台坏 大□	B	不明
40	側-353	IIIa	須恵器	無台坏カ □	不明	不明
41	側-354	IIIa	須恵器	碗 万カ	C	不明
42	側-355	IIIa	須恵器	坏 私カ秋カ	E	不明
43	側-356	IIIa	須恵器	坏 □	不明	不明
44	側-357	IIIa	須恵器	坏 豪カ	C	不明
45	側-358	IIIa	須恵器	坏 与	E	不明
46	側-359	IIIa	須恵器	碗 □	不明	不明
47	側-364	IIIa	須恵器	有台坏 □	不明	不明
48	側-365	IIIa	須恵器	有台坏 曹カ三カ	A	不明
49	側-366	IIIa	須恵器	蓋 大衆	E	不明
50	側-370	IIIa	須恵器	有台盤 □	不明	不明
51	側-372	IIIa	須恵器	無台坏 □	不明	不明
52	側-373	IIIa	須恵器	碗 富盛	B	不明
53	側-420	IIIa	須恵器	有台坏 寺	A	不明
54	側-421	IIIa	須恵器	坏 記号 □	D	不明
55	側-433	IIIa	須恵器	坏 □	不明	不明
56	側-444	IIIa	須恵器	鉢跡 □	不明	不明
57	側-445	IIIa	須恵器	有台坏 中カ	E	不明
58	側-446	IIIa	須恵器	蓋 □	E	不明
59	側-447	IIIa	須恵器	有台坏 □	不明	不明
60	側-449	IIIa	須恵器	蓋 国分	A	不明
61	側-451	IIIa	須恵器	無台坏 □	不明	不明
62	側-458	IIIa	須恵器	無台坏 富盛	B	不明
63	側-463	IIIa	須恵器	有台坏 進カ	E	不明
64	側-465	IIIa	須恵器	有台坏 □	不明	不明
65	側-466	IIIa	須恵器	有台坏 □	不明	不明
66	側-467	IIIa	須恵器	有台坏 □	不明	不明
67	側-468	IIIa	須恵器	有台坏 部分カ	E	不明
68	側-469	IIIa	須恵器	有台坏 □	不明	不明
69	側-470	IIIa	須恵器	有台坏 社□	E	不明
70	側-471	IIIa	須恵器	碗 □	不明	不明
71	側-472	IIIa	須恵器	碗 □	不明	不明
72	側-473	IIIa	須恵器	碗 中	E	不明
73	側-476	IIIa	須恵器	碗 与	E	不明
74	側-478	IIIa	須恵器	有台盤 福・七・三・〇	B	不明
75	側-479	IIIa	須恵器	有台盤 三	C	不明
76	側-484	IIIa	須恵器	有台盤 月	E	不明
77	側-526	IIIa	須恵器	蓋 麻呂	E	不明
78	側-560	IIIa	須恵器	有台坏 富	B	不明
79	側-565	IIIa	須恵器	無台坏 沙物書き「菩薩」カ	A	不明
80	側-630	IIIa	須恵器	有台坏 □	不明	不明
81	側-637	IIIa	須恵器	有台坏 □	不明	不明
82	側-706	IIIa	須恵器	無台坏 宅カ	E	不明
83	側-710	IIIa	須恵器	無台坏 □	不明	不明
84	側-712	IIIa	須恵器	無台坏 生	B	不明
85	側-713	IIIa	須恵器	有台坏 記号	D	不明
86	側-714	IIIa	須恵器	碗 西富	B	不明
87	側-730	IIIa	須恵器	無台坏 □	不明	不明
88	側-731	IIIa	須恵器	蓋 高	E	不明
89	側-732	IIIa	須恵器	有台坏 南	E	不明
90	側-810	IIIa	須恵器	有台盤 卅	C	不明
91	側-811	IIIa	須恵器	- □	不明	不明
92	側-812	IIIa	須恵器	- 線刻文字	D	不明
93	側-865	IIIa	須恵器	碗カ 忽カ	E	不明
94	側-885	IIIa	須恵器	- □	不明	不明
95	側-893	IIIa	須恵器	有台盤 □	不明	不明
96	側-904	IIIa	須恵器	鉢跡 記号☆に近い	D	不明
97	側-918	IIIa	須恵器	有台坏 上	B	不明
98	側-922	IIIa	須恵器	- 為	E	不明
99	側-923	IIIa	須恵器	碗 故カ	E	不明
100	側-957	IIIa	須恵器	坏 新	E	不明
101	側-958	IIIa	須恵器	蓋 古カ	E	不明
102	側-959	IIIa	須恵器	蓋カ □	不明	不明
103	側-960	IIIa	須恵器	蓋 利	B	不明
104	側-961	IIIa	須恵器	有台坏 須備	E	不明
105	側-998	IIIa	須恵器	- □	不明	不明
106	側-145	III	灰釉陶器	碗 □	不明	不明
107	側-214	IIIa	灰釉陶器	段皿 高体解カ	E	不明
108	側-215	IIIb	灰釉陶器	段皿 - □	不明	不明
109	側-225	IIIb	灰釉陶器	碗 故カ	E	不明
110	側-258	III	灰釉陶器	- 帯カ	E	不明
111	側-264	III	灰釉陶器	皿 南カ曹	A	不明
112	側-389	IIIb	灰釉陶器	碗 虫口 □カ	E	不明
113	側-391	III	灰釉陶器	碗 有	B	不明
114	側-423	IIIa	灰釉陶器	碗 福方	E	不明
115	側-493	IIIb	灰釉陶器	皿 芝	C	不明
116	側-501	IIIb	灰釉陶器	碗 前講圓カ	E	不明
117	側-506	IIIb	灰釉陶器	碗 曹司夫	A	不明
118	側-536	III	灰釉陶器	碗 宅	E	不明
119	側-537	III	灰釉陶器	碗 □	不明	不明
120	側-567	IIIb	灰釉陶器	碗 □	不明	不明
121	側-921	III	灰釉陶器	-	不明	不明
122	側-107	IIIcd	灰釉陶器	碗 貨	B	不明
123	側-109	III	灰釉陶器	碗 所	E	不明
124	側-110	IIIc	灰釉陶器	碗 □	不明	不明
125	側-146	IIIc	灰釉陶器	碗 部	E	不明
126	側-147	IIIc	灰釉陶器	碗 部	E	不明
127	側-148	IIIc	灰釉陶器	碗 放	E	不明
128	側-149	IIIc	灰釉陶器	深碗 施財(ヘラ書き)	A	不明

表30 国分寺遺跡出土墨書土器一覧表(2)

通番	番号	時代区分	種類	器種	内容	内容分類
129	伽-202	IIIb	灰釉陶器	碗	中	E
130	伽-216	IIIc	灰釉陶器	皿	拌カ	A
131	伽-218	IIIc	灰釉陶器	皿	□	不明
132	伽-220	IIIb	灰釉陶器	碗	二カ女カ	E
133	伽-221	IIIcd	灰釉陶器	碗	□	不明
134	伽-222	IIIb	灰釉陶器	輪花碗	中	E
135	伽-223	IIIb	灰釉陶器	碗	□	不明
136	伽-224	IIIbe	灰釉陶器	碗	神	E
137	伽-257	IIIc	灰釉陶器	碗	□	不明
138	伽-259	IIIb	灰釉陶器	碗	□	不明
139	伽-260	IIIb	灰釉陶器	碗	□	不明
140	伽-261	IIIc	灰釉陶器	碗	□	不明
141	伽-262	IIIb	灰釉陶器	碗	□	不明
142	伽-275	III	灰釉陶器	皿	財	A
143	伽-276	III	灰釉陶器	皿	善	E
144	伽-277	IIIcd	灰釉陶器	碗	□	不明
145	伽-290	IIIc	灰釉陶器	皿	□	不明
146	伽-298	IIIcd	灰釉陶器	皿	□	不明
147	伽-324	III	灰釉陶器	皿	エ□	E
148	伽-328	IIIbc	灰釉陶器	碗	菱形記号	D
149	伽-329	IIIb	灰釉陶器	碗	菱形記号カ	D
150	伽-387	IIIbc	灰釉陶器	碗	菱形記号	D
151	伽-392	IIIb	灰釉陶器	碗	□	不明
152	伽-393	IIIb	灰釉陶器	碗	□	不明
153	伽-401	IIIbc	灰釉陶器	皿	□	不明
154	伽-494	IIIb	灰釉陶器	皿	宅	E
155	伽-496	IIIb	灰釉陶器	碗	隼	E
156	伽-525	IIIc	灰釉陶器	深碗	盛カ	B
157	伽-538	IIIb	灰釉陶器	碗	□	不明
158	伽-539	IIIb	灰釉陶器	碗	祐	E
159	伽-568	IIIb	灰釉陶器	碗	給口	E
160	伽-569	IIIb	灰釉陶器	碗	□	不明
161	伽-570	IIIb	灰釉陶器	碗	戊	E
162	伽-571	IIIb	灰釉陶器	碗	□	不明
163	伽-619	IIIb	灰釉陶器	碗	□	不明
164	伽-622	IIIb	灰釉陶器	碗	□	不明
165	伽-704	IIIb	灰釉陶器	碗	□	不明
166	伽-743	IIIb	灰釉陶器	碗	口出	E
167	伽-744	III	灰釉陶器	碗	大	B
168	伽-827	IIIc	灰釉陶器	碗	富	B
169	伽-829	IIIb	灰釉陶器	碗	記号	D
170	伽-830	IIIc	灰釉陶器	碗	楕円形記号カ	D
171	伽-831	III	灰釉陶器	輪花碗	□	不明
172	伽-832	IIIcd	灰釉陶器	碗	酒	E
173	伽-874	IIIc	灰釉陶器	皿	宅	E
174	伽-898	IIIb	灰釉陶器	碗	口あ	E
175	伽-903	III	灰釉陶器	皿	□	不明
176	伽-931	III	灰釉陶器	皿	西富	B
177	伽-978	IIIc	灰釉陶器	皿	□	不明
178	伽-979	IIIb	灰釉陶器	碗	悉曇	A
179	伽-980	IIIc	灰釉陶器	段皿	万	C
180	伽-1001	III	灰釉陶器	皿	□	不明
181	伽-1002	III	灰釉陶器	壺	利カ	B
182	伽-1076	IIIcd	輪底・白底	碗	四	C
183	伽-125	IIId	山茶碗	碗	□	不明
184	伽-1000	IIId	山茶碗	碗	上	B
185	伽-176	IVa	山茶碗	皿	□わしカ□わりう	E
186	伽-67	IVa	山茶碗	皿	「玄」	D
187	伽-152	IVa	山茶碗	碗	□	不明
188	伽-153	IVa	山茶碗	皿	方	E
189	伽-165	IVa	山茶碗	碗	□	不明
190	伽-233	IVa	山茶碗	碗	□	不明
191	伽-512	IVa	山茶碗	碗	小為	E
192	美-32-3	III	須恵器	坏身	東内□□	E
193	美-32-4	III	須恵器	坏身	□村富	B
194	美-32-5	III	灰釉陶器	皿	□□□	不明

表31 墨書土器種別一覧表

種別	土師器	須恵器	灰釉陶器	山茶碗	白磁	合計
出土点数	2	95	86	10	1	194
割合	1.0%	49.0%	44.3%	5.2%	0.5%	100%

表32 墨書土器器種一覧表

器種	須恵器					
	壺類	蓋類	盤類	碗	その他	不明
出土点数	44	11	7	22	4	5
割合	48.4%	11.6%	7.4%	23.2%	4.2%	5.3%
種別	灰釉陶器					
器種	碗類	皿類	壺	不明	合計	
出土点数	61	19	1	4	86	
割合	70.9%	23.3%	1.2%	4.7%	100%	
種別	山茶碗					
器種	碗	皿	合計			
出土点数	7	3	10			
割合	70.0%	30.0%	100%			

表33 墨書き土器時期別一覧表

時期	IIIa	IIIb	IIIc	IIId	IIlab	IIlbc	IIlc	III	IVa	合計
出土点数	95	40	26	3	2	5	6	10	7	194
割合	49.0%	20.6%	13.4%	1.5%	1.0%	2.6%	3.1%	5.2%	3.6%	100%

表34 他遺跡との墨書き内容比較

国分寺遺跡			杉崎廃寺跡(飛騨市)			弥勒寺西遺跡(閇市)		
内容	点数	割合	内容	点数	割合	内容	点数	割合
寺に関連	17	14.0%	寺に関連	22	71.0%	寺に関連	51	42.5%
吉祥	19	15.7%	吉祥	1	3.2%	吉祥	16	13.3%
数字関連	13	10.7%	数字関連	0	0.0%	数字関連	1	0.8%
記号	12	9.9%	記号	5	16.1%	記号	1	0.8%
その他	60	49.6%	その他	3	9.7%	その他	51	42.5%
合計	121	100%	合計	31	100%	合計	120	100%

国分寺遺跡から出土した墨書き土器は、Aの割合が他の遺跡より少ないことが分かる。Bについては、弥勒寺西遺跡と同程度の出土が見られる。弥勒寺西遺跡では、「富」「福」が多い。本遺跡でも同じように「富(富)」「福」が見られるが、それ以外の吉祥文字もいくつか確認できる。また、Cについては、他の遺跡ではほとんど出土例が見られないが、国分寺遺跡では約10%出土している。数字に関連する墨書きがどのような意味を持つのかは不明であるが、他の遺跡に比べて出土例が多いことは、本遺跡の特徴と考えることができる。Dは杉崎廃寺跡で割合が高いが、すべて同一の記号「井」に対して、本遺跡で見られる記号はそれよりも多様である。菱形記号・星形記号が出土している点も、本遺跡の特徴と考えができる。

以上の結果から、他の遺跡と比べていくつかの相違があることが判明した。特に顕著であったのは、Aが少ないとあることである。杉崎廃寺は7世紀末に建立され、9世紀初頭に焼失した有力首長の氏寺であったと推定されている。墨書き土器は、僧房城若しくはその周辺の遺物包含層や柱穴など、寺域内で多く出土している⁷⁾。しかし、報告書で確認できる美濃國分寺跡の寺域内での墨書き土器は3点のみであるため、単純に比較することはできない。一方、弥勒寺西遺跡の東部に位置する弥勒寺跡も、杉崎廃寺と同じく当地の豪族(ムゲツ氏)の氏寺であったとされ、弥勒寺跡の東に隣接する弥勒寺東遺跡は武義郡衙跡が所在し、氏寺と郡衙が一体となった施設とされている。弥勒寺西遺跡は、こうした氏寺や郡衙に関わりのある祭祀が行われていた場所と考えられており、墨書き土器は、水辺の祭祀に関連する遺構から多く出土している⁸⁾。伽藍南面及び今回の発掘区は、弥勒寺西遺跡と同じく寺域外に位置するが、弥勒寺西遺跡ほど明確な祭祀の痕跡は見つかっていない。Aは祭祀と直接的な関連があるとは考えにくいが、弥勒寺西遺跡では、寺で管理されていた土器が大量に祭祀に活用されたとされており、弥勒寺跡との強い関連が考えられている。一方美濃國分寺では状況が異なることから、Aが祭祀等の目的で、寺域外に持ち出されていなかったか、今回の発掘区(伽藍南調査区)では、墨書き土器の122点(約64%)が自然流路からの出土であることから、これらが中世以降の流路変更などによって二次的に移動したと考えられる。

2 祭祀遺物について

今回の調査では、祭祀に関わると考えられる遺物として、陶馬1点と斎串2点が出土した。ここでは、県内の出土例等から、これらの遺物について検討する。なお、各務寒窯跡群(各務原市)の発掘調査報告書⁹⁾では、窯で焼成された須恵質の土馬を「陶馬」としていることから、本報告でもこの呼称を用いる。

(1)陶馬について

美濃須衛窯産の陶馬(図28-40)は、G地点SK42から出土した。土馬・陶馬の使用目的は、「墓前祭祀、岐神祭祀、そして水に関わる諸祭祀」¹⁰⁾とされる。水に関わる諸祭祀としては、井戸祭祀・河川祭祀・祈雨祭祀が考えられている。この他、自然災害や疫病をもたらす荒神や行疫神の行動を封じるための祭祀に用いられたとする考え方もある¹¹⁾。土馬・陶馬は、欠損して出土することがほとんどであるが、その理由は、祭祀に一度用いた祭具は効用を失ったものとして、破損して廃棄したとされる。あるいは、馬は行疫神の乗り物とされ、馬の脚を損なれば行疫神の動きを封じ、旱天・疫病・災厄を鎮めることができるとも考えられた。また、胴体部分の欠損は、單に行疫神の脚足を止めるだけではなく、行疫神に死を与えるという意味を重ねるという意味もあったとされている¹²⁾。

県内の出土例としては、各務原市教育委員会が行った各務寒窯跡群の発掘調査¹³⁾によって出土した陶馬がある(図93-①~④)。2号窯跡の灰原で出土し、前後の右脚が欠損したものが1点、完形に近いものが2点、頭から頭部にかけてのものが1点の計4点がある。いずれも鞍などの装飾のない裸馬である。同じく各務原市教育委員会が行った稲田山古窯跡群の発掘調査では、複数の窯跡から5点の陶馬が出土した¹⁴⁾。いずれも尾や脚、頭部のいずれか又はそのいくつかが欠損している。4点に綱・たてがみが沈線で表現され、うち1点には鞍も表現されていた(図93-⑤~⑨)。また、垂井町教育委員会が行った美濃国府跡の発掘調査¹⁵⁾によって出土した「土馬」がある。正殿跡の西に設定したトレンチの遺物包含層から出土した。頭部から胸部前部にかけてと、左前脚のみ残存し、胸部後部、残りの脚3本は欠落していた。鞍、耳は胎土を貼り付け、手綱やたてがみ、目、鼻はキザミを入れて表現している(図93-⑩)。胸部や脚が折られていること、飾り馬であることなどは、本遺跡で出土した陶馬と類似する。

窯跡で出土した陶馬は、出土状況から実際に祭祀に使用されたものではなく、製作後に未使用のまま廃棄されたものと考えられる。美濃国府跡から出土した土馬は、実際に祭祀に使われた可能性もあるが、遺構ではなく遺物包含層からの出土であるため、使用後の状況を留めていない可能性が高い。以上のように、岐阜県内では土馬・陶馬が遺構から出土した事例は確認されていない¹⁶⁾ことから、極めて貴重な資料といえる。

(2)斎串について

斎串(図33-77・78)は、B地点NR06から出土した。斎串は伽藍南面調査のNR05でも、川底と考えられる堆積から3点出土している。また、これと同時に人形代も1点出土している¹⁷⁾。伽藍南面調査のNR05は、斎串が出土したNR06の北西約24mのところに位置し、両遺構はともに平安時代以降のもので、接続すると考えられる(後述)。県内の出土例としては、柿田遺跡、興福寺遺跡、北方京水遺跡、弥勒寺西遺跡などがある。県内における斎串の出土例は、土馬・陶馬ほど限定的でないため、比較的広範囲で斎串を使用した祭祀が行われていたと思われる。また、これらの遺跡では、自然流路や井戸、

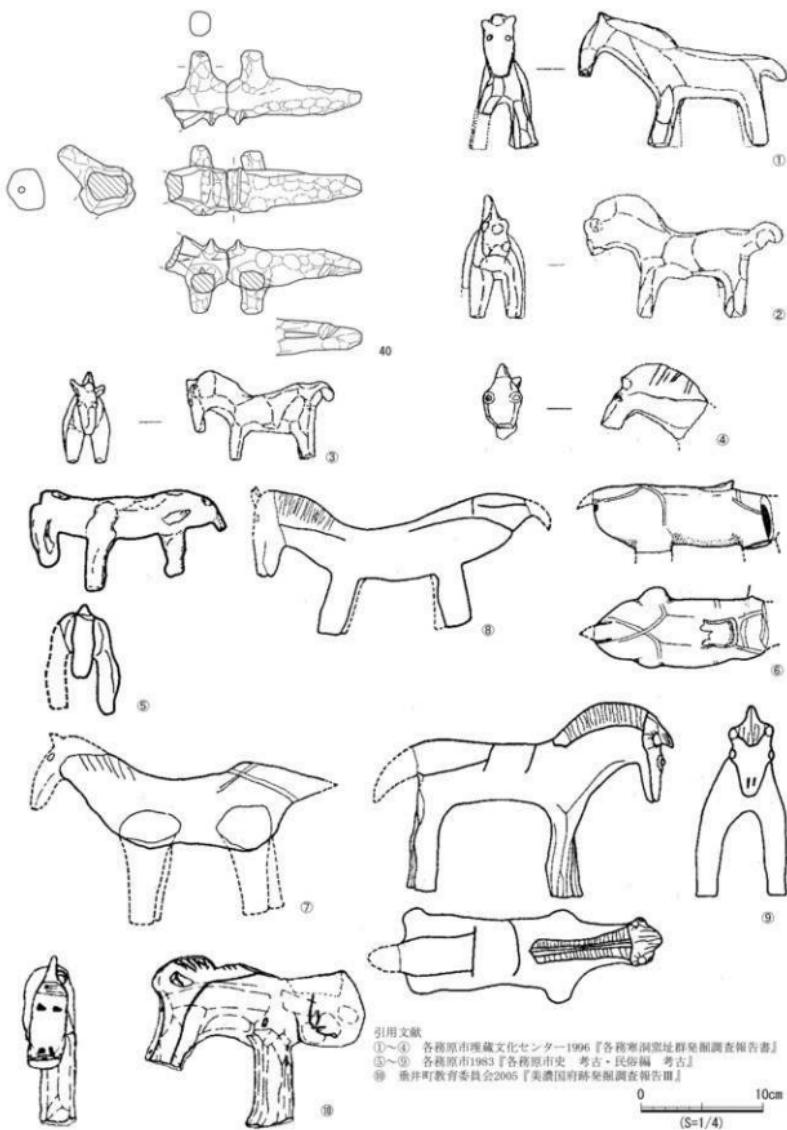


図 93 県内出土の土馬・陶馬

水制遺構など、水に関わる遺構から出土する例が多い。弥勒寺西遺跡では、流路に囲まれた方形の張り出し部周辺から斎串や人形代が出土したことなどから、一帯が水辺の祭祀場であった可能性が示されている¹⁸⁾。今回の調査でも自然流路から出土していることから、同様な祭祀が行われていた可能性がある。なお、第4章第1節で述べたように、県内の遺跡から出土している斎串の多くは、ヒノキ若しくはヒノキ科に同定されている。興福寺遺跡の報告書では、「北方京水遺跡でヒノキが確認されている他、柿田遺跡の平安～鎌倉とされる斎串もヒノキに同定されており」、ヒノキが広域的に利用されていたとし、その要因として「ヒノキの加工性を考慮し利用された」ことをあげている¹⁹⁾。今回出土した斎串もヒノキであることが判明し、このことがさらに裏付けられたといえる。

(3)まとめ

以上から、陶馬や斎串を用いた律令的な祭祀が美濃国分寺の伽藍外で行われていたと思われる。表35で示した²⁰⁾とおり、この陶馬が作られたと考えられる8世紀後半～9世紀は風水害や旱魃、飢饉が何度も起きており、こうした状況が、陶馬や斎串を用いた祭祀が行われた背景の1つとして考えられる。また、今回の調査で確認した祭祀に使用された可能性のある遺物が、当時の国分寺と直接的な関連があるかは不明であるが、国分寺が公的な機関であるという性格上、弥勒寺や郡衙に近接する弥勒寺西遺跡のように、国分寺に近い今回の発掘区が祭祀場として選択されたことも考えられる。

表35 古代の美濃における災害

	和暦	西暦	災害	地域	被害	文献
1	天平17年	745年	震災	美濃・浜津	美濃国橿館、正倉、堂塔など崩壊	続日本紀
2			干害	美濃、東海諸国		続日本紀
3	天平宝字6年	762年	地震	美濃、飛騨、信濃など	M7.9	続日本紀
4			飢饉	美濃		続日本紀
5	天平宝字7年	763年	干害・飢饉	美濃		続日本紀
6	天平神護1年	765年	飢饉	美濃		続日本紀
7	天平神護2年	766年	風害	美濃、伊勢		続日本紀
8	神護景雲1年	767年	飢饉	美濃		続日本紀
9	宝亀1年	770年	霖雨	美濃		続日本紀
10	宝亀4年	773年	飢饉	美濃		続日本紀
11	宝亀5年	774年	飢饉	美濃		続日本紀
12	宝亀6年	775年	暴風雨	美濃、伊勢、尾張	木曾川氾濫、死者300人、馬牛1000頭あまり、国分寺並びに諸寺塔倒壊	続日本紀
13	延暦8年	789年	飢饉	美濃		続日本紀
14			干害	美濃ほか14国		美濃気候編
15			飢饉	美濃		続日本紀
16			干害	美濃		美濃気候編
17	延暦18年	799年	飢饉	美濃		続日本紀
18	延暦19年	800年	飢饉	美濃		濃飛両国通史
19	仁和3年	887年	火災	美濃国分寺	美濃国分寺焼失	三代実録
20			地震	美濃ほか		三代実録

注

- 1) 大垣市教育委員会 2005『美濃国分寺－国分寺遺跡(伽藍南面隣接地の調査)－』(大垣市埋蔵文化財発掘調査報告書 第15集)
- 2) 大垣市教育委員会 2005『史跡 美濃国分寺跡』
- 3) 前掲1) の160頁に掲載された一覧表を基に、前掲2) に掲載された3点を加えて表29を作成した。
- 4) 社団法人 石川県埋蔵文化財保存協会 1998『古代北陸と出土文字資料』
- 5) 古川町教育委員会 1998の146頁に掲載された一覧表を元に集計した。
- 古川町教育委員会 1998『岐阜県古城郡古川町 杉崎魔寺跡 発掘調査報告書』
- 6) 関市教育委員会 2007の75～78頁に掲載された一覧表を元に集計した。
- 関市教育委員会 2007『弥勒寺遺跡群 弥勒寺西遺跡－関市円空館建設に伴う発掘調査－』
- 7) 5) 前掲
- 8) 6) 前掲
- 9) 各務原市埋蔵文化財調査センター1996『各務寒洞窯址群発掘調査報告書』(各務原市文化財調査報告第19号)
- 10) 小笠原好彦 2015『日本の古代宮都と文物』(吉川弘文館)363・364頁
- 11) 木野正好 1978「馬・馬・馬—その語りの考古学」『文化財学報』第二集 奈良大学文学部文化財学科
- 12) 3) 前掲
- 13) 各務原市埋蔵文化財調査センター1996『各務寒洞窯址群発掘調査報告書』(各務原市文化財調査報告第19号)図版 52(8～11)
- 14) 1号窯・3号窯・4号窯・12号窯・13号窯より、各1点ずつ出土している。
- 各務原市 1983『各務原市史 考古・民俗編 考古』
- 15) 垂井町教育委員会 2005『美濃国府跡発掘調査報告Ⅲ』第88図(6)
- 16) 金子裕之氏は、「土馬を埋めることも」水辺の祭祀によって「流すことに通じたようだ」とし、平城京在京四条四坊九坪の土坑SK2412から出土した6個に破砕された3体分の土馬と三彩小壺片を「埋納」と評価した(報告書では、「投棄」とされている。)。今回検出したSK43の出土状況からは、「埋納」又は「投棄」と評価することは難しいと考える。
- 奈良文化財研究所1983『平城京と祭場』1985『国立歴史民俗博物館研究報告』第7集 265頁
- 金子裕之「平城京と祭場」1985『国立歴史民俗博物館研究報告』第7集 265頁
- 17) 大垣市教育委員会 2005『美濃国分寺跡－国分寺遺跡(伽藍南面隣接地の調査)－』(大垣市埋蔵文化財発掘調査報告書第15集)第96図(852・853～855)
- 18) 関市教育委員会 2007『弥勒寺遺跡群 弥勒寺西遺跡－関市円空館建設に伴う発掘調査－』
- 19) 岐阜県文化財保護センター2015『興福寺遺跡』(岐阜県文化財保護センター調査報告書第132集)99頁
- 20) 大垣市教育委員会 1997の表5から、陶馬が作製されたと考えられる時期に近い8世紀後半～9世紀に、美濃地方で起こった災害を抜粋した。
- 大垣市教育委員会 1997『大垣市遺跡詳細分布調査報告書－解説編－』(大垣市埋蔵文化財調査報告書第5集)

第3節 遺構について

1 遺構の変遷について

今回の調査では、149基の遺構を確認した。このうちの自然流路の多くは、伽藍南面調査で検出された自然流路と接続すると考えられる。第2章第1節でも述べたように、国分寺が創建される以前から遺跡周辺には小河川がいくつも流れていることが推定されている¹⁾。これらの流路は、国分寺の消長と伽藍南面の土地利用の変遷に深く関わっていると考えられ、第5章第1節の時期区分に従い、自然流路と主要遺構などについて述べる。なお、図94・図95は伽藍南面調査の報告書における変遷図²⁾を再トレースし、今回の成果を含めて加筆した。

(1) I期(縄文時代～古墳時代後期)

今回の調査では、この時期と考えられる遺構は検出されなかったが、縄文土器や弥生土器が出土している。当遺跡の西に隣接する堅田遺跡の発掘調査では、縄文時代晚期の土坑が検出され、土器などが出土している³⁾。今回の調査でも、堅田遺跡に近い西部地区などで縄文土器が出土していることから、周辺に遺構が存在する可能性がある。

(2) II期(古墳時代末期から奈良時代前半)

この時期の自然流路は、伽藍南面調査を含めて確認されていない。今回確認したこの時期の遺構としては、D地点で検出したSD09がある。SD09の性格は不明であるが、復元された美濃国分寺伽藍の東端から約5m東に南北方向で設置されていることから、当時の地割と何らかの関係があったことが考えられる。この時期とされる前身寺院の存在については、伽藍内から検出した前身寺院の建物とされる掘立柱建物は、本格的な堂塔に先行する仮設的な建物であり、伽藍内から出土した複弁八葉蓮華文軒丸瓦も、白鳳期とされるものは55点中4点のみにとどまっていることから、国分寺の前身寺院は存在しないという説もある⁴⁾。一方、伽藍南面調査では、7世紀末葉～8世紀前半の遺物が出土しており、「遺物の出土傾向には、国分寺創建前のこの時期に一般的な集落とは異なった様相が認められる」ことから、「前身寺院の存在を全く否定することはできない」とされている⁵⁾。今回の調査でも、前身寺院の存在を裏付ける遺構・遺物は出土しなかったが、新たに当該期の遺構を確認したことから、当該期においても何らかの活動が行われていたと考えられる。

(3) IIIa期(8世紀後半～仁和3(887)年)

この時期の自然流路は、伽藍南面調査のNR02・NR04がある。今回の調査では、この流路に接続する遺構は確認していないが、IIIa期以降の自然流路と重複しているため、残存していないと考えられる。この時期の遺構には、A・G地点の西部で検出した掘立柱建物1棟及び檻5条の他、土坑などがある。SB01は、柱間約2.1m、柱穴の直径約0.8～1.2m、柱穴の深さが0.5m～0.9mで、伽藍南面調査で検出されたSB02と類似する点が多く、同規模の建物だった可能性がある。ただし、SB01の主軸方向は東西方向から7°傾いているのに対し、SB02の主軸がほぼ東西方向であるという違いがある。なお、後述する伽藍南面調査のSB01も、柱間や柱穴の大きさが類似する。檻は、主軸方向は今回検出したSB01と同様に、いずれも東西方向から3°～12°傾いている。今回検出したSB01と主軸方向が類似するものとしては、隣接するSA02・SA03がある。この他、G地点では、陶馬が出土したSK42やSD05、伽藍中軸から70mほど西のB地点ではSK08やSP01、SD01などを検出した。これらについては、伽藍

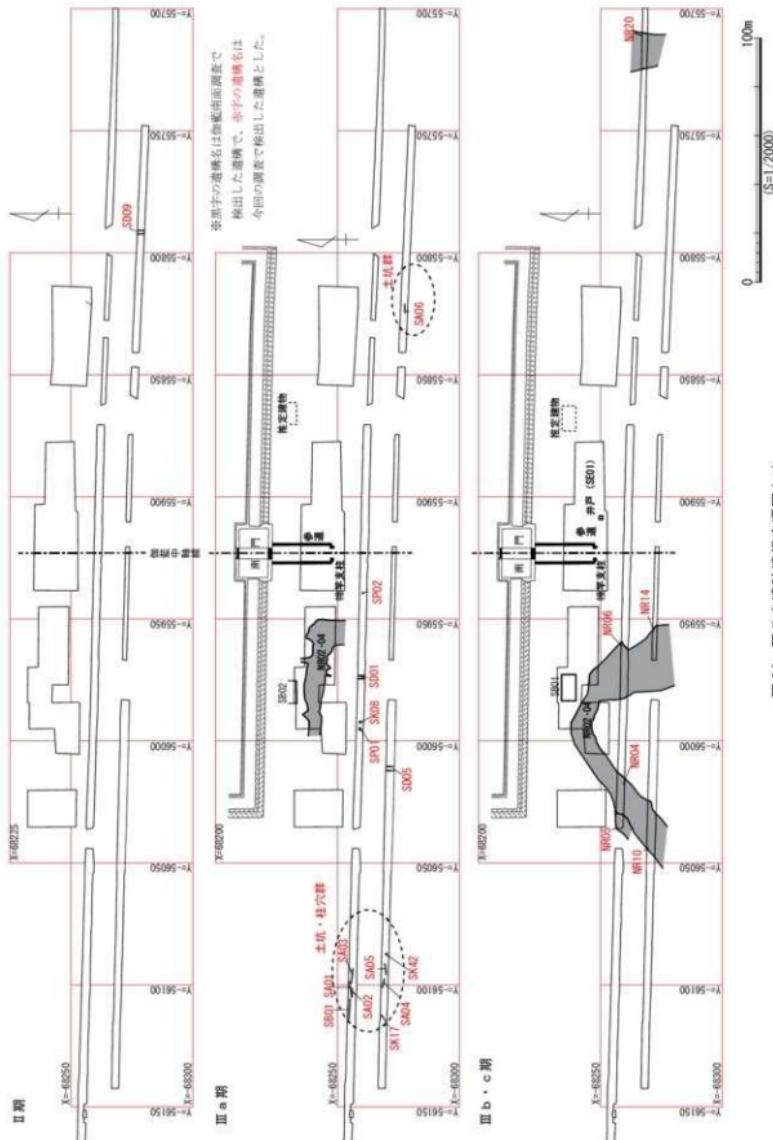


図 94 国分寺遺跡遺構変遷図(1)

南面調査で検出された NR02・NR04 の南西部に集中しており、この部分に何らかの施設が設置されていた可能性がある。なお、A 地点と B 地点の間では同種の遺構は検出していないが、ここにはⅣ期の NR02・NR03 が存在しているため、重複により失われた可能性が高い。また、伽藍中軸より東部に位置する D 地点の西部では、SA06 を含む遺構群を確認した。この付近は後世の自然流路が多数重複しているため、遺構が残存しなかったと考えられる。この時期は、国分寺の創建期であり、伽藍周辺地域においても、SB01 を伴うような何らかの施設が整備されたと考えられる。また、当該期の自然流路は、遺構群の分布から推定すると、美濃國分寺に影響を及ぼさないよう水の流れが管理されていた可能性がある。

(4) Ⅲb・c 期(仁和3(887)年～11世紀末葉)

この時期の自然流路は、伽藍南面調査ではⅢa 期に引き続いて NR02・NR04 が確認されているが、検出状況からこの 2 つの自然流路は河道を大きく変えたと考えられている。今回の調査では、この NR02・NR04 と接続する可能性がある流路を検出した。B 地点の西部では、伽藍南面調査の NR02・NR04 の西端に接続する NR04・NR05 を、G 地点中央部では NR04・NR05 に接続すると考えられる NR10 を検出した。また、B 地点中央部で、伽藍南面調査の NR02・NR04 の西端に接続すると考えられる NR06 を検出した。さらに、H 地点では、この NR06 と接続すると考えられる NR14 を検出した。以上から伽藍南面調査の NR02・NR04 を含む当該時期の流路は、G 地点中央部から B 地点の西端を通り、伽藍南面で湾曲し、B 地点の中央部から H 地点の東端を通っていたと推定される。この他、発掘区東端にある F 地点東端で検出した NR20 も、細片ではあるが土師器・須恵器・灰釉陶器のみが出土しており、当該時期に所属すると考えられる。この時期の遺構として、伽藍南面調査で NR02・NR04 の南東で SB01 が検出されており、焼失した国分寺の再建に伴う建物とされている。しかし、今回の発掘区では当該期の明瞭な遺構が確認できることから、Ⅲa 期にあった伽藍外の施設は同じ場所には存在していなかったと考えられる。流路の変化も、このことに連動していたかもしれない。なお、NR06 からは斎串が出土していることから、伽藍外において、水辺の祭祀が行われていた可能性はある。仁和3(887)年に国分寺が焼失し、席田郡定額尼寺へ機能が移されたが、元の場所に再建されたという歴史的記述は見当たらないとされている。今回の調査でも再建時期を明確に示す遺構・遺物は出土しなかったが、大原2号窯式・虎渓山1号窯式(10世紀～11世紀前半)の灰釉陶器が比較的多く出土していることから、焼失によって国分寺が断絶することではなく、再建された可能性がある。

(5) Ⅲd 期(11世紀末葉～12世紀末)

この時期の自然流路は、伽藍南面調査では前段階に引き続いて NR02・NR04 が存在していたとされている他、新たに NR01・NR03 が確認されている。なお、NR01・NR03 は、「明治時代の地籍図に見られ、明治21～24(1888～1891)年の間に消滅した河原田川の位置と一致する」⁴⁶ことから、河原田川の旧河道と考えられる(以下、伽藍南面調査で検出された NR01・NR03 を「旧河原田川」という。)。NR02・NR04 と接続する可能性がある流路は、Ⅲb・c 期から大きな変化はない。旧河原田川の南西部に接続すると考えられる流路としては、B 地点東部で NR07、E 地点西部で NR18 を検出した。H 地点では、NR07 と接続すると考えられる NR15 を、I 地点西部では NR18 と接続すると考えられる NR16 を検出した。以上から、旧河原田川は伽藍南面の北東から B 地点東部・E 地点西部・H 地点西部・I 地点西部を通っていたと推定される。また、I 地点東端の NR17、C 地点の NR21・NR22、D 地点西端の NR23 は、旧河原田川から南西へ分岐する流路であったと推定される。さらに、F 地点西部の NR19 および D 地点東端の

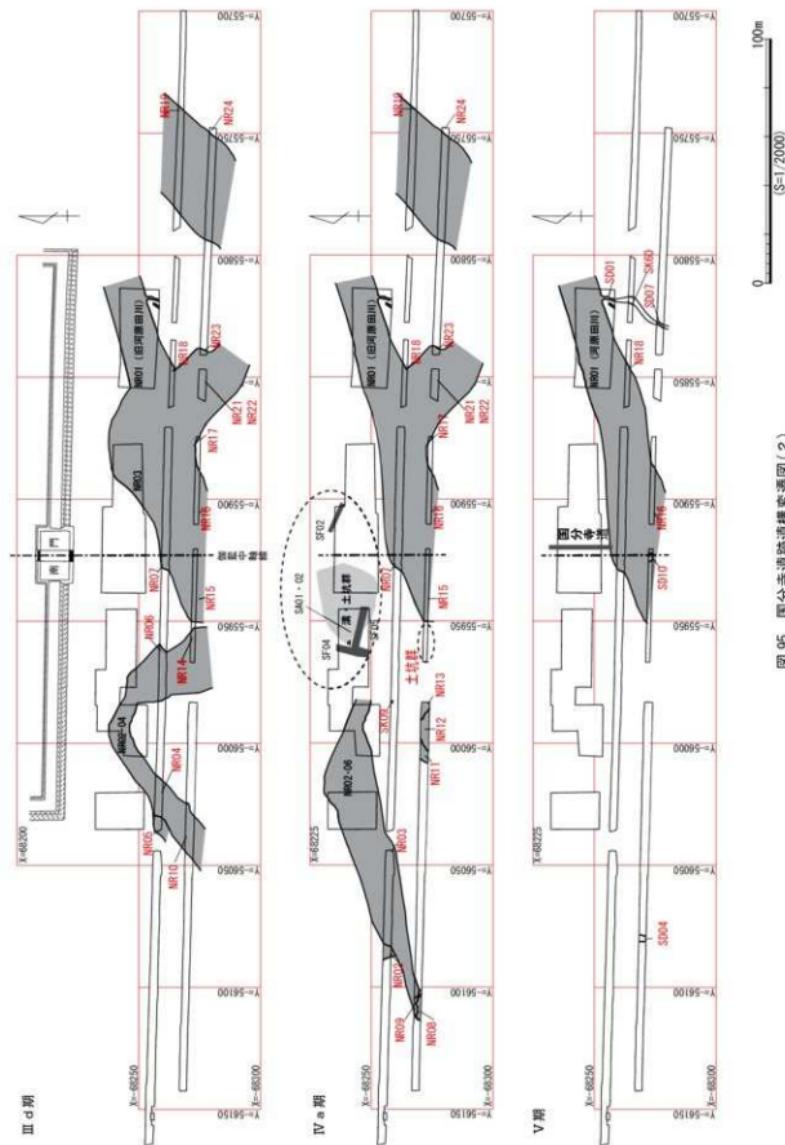


図 95 国分寺遺跡結構変遷図（2）

NR24は、位置的に分岐した旧河原田川に接続する可能性がある。このように、当該期において、発掘区を含む一帯は河道が大きく変化したことが考えられ、このことは美濃国分寺の廃絶などを含む活動の変化と連動している可能性がある。

(6) IVa期(鎌倉時代)

この時期の自然流路は、伽藍南面調査ではIIId期に引き続いだ旧河原田川が存在する他、NR02・NR04が再び流れを変えたNR02・NR06とされている。今回の発掘区でも、旧河原田川に接続すると考えられる自然流路が存続していた他、A地点東部のNR02・NR03、G地点東部のNR08・NR09といった伽藍南面調査で検出されたNR02・NR06と接続すると考えられる流路を検出した。伽藍南面調査のNR02・NR06は、今回の発掘区の南西方向からG地点西部、A地点東端を通り、伽藍南面調査における発掘区の西部を通っていたと推定されるが、今回の調査では推定されている東端からの流路を確認できなかった。この時期の遺構としては、伽藍南面調査では、伽藍中軸から約20m西側にあたる場所で溝・土坑群や道路状遺構が検出されている。今回の調査で検出した遺構では、B地点でNR06埋没後に掘削されたSK09やH地点のNR14埋没後に掘削された土坑群がこの時期の遺構である可能性がある。これらの遺構が、2条の流路の間に集中しており、美濃国分寺廃絶後に空閑地が何らかの目的で利用されていたと考えられる。

(7) IVb期(室町時代)

伽藍南面調査では、この時期の遺構・遺物はほとんど認められないため、寺域は完全に水田化されたとされている。今回の調査では、旧河原田川と接続するNR18から古漁戸の擂鉢(92)が出土したこともあり、旧河原田川は残存していたと考えられる。

(8) V期(元和元(1615)年に現美濃国分寺が再建されて以降)

この時期の自然流路は、伽藍南面調査ではIVa期に引き続いだ旧河原田川が存在したとされている。今回の調査でも、出土遺物から、当該期に旧河原田川の河道が残存していたことを確認した。なお、伽藍南面調査ではIVa期に引き続いだNR02・NR06も存続していたとされているが、これと接続するA地点東部のNR02・NR03の上面には、近世の水田耕作土の可能性があるIII層が堆積していたことが想定される⁷⁾ことから、この時期にはNR02・NR03は埋没し、IVa期まで流れていた自然流路のいくつかは埋没して、字絵図にある河原田川の流路に集約し、周囲の水田化が進んだと考えられる。この時期の遺構としては、今回の調査では、D地点西部のSD07、G地点中央部のSD04、H地点東端のSD10がある。SD07は、他の遺構より上層から掘り込まれていることを確認しており、この時期の水田耕作に伴う水路の可能性がある。伽藍南面調査では、旧河原田川と重複するSD01を検出しているが、位置的に今回確認したSD07と接続する可能性があり、さらにその間にあるSK60⁸⁾も、SD01・SD07と接続する可能性がある。SD04は当該時期の遺物が出土しており、この時期の遺構と考えられる。SD10は、旧河原田川が埋没した後に掘り込まれていることから、近代以降の遺構である。伽藍南面調査で確認した「国分寺道」に平行して設置されている可能性が高いが、その関係は不明である。

注

1) 青木哲哉、足利健亮、中井正幸 1997『第1章 地域詳細図編 10 美濃国分寺周辺』『大垣市遺跡詳細分布調査報告書一解説編一』(大垣市埋蔵文化財調査報告書第5集) 大垣市教育委員会

2) 大垣市教育委員会 2005『美濃国分寺一国分寺遺跡(伽藍南面隣接地の調査)ー』(大垣市埋蔵文化財発掘調査報告書第15集) 163頁

- 3) 岐阜県文化財保護センター2020『堅田遺跡・美濃国分尼寺東遺跡』(岐阜県文化財保護センター調査報告書第146集)
- 4) 大垣市 2011『大垣市史 考古編』
須田勉 2011「国分寺と七重塔」『国分寺の創建 思想・制度編』(吉川弘文館)
- 5) 大垣市教育委員会 2005『美濃国分寺—国分寺遺跡(伽藍南面隣接地の調査)—』(大垣市埋蔵文化財発掘調査報告書第15集)162頁
- 6) 4) 前掲 53頁
- 7) A地点 NR02・03 に隣接する壁面でⅢ層を確認しており、NR02・03 の上面は削平されてⅢ層は残存していないものの、堆積の状況からは NR02・03 がⅢ層上面からの掘り込みであることは考えにくい。
- 8) SK60 は、E 東地点の幅が非常に狭く溝と判断できないため、土坑に分類した。

〈引用・参考文献〉

- 愛知県史編纂委員会2015『愛知県史 別編 窯業1 古代 猿投系』、愛知県
- 有吉重藏2019「瓦の基礎知識」『考古調査ハンドブック18 古瓦の考古学』、ニューサイエンス社
- 内堀信雄、井川祥子1996「美濃における古代土師器煮炊具の様相」『第4回東海考古学フォーラム 鍋と甕 そのデザイン』、東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会
- 大垣市2011『大垣市史 考古編』
- 大垣市教育委員会1973『史跡美濃国分寺跡発掘調査報告』
- 大垣市教育委員会1974『史跡美濃国分寺跡発掘調査報告II』
- 大垣市教育委員会1975『史跡美濃国分寺跡発掘調査報告III』
- 大垣市教育委員会1980『史跡美濃国分寺跡環境整備事業報告書—発掘調査報告書一』
- 大垣市教育委員会1997『大垣市遺跡詳細分布調査報告書—解説編一』
- 大垣市教育委員会2005『美濃国分寺跡—国分寺遺跡（伽藍南面隣接地の調査）一』
- 大垣市教育委員会2005『史跡 美濃国分寺』
- 小笠原好彦2015『日本の古代宮都と文物』、吉川弘文館
- 各務原市1983『各務原市史 考古・民俗編 考古』
- 各務原市埋蔵文化財調査センター1996『各務寒洞窯址群発掘調査報告書』
- 金子裕之1985「平城京と祭場」『国立歴史民俗博物館研究報告』第7集
- 河野一也2019「古代の瓦造りと生産」『考古調査ハンドブック18 古瓦の考古学』、ニューサイエンス社
- 岐阜県教育委員会2007『改訂版 岐阜県遺跡地図』
- 財團法人岐阜県文化財保護センター2002『太江遺跡・寿楽寺廃寺跡』
- 財團法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター2003『寺平遺跡』
- 財團法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター2005『柿田遺跡』
- 岐阜県文化財保護センター2013『与島B地点遺跡・与島C地点遺跡』
- 岐阜県文化財保護センター2015『興福寺遺跡』
- 岐阜県文化財保護センター2015『北方京水遺跡』
- 岐阜県文化財保護センター2020『堅田遺跡・美濃国分尼寺東遺跡』
- 斎藤孝正1995「I 東海西部(愛知・岐阜)第3章 窯跡と出土遺物」『須恵器集成図録 第3巻 東日本I』、雄山閣
- 社団法人 石川県埋蔵文化財保存協会1998『古代北陸と出土文字資料』
- 城ヶ谷和広1996「総論 東海地方の古代煮炊具の様相と諸問題」『第4回東海考古学フォーラム 鍋と甕 そのデザイン』東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会
- 須田勉2011「国分寺と七重塔」『国分寺の創建 思想・制度編』、吉川弘文館
- 須田勉2011「国分寺の誕生 古代日本の国家プロジェクト」、吉川弘文館
- 閔市教育委員会2007『弥勒寺遺跡群 弥勒寺西遺跡—閔市円空館建設に伴う発掘調査一』
- 垂井町1996『新修垂井町史 通史編』
- 垂井町教育委員会2005『美濃国府発掘調査報告III』
- 垂井町教育委員会2010『美濃国分尼寺発掘調査報告書』
- 垂井町教育委員会2017『垂井町遺跡詳細分布調査報告書（1）』
- 奈良文化財研究所1983『平城京左京四条四坊九坪発掘調査報告書』
- 古川町教育委員会1998『岐阜県吉城郡古川町 杉崎廃寺跡 発掘調査報告書』
- 水野正好1978「馬・馬・馬—その語りの考古学」『文化財学報』第二集 奈良大学文学部文化財学科
- 渡邊博人2008「美濃須恵窯について」『日本考古学会2008年度愛知大会研究発表資料集』日本考古学協会
2008年度愛知大会実行委員会



国分寺遺跡遠景（東から）



A地点遠景（西から）

図版2 A地点の遺構（1）



SB01 柱穴列完掘状況（南東から）



SB01-P01 土層断面（南西から）



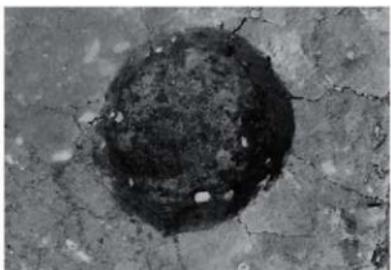
SB01-P04 遺物出土状況（南東から）



SB01-P05 土層断面（東から）



SB01-P04・SK01 完掘状況（南東から）



SA01-P01 の底から SA02-P01 を検出（東から）



SA01-P01・SA02-P01 完掘（東から）



A地点西部柱穴群（南東から）



SA01-P02 土層断面（南から）



SA02-P02 土層断面（南から）

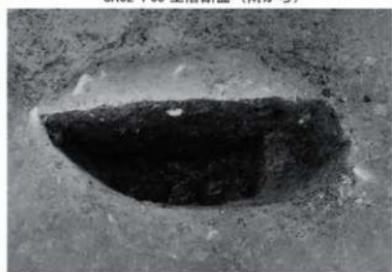
図版4 A地点の遺構(3)、B地点発掘区



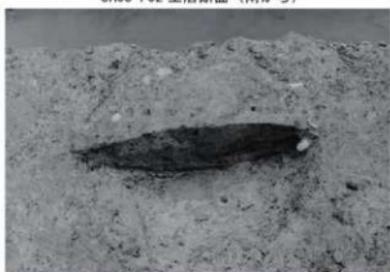
SA02-P03 土層断面（南から）



SA03-P02 土層断面（南から）



SA03-P01 土層断面（西から）



SA03-P03 土層断面（北から）



B地点遠景（東から）





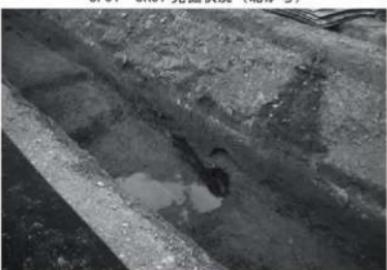
SP01 土層断面 (北から)



SP01・SK07 完掘状況 (北から)



SP01・SK07 土層断面 (北から)



SD01 完掘状況 (南東から)



SK08 上層遺物出土状況 (北から)



SK08 下層遺物出土状況 (北から)



SK08 土層断面 (北から)

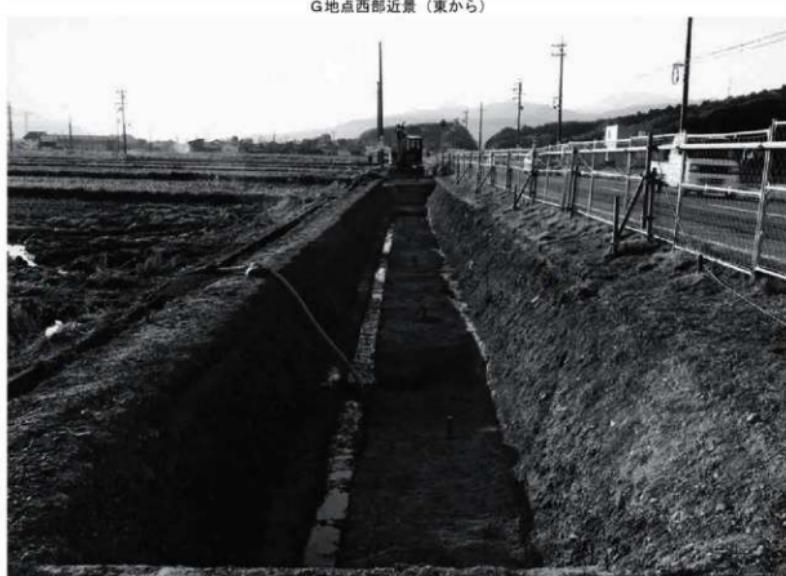


SK09 遺物出土状況 (南西から)

図版6 G地点発掘区（1）



G地点西部近景（東から）



G地点中央部近景（東から）

G地点発掘区（2）、G地点の遺構（1） 図版7



G地点東部近景（西から）



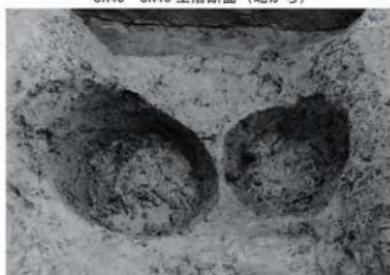
SA04-P02・SK26～SK29 完掘状況（北から）



SK45・SK46 土層断面（北から）



SD02 完掘状況、SK45・SK46 掘出（北から）

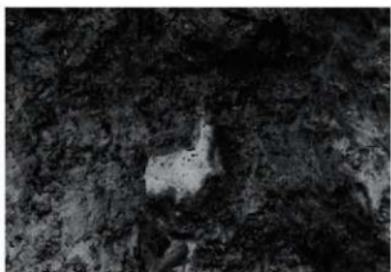


SK45・SK46 完掘状況

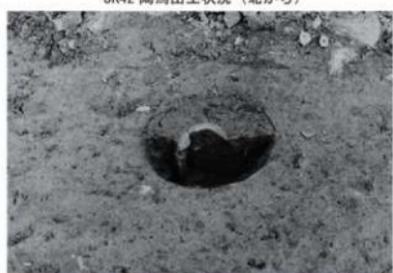
図版8 G地点の遺構(2)、H地点発掘区



SK42 陶馬出土状況 (北から)



SK42 陶馬出土状況接写 (北から)



SK17 土層断面 (南から)



SK17 土師器出土状況 (西から)



H地点近景 (東から)



I 地点近景（西から）



C 地点近景（西から）



SA06-P01 土層断面



D 地点近景（西から）



SA06-P02 土層断面

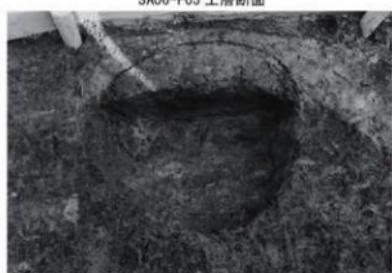
図版 10 D 地点の遺構 (2)、E・F 地点発掘区



SA06-P03 土層断面



SD09 遺物出土状況 (北から)



SP08 土層断面



SD09 遺物出土状況 (北東から)



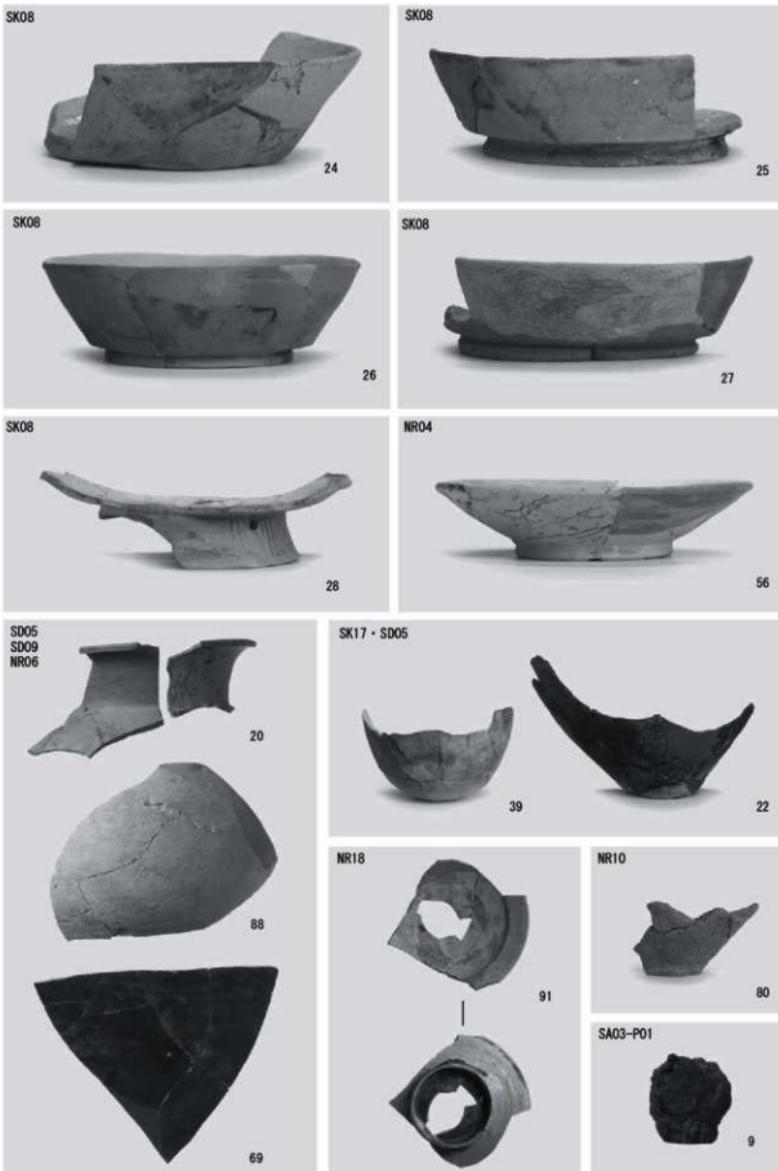
E地点遠景 (西から)



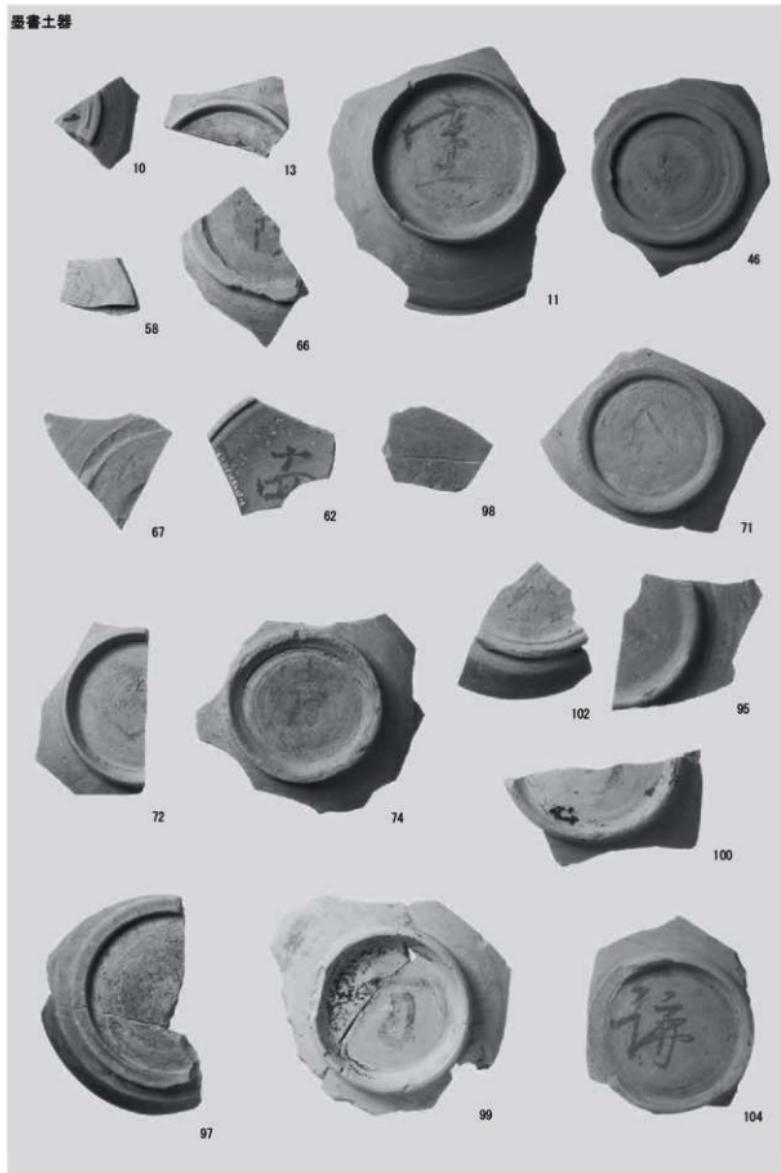
F地点西部近景 (西から)



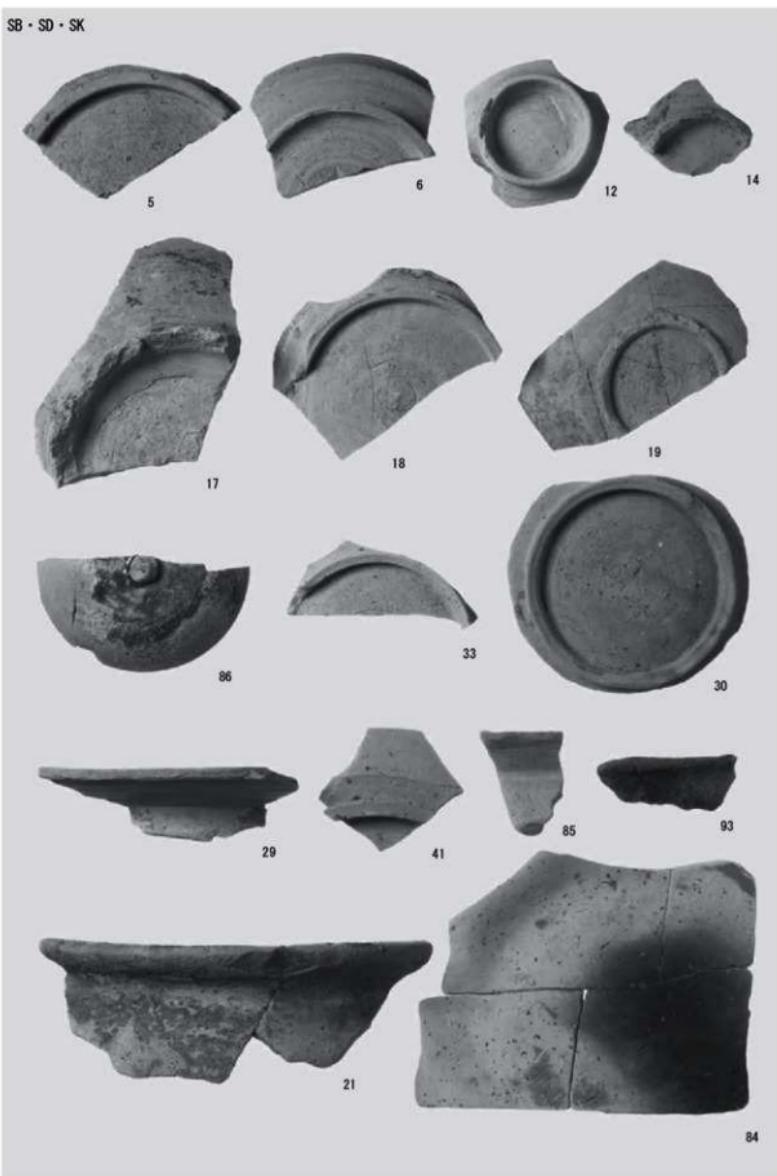
F地点中央部近景 (西から)



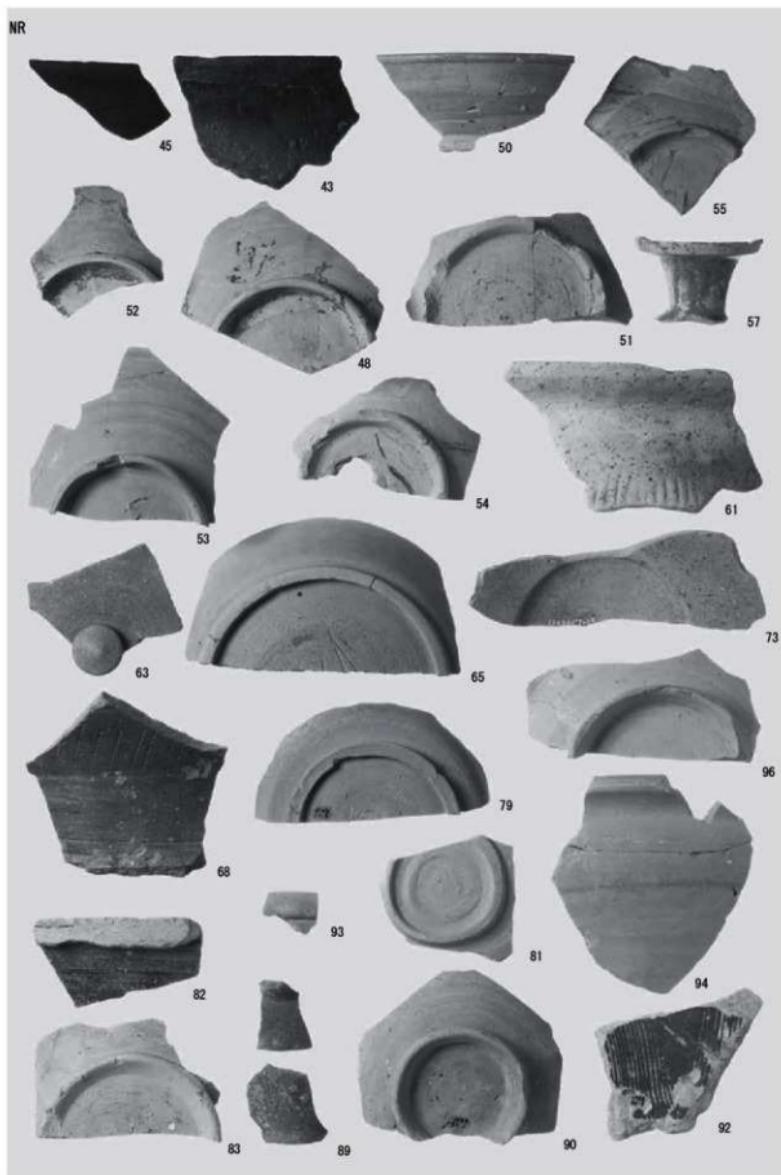
图版 12 出土遗物 (2)



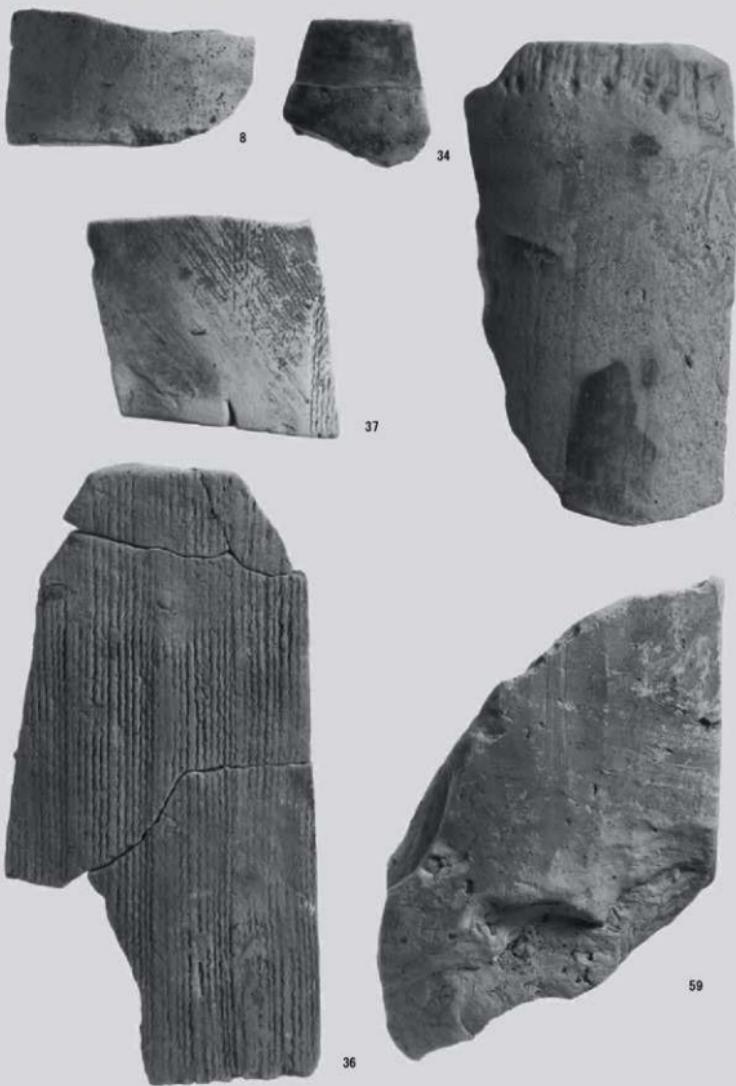
SB・SD・SK



图版 14 出土遗物 (4)

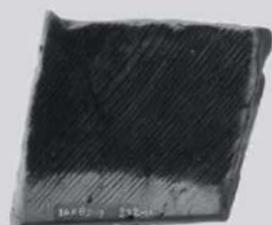


丸瓦・平瓦凸面 SB01・SK09・NR04

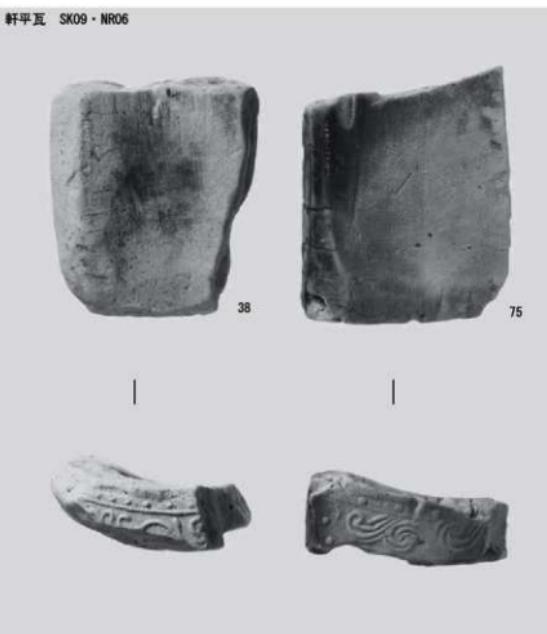


图版 16 出土遗物 (6)

瓦 · 平瓦凹面 SB01 · SK09 · NR04



軒平瓦 SK09・NR06



38

75

76

NR06



60

木製品 NR06



77

78

報 告 書 抄 錄

岐阜県文化財保護センター調査報告書 第150集

国 分 寺 遺 跡

2021年3月15日

編集・発行 岐阜県文化財保護センター

岐阜市三田洞東1-26-1

印 刷 もとすいんさつ株式会社